平成16年度放送大学大学院開設予定授業科目講義内容

平成15年11月発行

第　3　版

放送大学学園

教務部教務課

目　　次

1．総合文化プログラム

番号	科目	頁	開設年次	メディア	単位
	◇文化情報科学群◇				
1	総合情報学（’０２）	1	14	TV	2
2	総合人間学（’０２）	3	14	R	2
3	言語文化研究Ⅰ（’０２）（国語国文学の近代）	5	14	R	2
4	言語文化研究Ⅱ（’０２）（中国の言語と文化）	7	14	R	2
5	表象文化研究（’０２）（文化と芸術表象）	9	14	TV	2
6	情報化社会研究（’０２）（情報革命と社会の変革）	13	14	TV	2
7	地域文化研究Ⅰ（’０２）（地中海世界の歴史像）	15	14	R	2
8	地域文化研究Ⅱ（’０２）（東アジア歴史像の構成）	17	14	R	2
9	地域文化研究Ⅲ（’０２）（ヨーロッパの文化と社会－イギリスを中心に－）	19	14	TV	2
10	日本文化研究（’０２）	21	14	R	2
11	比較文化研究（’０２）（ジェンダーの視点から）	23	14	TV	2
12	文化人類学研究（’０２）（環太平洋地域文化のダイナミズム）	26	14	TV	2
13	国際関係論（’０２）	28	14	TV	2
14	国際社会研究Ⅰ（’０２）（現代アメリカの政治）	30	14	TV	2
15	国際社会研究Ⅱ（’０２）（中国近代政治史）	32	14	R	2
	◇環境システム科学群◇				
16	数理システム科学（’０２）	34	14	R	2
17	情報システム科学（’０２）	36	14	R	2
18	複雑システム科学（’０２）	38	14	TV	2
19	地球環境科学（’０２）	41	14	TV	2
20	物質環境科学Ⅰ（’０２）（物質の構造・性質・変化・循環）	43	14	TV	2
21	物質環境科学Ⅱ（‘０３）（環境システムとエントロピー）	45	15	TV	2
22	生命環境科学Ⅰ（’０２）（生命の多様性）	47	14	TV	2
23	生命環境科学Ⅱ（’０２）（環境と生物進化）	49	14	TV	2
24	認知行動科学（’０２）（心と行動の統合科学をめざして）〔臨床心理プログラムと共通〕	51	14	TV	2
25	生活科学Ⅰ（’０２）（生活財機能論）	54	14	R	2
26	生活科学Ⅱ（’０２）（すまいづくりまちづくり）	56	14	TV	2
27	健康科学（’０２）（医と社会の接点を求めて）	59	14	TV	2
28	精神医学（’０２）〔臨床心理プログラムと共通〕	62	14	R	2

2．政策経営プログラム

			開設年次	メディア	単位
29	経営システムⅠ（’０２）（企業の公的経営）	64	14	R	2
30	経営システムⅡ（’０２）（ヒューマン・リソース・マネジメント）	66	14	R	2
31	経済政策Ⅰ（’０２）（現代政策分析）	68	14	TV	2
32	経済政策Ⅱ（’０２）（財政と社会保障）	70	14	R	2
33	地方自治政策Ⅰ（’０２）（日本の地方自治－その現実と課題－）	73	14	TV	2
34	地方自治政策Ⅱ（’０４）（自治体・住民・地域社会）	75	14	R	2
35	芸術文化政策Ⅰ（’０２）（社会における人間と芸術）	77	14	TV	2
36	芸術文化政策Ⅱ（’０２）（政策形成とマネージメント）	79	14	R	2
37	福祉政策Ⅰ（’０２）（福祉社会の政策課題）	81	14	R	2
38	福祉政策Ⅱ（’０２）（障害者施策の展開）	84	14	R	2
39	法システムⅠ（’０２）（比較法システム論）	86	14	TV	2
40	法システムⅡ（’０２）（市民運動と法）	88	14	R	2
41	法システムⅢ（’０２）（情報法）	90	14	R	2
42	技術社会関係論（’０４）	92	14	R	2
43	環境マネジメント（’０２）（環境問題と企業・政府・消費者の役割）	94	14	TV	2
44	環境工学（‘０３）	96	15	TV	2
45	都市計画論（’０２）（私達の都市をいかにデザインするか）	99	14	TV	2

3．教育開発プログラム

46	教育文化論（’０２）	101	14	R	2
47	教育経営論（’０４）	103	14	R	2
48	学校システム論（’０２）（子ども・学校・社会）	105	14	TV	2
49	教育課程編成論（’０２）（学校で何を学ぶか）	108	14	R	2
50	認知過程研究（’０２）（知識の獲得とその利用）	110	14	R	2
51	教授・学習過程論（’０２）（学習の総合科学をめざして）	112	14	TV	2
52	現代身体教育論（’０２）	114	14	R	2
53	学校臨床社会学（‘０３）（教育問題をどう考えるか）	118	15	R	2
54	学校臨床心理学（’０２）〔臨床心理プログラムと共通〕	121	14	R	2
55	生涯学習論（’０２）（生涯学習社会の展望）	123	14	R	2
56	情報教育論（’０２）（教育工学のアプローチ）	126	14	TV	2
57	発達心理学（’０２）〔臨床心理プログラムと共通〕	128	14	TV	2
58	才能教育論（’０２）（スポーツ科学からみて）	131	14	TV	2
59	道徳性形成論（‘０３）（新しい価値の創造）	133	15	R	2
60	逸脱行動論（’０２）	135	14	TV	2

4．臨床心理プログラム

			開設年次	メディア	単位
61	臨床心理学特論（’０２）	138	14	R	4
62	臨床心理面接特論（’０２）（心理療法の世界）	142	14	R	4
63	心理学研究法特論（’０２）	146	14	R	2
	発達心理学（’０２）〔教育開発プログラムと共通〕	…(128)	14	TV	2
	認知行動科学（’０２）（心と行動の総合科学をめざして）〔総合文化プログラム環境システム科学群と共通〕	…(51)	14	TV	2
64	社会心理学特論（’０２）（人格・社会・文化のクロスロード）	148	14	TV	2
65	家族心理学特論（’０２）（システムとしての家族を考える）	151	14	R	2
	精神医学（’０２）〔総合文化プログラム環境システム群と共通〕	…(62)	14	R	2
66	コミュニティ・アプローチ特論（‘０３）	153	15	R	2
	学校臨床心理学（’０２）〔教育開発プログラムと共通〕	…(121)	14	R	2

＝総合情報学（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　中島　尚正（放送大学教授）〕
〔主任講師：　原島　　博（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　佐倉　　統（東京大学大学院助教授）〕

全体のねらい

急速に発展している情報技術は、現代の情報化社会を支える基盤として社会全体に大きな影響を与えており、広く産業、経済、政治、教育、芸術、文化等における知的活動を質的に変えつつある。社会の諸活動における知の営みと情報の関係を正しく理解することは、２１世紀に生きる私達にとって、文系・理系の区別なく必要とされることであり、総合情報学は広義の情報リテラシーを幅広く身に付けることを目的としている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	総合情報学の視座	講義の第１回目として、総合情報学の全体像を概観し、併せて講義の進め方についてオリエンテーションをおこなう。	中島　尚正（放送大学教授） 原島　博（東京大学大学院教授） 佐倉　統（東京大学大学院助教授）	中島　尚正（放送大学教授） 原島　博（東京大学大学院教授） 佐倉　統（東京大学大学院助教授）
2	情報技術の発展（1）－メディアの進化－	情報技術のデジタル化を機軸とした予想される今後の発展が、情報環境を含むメディアの進化にどのような影響をおよぼしていくかについて、マクルーハンの「メディアはメッセージである」という広く知られた言葉を起点として、モバイル、ユビキタスという視点に重点をおきながら概説する。	北川　高嗣（筑波大学教授）	原島　博 北川　高嗣（筑波大学教授）
3	情報技術の発展（2）－新しいリアリティの可能性－	情報メディアの進化の様相について考察し、それによってもたらされる可能性のうち、２つの重要な要素である、コミュニティと身体性の問題に関連し、1）情報技術を用いた組織形成、組織の学習・成長の支援の可能性、2) 情報技術を用いたバーチャル（実質的に同等）なリアリティの形成の可能性について概説する。	同　上	同　上
4	産業と生産の情報化	情報化の流れは、生産と流通のしくみを一変させ、情報関連産業だけでなく、製造業をはじめとして産業の構造を変容させている。ここでは、その実例を紹介しながら、これからの産業と生産の方向を考える。	中島　尚正	中島　尚正
5	情報と経済	情報化とともに経済のグローバリゼーションが進むが、コミュニティの衰退という問題も生じている。近年、新たな交換媒体として注目されている「地域通貨」を紹介しながら、情報化と経済の関連、コミュニティの今後のあり方について考える。	西部　忠（北海道大学助教授）	植田　一博（東京大学助教授） 西部　忠（北海道大学助教授）
6	情報と法律	ネットワーク犯罪や著作権、プライバシーなど、情報技術によって新しく発生してきた問題に法学はどう答えようとしているのか、他領域とのコラボレーションの可能性も含めて議論する。	濱田　純一（東京大学教授）	原島　博 濱田　純一（東京大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	メディア・アートとテクノロジー	コンピュータの出現で可能になったアートの新しい動きについて、映像を中心に紹介する。	原島　博	原島　博
8	情報と脳	認知ロボットの実験を通して、認知及び意識の問題への構成論的アプローチを、以下の点に注目しつつ紹介する。1）工学構成論、脳科学、現象学の接点。2）認知・意識の研究における身体性の意味。3）神経回路およびロボットモデリング。4）実験結果に関する力学系アプローチに基づく解析。5）実験結果に基づく自己意識に関する現象学的解釈。	植田　一博（東京大学助教授）	植田　一博
9	情報装置としての人間	人間は、環境との間でインタラクションをおこなう情報装置であると考えることができる。このような情報学の立場からの人間理解の系譜を解説し、併せて、情報学と進化論を結びつけて人間の認知や行動を捉えようとする最近の動きを紹介する。	同上	佐倉　統 植田　一博
10	情報化時代とメディア	多様なデジタルメディアの普及が、メディアの世界にどのような変容を引き起こしつつあるのか、今後、メディアの世界と我々はどのような関係を構築できるのかを、ソシオ・メディア論を軸に、ビデオ・ジャーナリズム、メディア・リテラシーなどのキーワードを織り込みながら展開する。	山内　祐平（東京大学助教授）	佐倉　統 山内　祐平（東京大学助教授）
11	情報化社会の教育	バーチャルユニバーシティ（オンラインによる大学教育）やホームスクーリング（ネットワークや通信教材によって自宅で学習する形態）によって大きく変容しつある合衆国の教育の現状を追い、これからの教育環境のあり方について議論する。	同上	同上
12	ネットワークコミュニティの組織論	Linux で脚光をあびたオープンソース運動や災害時の情報ボランティアなど、インターネットというメディアを通じて発生してきたボランタリーな組織のあり方とその可能性について議論する。	佐倉　統	佐倉　統
13	情報と生命科学	生命情報の基本であるゲノムを解読しようというゲノム計画が、世界的な規模で進行中である。これは情報技術の発展によるところが大きい。ヒト・ゲノム計画の意義を情報学の観点から解説するとともに、情報と生命論の枠組みについて考察する。	同上	同上
14	情報と生命論	生命の進化を情報という観点から見ることによって、人間の文化活動との接点が生まれつつある。文化情報の複製単位である「ミーム」という概念を導入することで、文化現象を生命現象と同じモデルで記述できる。ミーム学の意義、現状、今後の展望などについて解説する。	同上	同上
15	総合情報学の展開と課題	講義の最終回として、3名の主任講師の座談会形式で、総合情報学の今後の課題について語る。	中島　尚正 原島　博 佐倉　統	中島　尚正 原島　博 佐倉　統

＝総合人間学（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師： 柏原 啓一（放送大学教授）〕

全体のねらい

西洋哲学は、主として人間の知的な働きに、人間らしさを求めてきた。だが、この主知主義に基づく科学の偏重に翳りが見え始めた現在、人間を感情や意志や身体をも含めた諸機能の総合とみなして「人間学」を唱えた哲学者の思想に、改めて注目する必要がある。総合的全人という人間の新たな自己理解に、道をつけたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間学と人類学	人間学の原語のアンスロポロジーは、人類学とも訳される。この語の使用の例を振りかえって、哲学的人間学に対する自然人類学や文化人類学の相関と相違について考察し、人間を総合的全人として理解する哲学的人間学の特質を明らかにする。	柏原 啓一（放送大学教授）	柏原 啓一（放送大学教授）
2	哲学における人間観	哲学の歴史における人間の自己理解のあとを概観し、西洋の人間観が知的理性に重きを置いてきたものであることを見届ける。そのために、古代ギリシアにおける自然哲学から人間哲学への進展、近代哲学における知識論の形成のあとを探る。	同　上	同　上
3	科学と技術の時代	近代の主知主義的な人間観のもとで、科学と技術が大きな進展を見せたが、その背後に生じている問題に目を向ける。今日のわれわれにとって科学と技術の持つ意味を探るとともに、知性偏重を修正するための全人的視点の必要を説く。	同　上	同　上
4	カントの人間学 (1)	カントの主著が『純粋理性批判』『実践理性批判』『判断力批判』の三つから成ることの意味を、人間学的な観点から考える。すなわち、カントが知的理性の限界を想定して、善や美の価値を求める人間の精神活動をも大事にしたことに注目する。	同　上	同　上
5	カントの人間学 (2)	カントの最晩年の著者である『実用的見地における人間学』の内容を紹介しながら、カントの考えていた人間学の構想が、現実的な人間を、認識、感情、欲求の三つの能力の総合と捉えて、この総合的人間の実生活の記述にあることを確認する。	同　上	同　上
6	シェリングの人間学的図式	後期シェリングの哲学において、近代の知的理性を中心とする人間観が崩され、替って意志を中核に据える考えが提出される。ここではシェリングの『人間学的図式』を取りあげて、シェリングの考えていた人間学の内容とその問題点に触れる。	同　上	同　上
7	フォイエルバッハによる神学の人間学化	フォイエルバッハのキリスト教批判は、キリスト教の神学を人間学に読み替えることであった。その語るところを追いながら、フォイエルバッハが近代理性に替えて感情を中心とする人間学を構築したことを見届け、さらにそのことの問題点をも指摘したい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ディルタイの生の哲学	ディルタイは、知、情、意の総合から成る人間を生（生きること）と呼び、これを全体的人間（全人）とも称した。このディルタイの生の哲学に、精神文化を形成して止まない総合的全人の人間学を認め、人間学の課題についてここで整理をする。	柏原　啓一	柏原　啓一
9	シェーラーの哲学的人間学	哲学的人間学の名称を用いてみずからの哲学の構築をはかったシェーラーの思想を取りあげる。有機体に階層を設け、人間を植物や動物の性格を含みつつこれを越えるものと規定するその方法に批判はあるが、世界開放性に人間の特質を認める点は評価したい。	同　上	同　上
10	キルケゴールの実存思想	キルケゴールによって提出された実存としての人間観について考える。キルケゴールの語る実存とは、普遍的な理性というあり方に尽くされない自由な人間であり、自己の主体性の形成を課題とする人間である。近代を越える新たな人間観の典型をここに見る。	同　上	同　上
11	ニーチェの超人思想	価値の転換を唱えて旧来の哲学の枠組の解体をはかったニーチェの思想を取りあげ、超人と名づけられたニーチェの人間観について解説する。超人とは、自己完結的なあり方を打破し、たえず未来へと自己形成にいどみかかる力動的な人間のことである。	同　上	同　上
12	ヤスパースの実存開明の考え	ヤスパースの主著『哲学』の中で、人間がどう理解されているかを探る。人間は、日常的な生き方や科学的な知識獲得や主義主張による世界観形成などさまざまな位相をしめすが、自己の無根拠を知る限界状況によって、真の人間らしさに目覚めるのだ、という。	同　上	同　上
13	ハイデガーの現存在分析	ハイデカーは、『存在と時間』において、存在の意味を探求する中で人間を現存在と呼び、この現存在の分析を通して存在解明を行う。この現存在としての人間を、ハイデガーがどのように捉えているのかを学びながら、総体としての人間の姿を検討する。	同　上	同　上
14	欠如態の人間	哲学的人間学を唱導するプレスナーやゲーレンの思想を紹介する。人間の脱中心性による世界開放性を説くプレスナーも他の動物に較べて人間を欠陥存在と呼ぶゲーレンも、人間を欠如態と見ている点に特徴があり、ここに文化形成の無限の可能性を求めたい。	同　上	同　上
15	人間学の総合性	総合人間学の講義の締め括りとして、改めて人間学の総合性について述べる。そして、国際化にともなう文化の多元化や価値の多様化の進む現代には、ことにこのような総合人間学の語る総合的視点からの未来開放的な人間理解が求められることに言及する。	同　上	同　上

＝言語文化研究Ⅰ（'０２）＝（Ｒ）

－国語国文学の近代－

〔主任講師：　野山　嘉正（放送大学教授）〕

全体のねらい

本講義は国語学と国文学の全体像を理解するための必須要件として、近代の出発点における国学からの転換に特に着目しつつ、学芸として国語学と国文学とが成立した過程を分析し講述する。その際に西洋文学のイムパクトがもたらした文学現象といかに交錯したかに重大な関心を払いつつ、近代の学問としての意義を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国学から国文学へ	新時代の文学が未だに本格的には始動していない時期に、どうにかスタートした大学で国学からどのような伝統を引き継ぎ、そしていかなる新機軸が企図されたかを、当時唯一の大学であった東京大学の実例について検証し、本講義全体の基盤とする。	野山　嘉正（放送大学教授）	野山　嘉正（放送大学教授）
2	『新体詩抄』の歴史的意義	東京大学の三教官が試みた『新体詩抄』の序文の細読が本章の課題。この三人のうち東洋哲学の専門家は漢詩の達人でもあり、社会学と植物学専攻の二人は、元来が儒学の教養を備えていたことを強く意識しつつ、新時代の文学への対応について考察する。	同　上	同　上
3	近代文学の始動と国文学	坪内逍遙の『小説神髄』と二葉亭四迷の「小説総論」を考察し、次いで森鴎外初期の詩と小説について概観する。さらに逍遙・鴎外の論争に触れた後で、近代文学の動向と国文学者落合直文との関連を比較検討する。	同　上	同　上
4	正岡子規の「文学」と国文学	新時代の大学の国文学科に学びながら、卒業直前で中途退学した正岡子規の文学観を検討し、文学・日本文学・国文学等々の定義と特質について、具体例を示しながら考察する。	同　上	同　上
5	新体詩の確立と国文学	新体詩の確立者とされる島崎藤村の詩論を中心に詩業を検証する。その検証過程で国文学との関連を確認し、併せて小説家としての長い生涯と国文学の変容過程を展望する。	同　上	同　上
6	近世国学の成立	近世は、旧来の堂上貴族たちから新興の町人層に、和歌・物語などの古典が解放され流布した時代であり、それにともなって国学が成立する。体制的な漢学とはおのずから異質なこの学問を形成していった、僧契沖・荷田春満・賀茂真淵の動向に即しつつ国学形成の意義を考える。	鈴木日出男（成蹊大学教授）	鈴木日出男（成蹊大学教授）
7	本居宣長の古典研究	本居宣長は『古事記』『源氏物語』『新古今集』などの研究に偉大な業績を挙げ、近世国学の中に屹立する存在である。作品研究の実証的な合理性に徹することと、古代の非合理なるものへの畏敬の念とが共存する、その学問の特質を考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	近代化のなかの国文学	国学者たちは、文献研究としての書誌・本文・語義・語法・考証等々の多岐にわたる研究府分野を拓いたが、それらが明治期の大学制度の中にどのように組み込まれたか、西洋の文学研究の影響を受けて国文学としていかに出発したか、を考える。	鈴木日出男	鈴木日出男
9	文献研究と文学史研究	文献学における原典再建と、国学における諸本の異同の比較研究との特質を再確認し、文学史研究がもう一つの重要な研究分野になっていくことについても、事例を示しながら確認する。併せてこの二つの研究のありかたを考察する。	同　上	同　上
10	文献研究と文学史研究	文献学における原典再建と、国学における諸本の異同の比較研究との特質を再確認し、文学史研究がもう一つの重要な研究分野になっていくことについても、事例を示しながら確認する。併せてこの二つの研究のありかたを考察する。	同　上	同　上
11	国文学研究の課題	本文研究を基礎に据えて多方面に展開すべき文献学のこれまでのありかたに反省的考察を加えながら、近代以後の古典研究の方法論がどのように展開されてきたかについて述べる。その過程から古典研究の新たな可能性について展望を拓きたい。	同　上	同　上
12	日本語学と国語学	この二つの命名のしかたについて、明治期の事例を使いながらそれぞれの必然性を検討する。国語学が古くて日本語学の方が新しいというのは俗説に過ぎず、歴史社会との深い関連があったことを実証する。	同　上	同　上
13	国文典と洋文典	国学において分析・発見された文法が、明治になってから移入された西洋の文法と、どのように切り結び変容したか、あるいはどのように進展して両者が融合したか、等々の問題を、例示しつつ検討する。	同　上	同　上
14	国語国字問題	標準語の制定・普及について、仮名遣い・国字・文法などの諸点を検討する。明治三十年代に大きな社会的問題ともなったいわゆる国語国字問題の概略と、そこに生じた学問的な論争点とを解明する。	同　上	同　上
15	博言学・国語学・文学	初期の大学における博言学（言語学）と国語学との関係、国語学と文学との関係について、実例を示しながら検討し、併せて本講義の結びに資する問題点を提示する。	同　上	同　上

=言語文化研究Ⅱ（‘０２）=（Ｒ）

－中国の言語と文化－

〔主任講師：　傅田　　章（放送大学教授）〕
〔主任講師：　木山　英雄（神奈川大学教授）〕

全体のねらい

魯迅の散文詩集『野草』を読む。少ない篇数の割には多彩多様な詩的表象の下に、20世紀中国という大きな矛盾を象徴するかのような、ある魂の危機とその超克のドラマが進行する——と見る立場で、主な本文を精読。（木山、12回）。現代中国語文法について主として構文論の視点からいくつかの問題を論述。（傅田、3回）。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	『野草』（一）“詩”の始まるところ	『野草』の前提、背景、読解の方針。第一作「秋の夜」。眼前の景物が『野草』という心的世界の各要素に取り込まれていく。詩的な変容の始まり、ひきつづく展開の豫感を孕んだ夜の歌。	木山　英雄（神奈川大学教授）	木山　英雄（神奈川大学教授）
2	『野草』（二）“拒む”思想	第二作「影の告別」、第三作「物乞い」。「秋の夜」の後に“暗黒”“虚無”といった否定的な観念につかみかかるような二篇が続く。	同上	同上
3	『野草』（三）“復讐”のテーマ	第四作「復讐」、第五作「復讐その二」。“復讐”のテーマには、久しい由来に加え、西洋や日本の同時代文学との交渉も絡む。	同上	同上
4	『野草』（四）希望と絶望	第七作「希望」、第十一作「歩く男」。自身の中にはもはや否定的な動機しか残っていない“失敗者”あるいは絶望的な“孤独者”の反抗を主題化して、客観の場にさらす。作家自身の経歴を素材とする伝記的構成、といった問題も。	同上	同上
5	『野草』（五）回憶と叙情	第八作「雪」、第十作「すばらしい物語」。暗く激しい詩的な思考の合間を縫って、あるいは清冽に、あるいは濃艶に、生の瞬間の美が輝く。	同上	同上
6	主語と述語	主語とはなにか。従来の論を意味論、構文論のレベルを分けて再検討する。さらに‘表現論’からいわれる‘主題’をめぐっての論議の問題点を抽出し整理しておきたい。	傅田　章（放送大学教授）	傅田　章（放送大学教授）
7	目的語と補語	ともに動詞の後置補語成分であるところの，他動詞に対する目的語（賓語）と自動詞に対する補語（表語）とが‘賓語’に一括されて久しいが、あらためてその区別を提案し、それによって種々の構文についてより整合性のある解釈を試みる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	“了”について	文末助詞“了$_2$”は‘語気’をいうものであるのか。経過の表現として“了$_2$”のない非経過の表現との対立。時間とどのように結びつくのか。動詞接尾辞“了$_1$”との相違点と共通点。	傳田　章	傳田　章
9	『野草』（六）夢の系列（一）	第十二作「死火」。“夢”に託された一連の幻想において、『野草』のドラマは緊迫し、佳境に入る。その入り口に位置する「死火」の豊かな想像空間。	木山　英雄	木山　英雄
10	『野草』（七）夢の孫列(二)	第十四作「失われたよい地獄」。“夢”の中で陰画に反転された現代史縁起。“歴史”が主題なだけに、現実的な謎解きが行われやすいが、寓話としての構造をまず明らかにしなければならない。	同上	同上
11	『野草』（八）夢の系列（三）	第十五作「墓石の刻辞」、第十六作「くずれた線のふるえ」。いずれ劣らぬ怪異なイメージに彩られたこの二篇に、『野草』の詩的象徴の双方向の極致が結晶する。	同上	同上
12	『野草』（九）夢の系列（四）	第十七作「死後」。風変わりな掌編小説とも見られるような一編。そのすこぶる散文的に滑稽な死後再生譚を以て“夢”は締め括られ、締め括りにふさわしい一種哲学的な覚悟とともに“死者”は生の現実に舞い戻る。	同上	同上
13	『野草』(一〇)戦士と奴隷	第十九作「このよう戦士」、第二十作「利口者と馬鹿と奴隷」。一連の詩的思考の末に再構築された“戦士”像。それと対蹠的な“奴隷”根性をめぐる、苦い皮肉。	同上	同上
14	『野草』(十一)悔いと慰め	第九作「凧」、第二十一作「病葉」。古い家族の重荷、新しい愛の慰め。	同上	同上
15	『野草』(十二)再び現実へ	第二十二作「色褪せた血痕の中で」、第二十四作「題辞」。詩から再び散文へ。歴史的な現在の回復。『野草』のまとめ。	同上	同上

＝表象文化研究（‘０２）＝（TV）

－文化と芸術表象－

〔主任講師：　渡邊　守章（放送大学副学長）〕
〔主任講師：　渡辺　　保（放送大学教授）〕
〔主任講師：　淺田　　彰（京都大学助教授）〕

全体のねらい

芸術は、表象のシステムとしての文化の中にあって、その固有の価値について意識的であり、またそうした価値の創出・伝達・受容と、更にはそれを伝承するとともに破壊もする営為として、文化の根幹をなす特権的な表象である。それは、文化をその多様な層において照らし出す<鏡>として機能するから、芸術表象の分析・研究は、文化の総合的な分析・研究において、最も重要な場の一つを構成する。表象文化研究は、表象としての芸術を、その創造・伝達・受容の多面的な局面において研究しようとするものだが、ここでは、政治制度や宗教的儀礼から日常生活に至る人間の営みに浸透している<文化>を顕在化させる<装置>としての芸術に焦点を定めて、その構造と作用、それらを可能にする作業の動態を分析する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	表象とは ～理論的フレーム	「表象」(representation[英語]、représentation[仏語]、Vorstellung［独語］)という考え方について。「再＝現前化」と「再現＝代行＝表象」と「舞台上演」。何故、表象か？　表象によって何が見えてくるか。「表象」についての思考の歴史的系譜。カント、ショーペンハウワー、ニーチェ。ミシェル・フーコーの視座（『言葉と物』における「表象の歴史」から、『監獄の誕生』以降の「表象装置」の分析へ）。表象の生成・伝達・受容の関係構造における芸術。「視線」の移動。「表象装置」の具体例（教会、劇場、美術館、万国博覧会、百貨店、オリンピック競技、ベンヤミンと複製芸術論、バルトの写真論）。「引用のゲーム」と「間・テクスト性」（歌舞伎における変形ゲーム）。「踊る身体」の表象。表象の廃絶（アルトー）。	渡邊　守章（放送大学副学長）	渡邊　守章（放送大学副学長） 渡辺　保（放送大学教授） 浅田　彰（京都大学助教授）
2	表象装置Ⅰ ～都市と記念碑	「意味を付与されたイメージ」としての表象。建築の例（機能と意味）を都市とその記念碑的建造物によって分析する。「時計台」の系譜学。「安田砦」と「オデオン座フォーラム」の対比（記憶の活性化）。都市と時計台。時間の支配のトポス＝場。近代の時間＝駅の時計台。日本における「塔」の記憶。近代の時計台（アカデミズムと遊廓と）。ヨーロッパの都市における記念碑の表象（国民議会の例）。日本の国会議事堂の表象。エッフェル塔からの眺め。パリの都市計画の構造と意味。アルケ＝スナン王立製塩所に見る「中心」の意味（啓蒙思想による「パノプティコン」あるいは「一望監視方式」の発明）。「表象装置」という基本的な発想。	同　上	渡邊　守章
3	表象装置Ⅱ ～祝祭空間の演出	表象が創出され共有される特権的な時空＝場としての祝祭。カトリックの教会堂の例（ゴティックとバロックにおける世界像の表象としての教会建築）。バロック教会建築の「演劇性」。世俗的祝祭の典型としての劇場空間。「踊る王」の祝祭装置（宮廷バレエ、ルイ十四世御成婚パレード、ヴェルサイユ宮の『魔法の島の楽しみ』）。「葬儀」の劇場。	同　上	同　上
4	祝祭装置の近代Ⅰ	「共和国」の祝祭。劇場芸術の黄金時代であった19世紀ヨーロッパにおける「劇場」という表象装置。そこに設計された関係構造と、都市において劇場が醸成した虚構の作用の分析。19世紀の国際都市パリに照準を定め、台詞劇、オペラ、オペレッタ、バレエなど、19世紀を代表するジャンルについて、劇場による表象とその快楽の特性を分析する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
5	祝祭装置の近代Ⅱ	ヨーロッパ19世紀の後半は、劇場という表象装置が、祝祭装置としてはすでに機能不全に陥り始めた時代である。そのような劇場芸術について、それを「キマイラ＝存在不可能な怪獣」に譬えたのは、世紀末の詩人ステファヌ・マラルメであった。同時代の劇場芸術の破産とその根拠を暴きつつ、来るべき群衆的祝祭演劇の設計図を素描するマラルメ。「韻文朗読オラトリオ」「バレエ」「ワーグナーの神話的楽劇」「カトリックのミサ」をパラダイムの軸として設定しつつ、サーカスや寄席の芸の「直接的な演劇的力」を問い直すその演劇論を中心に、19世紀ヨーロッパが20世紀へと遺贈した「表象についての基底的思考」を跡づける。	渡邊　守章	渡邊　守章
6	美術館 あるいは記憶の装置	教会や劇場のように、19世紀近代以前から存在していた表象＝祝祭装置に対して「美術館」は歴然とフランス大革命の落とし子である。ただ、その出自によって、王侯貴族のコレクションを展示する「宮殿型美術館」（例えばローマのヴィラ・ボルゲーゼやドリア・パンフィリ）の「充満した私的空間」に対して、大革命以前から計画されたとはいえ、やはり『百科全書』とフランス大革命を受けて成立する芸術家のための「教育装置」でもあり、全国民的な「記憶の装置」でもあるルーヴル美術館とを対比して見る。「文化的記憶装置」としての美術館の使命は近代・現代の芸術にも及ぶのであり、ニューヨーク近代美術館、パリ国立ポンピドゥーセンター、またルーヴルに対して19世紀美術館としての設定されたオルセー美術館、ロンドンにおけるナショナル・ギャラリーと二つの「テイト・ギャラリー」の「棲み分け」の例を分析する。	浅田　彰 （京都大学助教授）	渡邊　守章 淺田　彰
7	万国博覧会 あるいは展示の政治学	「万国博覧会」もフランス革命の所産の一つといえるが、それは当初から、単に全国規模の物産展であったのではなく、パフォーマンスを含んだ文化的イベントとしての特性を備えていた。しかも、19世紀後半に至って急速に大規模化するこの「展示空間」は、まさに19世紀ヨーロッパ近代が発明した「メガ・イベント」であり、ヨーロッパ近代における表象装置のベクトルをよく理解させる仕掛けである。「産業の展示」「帝国の展示」「見せ物（パフォーマンス）」という3つのベクトルに貫かれた万国博覧会の系譜と推移を、表象装置という観点から分析するが、1867年パリ万博の展示空間の構造と、エッフェル塔によって記憶されている1889年フランス大革命100周年記念パリ万博の文化的な発信力が焦点となる。ベンヤミンに倣って言うならば、万国博の群衆は「遊歩する群衆」であったが、20世紀になって、群衆の視線を再び客席に縛りつけつつ、なおかつ万国博に匹敵しうるメガ・イヴェントとして成立するのが、近代オリンピック競技にほかならない。それは「身体への視線の集中」という観点からも、20世紀の表象装置の地平を画している。	渡邊　守章	渡邊　守章
8	表象とメデイア ～複製芸術論	表象を産出し伝達し共有させる「装置」に研究の焦点を当てれば、表象が「メディア」と如何に関わり、自らを変容・変質させつつメディアそのものをも変化させていくことに注目しなければならない。ベンヤミンの『複製芸術論』という20世紀の表象文化研究に基本的な命題（例えば「礼拝的価値」と「展示的価値」の対比や、「アウラ」とその喪失）を検討しつつ、1960年代におけるマクルーハンのメディア論、そして近年のレジス・ドブレ等による「メディオロジー（メディア学）」まで、表象やイメージとメディアが切り結ぶ局面についての言説を、歴史的に検証する。	淺田　彰	渡邊　守章 淺田　彰

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
9	表象とその臨界	ミシェル・フーコーの名著『言葉と物』が大胆に立てた時代区分によれば、ヨーロッパ17世紀から18世紀にかけての「古典主義の時代」は、分節言語を特権的な表象のシステムとして確立させた時代であり、それに対して、18世紀末から19世紀にかけて生起する大きな断絶は、表象不可能な力の侵入のまえに古典主義的な表象の思考そのものが揺らぎだす時代だとされる。それは言い換えれば、19世紀から20世紀を通じて、表象を思考する者は、常に表象の不可能性の出現と対峙しつつそれを行わざるを得ないことを意味する。特に、20世紀中葉の決定的な事件として、ナチによるユダヤ民族の大量虐殺があり、それは例えばワシントンの「ホロコースト博物館」の展示に対して、展示そのものの不可能性の上に立つ「ベルリン・ユダヤ美術館」のような形でも現れている。この人類史上の深いトラウマと同時代に、アントナン・アルトーのような「演劇の幻視者」が、全ての分節言語の廃絶の上に、「肉体の演劇」を立てようとしたことは、表象とその臨界を思考する上で、やはり避けては通れないだろう。やや視点を変えれば、西洋的な表象の発想にとっては臨界として立ち現れる、ある種の東洋的な表象の世界が、表象の思考の地平を画すのも当然かもしれない。マラルメの「余白」の強度の思考や実践であった『賽の一振り』が、東洋の水墨画に通じるような地平である。	淺田　彰	渡邊　守章 淺田　彰
10	テクストⅠ ～神話装置	文学的テクストを、19世紀近代が想定したように、「偉大な創造的主観性の産出物」として、いわば閉ざされた系と考えるのではなく、言語による表象を作り・伝達＝流通させ、それを受容し、更にはそれを記憶として蓄積し、再び別の形で活用するという、「開かれたテクスト」として捉えなおす。18世紀から19世紀の江戸時代の日本で、「御霊＝敵討ち神話」として広く深く機能した「曽我物語」を例に、鎌倉時代におきた「敵討ち」の物語が、江戸の文化の内部で、どのように創造的な変容を遂げたかを分析する。その際、吉原という遊廓が、どのような文化装置として機能したかを理解することは、決定的に重要である。従って、ここでは、『籠釣瓶花街酔醒[かごつるべさとのえいざめ]』と『寿曽我対面[ことぶきそがのたいめん]』ならびに歌舞伎十八番『助六由縁江戸桜[すけろくゆかりのえどざくら]』によって、江戸時代の二大悪所場であった芝居町と遊廓が神話テクストをどのように変形して舞台を成立させたかを分析する。	渡邊　守章	渡邊　守章 渡辺　保
11	テクストⅡ ～間[かん]－テクスト性	日本の伝統詩歌には、「本歌取り」という技法がある。それは単に古典のなかに典拠をもつことの顕示にはとどまらず、「本説＝典拠」と実際の言語パフォーマンスとの関係のゲームであった。単なる出典や影響関係の研究ではなく、テクストとテクストの間で演じられる「引用のゲーム」という局面に注目する必要がある。それは文学テクストと一般に芸術作品の受容論の地平を開くからだ。ここでも日本の江戸時代に例を取り、歴史上の事件であった「赤穂事件」を、『太平記』の「世界」に置き直すことで如何にして『仮名手本忠臣蔵』が成立したか、また、その『仮名手本忠臣蔵』を本説にして、如何に『東海道四谷怪談』が作られたかを分析する。もう一つに事例としては、八百屋お七の物語が井原西鶴の『好色五人女』から河竹黙阿彌の『三人吉三』へと変容したプロセスを論じる。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	身体Ⅰ ～舞踊と言説	表象としての芸術を考える際に、「身体」は特権的なトポス（話題＝場）を提供する。ヨーロッパ19世紀の思考の内部では、捨象されることが多かった「身体」は、20世紀後半の思想の一つの重要な核をなしている。12回と13回で取り上げる「身体」は、舞台に現れる身体である。先ずは日本の伝統演劇のなかから、能における「舞」と、「舞う身体」についての世阿弥の言説を分析し、『風姿花伝』から『二曲三体人形図』『花鏡』『三道』における世阿弥の思考を検討する。次いで、歌舞伎における所作事の発想とその構造・作用、主として歌の詞章と踊りの「振り」との関係に焦点を当てて分析する。	渡邊　守章	渡邊　守章 渡辺　保
13	身体Ⅱ ～虚構の身体	日本の舞台芸術には、「語り物」の構造が極めて強く、かつ多くの舞台表象を決している。ヨーロッパ的に言えば、「語り手」と「演技者」が分裂するわけだが、そうすることで、能も人形浄瑠璃も、また人形浄瑠璃を写した歌舞伎も、それぞれに固有かつ有効な舞台表象を作り上げてきた。その際、「演じる者」のステータスは、単にヨーロッパ近代の俳優論のように、演技者と役を完全に重なり合うものとしては発想できない。個人としての俳優と、彼が演じる役との間に、もう一つの、いわば「前＝表現的」レベルを想定しなければならない。それを「虚構の身体」と呼ぶが、「語り物構造」と「虚構の身体」との関係を、能と歌舞伎の演技によって見る。能の「仕舞い」や日本舞踊の「素踊り」は、この問題を立て、またそれを解く上で、重要なヒントを提供してくれる。	同　上	同　上
14	イメージのドラマツルギー	表象の最も分かりやすい局面は、イメージであり、意味を付与されたイメージである。その意味で、「映像論」は不可欠なのだが、映画映像、特に劇映画の映像を放送教材として用いることは、種々の制約から極めて困難である。そこで、「イメージ」の生成とその受容の政治・経済学とでも呼ぶべき主題をもつジャン・ジュネの戯曲『バルコン』の舞台（1956年作）を引用しつつ、現代社会とその文化における「イメージ」の演劇的・劇的作用について考える。ジュネの『バルコン』は、毎夜、客が自分の変身願望を満足させるべく訪れる「幻想館」と呼ばれる高級娼家を舞台に、権力への意思を性的表象へとシフトした「性と権力のごっこ芝居」だが、この娼家の女主人マダム・イルマと、その情夫でありかつこの店のパトロンでもある警視総監が、革命を挫折させて「英雄のイメージ」を手に入れるという、「イメージの権力奪取」を主題とする。その意味では、革命とその挫折の世紀と呼ばれた20世紀の総括とも受け取ることが可能な挑発的な劇作であるが、イメージのメタシアターとしてのその構造と作用に焦点を当てて分析する。なおこの舞台は演劇制作「空中庭園」が世田谷のパブリック・シアターの協賛を得て、渡邊守章訳・演出、篠井英介主演で、2001年に上演したものである。	同　上	渡邊　守章
15	表象と言説 ～視線・技法・知	最終回は、表象文化研究の基本的な問題の系の配置を示しつつ、全体の総括を行い、この授業科目では取り上げなかったが、問題の系を構成し得る課題について、主任講師三人で討議する。特に、表象としての芸術を論じる際に、理論的言説化の作業のもつ意味について論じる。	同　上	渡邊　守章 渡辺　保 浅田　彰

＝情報化社会研究（‘０２）＝（TV）

－情報革命と社会の変革－

〔主 任 講 師： 柏倉 康夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

産業革命の鍵はモーターであり、社会を動かしたのはエネルギーであった。今日それはコンピュータと情報へ移行しつつある。情報の伝達手段の発展は、人類社会を質的に異なるものへと導きつつある。20 世紀の情報革命が文化・社会に与えた影響を、カルチュラル・エコロジー（文化生態学）の立場から研究する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報と文化	過ぎ去った 20 世紀は様々に定義することができるが、この百年間は、とりわけ情報伝達手段が発達し、人々の生活に大きな影響を与えた時代であった。第一回の講義では、情報の伝達と文化の伝承の違いを中心に、今日わたしたちが直面している情報化社会の問題点を考える。	柏倉 康夫（放送大学教授）	柏倉 康夫（放送大学教授）
2	メディアの発展と時間意識の変容	コミュニケーション手段の発達は当然個人や社会の距離感を変える。電信・電話、映画、鉄道、飛行機等の発明と発見が人々の時間認識と経験にいかにかかわったかを各時代の歴史文献、文学テクスト、絵画を題材にして検証する。時間の文化史のこころみである。	同 上	同 上
3	社会の発展と言語	この回は国家の形成と言語の変遷について考える。明治維新で国民国家が成立するとともに、言語の共通化が急務となり、政府の政策や新聞などマス・メディアの普及で、それは達成された。言語のあり方に政治が大きく関与する例としては、現在統合を進めるヨーロッパも例外ではない。二つを例に考える。	同 上	同 上
4	イメージ・映像について	P．ヴァレリーは「イメージはイメージ以上のもの、それがよって来る事物以上のものだ」と語った。古来、イメージは第２存在（写し、分身）として存在の下位に置かれたが、それが今世紀に入って逆転したように見える。こうした現象はなぜ起こったか。その意味を考える。	同 上	同 上
5	戦争とラジオ	第２次世界大戦は、メディアが総動員された戦いであった。なかでも普及がピークに達しつつあったラジオの果たした役割は大きかった。ラジオ、とくに各国の海外放送が、いかに行われたかをイギリスの作家ジョージ・オーウェルの実際の活動を軸に検証する。	同 上	同 上
6	写真－複製芸術論	ドイツの批評家W・ベンヤミンは現代芸術の特徴を「複製」に求め、それが 20 世紀の芸術観にあたえた意味を論じた。彼が主題として論じたのは写真や映画であったが、20 世紀後半にいたって登場したデジタル技術を含めて、複製技術がもたらす問題を考察する。	同 上	同 上
7	報道写真雑誌「NIPPON」	第１次大戦後に起こった「新即物主義」の運動のなかから、多くの写真雑誌が誕生した。日本でも日本工房が「NIPPON」を刊行する。写真と各国語の記事で日本を世界に紹介する初に国際雑誌であった。 戦前・戦中の時代色を鮮明に映す雑誌を通して、情報と社会動向の関係を探る。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	ニュース映画・ドキュメンタリー	20世紀は映画の時代である。1930年になると、映画館では劇映画と並んでトーキー技術によるニュース映画が上映されるようになり、世界の動向を広く大衆に伝えた。これと並んで「ドキュメンタリー」と呼ばれる、映像による記録が盛んになる。記録映像の歴史と意義を検討する。	柏倉　康夫	柏倉　康夫
9	記憶の映像化	フランスの映画作家C・ランズマンが制作したドキュメンタリー「ショア」は、単に記録としての映像を用いて歴史を語るのではなく、人々の「記憶」を映像上に顕在化するという画期的方法で、歴史を定着することに成功した。過去に実在性を与える方法について考える。	同　上	同　上
10	パーソナル・コンピュータの誕生	今日の情報革命の源はXeroxのパロアルト研究所が制作したパーソナル・コンピュータ“Alto”にあった。このプロトタイプは市場に出なかったが、そこには今日のＰＣが備える機能なもとより、ネットワークの思想がこめられていた。ＰＣの開発思想から情報を考える。	同　上	同　上
11	デジタル革命と放送	デジタル技術の発展は放送と通信の融合をもたらす。さらにデジタル化は放送の分野で、双方向、高品質、多チャンネルという新たな可能性をひらく。当然これは放送内容（コンテンツ）を大きく変えずにはおかない。デジタル革命で進化す放送の未来と社会に及ぼす影響を取り上げる。	同　上	同　上
12	通信革命の未来	PC（パーソナル・コンピュータ）の普及とインターネットの構築は、ＰＣを情報を運ぶ道具に変えた。しかもインターネットの次世代規格IPv6では，無限のアドレスを設定できるため、すべて人・物にアドレ スが割り当てられて、情報通信はコミュニケーションからコントロールへと拡大される。この通信革命の影響を分析する。	吉井　博明（東京経済大学教授）	吉井　博明（東京経済大学教授）
13	デジタル・ アーカイヴと社会	デジタル・アーカイヴは人類が築き上げ た文明・文化、知識をコンピュータにデジ タル情報として収めるもので、これを活用することで新たな文化と産業を起こす動きが２１世紀前半の大きな波となろう。デジタル・アーカイブの機能と社会生活での役割りを展望する。	長谷川　文雄（東北芸術工科大学副学長）	長谷川　文雄（東北芸術工科大学副学長）
14	ヴァーチャル・リアリティー	サイバー・コミュニティーと呼ばれる世界では、ネットワーク上に現実の物理空間とは異質の架空空間が構築されている。我々はこのヴァーチャルな存在と共存し、コミュニケーションする社会とはいかなるものか。その意味を考察する。	同　上	同　上
15	文化の多様性を求めて	既存の文化に新たなデジタル文化が加わることで、多様な文化が世界各地で芽生えてくる可能性がある。それは既存の国家や民族の概念に影響を与えずにはおかない。地球全体で棲み分けと共生が可能な社会システム構築の条件を検討する。	柏倉　康夫 吉井　博明 長谷川　文雄	柏倉　康夫 吉井　博明 長谷川　文雄

＝地域文化研究Ⅰ（‘０２）＝（Ｒ）

－地中海世界の歴史像－

〔主任講師：　伊藤　貞夫（放送大学教授）〕
〔主任講師：　樺山　紘一（国立西洋美術館長）〕

全体のねらい

紀元前 8 世紀から紀元 16 世紀にいたる地中海周辺世界に注目し、その歴史的諸相を、この世界の特質如何を問いつつ、多角的に考察する。序説と全体像提示にあてる第 1･15 回を除き、他の 13 回では何れも研究史上枢要の主題を選び、史料の様態と扱いの実際、各領域における先端的な問題状況の２点に留意しながら、議論を進める。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	史料と方法	考察の対象と視角、講義全体の構成，履修上の留意事項について述べたのち、研究の基礎をなす史料の分類と批判、歴史を考察するそもそもの意義、このたびの研究に有効と見られる比較史的方法、の諸点に論及する。	伊藤　貞夫（放送大学教授）	伊藤　貞夫（放送大学教授）
2	古代の都市国家	この地域の古代史は、ギリシア・ローマの都市国家を軸に展開する。なかでも多数都市の競合的並存を貫くことにより、そのような歴史の典型を示すギリシアの場合を中心に、この世界がいかなる条件の下に成り立ち、いかなる歴史的位置を有するかを論ずる。	同　上	同　上
3	市民たちの世界	ギリシア・ローマ諸国家の核をなす市民共同体内部における社会的結合のありように関しては、近年さまざまな議論が生まれ、その帰趨は必ずしも定かでない。ギリシアの氏族制、ローマにおけるパトロネジに即して、最近の研究動向を追い、問題のありかを見定める。	同　上	同　上
4	家族史への誘い	古代ギリシア社会の基礎集団である家族の様態を、法廷弁論や碑文に基づき論究する。ローマとの比較はむろんのこと、近世ヨーロッパ諸地域の家族史研究や社会人類学の成果をも攝取し、核家族の遍在を想定する近年の有力説への批判を試みる。	同　上	同　上
5	奴隷制社会論	古代地中海世界では、自由人と奴隷との区別は明らかであった。奴隷とは、いかなる境遇にある人々だったのだろうか。古代地中海世界を奴隷制社会としてとらえることはできるだろうか。碑文やパピルス文書を素材に、考えてみたい。	本村　凌二（東京大学教授）	本村　凌二（東京大学教授）
6	「パンとサーカス」の社会史	ローマ帝国の「パンとサーカス」は、しばしば堕落した大衆社会の代名詞のごとく語られているが、この恩恵施与の慣行には、古代社会の底流にある人間関係の本質が表れている。現代における社会資本の在り方を再考する機会にもなろう。	同　上	同　上
7	古代末期社会論	かつて古代末期は古典古代文化が終末を迎える時代とみなされていたが、近年では独自の価値と文化を担う創造の舞台と考えられるようになった。この新しい世界がどのようにして生まれ育ったかについて、史料の再考を試みる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	中世イタリアの多言語資料	11－12 世紀の南イタリアでは、当時の多文化併存状況を象徴するように、アラビア語・ギリシア語・ラテン語で記された文書が多く出されている。それらの文書の外的特徴や保存形態、それらが収集されている古文書館、解読・利用する際の問題点を論じる。	高山　博（東京大学助教授）	高山　博（東京大学助教授）
9	中世地中海三大文化圏論	7 世紀から 15 世紀にいたるまで、環地中海地域は、アラブ・イスラム文化圏、ギリシア・東方正教（ビザンツ）文化圏、ラテン・カトリック（西ヨーロッパ）文化圏の三つに分割された状態にあった。この三つの文化圏を比較して、それぞれの特質を論じる。	同　上	同　上
10	中世地中海の交易と人的交流	中世の地中海は、大規模な覇権争奪戦の舞台であるだけでなく、異なる文化に属する人々が接触し交流する場でもあった。地中海を行きかった人や物に注目して、地中海交易のありようとそこに形成された人的ネットワークや交流圏を論じる。	同　上	同　上
11	ルネサンスに甦る古代ギリシア	ギリシアの古典文献は、イスラム世界からラテン世界への翻訳や、ビザンチンにおける発掘をへて、15－16 世紀のイタリアで本格的な再評価と再解釈を受け取った。その最終局面における展開を、ルネサンス文化の成熟に即して論ずる。	樺山　紘一（国立西洋美術館長）	樺山　紘一（国立西洋美術館長）
12	ブローデルとアナール派の地中海	ブローデルの『地中海』の基本構想を検証し、アナール派の歴史学方法論を吟味する。そこでは全体性と日常性というふたつの観点が重要であるが、両者の有効性が十分に発揮されているかどうか，また異なった視点がありうるのではないかを考察する。	同　上	同　上
13	オスマン帝国の成り立ち	13 世紀末にイスラム・ビザンツ両世界の接点であるアナトリア西北部に出現し、16 世紀には地中海世界の約４分の３の地域を占めるにいたったオスマン帝国の存在に注目し、その支配組織の特異なありようを、形成と発展の相の下に探る。	鈴木　董（東京大学教授）	鈴木　董（東京大学教授）
14	イスラム的共存のシステム	盛期のオスマン帝国が、さまざまな民族と宗教が複雑に入り組む広大な領域に対し、イスラム的伝統に基づく共存のシステムを用いながら、長期にわたりいかに統合の実を挙げたかを、史料の模索を通じ明らかにする。	同　上	同　上
15	地中海世界を考える視点	地中海世界は、歴史学はもとより、人類学・地理学・芸術学など，多様な角度から論じられてきた。数千年にわたる歴史をとおして、多様な文明が接触と競合を演じた世界を、いかに把握できるか。方法上の規準を原理的に捉えなおしてみたい。	樺山　紘一	樺山　紘一

＝地域文化研究Ⅱ（‘０２）＝（Ｒ）

－東アジア歴史像の構成－

〔主任講師：　浜口　允子（放送大学教授）〕
〔主任講師：　川勝　　守（大正大学教授）〕
〔主任講師：　吉田　光男（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

東アジア世界とは何か。その文化や社会はどのように形成され、いかなる特徴をもっているか。本講は、東アジア世界を構成する中国・朝鮮を中心として、その歴史と現在をさまざまな角度から考察しつつ、併せてその研究方法や研究の現状を明らかにする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	東アジア地域文化研究の方法、その特殊性と課題	東アジア地域には、前近代、近現代を問わず、膨大な官製文書、行政文書が存在する反面、地方文書、庶民文書、或いは各種社会や団体の史料などは不足或いは入手困難という傾向がある。したがって、東アジアの地域文化研究にあたっては、何よりもまず、史料の特殊性や、入手法、利用法、着目点などについて理解しておかなければならない。	川勝　守（大正大学教授） 吉田　光男（東京大学大学院教授） 浜口　允子（放送大学教授）	川勝　守（大正大学教授） 吉田　光男（東京大学大学院教授） 浜口　允子（放送大学教授）
2	東アジア世界とは何か	東アジア世界を特徴づけているものは何か。その理解のために、中国皇帝と周辺諸国家首長の朝貢・冊封関係と君臣関係の在り方、文化の伝播と形成等を取りあげ、中国の中華世界に対する朝鮮・日本の中華世界、東アジアの多極構造等について述べ、華夷秩序の歴史的展開と時期区分について考察する。	川勝　守	川勝　守
3	中華帝国の生成・展開・崩壊	一つの中国・一人者の支配はなぜ可能か。皇帝の出現と継承、王朝の形成と交替、官僚制と地方行政等の諸問題のもつ意味を理解し、帝国の諸制度、財政・土地制度・税制・徭役・官営工業等について検証し、そのシステムがなぜ崩壊するのかを考察する。	同　上	同　上
4	朝鮮近世の政治システム－官僚はどこから生まれてきたのか－	政治エリートである士族に焦点をあて、朝鮮近世の政治世界を解読する方法を考えていく。儒教、科挙、両班、官僚制度、地方制度を中心に政治システムを分析し、政治と社会との相関関係、人々の政治意識などに迫る。	吉田　光男	吉田　光男（東京大学大学院教授）
5	中国経済の社会動態 ――農業と手工業の結合	農耕と織布は中国における農業・工業生産の根幹であり、経済の基礎である。春秋戦国期の鉄製農具の使用より近代に至る農業・工業史の展開を追い、そこにいくつかの画期を設定して社会構造発展との関係を考える。	川勝　守	川勝　守
6	商業の発達と都市網の形成	唐宋期と明清期の二商業革命時期の内容を比較して、生産・流通・消費の所在関係、商人組織、経営・投資・管理、市場形成を確認し、明清期に国都ー省城ー府州城ー県城ー市鎮の重層的な都市階層がいかに形成されたかを見る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	朝鮮近世の流通経済－商業と商人－	朝鮮近世の流通経済には強い国家的統制があった。貢人、市廛、褓負商、大同法など、現在最も注目を浴びている研究課題に着目し、国家と商業との関係を手がかりとして流通構造の特色を探究し、朝鮮近世の経済世界がもつ特質を剔抉する。	吉田　光男	吉田　光男
8	伝統中国の社会構成	儒教主義に基く社会は、地主宗族をつくり、科挙制により官僚を出し、商業・工業を営む者とともに社会の支配階層を占めた。一方、自作農・佃農・雇農は、都市下層民とともに地方社会の大半を占め、政治・社会変動の中心となった。	川勝　守	川勝　守
9	朝鮮近世の社会集団	氏族、契、郷案組織など、国家と住民の中間にあって近世朝鮮社会の中核を形成していたさまざまな社会集団について、現代の社会調査を視野に入れながら考察し、歴史学と文化人類学・社会学の融合的な研究を模索する。	吉田　光男	吉田　光男
10	東アジアの思想文化――明儒における学統と政治実践――	儒教・仏教・道教は中国の宗教文化であり、三者相俟って中国思想を形成し、時代とともに内容を変えつつ、社会発展に対応してきた。その影響は二千年来、朝鮮・日本・琉球などの周辺諸国に及び、各国にそれぞれ定着した。その変遷をみる。	川勝　守	川勝　守
11	東アジアの家族と女性	東アジアにおける男女の社会的関係は、一般に父権家族制度とその道徳律の影響を受けてきたとされる。そうした両性関係の形成過程を明らかにすると共に、近年の研究によって、伝統的女性像の見直しがなされていることにも言及する。またジェンダーの視角から、家族や宗族を中心とした社会の特質を考える。	同上	同上
12	十八世紀の清朝と東アジア世界――清、乾隆期雲南銅の京運問題――	一八世紀の清は、領土・民族・生産と流通・文化等の面で今日の中国の原型である。人口は世紀末に4億に近づき人口爆発を起こした。移住と開発は少数民族地域や周辺諸国へ向かい、漢民族内外に反乱と戦争を起こした。また同世紀は、物流の新たな流れや、人々の広範なネットワークを作り出した時であった。	同上	同上
13	東アジアの近代と中国のナショナリズム	ヨーロッパ世界によるアジア進出は、中華帝国の天下的世界が解体され、代わって国民国家が形成される契機となるものであった。その鍵ともいえるナショナリズムの、各地域、各時期における担い手や表出の場について考察する。	浜口　允子（放送大学教授）	浜口　允子（放送大学教授）
14	近代中国と都市社会	二〇世紀に入って中国社会はどのような変化をみせたのか。その研究は如何にすすめられてきたのか。新しい都市の形成に注目し、伝統社会をひきつぎつつ新たな時代を刻印するその特色について考える。	同上	同上
15	社会主義の選択と現代中国	二〇世紀後半の現代中国の歴史は、社会主義の受容に始まり、いまやそこから脱却するのか或いは深化させるのかを問う模索のなかで新世紀を迎えている。この半世紀の歴史をどう捉えるか、幾つかの着目点について述べる。	同上	同上

＝地域文化研究Ⅲ（‘０２）＝（TV）

－ヨーロッパの文化と社会～イギリスを中心に～－

〔主任講師：　山内　久明（放送大学教授）〕
〔主任講師：　木畑　洋一（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　草光　俊雄（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

ヨーロッパ連合はすでに現実となり機能しているが、他方において言語、文化、社会に目を向けると、国家を単位とする多様な個別が存在することも事実である。この講義では、ヨーロッパの文化と社会を、イギリスに焦点を合わせて、そこで、民族、人種、地域、階級などさまざまな要素が複雑に絡む仕組みと歴史的背景を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに ―中心と周縁	イギリスは自らその一員であるヨーロッパ連合と不即不離の関係にある。ヨーロッパ大陸に中心を置いて見るとイギリスは周縁に位置するが、イギリスのなかで、イングランド対ケルト文化圏、南と北など、地理的・地域的多様性に基づく中心と周縁の関係が存在する。	山内　久明（放送大学教授） 木畑　洋一（東京大学大学院教授） 草光　俊雄（東京大学大学院教授）	山内　久明（放送大学教授） 木畑　洋一（東京大学大学院教授） 草光　俊雄（東京大学大学院教授）
2	自然と景観の保全	18 世紀中葉のイギリスの田舎における「囲い込み」と、産業革命の結果としての産業都市の成立は、イギリスの田舎と都会を大きく変貌させた。環境破壊に対する反省は環境保全運動を促し、顕著な一例がナショナル・トラストである。同時に、都市計画が発達した。	山内　久明	山内　久明
3	民族と人種の融和	イギリスという国民国家がどのようにできあがってきたかを、ブリテン島、アイルランド島への人の移動、イングランドと「ケルト辺境」の関係に着目して検討し、さらにイギリス帝国の形成と崩壊の過程が、イギリスの人種・民族構成にいかなる影響を及ぼし、国民国家としての姿を変容させたかを問う。	木畑　洋一	木畑　洋一
4	ことばの標準化と多様性	アングロ・サクソン時代のゲルマン的要素と、ノルマン征服以後のフランス的要素との融合による英語の豊富化。教育制度やメディアを通して行われた英語の標準化。それにもかかわらず存続する地域と社会的差違による英語の多様性。言語政策の問題、等々。	斎藤　兆史（東京大学大学院助教授）	斎藤　兆史（東京大学大学院助教授）
5	政治と女性	議会制民主主義を育んだ国というイメージのイギリスであるが、女性が参政権を得たのは、イギリス帝国の中のニュージーランドなどよりはるかに遅く、第一次世界大戦末期のことであった。女性の社会的地位の変遷と女性参政権獲得運動の展開を歴史的に追い、イギリス政治の中での女性の位置を探る。	木畑　洋一 鈴木　実佳（静岡大学助教授）	木畑　洋一 鈴木　実佳（静岡大学助教授）
6	経済的繁栄と停滞	産業革命の先進国、金融の中心地、「世界の工場」として世界経済を先導したイギリスも、20 世紀に入るとアメリカとドイツに追いつかれ、第二次大戦終結とともに植民地も失い、停滞。戦後の福祉国家の確立、サッチャー政策による福祉打ち切り、ビッグ・バンと続く。	草光　俊雄	草光　俊雄

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	社会構造と文化	いわゆる「階級」問題の複雑さは、中世の大土地所有者としての貴族に遡る土地所有形態に根ざした身分関係と、近世以後の流動的な経済活動による貧富の差に基づく階属性との混在に起因する。階級分化とは何か、教育は階級構造を流動的にするかどうか、等々の問題。	草光　俊雄	草光　俊雄
8	イギリスの医療	イギリスの近代科学に対するアイザック・ニュートンの貢献はいまさら言うまでもないが、それと並行してジョン・ロックに代表される経験論哲学の伝統の重要性が挙げられる。また、20 世紀前半、ヴィトゲンシュタインを擁したケンブリッジの哲学的隆盛など。	鈴木　晃仁（慶應義塾大学助教授）	鈴木　晃仁（慶應義塾大学助教授）
9	個性を伸ばす学校教育	イギリスの初等教育制度が中央政府の政策によって統一されたのは 1870 年の教育法によってであり、それ以前は宗教別の教会と私学に任されていた。義務教育年齢が延長され、機会均等が普及するのは第二次大戦後である。公立と私学、カリキュラム、試験制度、等々。	小澤　周三（東京外国語大学教授）	小澤　周三（東京外国語大学教授）
10	古くて新しい大学	イギリスの大学は中世の大学としてのオクスフォードならびにケンブリッジ、スコットランドの諸大学、産業革命に呼応する 19 世紀の諸大学、第二次大戦後の社会の平等化に基づく新大学、1992 年に昇格した最新の大学などがある。理念と制度の現在と歴史的背景。	山内　久明	山内　久明
11	国家と宗教	アングロ・サクソン時代に遡るキリスト教伝来、ローマ・カトリック教会直轄の中世キリスト教、ヘンリー8 世による宗教改革と英国国教会の成立、国教会から離反した非国教主義の諸宗教。宗教は信仰の問題であると同時に、文化と社会の動態に深く関わっている。	同　上	同　上
12	文学とメディア	文化と社会の総体のなかでの文学――そのつくり手と受容者の社会的位置づけ。さらにそこから、いわゆる純文学に隣接するメディアや、ポピュラー・カルチャー、書き手としての女性、こどもの文化など、問題は尽きない。	山内　久明 佐藤　和哉（日本女子大学助教授）	山内　久明 佐藤　和哉（日本女子大学助教授） 鈴木　実佳
13	表象文化	ロンドンを中心とする夥しい数の劇場で、シェイクスピアをはじめとする古典と現代劇が共存する活力にみちた演劇活動。ホガース、パーマ、ターナー、カンスタブル、ラファエル前派などの絵画。高度な演奏活動と音楽的創造性との相関性、等々。	草光　俊雄	草光　俊雄 ゲスト 菅　靖子（埼玉大学助教授）
14	イギリスと世界	EU の一員でありながら EU 統合の深化に対しては慎重なイギリス、かつての植民地であった英連邦諸国との絆も持続するイギリス、同時にアメリカ合衆国との「特別な関係」をも重視するイギリス――ユニークな多方位外交を進めるイギリスの、世界の中での位置を歴史的に探る。	木畑　洋一	木畑　洋一
15	イギリスと日本――おわりに	前回のテーマの延長としてイギリスと日本との関係文化、社会、外交などに即して考えるとともに、おわりにあたり全体をふたたび振り返り、まとめを行なう。	山内　久明 木畑　洋一 草光　俊雄	山内　久明 木畑　洋一 草光　俊雄

＝日本文化研究（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　高木　昭作（放送大学教授）〕

全体のねらい

（1）文化を、社会を成り立たせているところの暗黙の約束事、その成員のものの考え方、行動様式などに共通して存在するものと捉え、そのような約束事のひとつとして、本講では、古文書（ただし講師の力量、時間などの関係で近世古文書）について考える。

（2）上記のような目的で古文書を読むということは、作成者の意図に即して古文書を読むということに他ならない。このことは、実証史学の論文を自前で作成すべき大学院の学生にとって最小限身につけるべきことがらと考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	古文書学入門	本講の目的などについて説明した後、①古文書学とは、②文書と記録の違い、③書札礼、④参考文献など、古文書学についての入門的知識を述べる。	高木　昭作（放送大学教授）	高木　昭作（放送大学教授）
2	「禁制」という名の古文書	この回では、指揮下の軍隊に濫妨・狼藉を禁止して、特定の地域を軍隊の略奪・暴行から保護する「禁制」について述べ、放火・略奪が状態であった戦争の実態と、近世の平和のあり方について考える。	同　上	同　上
3	「印判状」	古文書には、その様式・内容・作成目的などにしたがって固有の名―宣旨・御教書・奉書・印判状などの名で呼ばれ、それぞれの名にふさわしい機能を果たしてきた。この回では、印判状に例を取り、当時の特定の様式の文書に対する呼び名とその機能について説明する。	同　上	同　上
4	声を出して近世文書を読む（その１）	「読書百ぺん、意おのづから通ず」というが、史料を理解するには、まず声に出して読むことが大切。まず当時の読み方がわからねばならないが、そのために仮名（ひらがな）の文書を読むことで、漢字まじりの文書と対照する必要がある。①近世文書に特有の表記と読み方、②仮名文書、などについて説明する他に、③近世の女子教育（とくに教科書）についても言及したい。	同　上	同　上
5	声を出して近世文書を読む（その２）	前回の続き。	同　上	同　上
6	老中奉書を読む（その１）	将軍や大名の意思を伝達するために多用された奉書の読み方について述べる。前近代社会では、高位者は下位者に直接言葉をかわさず、両者の間には必ず取り次ぎが介在したが、この言葉（音声）の世界の慣行が文字の世界に移されたのが奉書であるが、この回は、とくに取り次ぎを媒介とした伝達にともなう問題を中心に考えることとしたい。	同　上	同　上
7	老中奉書を読む（その２）	前回の続きで、神や狐などの憑依された介在者（霊媒など）による伝達の例などについて考察する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	老中奉書を読む（その３）	江戸幕府の老中は、将軍の護衛兼身の廻りの世話を任務とした小姓の中からとくに選ばれて将軍・一般幕臣間の取り次ぎを担当した、いわゆる出頭人が変化し、制度化されたものである。主君の寵愛をかさに出頭人が権勢をふるう状況、老中の成立とともに老中奉書が形成されていく様相、公的な取り次ぎとしての老中の成立とともに、側用人などと呼ばれるようになった将軍の側近が「内証」の取り次ぎにあたった実態などについて述べる。	高木　昭作	高木　昭作
9	老中奉書を読む（その４）	この回では古文書そのものからしばらく離れ、将軍と出頭人の間の人間関係が、ながく日本の社会に残ったことを、赤穂事件、ベネディクト「菊と刀」、司馬遼太郎「坂の上の雲」などを通じて指摘する。	同　上	同　上
10	老中奉書を読む（その５）	上位者の意思を側近が取り次いで下位者に伝達する文書が奉書であるが、逆に下位者の意思を上位者に伝達（披露）してくれるよう、側近に依頼する文書を披露状という。この回では、この披露状を読み解く訓練をおこなう。	同　上	同　上
11	御触書を読む（その１）	幕府や大名の命令や法度を、広く農民や町人に周知させるために、その配布ネットワークに従って触れ流した文書を御触書という。そうしたネットワークどのように構築されていたのか、御触として流れた文書にはどのようなものがあったのか、について述べる。続いて、幕府・藩による農村支配という観点から、御触書以外に農村に残された史料について簡単に述べる。	同　上	同　上
12	御触書を読む（その２）	前回の御触書のように、支配系統の文書だけに目を奪われると、近世の農村はまるで支配されるだけの存在であったような気分にもなりかねない。しかし他方では、中世のいわゆる郷村については自治の側面が強調されている。その伝統はどうなったのだろうか。この回では、農村の治安維持について定めた種々の史料から、この問題について考える。	同　上	同　上
13	近世の外交文書を読む。（その１）	中国を中心とした前近代の東南アジアの外交の世界では、中国語が外交文書の中心であった。したがって外交文書の解読には、漢文の知識が必要である。第13・14回は、漢文の外交文書を読み解きながら、日本型中華思想、鎖国観などに関する最近の学説について紹介したい。	同　上	同　上
14	近世の外交文書を読む。（その２）	豊臣秀吉、徳川家康の外交文書（漢文）を解読する。	同　上	同　上
15	文書にだまされるな！	①文書の字面にだまされるな！書かれたことを不用意に信じると、とんでもない間違いに陥ることは、すでに第12回の御触書で明らかになったことである。御触書だけを読むと、「鳴りを立てる」は幕府の命令によると受け取りがちが、実は農村の古くからの慣行を幕府が追認したものであった。 ②最も基本的なことは明示されない？書かれたことを信用しすぎないだけでなく、もっと重要なことは、社会の基本的な約束事に関することではあるが、書かれていないことがあることである。これらのことについて指摘して、古文書と文化に関する講義の締めくくりとしたい。	同　上	同　上

＝比較文化研究（‘０２）＝（TV）

－ジェンダーの視点から－

〔主任講師：　原　ひろ子（放送大学教授）〕

全体のねらい

この講義では、A 文化と B 文化を比較するといった手法ではなく、A 文化が他文化の影響を受けたり自文化内での主流価値の転換によって変化するプロセスを考える。第二に、複数の文化にまたがって生活する人々の事例から諸文化を比較しつつ、当事者の主体的生き方とその人々が生活する社会的文化的文脈との関連で考える。その際、文化人類学、社会学、歴史学などの知見にもとづき、現代における人間とその文化を考えるキーコンセプトであるジェンダーを中心として階級/民族・人種の要素や植民地化の要素などを加味し、複眼でものを見ることの重要性と社会変動のプロセスの中で諸事象を把えることの意義に着目する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	比較文化研究の多様性	比較文化研究に用いられる多様な研究手法に関して概観し、本授業科目のねらいを説明する。	原　ひろ子（放送大学教授）	原　ひろ子（放送大学教授）
2	カナダ北部狩猟採集民の事例	カナダ北部狩猟採集民カショーゴティネ（ヘヤーインディアン）の社会と文化に見られる19世紀中庸以降の変化をジェンダーの視点で論ずる。その際、新大陸開拓、動植物の変化、民族・人種関係、教育・職業などの変容との関連で考察する。特に、英国やフランス社会のジェンダー論的枠組みが先住民政策とどのように関連したか、についても触れる。	同　上	同　上
3	ジェンダーと社会化・文化化 ～インド①～	北インド、ウッタル・プラデーシュ州の農村社会における家族関係、結婚観や儀礼の過程を紹介し、ジェンダーによる役割や期待される行動様式、儀礼的役割の違いなどについて考察を加え、北インド農村の人々が、儀礼や日常生活をつうじて、「女性」として、「男性」として、いかに社会化・文化化されていくのかを論じる。	八木　祐子（宮城学院女子大学助教授）	原　ひろ子 八木　祐子（宮城学院女子大学助教授）
4	妊娠・出産・身体 ～インド②～	北インド農村の妊娠・出産に関する儀礼や産婆の役割などをとりあげ、ヒンドゥー社会における子どもを持つことの意味や身体観について検討し、男子偏重、家族計画とそれにともなう選択的産み分け、女児殺しなどの問題点に焦点をあて、ジェンダーの視点から考える。	同　上	同　上
5	農村の社会変化とジェンダー ～インド③～	経済自由化による外国資本の導入、グローバリゼーションの影響などインド社会をとりまく社会・経済的な大きな動きのなかで、消費経済の流入が本格化した90年代以降の北インド農村の社会変化に焦点をあて、教育レベルの上昇、結婚年齢の上昇、ネットワークの広がりといったさまざまな要因により、若い世代を中心とした男女関係、家族関係の変化など、ジェンダー関係がどのように変化し、人々の意識や行動がどう変わっているのかを考察する。	同　上	同　上
6	イニシエーション儀礼とドレイ制 ～アフリカ①～	植民地化前のアフリカ社会のジェンダー関係を、イニシエーション儀礼に表象されるジェンダー・イデオロギーとドレイ制から論じる。ジェンダー・イデオロギーは、アフリカ社会の親族組織の維持と再生産にとってきわめて重要な「しかけ」であったことを、一夫多妻やレヴィレート婚、あるいは女性婚などの婚姻制度からあとづけ、それがドレイ制やドレイ貿易の展開をも規定していたことを検証する。	富永智津子（宮城学院女子大学教授）	原　ひろ子 富永智津子（宮城学院女子大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	ドレイ制廃止と都市化 ～アフリカ②～	植民地化は、アフリカ社会にさまざまな変動要因をもたらした。ここでは、ドレイ制廃止と都市化の進展をとりあげ、アフリカ社会の男性と植民地統治者としてのヨーロッパ人男性、およびアフリカ系やアラブ人系女性という三者間のジェンダー・コンフリクトに焦点をあてて論じる。具体的には東アフリカのスワヒリ社会の事例と、ナイロビの「売春婦」を取り上げる。	富永　智津子	原　ひろ子 富永　智津子
8	女性の労働と慣習法 ～アフリカ③～	独立後、アフリカ社会のジェンダー関係はどのように変化したのか。ここでは、女性と労働に関しては、社会主義路線を選択したザンジバル（タンザニアの島嶼部）の事例をとりあげる。マクロ経済における女性の地位、インフォーマル部門における女性の労働状況を概観したあと、1980 年代半ばから増加しはじめた女性協同組合に焦点をあてる。また、慣習法に関しては、夫の遺体をめぐって争われたケニアでの裁判の事例を通して、近代法との二重規範の中で翻弄される女性の法的地位について考察する。	同　上	同　上
9	国民の創造とジェンダー	フランス革命への女性の参加と排除、ヴィクトリア朝イギリスにおける〈女性性〉の創造、明治期日本の「良妻賢母」と女子教育、沖縄の文化的境界表象としての〈女性〉の問題等を比較しながら、近代国民国家の形成と国民としての〈女性〉の出現を、〈男性〉との比較で、また国民国家内部の中心‐周辺構造にも留意しながら考察する。婦人参政権運動にも触れ、国民としての〈女性〉の表象的側面と主体的側面の双方を論じる。	伊藤　るり （お茶の水女子大学教授）	原　ひろ子 伊藤　るり （お茶の水女子大学教授）
10	国際社会とジェンダーの平等	ジェンダーの平等が国際社会の課題として浮上するようにいたった過程を国際連盟期、そして「国連女性の十年」以降、今日にいたる国際連合のもとでの展開を踏まえながら考察する。とくに開発と国際協力の問題に焦点を当て、ジェンダーの平等が国際規範としてどのような意義と課題をもつのか、南北格差、ポストコロニアル社会、トランスナショナルな市民主体の登場といった問題との関係において論じる。	同　上	同　上
11	国際移動とジェンダーの再編	従来、男性の労働力移動を中心に捉えられてきた国際移動をジェンダーの視点から再検討し、女性の国際移動という現象に注目する。ヨーロッパ（とくにフランス、ドイツ）と日本の事例を取り上げて、途上国から高度産業諸国への移動における性差、①送り出し社会、②受け入れ社会、③移住者自身とその家族、三つの水準におけるジェンダーのありよう、移動によって派生する新しい社会問題、文化創造の可能性等について論じる。	同　上	同　上
12	家族と人権	香港新界の原居民女性土地相続権論争、日本の夫婦別姓論争、アメリカやヨーロッパの同性愛婚論争を通して、現代社会における家族と親族の変容と、家族法の変革、その中でのジェンダー関係、人権を考える。台湾漢族社会および韓国社会における嫁姑関係、夫婦関係とその変化についても触れ、比較を試みる。	沼崎　一郎 （東北大学大学院助教授）	原　ひろ子 沼崎　一郎 （東北大学大学院教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	性暴力と男性性	セクシュアル・ハラスメント、レイプ、ポルノグラフィ、買春、ドメスティック・バイオレンス（DV）に見られる「普遍的」(東アジアだけでなく、アメリカやヨーロッパとも共通する)性暴力の問題と、男性のジェンダー／セクシュアリティとの関係を問う。紛争における集団的・組織的な性暴力、国際的な（児童）買春との関連にも触れる。また、男性からのDVへの取り組み、ホワイトリボン運動、DV加害者への教育的介入プログラムなどを紹介、その意義を検討する。	沼崎　一郎	原　ひろ子 沼崎　一郎
14	男性学と男性運動	男性性の問い直しと、変わる男性性について考える。日本とアメリカの男性運動（保守派&改革派）、特に日本のメンズリブ、育児連などの活動の紹介と、その意義の検討。韓国の「良い父親」運動、父親の家事・育児は当たり前という中国・台湾の実情にも触れる。男性性の多様性、特に非暴力的な男性性の可能性を探る。タヒチ男性やセマイ男性との比較など。	沼崎　一郎	原　ひろ子 沼崎　一郎
15	比較文化とジェンダー	全体のまとめを行い、ジェンダーの視点に立って社会変動のプロセスに着目しつつ比較文化研究を行う今後の課題について論ずる。	原　ひろ子	原　ひろ子

＝文化人類学研究（‘０２）＝（TV）

－環太平洋地域文化のダイナミズム－

〔主任講師：　江渕　一公（放送大学教授）〕
〔主任講師：　小野澤　正喜（筑波大学教授）〕
〔主任講師：　山下　晋司（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

テクノロジーの発展と経済のグローバル化に伴って、地球規模におけるヒトの移動と文化の流動化が進み、かつての周縁諸国も否応なしに世界経済システムの中に緊密に組み込まれつつある。その過程で文化にどのような変化が起こっているのかを主に環太平洋地域をフィールドとして多面的に考察し、地球時代のヒトの移動と文化のダイナミズムを捉える新しい方法論を考究する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	グローバリズムと文化のダイナミズム〈総論〉	人類社会の急速なグローバル化に伴い、文化人類学の対象もかつての周縁地域から産業中心地域、複雑な都市社会、さらに地球社会にまで拡大し、また文化の動態の研究への関心が高まっている。その概況とこの授業の課題及び理論的意義について論じる。	江渕　一公（放送大学教授）	江渕　一公（放送大学教授）
2	コロニアリズムと文化人類学－文化人類学の思想（Ｉ）－	伝統的な文化人類学の理論は、世界の周縁地域・植民地の文化を対象にして、コロニアリズムと深い関係を保ちながら構築されてきた。そこに文化人類学の思想的、方法論的問題点が隠されている。その視点から文化人類学の歴史を批判的に回顧する。	須藤　健一（神戸大学教授）	須藤　健一（神戸大学教授）
3	ネオコロニアリズムと文化人類学－文化人類学の思想（Ⅱ）－	産業中心諸国と周縁諸国の間には戦後、新たな形の政治的・経済的・文化的支配－従属関係が生まれ、その構造的基盤のもとに周縁諸国の世界システムへの編入が進んでいる。ポストコロニアル人類学はその情況をどう捉えてきたか、その思想を論じる。	吉岡　政徳（神戸大学教授）	吉岡　政徳（神戸大学教授）
4	移動の民族誌の構図－トランスナショナリズムの人類学（Ｉ）	現代はトランスナショナルな移動の時代である。人はよりよい教育、仕事、生活を求めて、故郷を離れ、都市へ出、さらに国境を越える。こうした人々の国際移動とともに変化する民族社会の風景（グローバル・エスノスケープス）を検討する。	山下　晋司（東京大学大学院教授）	山下　晋司（東京大学大学院教授）
5	エスニシティ研究の現在－トランスナショナリズムの人類学（Ⅱ）－	ポストコロニアル時代、そしてポスト冷戦構造下における国家の形成・再編と世界システムの構築過程で、諸民族の再編と紛争が頻発している。グローバルな情報ネットワークのもとで絶えず生成変化を続ける民族の内実と意味を検討する。	小野澤　正喜（筑波大学教授）	小野澤　正喜（筑波大学教授）
6	移民の適応戦略－トランスナショナリズム）の人類学（Ⅲ）－	経済のグローバル化は市場・資本の流動化だけでなく労働力のトランスナショナルな流動化を促進し、各地にディアスポラの増加と文化的モザイク化をもたらしつつある。グローバル・ネットワークに支えられた「越境する労働者」の構造を検討する。	須藤　健一	須藤　健一
7	観光人類学のパースペクティブ－トランスナショナリズムの人類学（Ⅳ）－	観光は現代においてきわめて重要な社会的事実である。観光という現象の展開、観光客と観光客を受け入れる社会、観光と文化の生成、持続可能な観光開発などについて検討し、観光という窓から現代の社会と文化のダイナミズムを観察する。	山下　晋司	山下　晋司

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	開発問題への関与	旧植民地・第三世界諸国への産業開発援助は、意図に反して貧困の拡大をもたらし、西洋的近代化理論への懐疑と批判が強まっている。産業開発は環境破壊の問題と連動することも多い。NGO活動を中心に環境・開発問題と人類学の課題を検討する。	清水　展（九州大学教授）	清水　展（九州大学教授）
9	先住民運動の現在－社会運動の人類学（Ⅰ）－	近代国家への編入を余儀なくされた先住民の間で近年、伝統文化の維持・復活とその基盤（自然・土地）の保障・回復を求める「文化に対する権利」意識が高まり、先住民族と国家の関係は新しい段階を迎えている。オーストラリア先住民運動の事例に即して先住民研究の新しい視角を探る。	江渕　一公	江渕　一公
10	先住民と芸術文化運動－社会運動の人類学（Ⅱ）－	近年、先住民の間で民族文化の復興・活性化運動が活発化し、とくに芸術文化の分野において顕著である。先住民族の都市への移動に伴う異文化との接触やグローバル文化の流入がその促進要因となっているメカニズムをオーストラリア先住民の芸術文化運動の事例に即して追究する。	同　上	同　上
11	宗教の再生－社会運動の人類学（Ⅲ）－	宗教はエスニシティの問題と関連していることが多い。宗教、民族、国家の三者関係が錯綜する超国家的ネットワークのもとで、宗教はしばしば国家的及び超国家的紛争と暴力の因となる。そうした宗教運動の展開情況を捉える視点と方法を論じる。	小野澤　正喜	小野澤　正喜
12	グローバル化のなかの性／ジェンダー－国境を越える女性たち－	グローバル化のなかで、性やジェンダーのあり方も大きな変化をとげている。国際移動における男女差、女性の越境と新しい人生への挑戦、国際結婚など、性やジェンダーの視点から今日における国境の越え方を考察する。	山下　晋司	山下　晋司
13	文化政策と教育の人類学－土着文化とグローバル文化のダイナミズム－	環太平洋地域では、諸民族の伝統的文化遺産を保護し、再生・活性化させつつ、国民文化の統合を進める文化・教育政策が展開する一方では、グローバル・メディアを媒介とする独自の国民文化形成も進んでいる。「文化の意識化」という視点から文化と教育のダイナミズムを追究する。	江渕　一公	江渕　一公
14	フィールドワークと人類学	人類学者の社会的責任とは何か。とくに調査対象への関わり方・姿勢がいま鋭く問われている。人類学者は現地社会の代弁者なのか。「発展・開発」政策への奉仕者あるいは批判者なのか。人類学史の批判的回顧の上に研究の倫理性について考える。	清水　展	清水　展
15	文化人類学の将来的課題と展望〈主任講師：総括鼎談〉	非西洋社会の研究から西洋的知の体系への懐疑と批判を提示してきた文化人類学は、既成科学に対する批判知の先駆者として評価される一方、西洋中心の政策科学への奉仕者との批判も受けてきた。文化人類学の方法論的課題と可能性について総括。	江渕　一公 小野澤　正喜 山下　晋司	江渕　一公 小野澤　正喜 山下　晋司

＝国際関係論（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　小和田　恆（元早稲田大学大学院教授）〕
〔主任講師：　山影　　進（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

複雑な今日の国際関係を捉えるために必要な基本的な考え方と現代国際関係の諸側面とを講義する。外国事情、国際情勢といった現状紹介ではなく、国際社会が抱えている主要な課題を示しつつ、履修者が自ら国際関係を分析できるような枠組みを提供したい。とくに日本外交とアジア太平洋地域の国際関係についての理解と分析を重視する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	国際関係論とは何か	初回から第5回までは、国際関係の基礎を講義する。国際関係論は、第一次世界大戦の悲惨な結果を踏まえて誕生したが、今日ではさまざまなアプローチがある。国際関係論の学問としての特徴を示すとともに、この講義の位置付けを明らかにする。	小和田　恆（元早稲田大学大学院教授） 山影　進（東京大学大学院教授）	小和田　恆（元早稲田大学大学院教授） 山影　進（東京大学大学院教授）
2	国際社会の捉え方	今日の国際社会は、西ヨーロッパで誕生し、世界全体を覆うに至った主権国家システムが基になっている。様々な国際社会の類型の中で、今日の国際社会の特徴を明らかにする。	同上	同上
3	国際関係と外交	国際関係にはさまざまな様態があるが、もっとも重要で基本となるものが国家間の外交である。外交の仕組みについて説明する。	同上	同上
4	対外政策決定過程	外交を行うに際して、国家は対外政策を決める。日本を例に、対外政策に関わる制度と、政策決定の仕組みを説明する。国益とは何かという問題にも触れる。	同上	同上
5	国際社会の組織化	人間活動の拡大とその相互依存が進み、それらの活動を規制するため国際レジームが作られた。さまざまな分野での調整が必要となり、組織化されるようになった今日の国際社会の複雑な様相を解説する。	同上	同上
6	平和と安全の確保	第6－10回は、今日の国際関係の主要な側面を取り上げる。第6回は、第二次世界大戦を経て、国際連合（とくに安全保障理事会）が国際の平和と安全を維持する責務を担うようになった。他方で、国連の役割には限界があり、それを補完する制度も無視できない。個々の国家が保有している自衛権と諸制度との関連も考察する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	国際経済の管理	国際的な経済活動を自由で円滑なものにする制度も発達した。経済のグローバル化が進む中で、国際経済機関の役割、通商関係をめぐる国際紛争（通商摩擦）の処理がどのようなものなのかを考察する。	小和田　恆 山影　進	小和田　恆 山影　進
8	開発と人間環境	先進国と途上国との間の経済格差が拡大する中で、同時にこれを是正する取り組みがなされてきたが、成果は十分ではない。他方で、開発はさまざまな環境問題を生みだした。環境と開発とのバランスをとろうとする国際社会の動きを考察する。	同　上	同　上
9	人間の安全保障	冷戦が終わり世界核戦争の脅威が減った反面、新しい脅威が注目されるようになり、「人間の安全保障」という新しい考え方が登場した。新しい課題に国際社会がどのように取り組んでいるかを考察する。	同　上	同　上
10	国際公共秩序	国際社会がグローバル化して、一つの人間社会を形成していく中で、国際社会全体のガヴァナンス・システムをどのように創出し、維持していくのかが大きな課題になる。そのような国際公共秩序のあり方と問題点を、政治、経済、社会の各分野について考察する。	同　上	同　上
11	第二次大戦後の日本外交	第11－15回は、国際関係論の実証分析のケースとして、日本の外交を特にアジア太平洋地域の中で考察する。第11回は、その前提として、第二次大戦後の日本外交の歴史的レビューから始める。講和、国連加盟、戦後賠償などの問題を日本のアジア政策との関連で論じる。	同　上	同　上
12	経済大国としての参画	急速な経済成長を遂げ、経済大国として国際社会に参画するようになった日本外交を取り上げる。主要先進国として政策協調に取り組む日本と、経済協力を通じてアジアに深く関与するようになった日本を考察する。	同　上	同　上
13	冷戦後の新たな役割	日本は経済だけでなく平和や安全保障分野でも大国としての役割を果たそうとし始める。国連の平和維持活動への協力、安保理常任理事国入りの意味などを冷戦後の国際関係の文脈から考察する。	同　上	同　上
14	アジア太平洋協力の重層的枠組み	日本の周りでは地域的な協力制度が急速に発達している。アジア太平洋という切り口から、日本の外交と多面的重層的な地域的協力枠組みとを結びつける。	同　上	同　上
15	地域主義と日本外交	国際社会のグローバル化が進行する一方、ヨーロッパ、南北アメリカ大陸など世界各地で地域主義が謳われている。その背景を考察しながら、日本にとっての地域形成の可能性を論じ、合わせて、日本外交の課題としてのアジア太平洋地域の将来を展望する。	同　上	同　上

＝国際社会研究Ⅰ（'０２）＝（TV）

－現代アメリカの政治－

〔主任講師：　阿部　　齊（放送大学教授）〕
〔主任講師：　久保　文明（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

アメリカの政治は、グローバルな視点に立っても、あるいは、日本との関係で考えても大きな影響力を持っている。アメリカの政治について正確な理解を持つことは、国際関係の理解を深める上で重要な課題の一つであり、政治学的にも重要な意味を持つ。ただアメリカの政治には、日本や西欧の政治と比較しても、ユニークな面が多い。その理解のためには、体系的な学習が必要とされよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	合衆国憲法	合衆国憲法の制定過程とその基本原理を明らかにする。アメリカが世界で初めて成文憲法を制定したことの意義を説明し、次いで、合衆国憲法の基本原理である権力分立の意味に言及する。さらに憲法修正の手続きと主要な修正条項にもふれたい。	阿部　齊（放送大学教授）	阿部　齊（放送大学教授）
2	連邦制と地方自治	アメリカの政治における連邦制の意義を理解するために、アメリカの州と日本の都道府県とを対比する。連邦法と州法の違いにもふれたい。また、地方自治体の政府が、日本の市町村と異なり、多様性を持つことを明らかにしながら、地方自治体の特質を検討する。	同上	同上
3	大統領	ヨーロッパの大統領制と比較しながら、アメリカの大統領制の特徴を明らかにする。大統領の権限、副大統領の地位にふれた後、大統領が統括する行政部を概観する。具体的には、各省庁の構成、大統領府の機能、独立行政機関の役割などに言及したい。	同上	同上
4	連邦議会	連邦議会の二院制が両院対等というユニークな特徴をもつことを説明した後、委員会を中心とした法案の審議過程をとりあげる。さらに、議員が地域代表的な性格を持つため、国民代表的な立場に立つ大統領と議会との間には、不断の対抗関係があることにふれる。	久保　文明（東京大学大学院教授）	久保　文明（東京大学大学院教授）
5	最高裁判所	最高裁判所の違憲立法審査権が持つ政治的意義を明らかにした後、政治的に重要な意味を持った判決、たとえば、ドレッド・スコット判決、ニューディール立法に対する違憲判決、ブラウン判決などをとりあげる。最近の最高裁の保守化にも言及したい。	阿部　齊	阿部　齊
6	選挙と選挙制度	まず、大統領選挙と連邦議員選挙の制度を説明し、次いでアメリカの選挙の特徴ともいえる有権者の登録制度と予備選挙をとりあげる。さらに、最近棄権率が増大していることの意味を探りながら、政治全体のなかで選挙が持つ意味が変わりつつあることにふれる。	久保　文明	久保　文明
7	政党と政党政治	アメリカの政党制の特徴とされる二党制とローカリズムについて説明した後、今日の二党制を構成する民主・共和両党を概観する。次に、両党の支持基盤を分析し、支持基盤再編成としての「決定的選挙」にふれる。最近の脱政党化の傾向にも言及したい。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	利益集団とその活動	アメリカの政治における利益集団の役割を明らかにした後、利益集団の代理人として活動するロビイストをとりあげる。また、利益集団の政治活動として大きな意味を持つＰＡＣにもふれたい。さらに、最近重要性を増している公益集団にも言及する予定である。	久保　文明	久保　文明
9	政策決定過程	アメリカの政策決定過程において、大統領、行政部、連邦議会、政党、利益集団などが果たす役割を明らかにする。さらに、最近その影響力が注目されているシンク・タンク、政策争点ごとに形成されるイッシュー・ネットワークにも言及したい。	同　上	同　上
10	人種とエスニシティ	アメリカの特徴の一つは、人種的民族的に多元的なことである。黒人の政治的発言権の増大は、アメリカの政治に大きな影響を与えてきたが、最近では新しいタイプの黒人政治家の台頭が注目される。また、スペイン系アメリカ人の急増も無視しえぬ意味を持つ。	阿部　齊	阿部　齊
11	女性	アメリカでも性別格差は歴然と存在しているが、1960年代以降、積極的優遇措置などにより、雇用面では格差はかなり是正された。しかし、政治における男女格差は依然として厳しい。格差是正の方策と女性政治家の可能性などを考える。	同　上	同　上
12	環境保護の運動と政策	まず資源保護運動とその遺産について概観した後、1960年代に強力になった環境保護運動と、その後押しで成立した一連の環境保護政策の特徴を明らかにする。また環境保護庁の役割、国立公園をめぐる問題、そして地球温暖化問題にもふれたい。	久保　文明	久保　文明
13	外交と国防	まず、アメリカ外交の特徴とされる孤立主義、膨張主義、イデオロギー第一主義などを説明し、次にアメリカ外交の文脈のなかで、冷戦の意味を究明する。さらに、冷戦終焉後の国際政治への対応を湾岸戦争や民族紛争への対応などを手掛かりとして検討する。また、外交政策との関連で、安全保障政策にもふれたい。	阿部　齊	阿部　齊
14	政治文化	アメリカの政治に内在する政治的原理を検討する。共和主義、民主主義、自由主義、立憲主義、革新主義、平等主義といった諸原理をとりあげ、ヨーロッパと比較しながら、アメリカ的特質を明らかにする。最近の新自由主義と保守主義の関連にも言及する。	同　上	同　上
15	現状と課題	ニューディールの時代にアメリカの政治は大きく転換し、「大きな政府」のもとで社会改革を進める政治が新しい伝統になった。しかし、1980年代以降、潮流は変わり、保守主義が支配的になっている。こうした現状を踏まえて、2000年代を展望する。	久保　文明	久保　文明

＝国際社会研究Ⅱ（‘０２）＝（Ｒ）

－中国近代政治史－

〔主任講師：　山田　辰雄（放送大学教授）〕

全体のねらい

歴史なくして現代を語ることはできない。なぜなら、現代は過去の歴史構造に拘束されているからである。その反面、過去は現代のすべてを説明することもできない。なぜなら、現代は過去に経験しなかった新しい現象を生み出すからである。本講は、現代の中国政治を意識しつつ、20 世紀前半の中国近代政治史を扱う。

①各回の教科書に基づく講義は放送の半分とし、後の半分は各回の括弧内の問題について原資料を提示し、学生とともに分析の過程、論理構成、学界の動向等について学ぶ。

②各回の課題は、政治学・政治史の問題として一般性をもたせる。

③全体の流れとして、近代中国政治史に集権・独裁と自由・民主との対比を鮮明にする。

④中華人民共和国の政治を常に意識しておく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	中国近代政治史を学ぶために	学部での勉強の蓄積を踏まえて、大学院で中国近代政治史を学ぶために必要な問題を取り上げる。分析力・構成力の涵養、課題の選択、資料の収集、参考書、図書館・研究機関・本屋、語学、国際交流等の問題がそれである。（一つの論文ができるまで）。	山田　辰雄（放送大学教授）	山田　辰雄（放送大学教授）
2	清末の政治	19 世紀の中国の王朝体制は、内なる矛盾と外国の圧力のなかで崩壊の危機に直面していた。この危機をいかに克服するかをめぐって、洋務運動・変法運動・革命運動が生まれ、中国の近代化の潮流が形成された。（改良と革命）。	同　上	同　上
3	辛亥革命	1911 年辛亥革命が起こり、清朝が崩壊した。革命勃発の原因と過程、軍隊の役割、議会制民主主義の成立と崩壊、２つの憲法、袁世凱の台頭、革命の指導権などの問題を通して、辛亥革命の性格を論じる。（代行主義）。	同　上	同　上
4	袁世凱の政治	袁世凱は清朝の軍近代化の指導者であり、辛亥革命後政権を掌握した。彼は武力を基礎にして反対派を弾圧、議会制民主主義を破壊して、最後に帝制樹立を試みた。従来革命に対する反動と捉えられてきた袁の政治を現代的観点から再考する。（袁世凱政治の評価について）。	同　上	同　上
5	軍閥政治	1916年の袁世凱の死から1928年の国民革命軍による北伐完成までは、軍閥混戦の時期と呼ばれる。軍閥混戦の過程を通して軍閥とは何か、どうして近代中国に軍閥が生まれたのか、軍閥の行動様式と歴史的位置づけを論じる。（人物研究）。	同　上	同　上
6	中華革命党から中国国民党へ	1919 年の中華革命党から中国国民党への転換は、中国革命の変容でもあった。この転換を促した要因として、軍閥の反乱、大衆運動の台頭、ソ連・コミンテルン・中共の働きかけ、帝国主義との対立等があった。（党・軍・大衆）。	同　上	同　上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	中国共産党の成立と国共合作への道	1921 年の中国共産党の誕生は、新しい社会的変化を反映していた。その背後には第一次世界大戦、ロシア革命、新文化運動と五四運動等があった。誕生間もない中共は労働者・農民の組織を基礎にして国民党に接近していく。（中国共産党の組織論）。	山田　辰雄	山田　辰雄
8	国共合作の政治	1924－1927 年国共両党は、反軍閥・反帝国主義の共通の目標の下に統一戦線を形成した（国共合作）。ここでは、国共合作の展開と崩壊の過程を扱い、あわせてその後の両党の発展を示唆する政治路線を明らかにする。（三民主義の解釈について）。	同　上	同　上
9	蔣介石の台頭と訓政時期の諸問題	国民党は、蔣介石の指導下に 1927 年反共化し、28 年には北伐を完成してひとまず全国を統一した。新政権は、孫文の理論に則り訓政時期（指導された民主主義）を開始したが、その統一の不完全さ故に後年に多くの問題を残した。（訓政・党の指導・大衆の政治参加）。	同　上	同　上
10	中国共産党のソヴィエト革命	1927 年国共分裂後、中共中央は武装闘争に転換した。この基盤は労農兵からなるソヴィエト政権であった。党中央は都市中心の革命に重点を置いたが、国民党の弾圧に破れ、農村を基礎とした毛沢東が台頭する。（李立三と毛沢東）。	同　上	同　上
11	安内攘外政策と抗日民族統一戦線政策	1931 年の満州事変の勃発は、激しく対立する国民党と共産党の再接近をもたらした。日本の侵略に対する両党の対応、民衆の抗日、国際関係と国内建設、西安事件などを通して両党の対立と接近の過程を論じる。（安内攘外論と抗日民族統一戦線論）。	同　上	同　上
12	抗日戦争	1937－45 年の時期を扱う。日中戦争は日米開戦により、太平洋戦争に拡大していく。日本軍の侵略、国共両党の協力と対立、戦争をめぐる国際関係が分析の対象となる。国共両党はまたこの戦争を通して戦後の力関係の基礎を築いた。（毛沢東の権力確立過程）。	同　上	同　上
13	国共内戦	1945 年日本の敗戦とともに国共両党の対立は激化する。アメリカによる両党の調停も失敗に帰し、46 年から内戦が勃発する。土地革命、知識人の動向、インフレ、国民党の腐敗と軍事的誤りが中共の勝利に貢献した。（中国革命における中間派について）。	同　上	同　上
14	日中関係の 150 年	今日、日中間に歴史問題をめぐる対立が絶えない。中国近代政治史を踏まえ、日中両国民が相互に理解しあえる枠組みを提起したい。時代区分、多様な側面（相互依存、競存、敵対）、多国間関係の側面からこの問題を論じる。（日本の基本的立場と新しい枠組みを求めて）。	同　上	同　上
15	20 世紀中国政治の連続性	その時々の現代中国の政治を取り上げ、歴史的観点から分析する。今回は、1989 年の天安門事件を、20 世紀中国政治の歴史的連続性の観点から分析する。（アイデンティティ、排他的支配、代行主義）。	同　上	同　上

＝数理システム科学（‘０２）＝（Ｒ）

〔主 任 講 師： 熊原　啓作（放送大学教授）〕
〔主 任 講 師： 砂田　利一（明治大学教授）〕

全体のねらい

現代科学はコンピュータの発達とともに、多くのものが数量化され処理される。数量化されたデータに対して数学モデルがたてられ、数学的手法によって数学的構造が調べられ、その結果がフィードバックされる。このような方法で研究され理解される学問を数理科学と呼んでいる。この講義ではその数学的手法の代表的なものを、できるだけ具体例に即して解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	数理科学とは何か	数理科学の特質と構造について数学に対する問題意識にまで遡って解説する。	熊原　啓作（放送大教授） 砂田　利一（明治大学教授）	熊原　啓作（放送大教授） 砂田　利一（明治大学教授）
2	線形システム１ 行列から積分変換へ	線形代数学から出発して無限次元に移行し、積分方程式とその解核について解説する。	熊原　啓作	熊原　啓作
3	線形システム２ 積分変換と固有関数展開	行列の固有値・固有ベクトルの手法を積分方程式に拡張し、固有関数展開について述べる。	同　上	同　上
4	線形システム３ 微分方程式の境界値問題と固有値問題	線形微分方程式の境界値問題を積分方程式に帰着させることによってその固有関数展開を求め、解の構造を明らかにする。	同　上	同　上
5	連続システム１ 膜の振動問題	物理的な問題の定式化を述べて、太鼓の音の問題がディリクレ（ノイマン）固有値問題に帰着されるまでを述べる。	浦川　肇（東北大学大学院教授）	浦川　肇（東北大学大学院教授）
6	連続システム２ 境界値固有値問題	ディリクレ（ノイマン）固有値問題の固有値がレーリー商によって特徴付けられること、および固有値の漸近的な性質を述べる。ディリクレ（ノイマン）固有値問題の固有値は、クーラントらによって創始された「有限要素法」により計算機で数値計算される。	同　上	同　上
7	連続システム３ 有限要素法	有限要素法の数学的基礎を学ぶ。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	連続システム４ 等スペクトル問題	有名な「カッツの問題」の解答、すなわち、同じ音を出すが、しかし形の異なる太鼓の例が「折り紙」によって作れること、そしてどうしてそれらの太鼓が同じ音を出すのか、そのカラクリを解き明かす。	浦川　肇	浦川　肇
9	離散システム１ コミュニケーション・ネットワークとグラフ	数理科学の多くの分野に、離散的モデルとしてのグラフが登場する。その１つの例としてコミュニケーション・ネットワークを取上げ、効率性と経済性を兼ね備えたネットワークのモデルを、グラフの言葉で表現する。グラフ理論の基礎概念と、その歴史的背景を解説する。	砂田　利一	砂田　利一
10	離散システム２ 効率的ネットワークと離散的ラプラシアン	ネットワーク理論における「拡大定数」の概念を導入し、この定数が大きいグラフが効率的ネットワークのモデルであることを見る。さらに「拡大定数」を、幾何学的量である「チーガー定数」と比較し、さらにこれを計算量が少ない量と比較するため、「離散的ラプラシアン」の概念を導入する。	同　上	同　上
11	離散システム３ 固有値とチーガー定数	「チーガー」定数と離散的ラプラシアンの「最小正固有値」とを比較する。多様体上のラプラシアンに対する固有値問題の類似として、「チーガーの不等式」を確立し、「最小正固有値」の大きいグラフが、効率的グラフを与えることを示す。最後に、純粋に理論的問題とネットワーク理論の関わりについて解説する。	同　上	同　上
12	確率システム１ 確率の基本概念と確率モデル	ランダムな現象を記述する確率モデルの基本概念である事象、確率変数、分布、独立性等について説明し、大数の法則、中心極限定理などの確率論の基本原理を解説する。さらに具体的な確率モデルの例をいくつか取り上げる。特に n＊n ゲームや最適戦略の問題から実生活にも有益な示唆が得られるであろう。	志賀　徳造 （東京工業大学大学院教授）	志賀　徳造 （東京工業大学大学院教授）
13	確率システム２ 人口論の確率モデル	人口動態を推定するための基本的なモデルとしてゴルトン・ワトソンモデル（GW モデル）を取り上げる。この GW モデルの解析には母関数の方法が有用で、確率１で絶滅が起こるか否かの判定の問題、絶滅時間の期待値やモーメントの計算、絶滅しないという条件のもとでの人口の振る舞いなども母関数を用いて解析できることを学ぶ。	同　上	同　上
14	確率システム３ ランダムウォーク	グラフなどの離散的空間上のランダムな歩み（ランダムウォーク）は最も基本的な確率モデルで応用も広い。このモデルに対し再帰性（出発点に必ず戻れるか？）の判定、それに関連して n ステップ推移確率の極限的振る舞いを調べる。その際、n ステップ推移確率の積分表現および積分に関する漸近解析が有効に用いられる。	同　上	同　上
15	確率システム４ 相互作用のある確率モデル	多くの成分が互いに影響し合いながらランダムに変化する確率モデルは統計物理、集団遺伝学等と関連しながら近年、急速に発展してきた分野である。その中の基本的なモデルとして、投票者モデルを取り上げる。主たる問題は社会にコンセンサスが成り立つか否かを判定する問題であるが、それはランダムウォーカー達の出会い確率を求める問題に帰着される。	同　上	同　上

＝情報システム科学（‘０２）＝（Ｒ）

〔主 任 講 師： 長岡　亮介（放送大学教授）〕

全体のねらい

IT(情報伝達技術)の発達と普及は、人々の日常生活まで巻き込む社会とその仕組みの大きな変容をもたらしつつある。技術的革新は高度技術のブラックボックス化によりこの技術の恩恵を享受するユーザ層を拡大することに成功したが、他方、この技術についての<科学的、原理的な理解>への道は閉ざされ、断片化した技術的「知識」の洪水の中で、いまや IT は「作る側」と「使う側」という新たな『二つの文化』的断絶を産み出している。この困難を打開するために、IT の諸問題に、実践的と理論的の両方の視点を総合的に考慮してアプローチするものである。

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報化の歴史 (1)	講義の概要の紹介をかねて、コンピュータの基本概念および情報処理を巡る今日的問題を講ずる。ソフトウエアの歴史と今日的課題にも触れる。とりわけ、講義の全体に必要となるコンピュータ環境の構築方法について解説する。 network については後に詳しく講ずるが、受講生の利便のために network の利用についても実践的に解説する。	長岡　亮介（放送大学教授）	長岡　亮介（放送大学教授）
2	情報化の歴史 (2)	情報伝達の基礎として code の問題を取り上げる。情報伝達単位としての bit, byte などの基礎概念を論ずる。 ASCII code また、日本語など multi byte code の仕掛けについて講義する. 併せて file の基礎概念として binary file と ASCII file の相違を論ずる。	同　上	同　上
3	情報システムの基礎概念	情報処理単位としての file, volume の概念とそれと不可分に結合する OS (Operating System), 出力、入力, デバイスを論ずる。Shell (Shell built-in command) との違いを理解する。 redirection, pipe 機能 (情報 (file)の保存、複製、削除, etc. は shell とは無関係)	同　上	同　上
4	情報伝達の基礎原理	応用ソフト（applicationsoftware）の基本を講ずる。簡単な shell script (batch file) から awk などの one liner, また compile された binary の実行形式 file までを俯瞰する。	同　上	同　上
5	**情 報 管 理** (1)	コンピュータ・アルジェブラ・システム（数式処理アプリケーション）や表計算ソフトを利用するというもっとも基本的なコンピュータ利用の可能性を講ずる	同　上	同　上
6	**情 報 管 理** (2)	text editor の基本原理を見る。体系による漢字のコーディングの違いを理解する。ワードプロセッサとの違いを理解する。見掛けと実体の違いを理解する。(論理的と物理的の違い、論理行数、物理行数)、桁折り、TAB, 全角、半角 space , WYSWYG	同　上	同　上
7	**プログラミング** (1)	text editor の基本機能を見る。(置換、検索、正規表現、insert, save)	同　上	同　上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	プログラミング (2)	file system (filename), network (mount, nfs, samba), ln, alias, permission (owner, group, others)	長岡　亮介	長岡　亮介
9	プログラミング (3)	環境変数（setenv PATH, PAGER, JSERVER）, Shell 変数 (set), (高機能) shell の機能 (alias, history, command name completion, spell check, Shellscript, foreach, if-then, end, env, pushd)	同　上	同　上
10	印 刷 文 書 (1)	WordProcessor, TeX, HTML, PDF, PostScript, 写植を比較的に論ずる。また、相互の変換可能性を論ずる。LaTeX の利用方法を入門的に解説する。MS-WORD, pLaTeX2e, mswordview, a2ps, dvipsk, etc.	同　上	同　上
11	印 刷 文 書 (2)	D.Knuth の開発した LaTeX を LeslieLamport が macro package として簡易化した LaTeX の使い方の基本を講ずる。	同　上	同　上
12	データの加工と管理の基礎	LaTeX の可能性を探る。特に、図版の取り込み、数値データの処理など発展的な解説に及ぶ。(ghostscript, ghostview)	同　上	同　上
13	ヴィジュアライゼーション	テキストデータを処理する簡易言語(sed, awk, perl)の入門的解説を行う。基礎データから LaTeX の文書を生成する方法など実践的な課題を扱う。	同　上	同　上
14	人 工 知 能	数値データの可視化と統計処理の基本を講ずる (gnuplot, Ngraph) グラフ化の利点と問題点, グラフによる統計処理	同　上	同　上
15	インターネットと知の変容	暗号の必要性など、情報共有についての基本問題実践的な問題を考察する。	同　上	同　上

＝複雑システム科学（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　杉本　大一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

現実の世界には多くの要素からなる複雑なシステムが多い。しかもそれらの要素は強く相互作用していて、非線形システムになっている。またシステムは孤立した存在ではなく、外界とエネルギーなどのやりとりのある開放系になっており、それをとおして非平衡状態が維持されている。他方では、システムからいろいろな要素を剥ぎ取って単純な力学系に還元してしまっても、なおかつそこに複雑性が残るという本質的複雑性が埋め込まれていることが多い。この科目ではそのような本質的複雑性から始めて、それが自発的形態形成にどのようにつながっており、さらに自然界においてどのように発現しているかを論じる。自然界にある複雑なシステムを論じるときに、その非線形相互作用が本質的役割を果たしている様子とメカニズムを明らかにする。このような視点は、原因と結果の関係が単純なデカルト的論理を超えている自然現象や社会現象を扱わなければならないという、21 世紀の要請に対処するために必要な基礎の一つになると考える。

回	テ　ー　マ	内　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	複雑システムの諸様相	いろいろな要素を剥いで行って単純なシステムに還元されても本質的に複雑性が残るもの、多数の要素が絡み合っているために複雑なもの、デカルト的論理と方法の限界、線形における原因と結果の関係、非線形における原因と結果の連鎖、非線形における複雑さ、要素の論理（性質）とシステムの全体としてのグローバルな論理（機能）などについて論じ、この科目のイントロダクションとする。	杉本　大一郎（放送大学教授）	杉本　大一郎（放送大学教授）
2	複雑系としての生命科学（Ｉ）～構造的にとらえる生命の論理～	複雑系において、部分と全体の相補的な関係をとらえる立場 (complex system)と、各部分のこみいった組み合わせに着目する立場 (complicated system) の違いについてのべる。 ついで、前者の立場の研究方法として、構成的アプローチと、大自由度の力学系を紹介する。	金子　邦彦（東京大学教授）	金子　邦彦（東京大学教授）
3	複雑系としての生命科学（Ⅱ）～発生への力学系アプローチ～	内部ダイナミクスを持ち増殖する要素の相互作用系として、細胞の抽象的モデルを考える。これをもとにして多様性、分化、集団としての安定性、それをもたらす分化規則の生成を調べる。さらに生命現象における安定性と不可逆性を議論する。	同　上	同　上
4	複雑系としての生命科学（Ⅲ）～ダイナミクスのシンボル化～	前回に見出された、ダイナミックな過程から分化されたタイプへの形成が、どのように固定され、情報として伝わっていくかを、進化の問題を例にとって示す。最後にこのような考え方が社会現象に適用できるのかを議論してみる。	同　上	同　上
5	計算機による自然の模倣（Ｉ）	物理学など従来の自然科学は、自然界の複雑な現象を出来るだけ単純化することによっていくつかの基本法則を見出してきた。計算機の発達により、単純な基本法則から自然界の複雑な現象を再現することが可能になりつつある。	小柳　義夫（東京大学教授）	小柳　義夫（東京大学教授）
6	計算機による自然の模倣（Ⅱ）	並列処理による計算速度の飛躍的向上は、実験できない対象や未知の物質などについての予言を可能にした。これにより量子科学、天体物理などの科学研究だけでなく、工業生産、環境問題、遺伝子工学などの実用問題にも計算機が活躍している。	同　上	同　上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	脳のこころ（I） ～脳の目的と原理～	脳は自ら情報を選択し、その情報を処理する為の仕組みを自ら獲得するシステムである。脳が情報処理の仕組みを獲得する為の仕組みは、遺伝子情報が進化の過程の中で獲得したものである。ここでは、生物情報システムの進化と脳の処理の獲得という目的とその原理について学ぶ。脳が情報処理をする為の仕組みを脳のこころと呼ぶと、脳のこころが脳を創る、ことになる。	松本 元 （理化学研究所主任研究員）	松本 元 （理化学研究所主任研究員）
8	脳のこころ（II） ～脳の目標設定～	脳は自らの情報をまず設定することで、その選択をした情報の仕組みを獲得する。このことから、脳を創る為にまず第1に必須なことは、目標を設定することである。次に、脳が設定した目標に対し強い関係を持ちつづけることで、目標を達成するための仕組みを獲得する。	同 上	同 上
9	脳のこころ（III） ～生体情報システムとしての脳～	生体情報システムでは、生物が物質、エネルギー以外の事柄（これを情報と呼ぶ）に対して開放系になっている点に特徴がある。従って脳と遺伝情報システムは、共通の基盤、情報に対する開放系の階層構造の中で理解することで、その著しい特徴が明らかになる。まず第 1 にその数学的構築が同型であること、第 2 に情報の開放系であるために愛に代表される精神と呼ばれる事象が生じることなどである。	同 上	同 上
10	非平衡開放系とその維持	自然界にある非線形・非平衡・開放系には、非線形振動をしながら持続している状態（例えば心臓）と、定常的に持続している状態（例えば生命体）がある。そのような系は、平衡に近づこうとして起こる不可逆過程によって生成されるエントロピーを、外部の空間に捨てることによって定常状態を持続することができる。	杉本大一郎	杉本大一郎
11	非平衡構造の自発的形成	平衡状態から有限量だけ離れた非平衡系は、それを包むより大きい非平衡の中に、入れ子構造になって存在する。例えば生命界という非平衡は地球の非平衡の中に、地球の非平衡は太陽－地球系という非平衡の中で初めて存続し得る。しかし大きい非平衡形の中にある部分系がいつでも非平衡でありうるわけではない。非平衡構造が自発的に形成されるには、系の内部での相互作用が重要であることを、定量的な例で示す。	同 上	同 上
12	自然界にある複雑システム	自然界には本質的複雑性、それを要素としてもつ複雑なシステム、非線形的に込み入っているシステムなど、多様な現象がある。そのようなシステムの全体としての振舞を規定している縛りは何であろうか。複雑流体、気象と気候、地球内部構造の進化、プラズマの非線形現象を研究している 4 つの研究室を訪れ、この問題を考える。	同 上	同 上
13	「構造と機能」（I） ～現代的生命機械論～	構造がわかれば機能がわかるという現代生物学のパラダイムは DNA の２重ラセン構造と蛋白質の立体構造の発見から生まれた。このパラダイムにのった最近の研究が生命の理解をどう進めたかを紹介する。特に機械文明にアナロジーをとる階層構造のトップダウン型アプローチを試みる。	永山 国昭 （岡崎国立共同研究機構教授）	永山 国昭 （岡崎国立共同研究機構教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	「構造と機能」(II) 〜蛋白質特異構造の起源〜	生命の第２の神秘、蛋白質の特異構造は生命科学の中心的テーマの１つである。ヒトゲノム解析後の中心課題として、全蛋白質構造決定の巨大プロジェクトが動き始めた。しかし個別的な蛋白質の背後に普遍的な蛋白質構造言語があるはずだ。生命境界物質である蛋白質の構造特異性の起源を物理的に説明する最新理論を紹介する。	永山　国昭	永山　国昭
15	生命＝自己複製系 〜偶然か必然か〜	複雑システム研究の方法について、従来のアプローチとどこが同じでどこがちがうのかを整理する。その上で超複雑系である生命に関し、複雑システム的アプローチの有効性を吟味する。特に生命の誕生について、それが、非生物的物質過程の必然的帰結なのか、偶然の産物なのかを考察する。そして多くの２元論的対立の構図を乗り越える複雑システム生成の試論を展開する。	同　上	同　上

＝地球環境科学（‘０２）＝（TV）

〔主 任 講 師：　濱田　隆士（放送大学教授）〕

全体のねらい

水惑星地球の理解には、惑星という物体としての特性に加えて、生き物の棲む場としての正しい把握が不可欠である。地球環境変遷の流れがあってこその現在の環境であり、ヒト出現以前のとそれ以後の文明の発達に伴う地球環境の変質との比較は大切である。地球自然と人為という複雑系同士が絡み合う複合相互作用系を考えてみよう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地球環境科学の成り立ち	惑星科学の発展を基礎に、かけがえのない地球、生命の星・地球を理解するため、そこに生息する生物とそれをとり巻く地球自然環境との相互作用の変遷を見てゆく科学が成立する。とりわけ、ヒトという特化した生物とのかかわりで地球環境問題が生起してきている。	濱田　隆士（放送大学教授）	濱田　隆士（放送大学教授）
2	地球理解の諸方策	複雑体である地球を知るためには、いくつかの異なった視点からの理解が必要であり、グローバルから個別まで、自然史から人為社会の動きまで、超領域科学の発想と関連諸分野の整理という作業が役立つ。ヒト中心の視方を捨て、地球自然側の論理と倫理で考える。	同　上	同　上
3	地球環境変遷略史	46 億年の地球全史の中から、決定的に地球環境を変えてきたイベントやテクトニクスについて考える。環境の変動に生物界の変動をもたらす、環境変遷の流れを大枠として理解することにより、地球のダイナミクス、“生きている地球”の姿を捉えることができる。	同　上	同　上
4	地球環境の諸要因－１	太陽系の一惑星である地球は、基本的に開放系としての仕組みを有している。かつての地球科学では、地球上でのできごとを理解するうえで、“外因”と“内因”との二つの要素を識別する立場をとってきたが、新しい地球観では互いに入り組んだ複雑系として扱う。	同　上	同　上
5	地球環境の諸要因－２	水惑星という特性を示す地球は、熱と物質の循環が基本となって変動し進化してきている。地球表層環境にとっては、必然的には大気・海洋の諸性質が主要因となる。人類の生存にとっては生活の場と資源という環境要因が決定的な意味を持つ。ヒト自身も環境要因となる。	同　上	同　上
6	環境変動と生物	生物界の時空変化は、大進化という多様性を結果的に増大させ、エントロピーを減らす不可逆過程に位置づけられる。現象としては気候変動と大陸・海洋分布の変化が大きく関与し、発展・絶滅の歴史を綴ってきた。適応という生物の絶妙な仕組みの役割を考える。	同　上	同　上
7	人類出現のインパクト	生物は、生物界自身を含む周辺環境の変動に順応し適応して地球史を生きてきた。しかし、人類は文明化のある時期から、環境に対してインパクトを与え、変質させ、新しい環境を創出する存在となった。従来の地球システムと大きく変わった地球について認識を深める。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	食資源と環境	生き物は、活動し成長するためにエネルギー源を必要とする。動物の場合、そのような資源物質を餌あるいは食糧と呼び、環境はそれを保証できるものであることが期待される場ということになる。生産性の低い環境を得た生物は適応により効率の良い摂取法を培う。	濱田隆士	濱田隆士
9	衣・住と環境	生息環境は食の供給だけの役では済まない。生活を続け、子孫を残し、子を育てるための独自のテリトリーがある方がより有利であったり、より快適であると判断される。ヒトは自分の周辺に衣服や家屋という物件を創出することに成功し、生息範囲を拡大してきた。	同　上	同　上
10	エネルギー・資源と環境	生物が生きるための食物から得られる生理的エネルギーを別として、ヒトという知的進化の頂点に立つ生物は、運動・行動・作業・生産等の活動のため、体力に代わる機械力を生み出し、そのためのエネルギー源を確保することが、文明生活の根底をなす事態を生んだ。	同　上	同　上
11	文明化と地球環境破壊	ヒトは、より高い生活レベルを追求することで文明を発達させてきた。そのために、利用可能な種々の資源を欲しいままに浪費してきた。結果として地球物質循環のスピードを超えて消費され、環境破壊と悪化を招く事態が露呈してきた。地球環境問題の本質である。	同　上	同　上
12	環境汚染	ヒトによる資源消費が進み、人為的生産・加工物が急速に増加してきた。自然界のもつ浄化力をはるかに超える汚染物質の拡散が起こることになった。生産物はいずれは廃棄物となるのであり、廃排物質の中には難分解であったり毒性を有したりするものが含まれる。	同　上	同　上
13	モニタリングと規制	環境汚染は汚染源とその影響との関係が、時間的にも空間的にも複雑な場合が多く、しかも有害性が表面化するタイミングが捉えにくい。したがって可能性の段階でモニタリングを進め、予測を立て、それに基く各種規制をとらなければ、環境悪化を防止はできない。	同　上	同　上
14	海洋環境科学が基礎	地球は水惑星と呼ばれるように、物質循環の一つの主役は水圏である。地球表面の70%を占める海洋環境は、大気との相互作用系の場であるから、地球環境の最大支配要因といってよく、その理解とマネジメントが地球環境問題の決定的条件となることを説明する。	同　上	同　上
15	地球環境問題の将来	地球環境は、ヒトの文明化の長い時間をかけて劣化し変質させられてきた。それ故に複雑かつ蓄積された結果が現在を構成しているので、その正確な状態の把握が第一であり、再び長い時間と新しい技術と共に、地球人一人一人の正しい自覚・反省が解決の道を決める。	同　上	同　上

＝物質環境科学Ⅰ（‘０２）＝（TV）

－物質の構造・性質・変化・循環－

〔主 任 講 師： 岩村 秀（放送大学教授）〕

全体のねらい

物質は人類の生存及び文化・社会・経済活動の基盤となっており、文明を支えてきた。人間の環境・生活・産業の根幹となっている物質の構造・性質・変化と循環について、活性分子フリーラジカル（遊離基）とその集合組織体の視点から、体系的理解を深める。豊かな物質観を培うと共に、第１線の研究を垣間見ることにより、修士論文の研究テーマを絞る一助とする。

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	物質構成及び形態の基礎	物質の３相、気体・液体・固体に対応して、人類の住む地球という惑星には大気・水圏・大地がある。本講義では、そこに存在する基本的物質の構造・性質・変化と循環を、特に活性分子フリーラジカル（遊離基）の重要性に視点を置いて論じる。フリーラジカルとはどのような化学種であろうか。	岩村 秀（放送大学教授）	岩村 秀（放送大学教授）
2	大 気（Ⅰ）オゾン	成層圏におけるオゾン（O_3）層の生成・消失のメカニズム、対流圏からの化学物質によるO_3層の破壊について、総合的に眺め、大気上層はフリーラジカルの世界であることを学ぶ。対流圏にも大気全体中の 10%程のオゾンがあり、様々な反応を起こし我々の生活に影響を及ぼしている。	同 上	同 上
3	大 気（Ⅱ）	対流圏にある酸素O_2、窒素N2、一酸化窒素NOについて、電子構造を比較検討することにより、NO がモノラジカル、O_2が三重項ビラジカルであることを理解する。硝酸を電子受容体とする硝酸呼吸はあっても、窒素呼吸をする生物は存在し得ない。また地球温暖化を導く各種温室効果ガスを概観する。	同 上	同 上
4	一酸化窒素の多面性	一酸化窒素NOは大気汚染物質NOx（$x = 1\sim3$）の１種であるが、生体内ではNO合成酵素によってL-アルギニンから作られている。微量であり短寿命ではあるが、循環器系を始めとして免疫系、中枢系にも関係する重要な作用をもつ化学物質である。その発見と研究方法について述べる。	同 上	同 上
5	生体内での酸素の挙動（Ⅰ）	酸素O_2は、赤血球中の色素タンパク質ヘモグロビンの鉄(Ⅱ)イオンと結合して、肺から末しょう組織まで運ばれ、細胞中のミトコンドリアで酸化的リン酸化に使用される。酸素とヘモグロビンの結合様式を解析し、酸素運搬体の必要条件を明らかにすることにより､酸素を輸送する液体“人造血液”が得られている。	同 上	同 上
6	生体内での酸素の挙動（Ⅱ）	酸素は前章で述べたような正常な役割を果たす一方で、活性酸素と総称される数種の有毒な化学物質（O_2^{-}・、H_2O_2、・OH、$'O_2$など）に変わる。これらに対して生体にはいくつかの巧妙な防御機構がある。それがうまく機能しないと、活性酸素は、DNAを損傷し、発ガン、老化を誘起する可能性をもっている。	同 上	同 上
7	植 物 の 光 合 成	植物のクロロフィルが吸収した太陽光のエネルギーが、一連の酸化還元系を経由する電荷の分離によって化学ポテンシャルとなり、二酸化炭素を還元し、酸素を放出する。後続するカルビンサイクルでブドウ糖が合成される。この光合成を人工的に再現しようとしている最先端の研究の一端を眺める。	同 上	同 上

回	テ　ー　マ	内　　　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	自動酸化におけるフリーラジカルの役割	油脂はフリーラジカル機構による自動酸化を受け、重合反応や鎖切断反応を起こす。これを防ぐために、生体内では天然の、食品・プラスチックなどでは人工の酸化防止剤が使われている。油脂の自動酸化は、プロスタグランジンの生合成および油絵具を通して、われわれの生存及び文化に重要な係わりをもっている。	岩村　　秀	岩村　　秀
9	二重結合への付加と連鎖反応	フリーラジカルの二重結合への付加は、連鎖反応となると、ラジカル付加重合反応となる。光で開始させることができる付加重合や架橋反応の中には、高分子フォトレジストとして使われているものがある。IC や LSI 回路のフォトリソグラフィーや印刷版材等に用いられている感光性樹脂について述べる。	同　上	同　上
10	ラジカル反応の定量化と合成化学への応用	数多くの有機化学反応が、フリーラジカルを経由して起きている。これらの反応は、選択性に乏しく、連鎖反応となって制御し難いと考えられてきたが、最近では反応の定量的な解析も進み、金属イオンの助けを借りるなどして、合成化学的に有用な反応が数多く開発されている。	同　上	同　上
11	電子スピン共鳴：フリーラジカルの検出	不対電子のスピンはプロトン（^{1}H）の核スピンの 658.5 倍の大きさの磁気モーメントをもつ。そのため、電子スピンの共鳴実験は、NMR より弱い磁場とマイクロ波を使って行なわれる。この電子スピン共鳴（EPR）の手法と、そこから得られるフリーラジカルの構造情報について学ぶ。	同　上	同　上
12	有機ビラジカル分子	不対電子を 2 個もつビラジカルは、O_2に止まらず、有機分子には例が少なくない。二価の炭素化合物であるメチレン遊離基（$:CH_2$）及びその誘導体は、1 中心ビラジカルと呼ぶことのできる化合物群であり、電子構造の解析及び合成化学への応用の観点から重要である。	同　上	同　上
13	固体：有機磁石の設計・合成と解析（Ⅰ）	不対電子のスピンは磁石の最小単位である。鉄・コバルト・ニッケルなどの金属・合金・酸化物では、3d、4s 軌道の不対電子のスピンが平行に揃って自発磁化をもち磁石となる。2p 軌道に不対電子をもつ有機ラジカルを使って磁石を作るには、どのようなアプローチが考えられるのであろうか。	同　上	同　上
14	固体：有機磁石の設計・合成と解析（Ⅱ）	有機ラジカル及び磁性金属イオンを原料とし、化学実験室でフラスコを使って分子集合組織体を作ることにより、磁石が合成できるようになった。従来の磁石にはない新規な物性があらわれ、光磁気記録、光回路素子など 21 世紀の新しい科学技術の芽が生まれようとしている。	同　上	同　上
15	相の境界と中間相の存在	物質には気体・液体・固体の３相があると考えるのが基本ではあるが、詳細に眺めると、相の境界（界面）に位置するコロイド（ゾル・ゲル）、単分子膜、累積膜など、また中間相となる液晶などの分子集合組織体が存在し、ナノ構造体として、その重要性に注目したい。	同　上	同　上

＝物質環境科学Ⅱ（‘０３）＝（TV）

― 環境システムとエントロピー ―

〔主任講師：中山　正敏（放送大学教授）〕

全体のねらい

いわゆる環境問題は、人間の生産活動の結果が人間の生活環境を悪化させるところから生じた。この講義ではその自然現象としての側面を理解するために必要な、物理学的な考え方について説明する。まず非平衡の場合を含めた熱力学の手法について述べる。この方法の限界を指摘し、いくつかの手法を紹介する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	環境システム	一般に、生産や生命活動を行う能動系とそれを包む環境によって、環境システムが構成される。環境は、能動系に資源、エネルギーを供給し、廃棄物、廃熱を受け取る。それが大きくなり過ぎたことが、環境問題である。環境システムの特徴について概観する。	中山　正敏（放送大学教授）	中山　正敏（放送大学教授）
2	物質、エネルギーの保存則	系の変化における基本法則を考える。物質とエネルギーは保存される。物質変化の階層に応じて、分子、原子、核子の総数が一定である。系のエネルギーの増分は、系になされた仕事と加えられた熱の和に等しい。これを熱力学第一法則という。	同　上	同　上
3	エントロピーの増大則	自然界には、熱伝導、拡散などの不可逆な変化がある。その向きを指定する法則を考える。物質やエネルギーの無秩序度を表す状態量を導入し、これをエントロピーという。不可逆変化はエントロピーの増大する向きに起きる。これを熱力学の第二法則という。	同　上	同　上
4	熱機関	技術者たちが蒸気機関を作った後で科学者たちが、それで出来る最大の仕事量を考察した。カルノーの熱素説による考察がエントロピーの発見につながった。それでは、効率でなく能率を最大にしようとするとどうなるだろうか。	白鳥　紀一（法政大学客員教授）	白鳥　紀一（法政大学客員教授）
5	開放系の熱力学	エネルギーや物質の出入のある開放系について、熱力学を考える。その場合には、自由エネルギーを導入すると便利であることを示す。また、エクセルギーを導入し、それが系が環境との平衡から外れている度合を表すことを示す。	同　上	中山　正敏
6	混合と分離	ヒトや生態系に悪い影響を与える物質が環境に散らばると環境問題になる。散らばっている有用な物質をいかに分離して集めるかが資源問題である。散らばるのは物の本性で、エントロピーの増大する過程である。資源環境問題を混合・分離の過程から考える。	同　上	白鳥　紀一
7	物質と放射	物質中の電子や原子などのミクロな粒子の持つエネルギーは、いくつかの特定の値に限られる。熱放射は空間の中を熱を伝える光（電磁波）である。そのエネルギーは、光量子を単位として物質とやり取りされる。量子性と環境問題の関係について考える。また物質循環と放射のグローバルな状況について述べる。	中山　正敏	中山　正敏

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	エントロピーの原子論	マクロな量であるエントロピーと、系のミクロな状態との関係を考える。マクロには一つの状態にある系も、ミクロに見れば原子などの運動によって多数の異なる状態に存在できる。エントロピーは、対応するミクロな状態の総個数の対数に比例する。	白鳥　紀一	中山　正敏
9	熱ゆらぎ	マクロには熱平衡にある系も、ミクロにはその近くでゆらいでいる。環境の中にある系に対する環境のゆらぎの影響を調べる。また環境の中を動く系には抵抗力が働き、熱ゆらぎを越えた距離を動かすには、ｋＴ程度の仕事が必要なことを示す。	中山　正敏	同　上
10	情報とエントロピー	情報とエントロピーは相補的である。情報は磁気・電気などの物理量によって担われるが、それが意味のあるのは、物理量の熱ゆらぎが小さく、その値が保持される場合である。そのような場合には熱力学ではなく、システムダイナミックスによる研究が必要となる。	同　上	同　上
11	マクロなゆらぎ	環境の中では、風の変化のように、熱ゆらぎよりも大きなスケールのマクロなゆらぎが起こる。これは、系が熱平衡状態からずれると、外的な変化に対して大きな応答をするという性質を持つからである。マクロなゆらぎの特徴と、その影響について考える。	北原　和夫（国際基督教大学教授）	北原　和夫（国際基督教大学教授）
12	散逸構造	外的条件を変えて、系の中の物質やエネルギーの流れを大きくして行くと、時間的空間的構造を持った新しい状態に移る。この構造を散逸構造という。散逸構造の一例は、流体が上下方向に循環する対流である。環境問題と散逸構造の関連について考える。	同　上	同　上
13	リサイクルと環境	リサイクルをすれば、資源の消費や廃棄物が減り、環境にいいはずだ。しかし、場合によっては、リサイクルに手間やエネルギーがかかったり、リサイクル処理中に毒性物質が放出されたりする。そこで、意味のあるリサイクルの条件について考える。	井野　博満（法政大学教授）	井野　博満（法政大学教授）
14	材料の環境負荷評価と選択基準	環境にいい材料の使い方は、リサイクルばかりではない。製品を長持ちさせることや、自然の物質循環に合った材料を選んで使うことも大事である。環境負荷評価（ライフサイクルアセスメント）の方法と、材料選択の基準について考える。	同　上	同　上
15	定常能動系と物質循環	能動系が定常であるためには、それに接する環境もまた定常でなければならない。物質に関しては閉じた地球では、物質が環境を循環することによってこれは果たされる。その際増大したエントロピーは、宇宙空間に棄てられる。現実の地球ではどうだろうか。	中山　正敏	中山　正敏

＝生命環境科学Ⅰ（‘０２）＝（TV）

－生命の多様性－

〔主任講師：　岩槻　邦男（放送大学教授）〕

全体のねらい

一般に生物の生は個体としての生で理解されることが多い。しかし、個体の生とは何かも、突き詰めれば大変難しい問題である。生命とは何かという問題を、個体とそれ以上のレベルで追究し、生きているとはどういうことかにかかわる諸問題を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生命と環境の科学	「生命」と「環境」という２つの言葉は、一般用語として多様な意味で使われる。これらの用語を本講義の目的に沿って定義し、この科目で何を伝えようとするかの問題設定を行う。	岩槻　邦男（放送大学教授）	岩槻　邦男（放送大学教授）
2	個体の生と生命系の生	生命体は細胞として生きることを確立しているが、ふつうは個体の生として生命が理解される。しかし、実際には、個体は生を完結する実体ではなく、生命系としての生がある。	同　上	同　上
3	生命体と生きていない物質	生きているものと生きていないものの差を明確に定義することは難かしい。生命の起源についての知見に触れながら、細胞として完成されている生命体の実体を理解する。	同　上	同　上
4	原核生物と真核生物	生命を完成させた構造である細胞には、原核性と真核性の差が分化した。真核性の起源を追究し、その進化学的意義を考え、さらに多細胞体の個体が進化した意味を考察する。	同　上	同　上
5	動物、植物、菌類	生物のうち、現在地球上で繁栄しているのは動物、植物、菌類の３群である。これらの生物の生き方の多様性と普遍性を整理し、進化における成功とは何かを考察する。	同　上	同　上
6	生物多様性と人	人と自然の共生は可能か、共生するとすれば、人はどのような生き方を求めるべきかを考察する。共生と自然破壊は対立する概念であるが、人の歴史は両者をどう生きてきたか。	同　上	同　上
7	文明が育てた植物たち	野生植物のうちに、人が文明を発達させてから進化してきた種があるらしい。このことを推定し、実証するためにはどのような研究が必要か、具体的な例として紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	環境創成の科学	生物多様性の持続的利用を図るためには、自然環境に変貌を強いることは不可避である。新石器時代をつくった先祖たちを手本に、現在における環境創成の理想像を追究する。	岩槻 邦男	岩槻 邦男
9	生命系の起源と進化	生命の誕生は地球の無機的環境を変え、生命と環境が一体となって動的に変化する生命系が生まれた。40億年にわたる生命系の歴史をたどりつつ、現在の生と環境を考える。	西田 治文（中央大学教授）	西田 治文（中央大学教授）
10	絶滅と生命	生物は、多くの種や高次分類群の絶滅を伴って多様化してきた。地質時代に起きた大量絶滅の実態と原因を探りつつ、ヒトが引き起こしつつある現在の絶滅と、生命系への影響を考察する。	同上	同上
11	生命体がつくる社会	同種の生物たちは、自然界でさまざまな集団をつくるが、それらの集団を、生物社会ととらえることができる。生物社会は厳しい環境の圧力にうちかって子孫を残していくための個体戦略の結果生じたものである。	松本 忠夫（東京大学教授）	松本 忠夫（東京大学教授）
12	生命体の存続と性表現	ほとんどの生物は有性生殖を行っている。そして、生物によってはメスとオスの二次性徴に大きな差があるものがいる。そのような極端な差は、同性個体間および異性個体間の相互作用の結果進化したものである。	同上	同上
13	生命倫理１：臓器移植	生命倫理の問題について、具体的な課題を取り上げ、理論と現実との絡みを解きほぐす。第１回は臓器移植に関わる問題点を取り上げ、今何が問われているかを問題提起し、共に考えたい。	岩槻 邦男 坂本 正明（テレビ朝日コメンテーター）	岩槻 邦男 坂本 正明（テレビ朝日コメンテーター）
14	生命倫理２：クローン生物	第２回はクローン生物とは何かを生物学の立場から考察し、さらに世間を賑わす問題になった高等哺乳動物のクローンに関わる諸問題を整理して、考察のための資料を提供する。	同上	同上
15	生命と環境の研究と教育	生命は細胞として生きており、個体として生きており、また生命系として生きている。生物多様性の一つの要素として生きる人の生を見つめ、生への畏敬とは何かを考察する。	岩槻 邦男	岩槻 邦男

＝生命環境科学Ⅱ（‘０２）＝（TV）

－環境と生物進化－

〔主任講師：　石川　統（放送大学教授）〕

全体のねらい

生物の進化を環境との関わり合いに重点を置きつつ考察する。ここでとり上げる環境には、生物をとり巻く無機的環境ばかりでなく、細胞内環境、生体内環境、さらには１つの生物種にとっての異種生物の存在なども含まれる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生物進化の場としての環境	生物にとっての環境とは、物理的自然環境だけではない。細胞内環境、生体内環境、異種生物間相互作用等が生物進化にどのように影響するかを概観する。	石川　統（放送大学教授）	石川　統（放送大学教授）
2	原始地球環境と化学進化	原始地球の環境下で有機物が合成され、やがて生命が誕生した。それらの過程を概説するとともに、当時の生態系についても述べる。	山岸　明彦（東京薬科大学助教授）	山岸　明彦（東京薬科大学助教授）
3	生命の起源とRNAワールド	生命の起源の頃には、RNA分子が生命にとって不可欠の遺伝情報と触媒作用の双方を担っていたとする説が有力である。その根拠について概説する。	石川　統	石川　統
4	環境としての細胞	細胞は生物を構築する最小単位であるとともに、機能分子にとっては環境としての意味をもっている。細胞の起源にも触れつつ、その働きを解説する。	同　上	同　上
5	酸素と生物	原始地球上には酸素は乏しかったが、光合成生物の出現によって、その濃度は飛躍的に上昇した。そのことが生物進化に与えた影響について概説する。	同　上	同　上
6	真核細胞の起源	真核細胞は異なる種類の原核細胞が共生しあうことによって生まれたと考えられている。その根拠を紹介しつつ、細胞小器官の機能について述べる。	同　上	同　上
7	多細胞生物と環境	多細胞生物を構成する細胞や組織は、周囲の生体内環境との整合性の下に維持されている。多細胞生物の起源とともに生体内環境の実態について紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	葉緑体からみた植物の進化	約２０億年前、藍色細菌が宿主生物に細胞内共生し葉緑体となり植物が生まれた。葉緑体からみた多様な植物（マラリア原虫を含む）の起源と進化のしくみを解説する。	黒岩　常祥（立教大学教授）	黒岩　常祥（立教大学教授）
9	極限環境の生物たち	高温、低温、高圧、酸性、アルカリ性等さまざまな極限環境にも微生物が生育している。これらの環境に適応するための戦略を、とくに温度との関係を中心に解説する。	山岸　明彦	山岸　明彦
10	補食・被食関係と進化	補食者、被食者双方の戦略を述べるとともに、第三者の介在によってそれらがどのように複雑化するかを、いくつかの実例を挙げつつ解説する。	松本　忠夫（東京大学大学院教授）	松本　忠夫（東京大学大学院教授）
11	寄生：食住環境としての異種生物	寄生者にとっては、宿主生物の体が生きていく環境である。寄生者と宿主の間にみられる生存のための巧妙な駆け引きと戦略について考察する。	深津　武馬（産業技術総合研究所主任研究員）	深津　武馬（産業技術総合研究所主任研究員）
12	共生と共進化	密接な生物間相互作用である共生と、それに基づく相互依存関係の深まりである共進化について、実例に沿いつつ紹介し、その本質を考察する。	同　上	同　上
13	細胞内共生	究極の共生の形態である細胞内共生の例を主として分子細胞生物学的観点から紹介し、その生物進化および生物多様性増大における意味を考察する。	石川　統	石川　統
14	環境と遺伝子	環境要因によるDNA損傷を監視し、それを回避する機構について、主として発がん、老化、および生物進化との関係を念頭に置きつつ概説する。	三谷　啓志（東京大学大学院助教授）	三谷　啓志（東京大学大学院助教授）
15	環境に働きかける生物たち	生物は環境の資源を有効に利用するために、多少なりとも環境の改変を行う。それを大規模に行うサンゴ虫、シロアリ、ミミズ類などを例として、その生物学的意味を考える。	松本　忠夫	松本　忠夫

＝認知行動科学（‘０２）＝（TV）

－心と行動の統合科学をめざして－

〔主任講師：　西川　泰夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

認知行動科学は、自らの心と行動を総合的に問い豊かな自己認識を図ることを試みる新たな「心の科学」である。また、自律的個性的な自己実現にとって心身の健康問題は重要な課題の一つとなるので、あわせて具体的な実践と応用のための技術や方法論と、そのもとにある基本的な心観（パラダイム）や原理・理論を詳細に検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	プロローグ －認知行動科学のめざすもの－	認知行動科学の大枠となるパラダイムを呈示し、当放送講義の全体像を概略紹介する。従来の「心の科学」（認知科学、認知論）ならびに「行動の科学」（行動論）の理論的な統合化のもとで総合的な自己認識と他者認識をはかり、自他における心身の健康問題や豊かで安全な社会形成への実践と応用のための技術・方法論のもとになる基本的な原理やパラダイムを詳細に吟味・検討する。	西川　泰夫（放送大学教授）	西川　泰夫（放送大学教授）
2	認知行動科学の基礎（１） －二大パラダイムの再吟味－	歴史上代表的な二大「人間観」である「認知（心）論」と「行動論」の統合化をはかり総合的統一人間科学「認知行動科学」を構築するために、各々の個別分野における心観、行動観を基本から再吟味する。また、心身問題への対応をめぐり両観点の比較検討を行う。	同　上	同　上
3	認知行動科学の基礎（２） －認知論－	二大パラダイムの統合における難問の一つである「心身問題」への取り組みをもとに、私の心と行動を統合的にいかにとらえ認識可能か検討する。第一の論点である「認知論」をふまえ心身の健康問題をはじめ自己認識をより良く達成するための実践法となる認知療法や認知的カウンセリングの基本原理や前提の検討を試みる。	同　上	同　上
4	認知行動科学の基礎（３） －行動の科学、行動論－	「心身問題」を吟味するさいのもう一つの論点である「行動論」の紹介を行う。この立場は、必要なことは心の解釈と説明を行うことではなく（あるいは、心やその概念を排除する）、なぜそう行動するのか、当該行動を制御している制御変数を行動の場、環境事象の中に特定することである。したがって、心は身体に還元される。では、行動の基本法則とは。また、自らの心身の健康維持促進を決定的に左右する行動様式とは。新たに提唱される「行動医学」、自律的健康維持のための「行動療法」、「行動修正・変容法」とは。	同　上	同　上
5	行動の科学（１） －Ｉ．Ｐ．パヴロフの条件反射学－	二大パラダイムの歴史的な成立経緯から、まず「行動の科学」における人間観を整理する。そのさいのキーワードの一つが「科学」である。この科学的認識活動による新たな「人間科学」とはどのようなものであったか。その第一歩となった条件反射学を再吟味する。「精神的（心理的）分泌」と名付けられた現象の解明がことの発端である。その結果、心とは決して不可思議な非物質ではなく、その物質的基盤となる脳のモデルへと展開する。	同　上	同　上
6	行動の科学（２） －Ｊ．Ｂ．ワトソンの行動主義－	自らの科学的な理解（自己認識）のために第三者により観察可能であり検証や反証のできる対象として選ばれたのが「行動（刺激－反応の結び付き）」に他ならない。そうした行動の形成と修正のための方法論や技術の背景となる「行動主義」の観点を考察する。 この基盤として、パヴロフの条件反射学、ならびに条件付け操作がある。また、なぜ「行動」を問題にするのか。彼の「行動心理学」、いな「行動の科学」を吟味する。	同　上	同　上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	行動の科学（3） －媒介過程論、動因論－	行動の制御変数としての生体内部の過程への見直しと、その見えざる対象をいかに科学的に可視化するか。刺激変数と反応という外的観察可能な変数の操作から規定される刺激－反応関係をもとにしたその間をつなぐ媒介物質過程をいかに科学的対象として取り出しうるか。この内的過程をあらためて「心」とよぶことが可能になるのか。その新たな「心」の機構と機能、ならびにその概念をめぐる展開の紹介。行動を左右する内的媒介変数としての「動機論」、「動因論」などを吟味する。	西川 泰夫	西川 泰夫
8	行動の科学（4） －B．F．スキナーのオペラント心理学－	実験行動分析学（オペラント心理学）を提唱するスキナー独自の観点の吟味と、その応用である応用行動分析学、行動療法をはじめ、教育工学、行動薬理学などを紹介する。スキナーの基本命題は、「なぜ生き物はそのように行動するか」と問うことである。またその答えは、生体の自発行動（オペラント行動）の表出場である同じ環境事象の中に当該行動の生起確率を左右する制御変数をみいだすこととみなす。そのさい、彼は、三項関係（機会刺激（弁別刺激）－オペラント行動－強化の随伴性）を基本として、独特の理論展開を図る。	同 上	同 上
9	パラダイム・シフト －認知論の台頭、高次精神現象－	台頭してきた新たなパラダイムである認知論、ならびに認知心理学に対する、反対の立場の急先鋒であるスキナーの態度は、当初から徹底しており一貫している。また批判してやまない。その理由は、彼の理論からみると、「認知理論」は排除すべき代表的な「理論」の一つであるからである。では、「認知論」における主題であるあらゆる心的過程、高次精神事象や心の概念は、いかなる科学的根拠において不可欠と理解され、主張されるにいたったのであろうか。最終的な「認知革命」と称されるようなパラダイム・シフトが生じる過程での、多様な高次精神事象を取り扱った、また内容も身近な実験事例を紹介する。	同 上	同 上
10	コロンバン・シミュレーション計画 －ハトによる認知過程のシミュレーション－	コロンバン・シミュレーション計画とは、ハトを用いた認知過程のシミュレーション研究計画である。この計画は、オペラント行動心理学の提唱者であるスキナーの最晩年における研究計画である。当時、心理学の基本パラダイムは、行動論、行動心理学に代わって認知論、認知心理学へと移行し始めていた。これに徹底的反論を展開したのはスキナーである。彼が排除すべき「理論」の典型的理論である「認知論」を認めるはずもない。心や、高次精神現象と称される現象を、チンパンジー（霊長類）以下でしかないハト（鳥類）を用い行動的に形成し、記述する。９章で紹介した実験例への反証でもある。	同 上	同 上
11	「心の科学」（1） 認知革命－「行動の科学」から「心の科学」への回帰－	心理学の内部で繰り広げられていたパラダイム論争に加え、新たに心理学外での諸科学の興隆に伴い、心理学への多くの影響がおよぶにいたり、心理学は、それまでの「行動の科学」から「心の科学」への大幅な移行、回帰といってもよい変化が生じた。これを「認知革命」とよびさえする。それは、あらためて心的過程をはじめ、メンタルな概念での行動の説明が可能になるのに伴う、パラダイム・シフトに他ならない。その背後にある外圧ともいうべき新たな展開は、情報理論、コンピュータ・サイエンス、数理言語学に起こった出来事による。情報理論を中心にその変遷を概括する。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	「心の科学」（2） －認知心理学の成立、システムを流れる情報の観点から－	新たな「心の科学」を目指す「認知論」に立脚した「認知心理学」の具体的な事例実験研究を紹介し、「心」の概念の再吟味を試みる。そのさいの中心的なパラダイムを一言で示すと、「心とは、情報の処理・操作システムである」、あるいは「心とは、システム・コントロール情報処理システムである」という言明、命題に集約されよう。このことは、あるまとまりをもつシステム全体を情報の流れの中で固有の機能を発揮するさまざまな下位システムの有機的集合体とみる立場でもある。この観点は、生物にとどまらず機械をはじめ多くの人工物、物理事象を含みそれらを共通の基盤に立って論ずる新たな道を開く。	西川　泰夫	西川　泰夫
13	「心の科学」（3） －心はコンピュータか－	いわゆる認知革命をもたらした大きなインンパクとの一つが、コンピュータの発明にあることは論を待たない。その特色の一つとして、情報のコントロール・システム、情報の処理・操作システムであることをあげることができる。そして、心の基本的な営みに重ねて論じうる可能性を前章１２章で議論した。さらには、その基本構成要素、ユニットが情報の流れの中で果たしている情報コントロールシステムとしての特色や機能を実証的に考察できた。この情報を直に担っているのが、記号系であることも指摘した。その意味では、コンピュータも人の心も同じく、記号の処理・操作システムであるという命題が成り立つ。では、「心は、コンピュータである」、という言明、命題は成り立つのであろうか。こうした可能性を論ずる新たな「心の科学」、「認知科学」の動向を紹介する。	同　上	同　上
14	「心の科学」（4） －「考える」とは、記号論理学をもとに－	心身問題の解決を探る現代の心の科学における基本方針は、システムを行き来する記号あるいは情報をキー概念として、脳を基盤とする物質的、物理過程をもとに一元論的な解消を目指すものといってよい。本章は、当の「記号」と「記号の処理・操作」それ自体を考察の対象とする。その記号の処理・操作とは、一定の規則に則って行われる「計算」である。日常の「考えること」に当たる。その基本の論理構造を、伝統的なアリストテレス論理学から、現代の記号論理学、命題論理学と述語論理学に則って吟味する。それは新に考える機械（コンピュータ）の可能性を開くとともに、心を機械とみる観点へと開かれる。この上で心身問題への新たな解決の糸口を探る。	同　上	同　上
15	エピローグ －「認知行動科学」；「認知論」と「行動論」の統合と新たな展開－	現代心理学の二大パラダイムの吟味を通して、私たちの最大の関心事の一つである「心とは何か」、「行動とは何か」に対する思索の後を追って現代の心理学のフロンティアの有様を概観してきた。心理学の統一理論の確立をはじめそこには多くの重要な課題が解決を待っている状況である。最大の論点の一つはデカルトを一つの原点とする「心身問題」にある。それは「擬似問題」であろうか。心などの用語の「記述レベル問題」であろうか。一方、物理自然諸科学は、「機械論」に立って一貫した世界観を確立してきた。それは心をいかに解くか、新たな段階を迎えている。「認知科学」がそれである。それは統一理論たりうるか、身近な話題を通じその可能性を探り、本書のとりまとめを行う。	同　上	同　上

＝生活科学Ｉ（‘０２）＝（Ｒ）

－ 生 活 財 機 能 論 －

〔主任講師：　酒井　豊子（放送大学教授）〕
〔主任講師：　伊藤　セツ（昭和女子大学教授）〕

全体のねらい

生活科学の研究には生活文化、生活様式、生活技術、生活資源、人間関係、ジェンダー、消費者問題、生活人間工学など、さまざまな視点からの切り口がある。一方、生活のどのような場面を想定してみても、そこには人と生活財の何らかのかかわりが存在する。この講義では、第１章の総論に続く第２章以下を、第１部：生活材料学（第２章～第５章）、第２部：生活財の科学（第６章～第１０章）、第３部：生活財と生活行動（第１１章～第１５章）の３部構成とし、生活者と身近にかかわる生活財に関し、上のようなさまざまな切り口から調査、比較、分析したさまざまな研究事例を紹介しつつ、生活科学の研究思想、研究手法などを検証するとともに、今後の研究の発展の方向と可能性を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生活科学の思想と領域	生活とは、生活者とは、の考察に基づいて、生活科学と周辺諸科学とのかかわり、生活科学の研究領域等を紹介し、生活科学の概念を把握した上で、この講義の立場と狙いを明らかにし、第２章以下で取り扱う内容について概説する。	酒井　豊子（放送大学教授） 伊藤　セツ（昭和女子大学教授）	酒井　豊子（放送大学教授） 伊藤　セツ（昭和女子大学教授）
2	生活材科学Ｉ －資源論－	生活財として用いられる食品材料、繊維材料などについて、資源という視点から検証を試みる。キーワードは資源、エネルギー、食料、繊維、生産量、供給量、消費量、必要量、自給率など。	酒井　豊子 的場　輝佳（奈良女子大学教授 ）	酒井　豊子 的場　輝佳（奈良女子大学教授 ）
3	生活材科学Ⅱ －基本的性能－	食品材料と衣服材料を中心に、生活財として用いる上での最も基本的と思われる性質・性能について、研究成果や課題を整理する。キーワードは、成分、微細構造、耐久性、安定性、保存性、安全性など。	酒井　豊子 的場　輝佳	酒井　豊子 的場　輝佳
4	生活材科学Ⅲ －感覚的性能－	生活財として用いる上での、材料としての感覚的性能について取り扱った研究事例を紹介する。キーワードは、 テクスチャー、舌触り、肌触り、官能評価など。	今井　悦子（聖徳大学教授） 酒井　豊子	今井　悦子（聖徳大学教授） 酒井　豊子
5	生活材科学Ⅳ －材料の変性－	食品材料を中心に、加工、調理等の過程で生じる、食品組織、食品成分などのさまざまな変化について取り扱う。キーワードは組織、成分、加熱、加圧、経時、加工、調理、発酵、酵素、品質変化など。	的場　輝佳	的場　輝佳 酒井　豊子
6	生活財の科学Ｉ －生態学－	生活の場における生活財の現実の姿について取り扱った研究事例、特にその研究手法とそこから抽出される生活の実態・変化を中心に紹介する。キーワードは、生活財生態学、生活財保有量、時代変化、地域性など。	田村　照子（文化女子大学教授）	田村　照子（文化女子大学教授） 伊藤　セツ

回	テ ー マ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	生活財の科学Ⅱ －機能論－	生活財の果たす役割を概観し、衣服、寝椅子などに例を取って、使用目的を果たすための機能の追求、設計手法、機能の評価などについての研究事例を紹介する。キーワードは、人間工学、被服構成学、体型、身体適合、障害者、加齢、装身など。	松山　容子 （大妻女子大学教授 ）	松山　容子 （大妻女子大学教授） 酒井　豊子
8	生活財の科学Ⅲ －様式論－	衣服を例にとって、生活財の時代的、地域的変容をライフスタイルや生活思潮とのかかわりで取り上げた研究事例を紹介する。キーワードは生活規範、慣習、統制、制服、ジェンダー、洋風化、ファッションなど。	有馬　澄子 （東横学園女子短期大学教授）	有馬　澄子 （東横学園女子短期大学教授） 伊藤　セツ
9	生活財の科学Ⅳ －消費性能－	生活の場におけるさまざまな取り扱いとの関連において、生活財の消費性能を取り上げた研究事例を紹介する。キーワードは、耐久性、変形、変色、消費期限、商品寿命など。	今井　悦子 酒井　豊子	今井　悦子 酒井　豊子
10	生活財の科学Ⅴ －生理学－	生活財の機能として重要な快適性に焦点を当て、快適性評価に不可欠な人体生理の側面から生活財について取り上げた研究事例を紹介する。キーワードは快適性、心地、感覚、体温調節反応、高齢者、圧迫、自律神経反応、着用感、衣服、寝具など。	田村　照子	田村　照子 酒井　豊子
11	生活財と生活行動Ⅰ －生産－	生産とは何か、生活財の製品開発、製品計画などにおける生活視点に関する研究事例を紹介する。キーワードは、生産者、生活視点、消費者要求、消費者苦情、消費者対応、企業文化、企業の社会的責任、労働時間、就労など。	伊藤　セツ	伊藤　セツ 酒井　豊子
12	生活財と生活行動Ⅱ －購買－	消費者の生活財の選択・購入行動と、消費者と生産者の関係について取り扱った研究事例を紹介する。キーワードは、販売と購買行動、サービス産業、表示、広告、家計、価格、過剰包装、贈答文化、消費者対応、消費者苦情など。	伊藤　セツ 酒井　豊子	同　上
13	生活財と生活行動Ⅲ －食べる－	何を食べるか、どこで食べるか、誰と食べるかなど、食事の在り様を取り上げた研究事例を紹介する。キーワードは、栄養性、ダイエット、拒食症、過食症、外食・中食・内食、個食、加工済み食品など。	的場　輝佳	的場　輝佳 酒井　豊子
14	生活財と生活行動Ⅳ －洗う－	衣服の洗濯、食材・食器の洗浄など、生活の場面における洗浄について、身辺の衛生と環境保全の視点から課題を整理する。キーワードは、界面活性剤、洗剤、水、洗浄効果、電気洗濯機、食器、洗い機、洗濯排水など。	酒井　豊子 的場　輝佳	酒井　豊子 的場　輝佳
15	生活財と生活行動Ⅴ －廃棄－	不要になった生活財の各家庭からの排出の問題を、資源問題、環境問題など今日的視点から、また、生活の視点から総括する。キーワードはゴミ、故繊維、リサイクル、再資源化、生活排水、循環型社会など。	同　上	酒井　豊子 的場　輝佳 伊藤　セツ

＝生活科学Ⅱ（‘０２）＝（TV）

－すまいづくりまちづくり－

〔主 任 講 師： 本間 博文（放送大学教授）〕
〔主 任 講 師： 佐藤 滋（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

わが国の居住空間は、統計資料上の改善は目覚しいが、多様化するニーズへの柔軟な対応に欠け、地域としての居住環境はなおざりにされ、依然として多くの課題を抱えたまま改善のプロセスは明確でない。このような状況を変革し、居住者の生活に適合した居住空間づくりを実践するには、専門家にただそれを任せておくだけではなく、住民自ら積極的に関わることが必要であり、現にそのような状況が各所に見られようになり、そして確実に増えてきている。本講義は、そのような居住空間の改善に積極的に関わろうとする意欲を持つ住民が、様々な活動を行うために必要な、実践的な、そしてやや専門的な知識を習得することを目標とする。講義の前半で「すまいづくり」を、８章から「まちづくり」について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに	集まって住む、そこにおける共同の意味をより積極的に追求しようとする動きが顕著になり、大きなうねりとして21世紀のすまいづくりのキーワードになりつつある。まちづくりにおいても第１の原則は住民地権者の参加である。本章では本講義の構成と狙い、各回の内容を概説し、居住空間造りに主体的に関わることの意味を考える。	本間 博文（放送大学教授）	本間 博文（放送大学教授）
2	コーポラティブ方式でのすまいづくり	1970年代に脚光を浴びたコーポラティブ方式でのすまいづくりは、一時の停滞期を過ぎ、今再び注目を浴びている。多様なライフスタイルの家族、世帯が共存する都市社会においてすまいづくりに主体的に関わることの重要性が見直されてきたためである。ゲストに中林由行コープ住宅推進協議会幹事長を迎えて、コーポラティブ方式のすまいづくりの変遷、その手法、典型事例などを紹介し、今後の住まい造りに有効な知見を得る。	同 上	同 上
3	スケルトン定借マンションによるすまいづくり	スケルトン定借マンションのねらいとその仕組みを紹介し、さらに今後の都市社会の中でどのような有効性を持つかを述べる。その上で、この方式を採用してすまいづくりを行った東京都世田谷区の２つのプロジェクトを取材し、この方式の可能性と課題を明らかにする。とくにプロジェクトを支援する立場のコーディネーター、設計者の役割や能力を検証する。併せてプロジェクトを進める上で発生する様々な問題を提示し、問題解決のための指針を示す。	同 上	同 上
4	コレクティブハウジング(1)	21世紀の社会は単に住まいを共同で造るだけではすまなくなってきている。さらに進んで生活を共同化し、お互いに補い合って生活の質を高めていこうとする動きが主に北欧を中心に出てきている。どこでどのようにすむかというライフスタイルと住宅選択の一つである。欧米での先駆的な事例を紹介し、コレクティブハウスの可能性を探る。	小谷部 育子（日本女子大学教授）	小谷部 育子（日本女子大学教授）
5	コレクティブハウジング(2)	日本でのコレクティブハウジングの動向を紹介する。グループホームなど似通った用語が氾濫し混乱しているのでまず関連用語も含めてその定義を明確にする。同時にコレクティブハウジングの特徴、住宅形式、対象とする生活者像などを概観する。その上で、阪神･淡路大震災の復興事業の一環として神戸市に建設された兵庫県営片山住宅などの事例を紹介し、公営コレクティブの問題点、民営のコレクティブハウス建設の取り組みなどを紹介する。	同 上	同 上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	環境と共生する住まい(1)	21 世紀の住まいづくりは環境負荷をいかに軽減するかが重要な課題の一つである。建築と地球環境の問題を概観し、低環境負荷を実現するための基本的な知見を述べた上で、今後の取り組みについて考える。海外の先導的なすまいづくり、まちづくりの事例を合わせて紹介する。	小玉 祐一郎（神戸芸術工科大学教授）	小玉 祐一郎（神戸芸術工科大学教授）
7	環境と共生するすまい(2)	地域の自然的特性、社会的特性のポテンシャルを発見し、すまいづくりに生かすことは省エネルギー、省資源を実現して環境負荷を減らすだけではなく、地域の魅力を引き出し、良好な社会ストック形成に貢献する。東京世田谷の環境共生型集合住宅、岡山倉敷の伝統的民家再生などの事例をあげながら、環境と共生するすまいづくりを展望する。	同 上	同 上
8	復興まちづくり	阪神・淡路大震災の後の復興まちづくりは、今日のまちづくりの可能性と課題、そして限界を明らかにした。住民の主体性と行政の責任、そして専門家のリーダーシップ、さらに蓄積されたまちづくりの技術の有効性が試されたのである。主に神戸市野田北部地区における復興まちづくりの事例を追ってこの問題を解明する。	佐藤 滋（早稲田大学教授）	佐藤 滋（早稲田大学教授）
9	住み続けられるまちづくり	災害に脆弱な木造密集市街地で 1970 年代後半から、地域社会を基盤として住環境の整備を標語に掲げながら、広範な改善型まちづくりの試みが進められた。埼玉県上尾市仲町愛宕地区、長崎県長崎市曙町中道地区を事例に住環境の整備を進め「安心して住み続けられるまち」を目指したまちづくりの成果を振り返り展望する。	同 上	同 上
10	参加のまちづくり	まちづくりの第 1 の原則は使用者の参加ということで、1960 年代以後建築や造園、都市計画の分野で取り組まれていた最大のテーマである。目標空間イメージの共有と実践、ユーザー参加、参加の技術とプログラム、デザインゲームなどのキーワードがどのように反映しているか、その取り組みを探る。この分野での実践を積み重ねてきた卯月盛夫早稲田大学教授をゲストに向かえて講義を進める。	卯月 盛夫（早稲田大学教授）	卯月 盛夫（早稲田大学教授）
11	町並み保存・町の資源を活かす	歴史的町並みの保存は、まちの資源がもっともあきらかな形で存在しているという点では、資源をいかす町づくりの最右翼にあるといえよう。しかし、それだけに住民の日々の生活そのものと深くかかわる。歴史的な町並みを現代の町づくりの資源としていかすとはどういうことなのか？ 町並み保存とは、何を、なぜ、どのように保存することなのか。埼玉県川越市を事例に取り上げ、具体的に考える。	福川 裕一（千葉大学教授）	福川 裕一（千葉大学教授）
12	まちをマネージメントする	都市の中心部は、その市民生活の中心になるだけでなく、外部の人をひきつけ、都市の経済基盤として重要な役割を果たしてきた。その中心市街地の衰退がはげしい。これをどう立て直すか。先駆的に取り組まれている滋賀県長浜市の試みに学ぶ。	同 上	同 上
13	まちのポテンシャルを表現する	都市と農山村を結ぶいわゆるマチは地域の交通の要衝であり古くから栄えた。しかし、その後の社会背景の変化を受けて現在ではかつての面影を失いつつあるが、歴史的資源を活かしながら新しい風景デザインの創造を機軸にまちづくりを展開し、内外へ向けて情報発信につとめるこころみが成果をおさめている。愛知県足助町の事例を取り上げる。	後藤 春彦（早稲田大学教授）	後藤 春彦（早稲田大学教授）

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	まちづくりはひとづくり	島国という日本の国土を形成する骨格は、中山間や離島等の条件不利地域である。こうした、いわゆるムラにおいて、行政と住民を媒介する中間セクターとしてのまちづくり研究所等を設立し、地域資源を研究対象や教材としながら、地域づくりの中核を担うひとづくりをすすめる方法がこころみられている。新潟県高柳町を事例としてとりあげる。	同 上	同 上
15	まちづくりの時代	現在まちづくりの仕掛けがありとあらゆる形で始められている。それではまちづくりを切り開いていくためにどのような戦略があるのだろうか。まちづくりに取り組んでいる専門家、行政、住民のパートナーシップ、制度と仕組み、まちづくりの技術などについて様々な立場で関わっている人々へのインタービューを交えて探る。 最後にまちづくりは日本の独特の社会・文化が生み出した方法であると同時に、世界の各地で近代都市計画を乗り越えるためのさまざまな試みが行われている。台湾でまちづくりのリーダーとして活躍中の陳両全教授のインタービューを通して国政的に広がりつつある状況を紹介する。	佐藤 滋	佐藤 滋

＝健康科学（‘０２）＝（TV）

－医と社会の接点を求めて－

〔主 任 講 師： 近藤 喜代太郎（北海道大学名誉教授）〕

全体のねらい

この科目では医学をはじめ、保健にかかわるすべての学理を基礎とするが、その学理自身が目的ではなく、現在の日本社会で具現されている医療のレベルでの問題とし、ヒトの罹患をめぐる人文的・社会的な諸事象について広範に学ぶことを目的とする。科目の構成にあたって、人体内部に起こる現象よりも、医学・医療と社会との接点に起こる諸事象に重点をおく。今日、学際的・超域的に知をどのように構築するとしても、その中に「ヒト」という要件を欠くことはできない。また、個人のセルフケアについても地球的視野が必要となっている。本講義の視座の一つは、この点をふまえて本学大学院の他の科目との有機的な関連性を保つことである。科目の構成に当たって、臨床心理プログラムの科目「精神医学」との重複を避ける。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	人間生存の条件と健康	ヒトは進化の頂点にある。約20億年前、真核生物が誕生し、地球システムのなかで環境条件に恵まれて進化し、今日の生物の姿になったのである。本章ではヒトをふくむ生物の１個体の生存条件と、多世代にわたる集団の生存条件を検討する。１個体の健康と種の維持の背後にはそれを可能にする諸条件が持続的に成立しなければならない。本章ではこれらを地球システムとの関連で具体的に学び、次章以下の序論とする。	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）	近藤喜代太郎（北海道大学名誉教授）
2	疾病の成立と回復の促進	疾病は生存の条件が破綻したとき成立する。医学はその機序を解明する学理、医療はその予防と治療の技術システムである。本章では人体の構造と機能を簡潔に復習し、ヒトが罹患する機序を10余りに分けて解説し、今日の日本における疾病の発生動向と問題点をのべ、診断、治療、リハビリテーションなど、回復を促進する技術システムの枠組みを学ぶ。	同　上	同　上
3	医療のしくみ	治療が行われる場が医療施設であり、医師をはじめ、名称と職務を独占する有資格者が法令、医学、薬学の学理、経済規範などに従いつつ、受診した患者のために最善をつくすのが医療である。本章では多くの法令で構成される社会的なしくみだけでなく、病院など、医療にかかわる私的セクターをふくめて、医療のしくみを学ぶが、社会保障制度と経済的側面、高令者福祉にかかわる部分は５章と６章にゆずる。	同　上	同　上
4	公衆衛生のしくみ	公衆衛生は健康をまもる国と社会のしくみである。この分野は本学の専門科目としてすでに開講されているが、大学院の健康科学でも不可欠な重要分野なので、なるべく内容の重複を避け、総合文化の観点から必要な事実を追加しながら、基幹的な枠を示し、主要な問題点を考察することとする。感染、栄養不足などが主な課題であった時代は遠く去り、今日の日本では老いと死という、保健医療の最終的課題が重要になり、公衆衛生も最終段階に入ったといえよう。	同　上	同　上
5	社会保障と医療経済	今日、自由診療はほとんど存在せず、医療は社会保障の一環としての医療保障となり、GNPの10%以上、国によっては、それ以上を費やす巨大な存在となった。医療保障は国の制度の一部であり、巨額の医療費をどのような原則でだれがどう負担するかは国運を左右するような政治、経済の重要課題でもある。本章では日本をふくむ主要な国々の医療制度、その発展の歴史と今日の問題点を比較考察し、日本の現行制度をめぐる諸々の論点を展望する。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	高齢者と医療・福祉	保健・医療・福祉は、本来、方法は異なっても目的はひとつであるので、連携するのが当然である。しかし、立法と発展の沿革が異なるためにそれが困難であり、とくに高齢者にその矛盾がしわ寄せされていた。日本では家族扶養が美風とされ、公的介護のしくみが発展せず、なにが医療でなにが介護かが不明確であったが、「介護保険」（平成12年）の導入によって福祉は新しい段階にはいり、医療との連携が切実な課題となった。本章では日本の現行制度と社会保障の一元化に向けての問題点に触れる。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
7	死をめぐる問題	ヒトはかならず死亡する。医療の理念は「生命の尊重」であるが、延命技術によって変貌した死の姿は医療にも試練をもたらした。今日、死の大部分は高齢者に対する施設ケアの場で、医療の管理下で生じ、私から公へと変貌し、また延命技術の進歩ともに安楽死、尊厳死、脳死など、法的意義の異なる死の類型が明らかになった。本章ではこれらにかかわる複雑な問題とともに日本を含む国々での死の実態、医療の役割、ホスピスなどについて考察する。	同　上	同　上
8	生　命　倫　理	古くから西欧の医療の道義性は「ヒポクラテスの誓い」によって守られ、他の文化にもそれぞれの理念があり、医師はあたかも父親のように振るまい、患者はそれに全面的に依存していた。しかし今日、患者の自己決定権が当然となり、父性主義は否定された。また技術的進歩によってそれまで「自然の摂理」だったことが技術の領域に移った。生命倫理はこのような動向のなかでますます重要となり、国家社会のなかで医療はどうあるべきか、医師などの保健職者はどうすべきかの指針を示すものとなっている。本章では生殖技術、胚性幹細胞などの初期生命、医療における患者の自己決定権と「説明と同意」など、主要な生命倫理の課題について学ぶ。	同　上	同　上
9	患者にとっての医療	患者が医療に求めるものは治療と癒しである。医師は患者にとってその与え手であり、ある意味で絶対者であった。しかし今日、医療は説明と同意の許に患者の自己決定に基づいて供与すべき専門技術となっている。本章では患者医師関係、患者からみた医療についてのべ、セカンド・オピニオンなど医療をめぐる患者からの提案に触れ、医療がその意思に反して役目を果たし得ない種々の場合、とくに医療過誤と裁判の動向についてのべる。	同　上	同　上
10	医学研究と高度先端医療	生命医科学は、情報科学とともに２１世紀を担う科学とされ、たえず新しい技術と応用が提案されており、「高度先進医療」はその成果の一部である。しかし技術の進歩は、脳死移植、遺伝子治療、胚性幹細胞による再建医療、ヒトゲノム情報の応用などにみるように巨大な可能性が指摘されながら、社会的受容に問題点があり、さまざまの緊張を生じている。本章ではこのような問題を考察する。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
11	保健医療のリスク・マネージメント	保健医療には予期できない突発的事案が少なくない。心筋梗塞は本人には青天の霹靂であっても、それに対処する救急体制は周到に準備された継続的に保たれる全国的体制である。このように保健医療の危機は個人のレベルでも生ずるが、薬害エイズのように、国の薬事行政のあり方が多数の犠牲を生んだと認められる事案もある。前例に従い、時間をかけて他の問題との整合性を考えて法的手順を踏むべき事案もあるが、急速に対処しないと対処が困難になり、被害が拡大する事案もある。本章では保健医療におけるリスク・マネージメントの現状と問題点をのべる。「危機管理」という日本語を用いないのはこの分野が外国の水準に遠く、日本での概念が完成していないためである。	近藤喜代太郎	近藤喜代太郎
12	医療評価、説明責任、情報社会	今日、医療には透明性が求められている。本章では病歴開示と守秘義務、病院評価、研究、高度医療にかかわる説明責任などをはじめ、医師、病院、医療のあり方などへの外部評価にかかわる問題をのべる。厚生省をはじめ、日本の官庁は情報公開の点で遺憾な状態にあり、国民の利益に反することも少なくない。本章ではこの問題をふくめて、情報社会のなかで医療にかかわるすべての個人、団体のあるべき姿を考察する。	同　上	同　上
13	医学・医療の法と規範	今日の医学・医療は多くの法と規範の許にある。それらの一部には前章までにも断片的に触れられているが、本章は憲法第 13 条、同 25 条、厚生、労働、環境法規をはじめ、保健にかかわる多くの法令を体系的に説明し、外国とも比較し、法と規範の面からの問題点を考察する。法令と倫理・道徳の規範の関係を考察し、さらに、近年盛んに提案されている各種のガイドラインとその意義について学ぶ。	同　上	同　上
14	国　際　保　健	ヒトには国境があるが、病原性細菌には国境はない。保健はもともと国際的であり、検疫のように国境を盾とする制度もあるが、国際的共生が当然となった今日、制度的制約をこえた、さまざまの国際協力活動があり、それらは必然的に先進国が資金、技術、経験などを発展途上国に提供する側面をもつ。また近年、NGO をはじめ、非国家組織の役割が大きくなりつつある。本講はこれらの問題と在日外人・在外邦人の保健医療について学ぶ。	同　上	同　上
15	医史の今日的意義と代替・相補医療	医史を知ることは現在の医学・医療を知ることである。本章では膨大な知見を取捨し、西洋の医学・医療が今日の体制となり、日本をふくめて、文化的伝統の異なる国でも正統的医療の地位についた理由を探る。そして日本では漢方、鍼療法など、西欧でもカイロプラクティックなどの伝統的医療が別体系で存在しつづけるなどの事実をのべる。最近、日本ではそれらが連合して代替、相補医療として再構成され、西洋医学の限界を補い、人々の癒しとなっている現状を学ぶ。米国でもカイロプラクティックが国立健康研究所 NIH で研究されている。	同　上	同　上

＝精神医学（‘０２）＝（Ｒ）

〔主 任 講 師：　仙波　純一（放送大学教授）〕

全体のねらい

この科目は臨床心理士養成コース大学院の科目として作成されたものである。したがって、医学的な知識がなくとも、精神医学の役割を理解できるように工夫されている。診断学は簡単な記述にとどめ、精神科疾患を提示し、その治療の道筋を把握できるように作成した。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	精神医学とは何か	医学における精神医学の占める位置を説明し、次に精神医学の簡単な歴史と現状について述べる。精神症状を把握するための精神医学的面接法、臨床検査法、および診断法の概略を述べる。	仙波　純一（放送大学教授）	仙波　純一（放送大学教授）
2	精神分裂病（１）	精神医学の最大の課題のひとつである精神分裂病をとりあげ、その疫学、症状、推定されている成因などについて述べる。	石丸　昌彦（桜美林大学教授）	石丸　昌彦（桜美林大学教授）
3	精神分裂病（２）	精神分裂病の治療法すなわち、薬物療法、精神療法、社会復帰療法などについて述べる。	同　上	同　上
4	気分障害（１）	従来の診断名では躁うつ病とよばれる気分障害をとりあげ、その疫学、症状、推定されている成因などについて述べる。	仙波　純一	仙波　純一
5	気分障害（２）	気分障害の治療法を構成する薬物療法と精神療法の役割を述べる。	同　上	同　上
6	不安障害とその周辺	伝統的には神経症と呼ばれてきた疾患群を不安障害としてとりあげ、その主なものについて、疫学、症状、治療法などを述べる。	仙波　純一	仙波　純一
7	摂食障害・人格障害	拒食症・過食症などの摂食障害の疫学、症状について、また境界性人格障害などの人格障害の概念、特徴について述べる。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	薬物アルコール依存	社会問題化しているアルコール依存症、覚醒剤依存症などの疫学、症状、治療について述べ、その推定されている機序にも言及する。	石丸　昌彦	石丸　昌彦
9	身体疾患による精神障害	中枢神経系疾患の部分症状として現れる精神症状について解説する。精神科領域で扱われることの多いてんかんについても概略を述べる。	仙波　純一	仙波　純一
10	老年期の精神障害	高齢化社会で問題となる老人性痴呆や老年期のうつ病をとりあげ、その疫学、類型、症状、治療について述べる。	石丸　昌彦	石丸　昌彦
11	児童青年期の精神障害	小児期に明らかとなる広汎性発達障害、学習障害、注意欠陥多動性障害などについて述べる。	市川　宏伸（東京都立梅ヶ丘病院副院長）	市川　宏伸（東京都立梅ヶ丘病院副院長）
12	精神科治療（1）	精神科治療薬の種類とその推定される作用機序について述べる。いくつかの精神科特殊療法にも言及する。	仙波　純一	仙波　純一
13	精神科治療（2）	精神科治療における心理・精神療法をとりあげ、その基本原則について述べる。いくつかの特殊精神療法にも言及する。	石丸　昌彦	石丸　昌彦
14	精神医学と法律	同意の得られない治療は精神保健福祉法に基づいて行われる。また刑事責任能力などについて司法上の問題が生じることもある。このようなときの精神医学と法の関わりを示す。	仙波　純一	仙波　純一
15	地域精神医療	精神障害者が地域に住み満ち足りた生活や活動を行えるために地域で行うべき精神医療や福祉について述べる。	同　上	同　上

＝経営システムⅠ（‘02）＝（R）

－企業の公的経営－

〔主任講師：　佐々木　弘（放送大学教授）〕
〔主任講師：　加護野　忠男（神戸大学大学院教授）〕
〔主任講師：　山田　幸三（上智大学教授）〕

全体のねらい

受講者が関心をもつテーマや修士論文で取り上げようとするテーマをより広い学習分野の中から選択できるよう「経営システムⅠ」は、講義内容を大きく、二つ――前半では私企業（民間企業）を対象とし、後半では公企業を対象とする――の部分から構成させるよう努力した。それぞれの分野の重要問題を簡潔に学習していこう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	環境の中で生きる企業	企業は経済社会という経営環境の中で活動する組織体であり、その環境とのさまざまなやり取りの巧拙が存続に影響を及ぼす。しかし、企業は環境に対して単に受動的に適応するだけでなく。自らの戦略的な活動によって発展・成長を遂げる。	加護野　忠男（神戸大学大学院教授） 山田　幸三（上智大学教授）	山田　幸三（上智大学教授）
2	経営戦略の内容と機能	経営戦略は、企業と環境とのかかわり方を将来的志向的に示す構想であり、能動的な活動によって経営環境に適応していくために不可欠な役割を果たす。ここでは、経営戦略の内容と機能について概観しておくことにしよう。	同上	同上
3	全社戦略	経営戦略は、組織の階層の違いを反映して事業戦略と全社戦略とに分けることができる。全社戦略は事業構造の戦略とも呼ばれ、企業全体に関する課題を広範で長期的な視点から分析して事業戦略の整合性を検討する。ここでは、全社戦略の内容と課題を説明する。	同上	同上
4	事業戦略	事業戦略は、競争と不可分の関係にあり、「誰に」「何を」「いかに」という3つの問題に答えて差別化を図る必要がある。しかし、製品やサービスのレベルではなく、事業システムという仕組みのレベルで競争相手との差別化を実現することが本質的な課題である。	同上	同上
5	事業システムの構築	事業システムでの競争優位は目立たないが、競争相手による模倣が難しく持続するという性質をもっている。ここでは、事業システム構築のための基本的な選択と事業システムの設計のための基本的な論点について考える。	同上	同上
6	情報化時代の事業システム	1990年代以降の競争では、品質に加えてスピードや俊敏性がキーワードとなっている。情報化の進展は、戦略の実現に必要な組織の俊敏性を高めるために重要な役割を果たす。情報とコンピュータネットワークの特性に見合った事業システム作りが求められている。	同上	同上
7	日本企業の戦略課題（1）	コーポーレート・ガバナンスは、企業の健全な発展を促すために、どのような制度や慣行をつくるべきかということを基本的な問題とする。ガバナンスの問題は、現代企業が全体として取り組むべき問題となっている。ここでは、最近の動向と問題にも言及する。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	日本企業の戦略課題（2）	最近の日本型経営に対する評価は、かなり厳しいものがある。日本企業の経営に改めるべきところは多いとはいえ、簡単に切り捨てて欧米のやり方を真似てうまくいくものではない。ここでは、経営戦略と人事制度について、これまでの特質を理解し、その強さと弱さを考える。	加護野　忠男 山田　幸三	山田　幸三
9	公企業とは何だろうか	公企業とは何だろうか。資本主義体制下においても、なぜ私企業だけて、すべてをやれないのか。公企業の存在理由や意義は何か。公企業は（私企業に比して）どのような経営原則に基づいて経営されているのか。	佐々木　弘 （放送大学教授）	佐々木　弘 （放送大学教授）
10	公企業と公益企業	公企業としばしば混同されるものに、公益企業という用語がある。そこで、公益企業とは何か。公企業との相違点はどこにあるのか。具体的にはどのような産業群にみられる企業をいうのか。できれば、近年の公益企業規制改革の動向にも触れてみたい。	同　上	同　上
11	公企業の経営形態（その1）	公企業とひとくちでいっても、実際には、公企業は様々な経営形態をまとって存在している。そこで、公企業の経営形態を類型化して示したうえで、その主要な形態のいつくかをとり出して、その特徴や課題を明らかにしていくことが必要となる。	同　上	同　上
12	公企業の経営形態（その2）	前章につづいて、ここでは、近年特に世間の広い関心を集めている「第三セクター」形態をとりあげ、その理論と実際、いくつかの問題点などを指摘したい。	同　上	同　上
13	公企業の経営効率化をいかに促すか（その1）	公企業の経営効率化をいかに促すか。物価安定政策会議や経済企画庁（現内閣府）での議論、さらには、欧米における動向等を参考にしつつ、公企業の経営効率化への方策をいくつかの視点から論じる。	同　上	同　上
14	公企業の経営効率化をいかに促すか（その2）	最近、PFI方式や独立行政法人制度をはじめ、上下分離論方式や多様な経営委託など、公的サービスの供給方式の多様化が注目されるようになった。このような流れの中で、公企業はどうあるべきかを考えてみよう。	同　上	同　上
15	公企業の経営多角化	私企業の場合と同様、公企業にあっても、経営資源を活用しながら、経営多角化が模索される。現行制度上、この問題はどのように取扱われるのか。いくつかの実際上のケースにもできるかぎり言及しながら、この問題がもつ意義や課題を明らかにする。	同　上	同　上

＝経営システムⅡ（‘０２）＝（Ｒ）

－ヒューマン・リソース・マネジメント－

〔主任講師：　神代　和欣（放送大学教授）〕
〔主任講師：　山口　浩一郎（放送大学教授）〕
〔主任講師：　八代　充史（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

従来の人事・労務管理論と異なり、この講義では、最近のミクロ経済学、とくにラジアー『人事と組織の経済学』に代表される労働経済学の見方を基礎とし、そのうえで日本の労働法体系のなかで人事・労務の実務者が最低限度の常識として知っておかなければならない法制度・規範・規制にもふれながら，企業の人材育成・活用の問題を，体系的に考えてみる。さらに、戦後50年の歴史のなかで形成されてきた、日本的な雇用システム・労使関係の長所と短所を吟味し、それらが21世紀の大競争時代にどのように修正されていくか、またいくべきかを、国際的な視点からも考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	ヒューマン・リソース・マネジメントの課題	HRMの起源、ミクロ経済学の発展、日本的経営の見直し、HRMの課題、所有権・経営権・参加権、労使関係と雇用関係	神代　和欣（放送大学教授）	神代　和欣（放送大学教授）
2	募集・採用と配置	採用の自由と公共政策、採用の戦略化、「期間の定めのない雇用」と有期雇用、HRフローと雇用ポートフオリオ、増加する中途採用、採用をめぐる労使紛争	同　上	同　上
3	就業規則と労働規律・勤労意欲	インセンテイブ・システムとその功罪、就業規則、モラルハザード問題、規律違反への制裁、欠勤率、テレワークと就業規律、労働条件の不利益変更、変更解約告知	同　上	同　上
4	職場組織と意思決定	日本の職場組織と意思決定、ミドル・アップ・ダウン型意思決定、キー・パーソンとしての職長、アメリカの職場組織と意思決定、自律的チームワーク、忘れられた職長、多様化と収斂化	柴田　裕通（横浜国立大学教授）	柴田　裕通（横浜国立大学教授）
5	技能と技能形成	海外の技能理論、決定論的モデルと社会的選択モデル、職人的知識・エラー対応技能、「知的熟練」論、技能と技能形成の課題	同　上	同　上
6	賃金・査定制度の変容	アメリカの賃金・査定制度、ブルーカラー、ホワイトカラー、日本の賃金・査定制度、組合員、非組合員・管理職クラス、最近の調査研究	同　上	同　上
7	労働時間と勤怠管理	勤怠管理、勤怠管理と労働時間、労働時間ということば、伝統的な時間制度、法定労働時間、労働時間の算定、時間外・休日労働、女子・年少者、弾力的な時間制度、変形労働時間制、裁量労働制、フレックスタイム、休憩・休日、年次有給休暇	山口浩一郎（放送大学教授）	山口浩一郎（放送大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	昇進管理と人事考課	昇進管理、昇進とは、昇進選抜と「トーナメント移動」、個別企業のキャリアー・ツリー、昇進選抜の国際比較、ファスト・トラックは存在するか、これからの専門職制度、人事考課、人事考課の対象とプロセス、昇進と人事考課に関する法律問題	八代　充史（慶應義塾大学教授）	八代　充史（慶應義塾大学教授）
9	配置転換と出向・転籍	配置・異動管理、仕事基準とヒト基準、企業内労働市場と「異動の力学」、配置転換にまつわる法律問題、出向・転籍、出向・転籍者途中と採用者、45 歳以上ホワイトカラーの受入実態	同　上	同　上
10	非正規労働者の活用	コンテインジェント・ワーカーとは、パートタイマーの管理の実態とその問題点、派遣労働者の管理の実態とその問題点、コンテインジェント・ワーカーの今後	同　上	同　上
11	集団的労使関係	民主的社会の労使関係、企業別組合の特色：その長所と問題点、マクロ経済環境の変化と団体交渉制度、大競争時代の賃金決定、団体交渉機能の低下、個別的労使関係	神代　和欣	神代　和欣
12	労働紛争とその調整	労働紛争の類型、利益紛争の構造、団体交渉制度、争議行為の保障、争議権の制限、ロックアウト、団体紛争の調整、権利紛争の解決、自力救済の禁止、裁判手続き、労働委員会の手続、個別紛争の処理	山口　浩一郎	山口　浩一郎
13	職場の安全・衛生と労働災害	災害補償、労災保険、法定外補償、安全衛生、管理体制の整備、防止・退避・救済措置、産業保健と産業医、安全衛生マネジメントシステム	同　上	同　上
14	付加給付	比重を増す付加給付、法定福利、法定外福利，カフェテリア方式、退職金制度、労働債務としての退職一時金、賃金債務と退職金、退職給与引当金、懲戒処分による減額・不支給、労働条件の不利益変更、年功を加味しない退職金制度	神代　和欣	神代　和欣
15	定年制と高齢者雇用	長寿社会における定年制、公的年金と定年制のギャップ，年金と高齢者の就労意欲、高齢者雇用問題の難しさ、景気に左右される高齢者雇用、ミスマッチ対策、高齢者雇用対策の大綱、悠々自適のすすめ、増加する早期退職、老後所得保障	同　上	同　上

＝経済政策Ⅰ（‘０２）＝（TV）

－現代政策分析－

〔主任講師：　林　敏彦（放送大学教授）〕

全体のねらい

政府の経済政策は、民間経済活動が円滑に行われるための制度的および経済的基盤を整え、市場制度を補完し、必要に応じて自ら市場に参加して、効率的で、公正で、よりよい資源配分の実現を目指すことを目標とする。この講義では、現代の経済政策が果たすべき役割について、理論的、実証的に検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	経済政策はなぜ必要か	政府が行う政策のうち、ひとびとの経済生活に直接影響するものを経済政策と呼ぶ。日本のような市場経済において、経済政策はなぜ必要なのだろうか。シカゴ学派の考え方と制度学派の考え方を比較検討してみよう。	林　敏彦（放送大学教授）	林　敏彦（放送大学教授）
2	社会の厚生	政策効果は、社会全体の厚生を基準にして判断されなければならない。社会的厚生は、市民主権の原則のもとに、効率性と公正さを追求することによって高まる。経済政策決定、実行過程への参加のあり方も重要な政策評価の対象となりうる。	同上	同上
3	カルドア＝ヒックス基準	政策がひとびとの全員一致で支持される場合には問題ないが、一般にある政策がとられれば、それによって新しく利益を受ける人と利益を失う人が現れる。利害得失を超えた政策判断はどのような基準に基づいて行えばよいのだろうか。	同上	同上
4	市場の成功と失敗	市場メカニズムによって最適な資源配分が実現されるというのはどういうことだろうか。市場はどのような場合に成功し、失敗するのだろうか。どのような財でも市場取引に委ねることで社会的最適が実現されるのだろうか。	同上	同上
5	外部効果と政府の役割	企業や消費者の経済活動が、契約当事者以外の第３者に影響を及ぼすことを外部効果という。外部効果の例としてはどのようなものがあり、外部効果が存在すれば市場が失敗すると言われるのはなぜだろう。	同上	同上
6	公共財	社会の構成員が同じ量だけ消費するしかないサービスは、公共財と呼ばれる。市場は公共財の最適供給に失敗するというのはどういう意味なのか。公共財のただ乗り問題とは何か。公共財は政府が供給すべきなのだろうか。	同上	同上
7	不確実性と情報	金融活動に限らず経済活動のほとんどは不確実性にさらされている。リスクと不確実性には民間の保険だけで対応が可能だろうか。情報が偏っている場合、市場はうまく機能するだろうか。何らかの政府の介入は必要だろうか。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	政府の失敗	外部効果、公共財、情報の偏在などがある時、市場は失敗すると言われる。では、それらを補正する政府は失敗しないのだろうか。投票のパラドックス、政府の活動に伴うエイジェンシー費用などについて見てみよう。	林　敏彦	林　敏彦
9	政策分析	政策の立案、策定、実行には膨大な情報と専門的知識が必要とされる。費用・便益分析、産業連関分析を紹介し、政策アイデアの市場のあり方、および民主主義と政策分析専門家との関係について考えてみよう。	同　上	同　上
10	競争政策	市場経済が円滑に機能し、技術の恩恵が消費者に還元されるためには、市場の競争環境が整備されていなければならない。独占禁止政策にはどのようなものがあり、競争政策は新たな技術進歩からどのようなチャレンジを受けているのだろうか。	同　上	同　上
11	産業政策	経済には絶えず新たな産業が興り、競争力を失った産業が消滅していく。産業構造の転換をアシストする産業政策は、どう運営され、どう変貌していこうとしているのだろうか。国有化と民営化、中小企業政策についても考える。	同　上	同　上
12	規制政策	民間経済活動に政府が介入する公的規制は、社会的規制あるいは経済的規制を目的として行われる。規制政策の役割と課題について、資源リサイクル問題、公益事業規制、インセンティブ規制などを例に考えてみよう。	同　上	同　上
13	地域経済政策	地方自治体も経済政策を担当している。その中から、国レベルとは異なる自治体の政策手段選択上の制約、地域間競争の激化、地域経済ビジョン政策、利用者による都市のガバナンスの問題などについて考えてみよう。	同　上	同　上
14	マクロ政策	景気、雇用、物価、国際収支など、マクロ経済を持続的安定成長の軌道に保つことも経済政策の重要な役割として認識されている。マクロ経済をコントロールするための政策手段とその効果について考えてみよう。	同　上	同　上
15	国際的課題	近年、マクロの政策協調、国際紛争と安全保障、地球温暖化・オゾン層破壊・種の多様性などのグローバルな環境問題等、国際的広がりをもつ政策課題の重要性が増している。世界政府なき国際公共政策は可能なのだろうか。	同　上	同　上

＝経済政策Ⅱ（‘０２）＝（Ｒ）

－ 財 政 と 社 会 保 障 －

〔主 任 講 師： 宮 島　 洋（早稲田大学特任教授）〕
〔主 任 講 師： 井堀　利宏（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

「経済政策Ⅱ」では、今日もっとも重要な政府（公共部門）の役割であり、その改革をめぐって論争の絶えない財政政策と社会保障を取り上げる。財政政策と社会保障の機能や問題点を総合的かつ的確に把握できるよう、第一部（第1-6回）に制度分析篇、第二部（第7-14）に理論分析篇を配置するとともに、まとめ（第15回）には、今日の主たる論争点と研究課題を具体的に提示した。

回	テ ー マ	内　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「財政制度と財政民主主義」	財政や社会保障といった政府の公共政策の基本は、行政府での立案と立法府での審議という過程を経て決定されるが、この過程には、国民主権の観点から、一般に財政民主主義と呼ばれる、憲法、財政法等による厳しい制度的制約がある。この財政制度の現状と問題点について、特に財政民主主義の理念と実態の乖離について、「政府の失敗」を中心に、経済および財政の観点から説明する。	宮 島　 洋（早稲田大学特任教授）	宮 島　 洋（早稲田大学特任教授）
2	「政府の範囲と役割」	財政の意思決定および執行の主体は政府または公共部門であり、この財政上の政府の範囲と機能を明確にすることは、財政民主主義の対象を特定するばかりでなく、財政の国際的・歴史的比較や経済分析の方法をも明確にするものである。その際、国により、時代により変動する「財政制度」ではなく、経済理論を基礎に構成され、国際標準となっている「国民経済計算」の考え方を重視する。	同　上	同　上
3	「予算・決算過程」	政府の公共政策の年度収入・支出計画が「予算」であるが、財政法等の定めに従って、予算は編成・決定・執行・決算という長い過程を経て完結する。この予算過程全体の推移と制度的な問題点、そして、支出（歳出）構造に関する制度的枠組みを論じつつ、1990年代の国の予算を具体的な事例に、予算過程の特徴を数量的に明らかにする。	同　上	同　上
4	「租 税 の 制 度」	租税体系および個別主要租税の制度を論じる際に前提となる三つのテーマを扱う。第一は経済循環に即した納税義務者と課税ベースのクロス分類に基づく主要租税の経済的位置づけ、第二は課税単位、付加価値等、主として課税ベースに関する諸問題の横断的な考察、そして、第三は経済のグローバル化にともなう国際的な課税調整の制度分析である。	同　上	同　上
5	「財政赤字と公債制度」	政府の財政収支および公債発行（長期借入金）に関する財政法の規定に着目し、財政赤字の意味と構造、いわゆる建設国債・特例国債（赤字国債）分類の意義と異同、国債の市中消化原則（中央銀行引受禁止原則）、公債オペ等の国債管理政策、公債償還（減債基金）等に関する論点を、財政制度・政策と金融政策の両面から分析する。	同　上	同　上
6	「社会保障制度」	社会保障制度は広い意味では財政制度の一環といってよいが、厳密には、一部の制度は財政制度から相対的に独立している極めて複雑な制度である。この社会保障の仕組みについて、財政制度との関連でその会計制度と資金移転構造を明確にするとともに、社会保障全体の給付・負担構成、社会保険の特徴、少子高齢化の影響等を主として制度面から論じる。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	「公共財の理論」	私的財とは異なる公共財の性質を説明するとともに、公共財の理論について包括的に議論する。まず、純粋公共財と準公共財の類似点・相違点を解説する。ついで、公共財の最適供給条件であるサムエルソンの公式を導出し、公共財の自発的供給メカニズムやただ乗りの問題を説明する。さらに、公共財の中立命題を解説する。	井堀　利宏（東京大学大学院教授）	井堀　利宏（東京大学大学院教授）
8	「公共選択の理論」	政府の失敗を重視する公共選択の基本的な考え方を説明する。投票行動を明示して政策決定のメカニズムを考察するとともに、政治家や有権者や利益団体の行動を導入して、財政政策に及ぼす影響を取り扱う。また、財政錯覚が財政運営に与える影響についても分析する。	同　上	同　上
9	「政府支出の理論」	政府支出を拡大する政策のマクロ経済に及ぼす効果について、いくつかの代表的なモデルを用いて、理論的に説明する。まず、ケインズ・モデルでの乗数効果を説明する。ついで、新古典派モデルでの乗数効果を説明する。また、政府支出と経済成長との関係について、経済成長モデルを用いてその長期的な効果を説明する。	同　上	同　上
10	「課税の理論」	労働所得、利子所得、消費に対する課税の効果を分析するとともに、ある一定の税収を確保するときに、もっとも望ましい課税のあり方について、最適課税論の視点から考察する。とくに、効率性と公平性の２つの基準を明示して、望ましい課税ベースと税率構造について説明する。	同　上	同　上
11	「公債の負担」	公債や社会保障が将来世代に与える負担について、代表的な議論を紹介する。また、公債と世代間移転政策や課税政策との相違点、類似点を考察する。さらに、公債や年金の負担が将来世代に転嫁されないという中立命題を紹介して、その後の理論的展開についても説明する。	同　上	同　上
12	「財政の運営」	均衡財政を維持すべきかあるいは財政赤字を容認すべきかという観点から、財政運営の考え方を説明する。また、財政赤字の維持可能性や財政破綻の問題を取り上げる。さらに、最適な財政赤字をどう理解すべきかについて、ケインズ的な立場や新古典派の立場などいくつかの視点で説明する。	同　上	同　上
13	「公共投資の理論」	ミクロの公共投資のあり方を考える際に最も重要な判断基準である、費用＝便益分析を説明する。また、マクロの公共投資の最適水準について、理論的に解説する。さらに、公共投資の割引率をどう設定すべきかを議論する。	同　上	同　上

回	テーマ	内　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	「社会保障の理論と財政」	政府が社会保障を行うの根拠、セイフティ・ネットの意義、社会保障の経済的な機能、社会保険財政における積立方式と賦課方式の差異、年金保険や医療保険の特徴、人口構成の変化や経済状況の変動が社会保障に及ぼす影響などについて、理論的に解説する。	井堀　利宏	井堀　利宏
15	「構造改革の課題」	今日、日本の財政および社会保障については、経済構造改革（規制の緩和等）、財政改革（財政の再建等）、社会保障改革（世代間公平の等）、地方分権の推進（機関委任事務の廃止等）の観点から、大きな構造改革が迫られている。それら改革の課題、方法および問題点を提示する。	同　上	同　上

＝地方自治政策Ｉ（‘０２）＝（TV）

日本の地方自治－その現実と課題－

〔主任講師：　阿部　齊（放送大学教授）〕
〔主任講師：　天川　晃（放送大学教授）〕
〔主任講師：　澤井　勝（奈良女子大学教授）〕

全体のねらい

地方自治は市民の日常生活に最も密着した公的領域である。しかも、従来の中央集権型の政治に代えて、地方分権型の政治が推進されている今日、地方自治の重要性は日を追って高まりつつある。この科目では、日本の地方自治の制度的特徴を明らかにした後、具体的な政策問題の検討を通して、参加型地域社会形成の可能性を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	明治国家と地方自治	明治国家の自治制度は1889年（明治23）に公布された大日本帝国憲法と前後して制定された市制町村制、府県制・郡制という法律で制度の骨格ができあがったとされる。これらの自治制度が形成された経過とその後の変化を辿りつつ、明治憲法下での地方制度の特徴を概括的に捉えることにしたい。	天川　晃（放送大学教授）	天川　晃（放送大学教授）
2	戦後改革と地方自治	敗戦とそれに続く占領下で進められた諸改革によって明治国家の地方行政システムは崩壊した。この経過をたどるとともに、新しく制定された日本国憲法と地方自治法の下で作られた地方自治制度はどのようなものなのかについて概観したい。	同　上	同　上
3	地方分権改革	80年代に入って、財政状況の悪化と共に行政改革が課題となってきた。1995年に地方分権推進委員会が設置され、機関委任事務の廃止を中核とする分権改革の提言を行い、2000年4月から新しい分権の制度が実施され始めた。この改革過程を見るとともに残された課題について検討する。	同　上	同　上
4	地方自治の統治構造一首長と議会	わが国の地方自治体は首長と議会の二元的代表制をとっている。二元的代表制における首長と議会の役割、首長と議会の関係、議会の構成と運営、地方行政組織の管理と運営など、自治体政府の構造と機能を明らかにする。	同　上	同　上
5	自治体の財政規模	地方自治体の主な財源は、地方税、地方交付税、国庫支出金、地方債である。ここでは自治体の主要な自主財源である地方税の制度的特徴を明らかにするとともに、地方交付税や国庫支出金の持つ問題点を検討する。	澤井　勝（奈良女子大学教授）	澤井　勝（奈良女子大学教授）
6	歳入の自治の可能性	自治体財政支出の構造とその変化を明らかにしながら、国の財政と自治体財政との相関関係を検討する。さらに、自治体財政に占める福祉財政の地位と動向、公共事業費など公共投資の効果と問題点などを分析する。	同　上	同　上
7	地方自治の政策過程	地方自治体における政策過程を課題の設定、選択肢の提示、政策の決定、執行、評価に整理しこれら相互の関係を明らかにする。具体的には、政策決定過程理論の状況を概観し、執行と評価過程に関するいくつかの問題をとりあげ、自治体の政策能力を高めるための方策を検討する。	天川　晃	天川　晃

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名(所属・職名)	放送担当講師名(所属・職名)
8	自治体財政の課題	今日の地方自治体は、その収支構造において危機的状況にあるところが少なくない。特に地方債の発行残高は急激に増加している。こうした地方自治体の財政危機の諸要因を分析するとともに、将来における打開の方策を探る。	澤井 勝	澤井 勝
9	都市計画と自治体の役割	都市計画を決定し施行する主体は地方自治体であるが、わが国の自治体には、都市計画が十分に機能せず、都市の無秩序な成長を許してきたところが少なくない。自治体の都市計画の現状と問題点を明らかにし、打開の道を探る。	阿部 齊（放送大学教授）	阿部 齊（放送大学教授）
10	自治体の福祉政策	自治体は、児童福祉、高齢者福祉、障害者福祉などの領域で重要な役割を果たしている。とくに、高齢化の進行によって、高齢者に対する介護サービスの充実は緊急の課題となった。自治体の福祉政策の現状と課題を探りたい。	同 上	同 上
11	自治体の女性政策	国のレベルでも地方のレベルでも、政治の分野には依然として著しい性別格差がある。自治体の首長や地方議会の議員をみても、女性の比率は著しく低い。性別格差の背景を探るとともに、女性施策の有効性を検証する。	同 上	同 上
12	自治体の危機管理	わが国では、地震、噴火、洪水などの自然災害が頻発しており、最近では、感染症の急激な伝染、原子炉の事故など新たな形態の災害も加わった。こうした非常事態に対する自治体の危機管理を分析し、問題点を明らかにする。	同 上	同 上
13	住民自治と住民参加	地方自治は団体自治と住民自治の妙面から成るとされる。地方分権改革で団体自治は充実したが、住民自治の徹底は課題の域を出ていない。住民投票の制度化、住民提案の採用、地方議会への住民参加などの可能性を検討する。	同 上	同 上
14	国際化と自治体外交	自治体は一定の地域の住民の住民による住民のための自治組織であるのに、その自治体が「外交」的な活動を行うのはなぜであろうか。ここでは、姉妹都市提携から経済・文化政策に至る自治体外交の歩みを追うとともに、自治体内部で在日外国人との共生を図る「内なる国際化」の現状と問題点を探る。さらに自治体国際協力が持つ新たな可能性についても考えてみたい。	天川 晃	天川 晃
15	地方自治の国際比較	日本の地方自治の特質を明らかにするためには、諸外国の地方自治との比較検討が必要である。比較の対象には、アジアやヨーロッパの諸国も含められるべきであろうが、紙数と時間の制約を考えて、アメリカとカナダに限定したい。	阿部 齊	阿部 齊

＝地方自治政策Ⅱ（‘０４）＝（Ｒ）

－自治体・住民・地域社会－

〔主任講師：　倉沢　進（放送大学教授）〕
〔主任講師：　小林　良二（東京都立大学教授）〕

全体のねらい

日本の地方自治は、明治以降の中央集権的政策のもとで、地方統治機構として機能してきたが、近年地方分権・住民自治など住民を主体とした自治的な地域社会運営をめざす、新しい動向が生まれてきた。従来の自治行政のからを破るさまざまな動きに注目しつつ、コミュニティ論に立脚した自治と地域社会の在り方を探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地域生活とコミュニティ	地域生活－地域性と共同性、伝統的地域社会とその解体、社会目標としてのコミュニティ。コミュニティ行政の展開。	倉沢　進（放送大学教授）	倉沢　進（放送大学教授）
2	日本の地域社会と自治体	日本の伝統的地域社会、都市化－伝統的地域社会の解体、自治制度の展開と町内会。	同上	同上
3	コミュニティの社会理論	コミュニティ論の二つの流れ、コミュニティ理論の系譜、コミュニティの社会理論。	同上	同上
4	まちづくりと市民	まちづくりと市民、まちづくり参加の変遷、市民によるまちづくり、地方分権時代のまちづくり。	斉藤　進（産能大学教授）	斉藤　進（産能大学教授）
5	まちづくりの仕組み	まちづくりとマスタープラン、市町村の総合計画、都市計画とマスタープラン、マスタープランづくりの今後。	同上	同上
6	まちづくりの手法	参加型まちづくりの取組みと背景、まちづくりワークショップ、まちづくりワークショップの進め方、まちづくりワークショップの成果と展望。	同上	同上
7	まちづくりと自治体行政	地方分権と自治体まちづくり、成熟都市型社会とまちづくり課題、協働型まちづくりと市民。	同上	同上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	地域、自治体と福祉	ケアの時代の福祉、介護サービスの担い手、ケアの時代における地域の役割。福祉国家の発展に伴って、自治体は住民に対してさまざまな社会サービスを、提供するようになった。自治体は各種の社会サービスをどのような仕組みによって提供してきたか、又今後それがどのように変化するかについて考える。	小林　良二（東京都立大学教授）	小林　良二（東京都立大学教授）
9	社会福祉サービスへの住民参加	社会福祉サービスの拡大とその背景、住民参加型の在宅福祉サービスの登場、参加型住民サービス活動と行政。	同　上	同　上
10	社会福祉計画とモニタリングへの参加	社会福祉における計画参加の基礎、住民の計画参加のための施策、市民によるモニタリング活動、計画参加と住民。	同　上	同　上
11	地域社会と住民の学習活動	地域社会と教育・学校、学習活動の場と社会教育施設、自治体の事業としての社会教育。	鈴木　眞理（東京大学助教授）	鈴木　眞理（東京大学助教授）
12	自治体の学習支援活動	地域社会における住民の学習機会・資源、学習活動としてのボランティア活動、自治体の自己変革と生涯学習支援。	同　上	同　上
13	社会的不平等と空間構造	社会的不平等と空間構造、社会的不平等の多元性、空間的不平等と階層的不平等。	倉沢　進	倉沢　進
14	自治体行政と住民	住民参加、町内会・自治会、町内会の行政補完とボランタリーアソシエーション。	同　上	同　上
15	自治体と社会調査	自治体にとっての社会調査、標準化調査の企画を実施、調査主体の問題。	同　上	同　上

＝芸術文化政策Ⅰ（‘０２）＝（TV）

－社会における人間と芸術－

〔主任講師：　徳丸　吉彦（放　送　大　学　教　授）〕
〔主任講師：　利光　　功（大分県立芸術文化短期大学長）〕

全体のねらい

芸術と人間の関係は社会によって大きく規定されている。芸術の保護・抑圧、芸術伝承の断絶と保証も、それぞれの社会がとっている政策によって大きく左右される。この講義は、社会における諸芸術と人間の関係を、過去・現在・将来にわたって、芸術文化政策の観点から多面的に考察するものである。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論、芸術文化とその政策	最初に芸術と芸術文化政策の意味について考察し，芸術が社会に対して働きかける作用を有することを明らかにする。この働きかけの反応の現れたものが芸術文化政策であり、その主要は内容を概観して、講義全体の導入を行う。	利光　功（大分県立芸術文化短期大学長）	利光　功（大分県立芸術文化短期大学長）
2	古代からの芸術理論に見られる芸術文化政策的要素	古代のギリシャ・中国以来の芸術の理論には、さまざまな形で文化政策への言及が見られる。とくに、アリストテレスの『政治学』・墨子の『非楽論』を出発点として、その後の理論から芸術文化政策に関する見方を抽出する。	徳丸　吉彦（放送大学教授）	徳丸　吉彦（放送大学教授）
3	近代社会における芸術文化政策	芸術と社会との関係で重要な意味をもつ制度を近代社会を中心に考える。パトロン制度、検閲、公演・出版の許可などの変遷を扱う。	同　上	同　上
4	20 世紀における全体主義的な芸術文化政策	旧ソヴィエト連邦やナチズム時代のドイツのような全体主義国家においては、国家の政治目的に合致する芸術文化を助成し、反対する芸術文化を抑制する政策がとられる。ここでは政治に翻弄され、ナチによって廃校に追いこまれたバウハウスの事例を取り上げる。	利光　功	利光　功
5	明治時代における美術政策	明治維新によって近代国家の仲間入りをした日本の場合は、明治政府の芸術文化政策が、今日まで影響を及ぼしている。ここでは、美術に焦点を合わせて、工芸振興や美術教育の施策を検討する。	同　上	同　上
6	明治時代における服飾文化政策	服飾も文化であり、芸術である。明治における頭髪や服飾に関する政策が現在まで日本に大きな影響を及ぼしていることは自明であろう。この問題を芸術文化政策という広い座標において考察する。	小池　三枝（お茶の水女子大学名誉教授）	小池　三枝（お茶の水女子大学名誉教授）
7	明治時代における音文化政策	音楽や音に関しても、明治は現在の日本に決定的な影響を与えている。西洋音楽の普及だけでなく、日本音楽もこの時代に大きな変質を経験している。こうしたことへの芸術文化政策の役割を再検討する。	徳丸　吉彦	徳丸　吉彦

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	芸術文化政策としての芸術教育	明治時代の芸術文化政策の影響がいまだに強く持続しているのが、芸術教育の領域である。音楽教育を例にして、現在の日本における音楽のあり方、音楽産業、楽器産業等と教育との関係を考察する。	徳丸　吉彦	徳丸　吉彦 田中　健次（茨城大学教授）
9	国を越えた芸術文化政策、多文化社会における芸術文化政策	芸術文化政策は一つの国や文化の中だけで完結するとは限らない。日本がヴェトナムを援助して、ヴェトナム宮廷音楽を活性化した作業は国を越えた政策の例である。また、ロサンゼルスを例に多文化社会における芸術文化政策を考える。	同上	徳丸　吉彦
10	少数民族に関する芸術文化政策	現代の産業化と国際化の傾向の中で、犠牲になりやすいのは、少数民族の芸術である。このための芸術文化政策はどうあるべきかを、ヴェトナム少数民族の伝統芸能を記録するための日本・ヴェトナムのプロジェクトを例に考える。	同上	徳丸　吉彦 山口　修（大阪大学名誉教授）
11	地域社会の芸術文化政策	国のレヴェルではなく、さまざまな規模の地域社会における芸術文化政策を考える。日本では宮崎県全体と宮崎県椎葉村の事例を、また、外国ではスウェーデンにおける民俗音楽の復活プロジェクトを例にして、この問題を考える。	同上	徳丸　吉彦
12	美術館の思想と実際	国立美術館と公立美術館の設立と運営は、それぞれ国と地方公共団体の芸術文化政策の一つの現れである。ここでは特にここ30年の間に数多く設立された公立美術館の抱える諸問題について検討する。	利光　功	利光　功
13	音楽博物館の思想と実際	音楽を聴き、楽器に触れることができ、また、音楽に関する調査ができる場所が音楽博物館である。日本（浜松）と外国（スウェーデンのストックホルム）の典型的な例を出発点にして、音楽情報と音楽博物館のあり方を考察する。	徳丸　吉彦	徳丸　吉彦
14	現在における芸術文化政策	日本の文化庁、国立劇場、県立劇場等における意思決定の方法と現実の運営を検討することにより、いままでの講義で提出した問題を整理する。	同上	徳丸　吉彦 海老澤　敏（新国立劇場副理事長）
15	新しい芸術文化政策を求めて	芸術文化政策の立案も含めて、政策の実行ないし実現には、芸術家・作品とそれを享受する人々をつなぐアート・マネージメントが重要な役割を果たす。アート・マネージメントの課題と、この分野の人材の育成について考える。	徳丸　吉彦 利光　功	徳丸　吉彦 利光　功

＝芸術文化政策Ⅱ（‘０２）＝（Ｒ）

－政策形成とマネージメント－

〔主任講師：　根木　昭（東京芸術大学教授）〕

全体のねらい

「芸術文化政策」は、今日重要な政策領域となっている「文化政策」の一部を構成する。本講義では、芸術文化を含む文化政策全般について、学問としての体系化の視点、アートマネージメントとの異同、その変遷、背景、形成過程、構造と枠組み、文化施設の設置・運営、まちづくりとの関連、今後の方向を中心に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	「文化政策学」確立の視点と「芸術文化政策」	今日、文化政策は、重要な政策領域の１つとなっており、政策科学の立場から、その学問としての体系化が急がれている。本章では、「文化政策学」確立の視点について考察するとともに、併せて、文化政策全体の中での「芸術文化政策」の位置づけを眺める。	根木　昭（東京芸術大学教授）	根木　昭（東京芸術大学教授）
2	アートマネージメントと文化政策	本章では、企業によるメセナ活動の実態と、これを背景に文化経済学、アートマネージメント論が提唱され、文化経済学会〈日本〉が設立された経緯を跡づける。また、アートマネージメントと文化政策の異同、相互の関連、将来の統合の可能性について考察する。	同　上	同　上
3	文化政策の変遷—「芸術文化」を中心として—	文化政策は、これまで多くの変遷を遂げてきた。本章では、「芸術文化政策」に焦点を当て、戦前を３期、戦後を４期に分け、その変遷の跡を概観する。特に、戦後の第４期（1990年以降）の動向を押さえることにより、芸術文化政策の今日的課題を把握する。	同　上	同　上
4	文化政策の背景	文化政策の背景を成すものとして、①文化の内容への不関与の原則、②「文教」政策への位置づけ、③日本文化の形成過程から導き出される方向性、④1980年代の時代状況、の４つが措定される。本章では、これらの意義について考察し、今後の立脚点とする。	同　上	同　上
5	文化政策の形成過程	本章では、政策形成の一般的なプロセスとともに、国（文化庁）の文化政策の形成過程を把握し、また、非常時（大震災）における文化政策の変質を兵庫県について眺める。さらに、文化庁の文化政策策定機関による諸提言の軌跡をたどり、政策対応の結果を分析する。	同　上	同　上
6	文化政策の構造（1）—「文化の振興と普及」の枠組みと芸術文化支援行政—	本章では、国（文化庁）の文化政策の対象領域の中核を占める「文化の振興と普及」に関わる全体的な枠組みについて、「文化の頂点の伸長」と「文化の裾野の拡大」に分けて概観するとともに、特に、「芸術文化支援」に関わる施策（＝支援行政）について、詳細な実態把握と考察を行う。	同　上	同　上
7	文化政策の構造（2）—関連領域の拡大と「自治体文化行政」—	本章では、近年顕著になっている他の政策領域（他省庁）の文化への接近と、文化庁の政策庁としての位置づけについて眺める。また、地方公共団体の文化政策について、いわゆる「自治体文化行政」の発展と停滞の跡を探り、今後の方向について考察する。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　　　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	文化政策の構造（3） —文化法制と文化予算—	本章では、文化法制の全体像と地方公共団体の文化振興条例を概観するとともに、「文化権」と「文化基本（振興）法」に関わる課題について考察する。また、国（文化庁）と地方公共団体の文化予算について、これを構造的に把握するとともに、諸外国との比較を行う。	根木　昭	根木　昭
9	文化施設の設置・運営 —設置者行政—	文化施設の設置・運営（＝設置者行政）は、文化政策の重要な柱の１つである。また、各種文化施設の中でも、劇場・ホールと博物館・美術館がその双璧を成している。本章では、国、地方公共団体を通ずる文化施設の全般的な概況と今後の在り方について把握する。	同　上	同　上
10	文化会館（１）	今日、公立の文化会館は、地域舞台芸術の創造の場として重要な地位を占めている。本章では、文化会館の意義、すなわちその性格と概念について把握するとともに、公民館との相違を眺めることにより、社会教育行政と文化行政との異同を概観する。	同　上	同　上
11	文化会館（２）	本章では、文化会館について、これまで提起されてきた問題点、特にソフト面の脆弱という指摘を踏まえ、貸館性から創造性への転換、地域舞台芸術創造の拠点としての役割を考察するとともに、文化会館をめぐる課題と経営的視点の必要性について考察する。	同　上	同　上
12	美術館（１）	美術館は、社会教育機関である博物館の一種であるが、文化政策の主要な対象となっている。本章では、社会教育施設・文化施設・研究施設としての博物館一般の性格を踏まえつつ、美術館の意義・機能について考察するとともに、美術館の概念と性格を把握する。	同　上	同　上
13	美術館（２）	本章では、社会教育政策・文化政策・学術政策の中における美術館の位置づけ、美術館政策と文化政策への収斂について明らかにするとともに、美術館一般に関わる政策と国立美術館（2001年４月から独立行政法人に移行した）を国が設置する意味について考察する。	同　上	同　上
14	まちづくりと文化政策	本章では、文化施設と都市景観との関連（ハード面の意味）について考察するとともに、まちづくりにおける文化政策の位置づけを、地方公共団体の文化振興指針の中に探る。また、滋賀県長浜市の「黒壁ガラススクエア」を例に、まちづくりの在り方の１つを眺める。	同　上	同　上
15	文化政策の今後の方向	これまでの総括として、文化政策の背景にある普遍化と個性化の方向を押さえ、特に芸術文化政策における新たな課題を確認するとともに、これらを踏まえて、文化政策の中核領域の一層の深化、関連領域への拡大と、「総合文化政策」確立の必要性を提示する。	同　上	同　上

＝福祉政策Ｉ（‘０２）＝（Ｒ）

－福祉社会の政策課題－

〔主任講師：　松村　祥子（放送大学教授）〕
〔主任講師：　大森　　彌（千葉大学教授）〕

全体のねらい

少子高齢化やサービス産業化の中で深刻化する人々の生活問題解決に有効な福祉政策をどのように築いていけばよいのだろうか。1990年代から進められている我が国の福祉改革では、社会福祉における「選別主義から普遍主義への転換」「福祉サービス供給主体の多様化」「地方分権化」そして「住民参加」などが推進されている。特に具体的な福祉政策を福祉計画で示し、目標値達成にむけての執行さらにそれを評価するといった展開が広がってきているが、立案や実施に必要な理論的、実践的知識や技術の不足から生じる問題も少なくない。福祉政策の新しい波の中での課題を多角的に検討することによって、福祉の供給者と利用者が連携して福祉社会を構築する道しるべとしたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	福祉政策の特質	福祉政策は人々のくらしに安心を保障する政策の束である。少子高齢化が進む中で、福祉政策の分野において、政府が、誰を対象に、どのような量と質の財とサービスを、誰の負担で、いかに供給するのかは、政府への信頼と正統性の基礎ともなる重要性をもっている。こうした観点に立ち、福祉政策の特質を捉える主要な視点を解説する。	大森　彌（千葉大学教授）	大森　彌（千葉大学教授）
2	福祉政策の新たな波（1）－進む社会保障構造改革－	1990年代からわが国で起こった福祉政策の変化を、「基礎構造改革」という観点から、主として制度改革に焦点を当て、その変化の経緯と内容を解説する。そこに、従来の福祉観、老人観、低所得者観の転換、措置制度から利用制度への転換、市町村中心主義への転換など、パラダイム転換ともいうべき大きな変化を見出すことができる。	同　上	大森　彌
3	福祉政策の新たな波（2）－福祉分野の分権改革－	地域住民とその代表機関の自己決定権を拡充する分権改革によって、これまで集権主義の強かった社会福祉の分野に、どのような変化が生じているのか、今次の分権改革の特質に触れつつ、従来の国などの関与がどのように縮減され、緩和されたかを解説し、社会福祉事業の市場化に言及する。	同　上	大森　彌 松村　祥子
4	児童家庭福祉政策（1）－健やかな子どもの成長促進－	児童福祉法には、「国及び地方公共団体は、児童の保護者とともに、児童を心身ともに健やかに育成する責任を負う」（第二条）と明記されている。今、我が国で成長する子どもたちの抱えるさまざまな問題をみると、この条文が空しく思えるほどである。しかし、国や地方公共団体が無策であるわけではなく、多くの施策が実施されている。ではなぜ子どもの生活改善ができないのであろうか。この章では、少子化の進む我が国での児童福祉改革の方向と内容を検討したい。	松村　祥子（放送大学教授）	松村　祥子
5	児童家庭福祉政策（2）－制度・実践・利用の乖離を克服するために－	児童家庭福祉政策と制度は政治と行政のイニシャティブによって作られるが、制度を運用していくためには、公私の組織とサービスの担い手が必要である。また、制度が公平に効果的に機能するためには、利用者の意識や態度も適切でなければならないだろう。政策（policy-政府の施策）が制度（institution-社会的な仕組み）になり、実践（practice-環境を変化させる活動）をへて生活改善の実を挙げる全過程（process）を検討することによってはじめて政策の有効性の検証ができる。　ここでは、児童家庭福祉分野でのトピックを取り上げて、真に児童家庭を支援するために必要な方策を検討してみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	高齢者福祉政策（1） －自律と連帯の高齢期生活保障の構築－	「21 世紀福祉ビジョン」で提案された総合的福祉ビジョンが最も具体的に展開されているのは、高齢者福祉政策の分野である。そこでは、新ゴールドプランと介護保険導入に見られるような新介護システムへの移行がはかられた。又、雇用や余暇政策からも自律と連帯の高齢期生活保障が目指されている。	松村　祥子	松村　祥子
7	高齢者福祉政策（2） －高齢者福祉の変化と高齢者生活－	国際的にみても、日本の歴史の中でも、平均的には決して低い生活水準にあるとはいえないのに、今日のわが国の老若男女の多くは高齢期への生活不安を強く感じている。こうした中で、高齢者福祉に携わる公私の機関の職員や研究者、教育者は漫然とした取り組みをするのではなく、長期的な目標意識と鋭い現実感覚を合わせた施策を推進しなければならないだろう。急速で高度な高齢化への日本の挑戦に世界の視線が集まっている。特に 21 世紀の国際社会の共通価値とされる「各世代の生活の質の推進」という文脈での高齢者福祉のあり方が追求されなければならないと思われる。	同　上	同　上
8	障害者福祉政策 －ノーマライゼーションの実現－	障害者基本法(1993 年)では、障害者福祉の基本理念として、すべての障害者の個人としての尊厳、人権保障、社会参加の重要性が唱えられている。「障害者プラン～ノーマライゼーション７ヶ年計画」等では地域における生活支援が展開されている。しかし、経済停滞下での障害者雇用の困難、保健と医療と福祉の統合化という名の下での保護の低下等、多様な政策課題が未解決である。さらに障害者とその家族の高齢化等への対応は緊急課題となっていること等をとり上げる。	同　上	同　上
9	生活保護政策 －セーフティネットとしての機能－	国民生活の最低限（ナショナルミニマム）を守る生活保護制度は他の諸制度を補足する安全網（セーフティネット）として重要な機能を果たしている。経済社会の変化を反映する保護率、保護水準、被保護世帯の類型等から現代の貧困の状況とそれへの対応策を示す。又、国の制度でありながら保護率の地域差が大きいこと、世帯単位の原則の中で個人単位の必要が高まっていること、資産調査のあり方が他の国と較べて厳しいこと、保護基準の設定が適切かどうかということ、そして、保護を受けられない多くの人がいること等、現行制度をめぐる論点から政策課題を明らかにしたい。	同　上	同　上
10	地域福祉政策 －住民と行政と民間活動のパートナーシップ－	人々の生活の拠点である地域社会は、社会福祉の利用と供給の交差点でもある。経済社会構造の変化の中で、家庭と職場の通過点となった地域社会を再編して新しい生活安定のネットワークを作らねばならない。　これまでバラバラにおこなわれてきた施設福祉と在宅福祉をつなぎ、公的福祉と民間福祉が協働する場としての地域のあり方と地域福祉政策の課題を検討したい。	同　上	大森　彌
11	危機管理政策 －災害対応の福祉政策－	天災や人災による危機的状況に際して、人命救助、救援物資の支給及び生活再建にむけての支援をするのは行政の大きな任務である。被害を最小にし、すみやかな生活再建を促進するためには、災害発生後の適切な対応だけでなく、通常体制の見直しも必要であろう。阪神・淡路大震災等の経験をふまえて国や地方自治体の危機管理体制がどの様に変化したのかを示す。また、今後に向けての課題を明らかにする。	秋山　智久 （大阪市立大学教授）	秋山　智久 （大阪市立大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	福祉の法律と政治	社会福祉政策を実施していく際に根拠とされる福祉法律には社会福祉の組織に関する法、社会福祉サービスに関する法、財政に関する法、権利救済に関する法等がある。福祉改革の中で、どの様な法制が作られているのか。その内容と意味について検討する。社会福祉政策を形成し、実施するプロセスでは政治が大きな影響力を持っている。行政等により立案された政策を論議決定するだけでなく、政党による政策立案も政治の中で行われている。福祉をめぐる政治の今日的状況と問題点を示す。	栃本　一三郎 （上智大学教授）	栃本　一三郎 （上智大学教授）
13	福祉サービスの供給体制	社会福祉の供給体制となる福祉行政と言えば、中央政府をピラミッドの頂点とする行政組織と公費の配分というとらえ方がわが国では一般的であった。しかし民営化や地方分権化の中で、公私の多様な福祉資源をどう組織化していくのかが、最大の課題となっている状況を示す。	同　上	同　上
14	福祉の資源 －財源と人材－	福祉政策に関する国、都道府県及び市町村の関係が変化する中で、それぞれの立場の責任と活動内容の再編が進んでいる。特に人口構造や経済環境の変化に対応するためにどのように社会福祉の財源や人材の質量を確保するかが大きな課題となっている。	松村　祥子	大森　彌 松村　祥子
15	福祉政策の目標と評価 －生活の豊かさ、地域の豊かさを目指して－	福祉政策の実施のためには、対象者のニーズの把握と十分な質量を備えたサービス供給システムの構築が不可欠である。ここでは、福祉政策の目標達成に向けて策定されている各分野の社会福祉計画と政策評価について検討する。さらに福祉の土壌を耕し豊かな生活と地域社会を築くための福祉の町づくりと福祉教育の方向も示したい。	大森　彌 松村　祥子	同　上

＝福祉政策Ⅱ（‘０２）＝（Ｒ）

－障害者施策の展開－

〔主任講師：　三ツ木　任一（放送大学名誉教授）〕
〔主任講師：　佐藤　久夫（日本社会事業大学教授）〕
〔主任講師：　大曽根　寛（放送大学教授）〕

全体のねらい

介護保険制度の実施、社会福祉基礎構造改革、成年後見制度の導入、地方分権の推進など、社会システムが大きく変化する中で、障害者施策もまた急激な変革を求められている。障害者施策の展開の過程、個々の施策課題における先進的な実践事例の検討を通して、今後の障害者施策の基本的な方向を探りたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	障害者施策の基本理念	人権の尊重、ノーマライゼーション、自立と社会参加の促進、当事者主体など、障害者施策の基本理念の本来の意味を、従来の考え方と対比して理解するとともに、私たち自身のパラダイム転換を図る。	三ツ木　任一（放送大学名誉教授）	三ツ木　任一（放送大学名誉教授）
2	障害者施策の法体系	わが国の障害者施策に関する法律は多岐にわたっている。それらを体系的に把握するとともに、近年の法改正の動向、主要な法律の内容、今後の課題などについて理解を深める。	大澤　隆（岩手県立大学教授）	大澤　隆（岩手県立大学教授）
3	障害者施策の行財政	障害者施策に関する行政機関、財政構造を、省庁統合、地方分権の推進の動向を踏まえて理解する。また、障害者施策における国、地方自治体の役割分担とそれを支える財政的基盤について検討する。	同　上	同　上
4	障害者施策の計画	国、地方自治体の障害者施策の計画について、その策定過程、主要な施策課題と実施結果などについて具体的な実例を通して理解し、今後の計画の策定、実施、評価のあり方を検討する。	三ツ木　任一	三ツ木　任一
5	障害の概念と障害者の実態	「WHO国際障害分類」の改訂の動向、障害の新たな概念を理解するとともに、障害の認定に関するさまざまな課題、障害者施策の対象としての障害者の実態について検討する。	佐藤　久夫（日本社会事業大学教授）	佐藤　久夫（日本社会事業大学教授）
6	障害児教育	障害児教育の動向と現状を概観しながら、障害児教育のさまざまな課題とその改革の方策を、国際的な動向を踏まえながら検討する。	石渡　和実（東洋英和女学院大学教授）	石渡　和実（東洋英和女学院大学教授）
7	就労支援	障害者雇用、福祉的就労の動向と現状を概観しながら、福祉的就労から雇用への統合をめざす先進的な実例を通して、新たな就労支援のあり方を検討する。	大曽根　寛（放送大学教授）	大曽根　寛（放送大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	地域生活支援	障害をもつ人たちの地域生活の動向と現状を概観しながら、地域生活に不可欠な住まい、所得、介助・見守り、地域活動、家族支援などの支援サービスのあり方を検討する。	中野　敏子（明治学院大学教授）	中野　敏子（明治学院大学教授）
9	障害者施設	障害者施策の中核として進展してきた障害者施設の動向と現状を概観しながら、抜本的な変革を要請されている入所施設、地域での新たな居住の場の整備、自立をめざすリハビリテーションサービスのあり方を検討する。	同上	同上
10	当事者活動	障害者施策を推進させてきた障害者運動の動向と現状を概観しながら、施策決定過程への参加・参画、当事者主体のサービス提供、行政、専門職との連携のあり方を検討する。	三ツ木　任一	三ツ木　任一
11	権利擁護	権利擁護を推進させてきた当事者、関係者の活動の動向、権利擁護の現状を理解するとともに、障害をもつ人たちの人権保障システムのあり方を検討する。	石渡　和実	石渡　和実
12	まちづくり	福祉のまちづくりの動向と現状を概観しながら、各地の先進的な実例を通して、まちづくり、バリアフリーの本来のあり方を検討する。	大曽根　寛	大曽根　寛
13	マンパワー	障害者施策に関わる多様な専門職の動向と現状を概観しながら理解するとともに、専門職、当事者、ボランティアとの効果的な連携のあり方を検討する。	同上	同上
14	国際交流	国連を中心とした国際交流の動向と現状を理解するとともに、国際的にみた障害者施策の重要課題とわが国の果たすべき役割を検討する。	佐藤　久夫	佐藤　久夫
15	障害者施策の展望	急激に変化する社会的状況において、障害者施策はどうあったらよいのか。これまでの学習を総括して、今後の障害者施策の基本的な方向を探る。	大曽根　寛	大曽根　寛

＝法システムⅠ（‘０２）＝（TV）

－比較法システム論－

〔主任講師：　六本　佳平（放送大学教授）〕

全体のねらい

伝統文化との相克のなかで独自の近代西洋型法システムを確立しつつある日本との比較において、近代西洋型を共有しつつも興味深い差異を示す英・米・独・仏・伊の特徴を現代の環境下で探る。また中・韓・ベトナム・タイ・マレーシアについて、近代化の政治的経緯、伝統文化、国際環境等を背景に、アジアにおける近代型法システムの形成過程を分析する。特に、裁判制度、法律家、国民の法意識の流動する現状を映像で活写する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	法システムを比較する	序論として、法システムの概念、そのあり方が政治・経済・社会・文化に対して及ぼす機能的意義と逆にそれらから受ける影響、および大きく近代化と呼ばれる社会変化における近代型法の意義などについて概説し、日本を中心として一方で西洋諸国、他方でアジア諸国を見る比較分析の視座を設定する。	六本　佳平（放送大学教授）	六本　佳平（放送大学教授）
2	日本の法システム（1）	諸外国の法システムとの比較の基準となる日本の法システムについて概説し、その中心的構成要素である裁判制度および法律家の制度、およびその実際の作用や法文化との関係について説明する。日本法の今日までの発展過程のこの観点からの特色を概説し、諸外国との比較分析の意義について述べる。	同　上	同　上
3	イギリスの法システム	（以下の 5 章では、西洋諸国の法システムの歴史的・文化的特色・現代の諸問題を、日本との比較を念頭におき、裁判制度・法律家・法役務のあり方を中心に、各国の特徴的な面に焦点を合わせて描き出す。）イギリス：コモン・ロー、法律家と自治の伝統、法曹一元制、バリスタ・ソリシタの一元化、裁判官の地位、国民の法利用とソリシタ制の特色、法律助言・扶助等	同　上	同　上
4	アメリカ合衆国の法システム	(同上) アメリカ：　連邦制、違憲審査制、陪審制、ロースクールの役割、弁護士の職域・業務形態の多様性、弁護士費用制等。	同　上	同　上
5	ドイツの法システム	(同上) ドイツ：　大陸型の法、国家試験と法曹養成制度、大陸型裁判官の地位、参審制、弁護士・企業弁護士・公証人、法定弁護士報酬制度、弁護士事務補助員制度等。	同　上	同　上
6	フランスの法システム	(同上) フランス：　法的人材養成制度、大学法学部の役割、陪審制、裁判官の特色、女性裁判官の進出、諸種の弁護士の統合、社会変化への対応、ヨーロッパ統合と法律家等。	同　上	同　上
7	イタリアの法システム	(同上) イタリア：　大学法学教育の伝統、法曹養成制度とその改革、裁判と政治、弁護士過剰問題、国民の法・裁判観等	六本　佳平 山口　浩一郎	六本　佳平 山口　浩一郎

回	テ　ー　マ	内　　　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	欧米の法システム ―討論１―	以上の諸国の法システムの観察を、欧米の西洋近代型法システムの間の個性の違いや、それらとの比較の観点から日本の特色を再度振り返る観点から、専門家ゲストを交えて討論形式で総括する。	六本　佳平	六本　佳平
9	韓国の法システム	（以下の６章では、各国の近代化の政治過程の特色、西洋法制度の影響ないし導入、伝統的秩序の特色、第二次大戦後の政治変動との関係等を背景とし、近代法システムの形成における独立の司法部、法律家の形成、伝統的国民意識や現代の国際化の影響を含めて、日本との比較の枠組みを論ずる。） 韓国：大統領制の意義、儒教文化の影響、日本の法制度の影響と相違点、司法制度改革、国際化の影響等	同　上	同　上
10	中国の法システム	(同上)　中国：法システムの制度的枠組み、社会主義的市場経済の発展における法の役割、法律家の創出、紛争処理過程の特色、国際取引における諸問題等。	同　上	同　上
11	タイ国の法システム	(同上)　タイ：　君主制民主主義の法システムの概観、大陸法系の法システムの下でのイギリス法制度の影響、法律家の制度、近年の司法制度の改革、伝統的紛争処理過程と民衆の法意識、経済の国際化の影響等	同　上	同　上
12	マレーシアおよびベトナムの法システム	(同上)　ベトナム：　現代ベトナム法システムの概観、伝統文化の影響、日本による法整備援助、法律家の創出、経済発展における法システムの役割等。 マレーシア：　イギリス法制度の影響、法学教育・法曹養成制度、民衆の法・裁判意識、国内サブカルチャの問題、経済の国際化の影響等	同　上	同　上
13	アジア諸国の法システム ―討論２―	(同上)　以上のアジア諸国の現代の法システムの観察を総括し、アジアにおける近代法システムの形成過程の特色や課題、また日本の法システムとの関係や比較について、専門家ゲストを交えて討論形式で論じる。	同　上	同　上
14	日本の法システム（2）	日本の法システムは、急激な社会変動の下で、司法制度改革を中心として近年大きく変化しつつある。この章では、法役務の形態に焦点を合わせて、新たな法と社会のあり方への模索の過程と課題を探る。	同　上	同　上
15	総括と展望	以上の全体を総括し、近代西洋型法システムとそのアジア地域での形成のさまざまなあり方、日本の法システムとの相互作用関係、経済発展や政治的民主主義・自由主義との機能的関係、将来の発展方向等について、専門家ゲストを交えて討論形式で論ずる。	同　上	同　上

＝法システムⅡ（‘０２）＝（Ｒ）

－市民運動と法－

〔主任講師：　山口　浩一郎（放送大学教授）〕

全体のねらい

近年、政府や企業とならんで、社会のいろんな面で重要な役割をはたすようになってきたものに市民団体の活動がある。このような活動は非営利組織（Nonprofit Organization. NPO）といわれている。この講義では、このような市民活動の諸相をとりあげ、多面的に考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	市民活動の概観	わが国では阪神大震災の際に注目されたが、市民活動（NPO）はいろんな形で存在している。第１回は、講義の導入として、市民活動の特徴、現状、他の組織（政府、企業）との関係などを概観する。	山口　浩一郎（放送大学教授）	山口　浩一郎（放送大学教授）
2	市民活動団体と法	1998 年、わが国では、市民活動団体の法人化をみとめる特定非営利活動促進法（NPO 法）が制定された。これにより、市民活動の組織化が以前より容易になった。第２回は、この法律の立法経緯と団体の法人化、管理運営等法律の内容を説明する。	同　上	同　上
3	市民活動団体のマネジメント	市民活動をおこなう団体も、団体である以上、組織としての管理運営が必要である。事業遂行、事業評価、成員管理、資金調達などの問題がある。第３回はこれらの点について考えてみる。	同　上	同　上
4	フィランソロピーとボランティア	市民活動の発展には、それを支える助成・支援団体とボランティアが必要である。企業や労働組合がおこなっている社会貢献活動も無視できない。第４回は、市民活動を支えたり、併行しておこなわれる活動をとりあげる。	同　上	同　上
5	環境の保全と保護	市民活動の１つの分野は環境保全とか自然保護である。ナショナル・トラストがよく知られているが、他にもリサイクル運動とか街づくり・村づくりなどがある。第５回はこれらの活動についてみてみる。	同　上	同　上
6	災害の予防と救援	わか国で市民活動が阪神大震災のときに注目されたように、災害時の救援・復興運動は市民活動の重要な分野である。外国では民間防衛という組織があり、災害救援とか地域の安全活動がおこなわれている。第６回はこれらの活動について考える。	同　上	同　上
7	教育と文化	現代社会では、教育の中心組織は公教育としての学校であるが、最近はフリースクールの教育、シンクタンクによる研究が登場している。文化や芸術の面でも、保存や創造等いろんな活動がみられる。第７回はこれらの活動について考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	社会福祉	政府のおこなう医療・福祉とならんで、これらの関連サービス分野で市民活動の存在は見落とせない。障害者の支援もそうである。社会福祉協議会などの活動も含め、第8回はこれらの点について考える。	山口　浩一郎	山口　浩一郎
9	消費者問題	消費者保護の市民活動は古くから存在した。最近は、その活動も欠陥商品から悪徳商法などに拡大されてきている。第9回は、被害者である消費者の救済を中心に、どのような活動がなされているかを考える。	同　上	同　上
10	人権と平等	21世紀の社会では、人権や平等が一層推進されるであろう。人権擁護や差別の撤廃も市民団体の活動分野である。市民オムブズパースンなどを含め、第10回はこれらの活動について考える。	同　上	同　上
11	国際活動	市民活動は国内だけでなく、国境なき医師団の活動のように国際レベルでもおこなわれている。第11回は、技術援助、環境保護、国際福祉、文化交流などから適切な事例をとりあげ、国際活動を概観する。	同　上	同　上
12	食品の安全	食品の安全は21世紀の大きな課題である。遺伝子組みかえ食品や収穫後使用農薬など人体に深刻な影響を与える、第12回は、実際にこの分野での活動にたずさわってきた方から話をうかがい、その経験を学ぶ。	神山　美智子（弁護士）	神山　美智子（弁護士）
13	市民相談	現代社会では、社会生活をしていくうえでいろんな知識が必要になる。税金、福祉、訴訟等問題をかかえて困っている人は多い。このニーズに答えるのが市民相談である。第13回は、この分野にくわしい方から話をうかがう。	六本　佳平（放送大学教授）	六本　佳平（放送大学教授）
14	市民活動の展望	これまでの講義で、市民活動が現代社会で重要な存在に成長してきたことがわかった。そこで、第14回は外国の状況を考察して、今後のわが国の市民活動の将来を展望する。	山口　浩一郎	山口　浩一郎
15	市民活動の課題	市民活動が今後十分発展していくには、どのような課題が解決されなければならないか。第15回は、講義のしめくくりとして、この問題を法制、人的資源、情報、財政などの点から考えてみる。	同　上	同　上

＝法システムⅢ（‘０２）＝（Ｒ）

－　情　報　法　－

〔主任講師：　宇賀　克也（東京大学大学院教授）〕
〔主任講師：　長谷部　恭男（東京大学大学院教授）〕

全体のねらい

情報に関する法律問題について、憲法、行政法、民法、知的財産法、刑法の観点から多角的に分析するとともに、情報倫理の問題、図書館の機能についても解説する。情報のデジタル化、ネットワーク化に伴う問題に比重を置くが、基礎的な法原則についても十分な理解が得られるように配慮する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報法の概要	情報法の講義においては、憲法、行政法、民法、知的財産法、刑法という法律学の視点で情報に関する諸問題を取り扱うとともに、情報倫理の問題や図書館の機能についても解説する。初回は、その全体の概要を説明する。	宇賀　克也（東京大学大学院教授） 長谷部恭男（東京大学大学院教授） 他分担協力者	全　員
2	憲法上諸原則	表現の自由、プライバシー、知る権利、財産権など、情報法に関わる憲法原理について概略を説明し、あわせて異なる憲法原理が対立する可能性について触れる。	長谷部　恭男	長谷部　恭男（東京大学大学院教授）
3	情報倫理	インターネットなどのコンピュータネットワーク社会の秩序を保つには、従来の法律による規制だけでなく、情報倫理と呼ばれる規範が必要となっている。この情報倫理について、具体的な問題を通して、さまざまな側面から考えていく。	山口　和紀（東京大学教授）	山口　和紀（東京大学教授）
4	放送制度	放送の規律根拠、番組編集準則、集中排除措置、ＮＨＫと民間放送の二本立て体制など、放送制度の基本原則について説明し、多メディア化・多チャンネル化に伴うこれらの原則の変容について触れる。	長谷部　恭男	長谷部　恭男
5	通信制度	電気通信事業は、20世紀最後の30年間に、国家による独占（あるいは国家によって保護された独占）事業から、その民営化および競争の導入へと大きな変革を遂げた。この章では、通信事業に関わる法制度を概観した後、通信事業の特質を検討し、さらに通信の秘密について説明する。	同　上	同　上
6	情報公開	政府情報の原則公開の理念に立脚して、国民・住民等に情報開示請求権を付与する情報公開法・情報公開条例の基本的構造がどうなっているのか、電磁的記録の情報公開についてはどのような問題があるのかを解説する。	宇賀　克也	宇賀　克也（東京大学大学院教授）
7	個人情報保護	個人情報保護の法制度が備えるべき基本的要素は何かをOECD８原則、EU指令等を参照しつつ検討し、わが国の個人情報保護に関する法制度の特徴を説明する。あわせて、行政情報化に伴う個人情報保護の課題につき述べる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	行政情報化	行政情報化推進基本計画に基づく国の行政情報化の推進状況と今後の課題、とりわけ、申請・届出という行政手続のオンライン化に関する法律問題を検討する。	宇賀　克也	宇賀　克也
9	データベースのサービスとコンテンツ	文献や図書については多くのデータベースサービスが、ネットワークを介して利用者に提供される。このようなサービスの基本概念と仕組みについて説明する。 (1)データの分類 (1.1) 1次情報と2次情報 (1.2) ハイパーテキスト (1.3) テキストとマルチメディア (2)データベース・コンテンツの作成法 (3)情報検索システムの仕組み (4)統合メディア環境を目指して	中川　裕志 （東京大学大学院教授）	中川　裕志 （東京大学大学院教授）
10	電子商取引（その1）	取引に関する情報がデジタル化・ネットワーク化されることで、紙を前提として行われてきた取引に大きな変化が生ずる。これが電子商取引である。では、いったいどのような電子商取引が発展しようとしているのだろうか。また、そこに含まれる法的問題はどのようなものだろうか。これらについて、国際的な視点を含めて考えたい。	内田　貴 （東京大学大学院教授）	内田　貴 （東京大学大学院教授）
11	電子商取引（その2）	インターネットを通した電子商取引においては、相手が誰であるか、また送られてきた情報が改ざんされていないかを確かめることが難しい。このセキュリティ上の問題を解決するために考案された電子署名と、それをめぐる法制度を中心に、電子商取引についての法律問題をより掘り下げて検討する。	同　上	同　上
12	知的財産法（その1）	特許法、著作権法、不正競争防止法などの知的財産法は、情報の財産的価値を保護するための法として捉えることができる。この観点から、知的財産法が、どのような目的で、いかに設計されているかということを概観する。	井上由里子 （筑波大学助教授）	井上由里子 （筑波大学助教授）
13	知的財産法（その2）	デジタル化、ネットワーク化の進展に伴って、知的財産法に関する新たな問題が次々に生じている。個々の論点につき、国際的動向も踏まえて検討する。	同　上	同　上
14	情報の刑法的保護	情報を刑法でどのように保護するかについては、国家機密、財産的情報、個人情報など、その性質に応じた議論が必要である。現行法における情報の刑法的保護を概観した後、将来のあるべき姿について検討することにしたい。	佐伯　仁志 （東京大学大学院教授）	佐伯　仁志 （東京大学大学院教授）
15	インターネットと刑法	インターネット上の様々な不正行為に対して、既存の刑罰法規をどこまで適用することができるのか、適用できない場合にどのような刑罰法規が新たに設けられたのか、今後設けられるべきなのか、といった点を検討することにしたい。	同　上	同　上

＝技術社会関係論（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：森　谷　正　規（放送大学教授）〕

全体のねらい

日本は技術を大きく進ませ産業を発展させて、とても豊になったようであるが、環境問題、廃棄物処理、交通渋滞・事故、防災の不備、医療・福祉・教育の後れなどの社会問題が山積している。それは「社会」に向けた技術が進まないからであり、なぜ進まないのか、どうすれば進めることができるのか、技術と社会の関係を深く考えて、よりよい技術のありかたを考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	Ｉ技術社会関係のあり方 技術進展の変革	技術は「産業」「家庭」「社会」に向けられるが、「社会」に向ける技術が後れている。したがってさまざまな社会問題が激化しているが、なぜこうした技術が後れているのか、これまでの技術進展の全体を見通して、問題点を挙げ、変革の必要性を指摘する。	森谷　正規（放送大学教授）	森谷　正規（放送大学教授）
2	技術社会関係の基礎	技術は一般に市場をもとにした経済原理によって進展していくが、「社会技術」は経済原理が効きにくいものが多い。その「社会技術」をどのようにすれば進ませることができるのか、技術と社会の関係の基礎をしっかりと把握しておく。	同　上	同　上
3	技術に果たす政治の役割	「社会」において強いニーズがある技術がいっこうに進展しない場合、政治がそのニーズを正しく把握して、技術が進むような何らかの「仕組み」を作り出す必要がある。現代は技術に果たす政治の役割が大きくなっているのであり、それについて深く考える	同　上	同　上
4	「社会技術」を進める制度	「社会技術」を進めるために政治が作る「仕組み」の主なものは制度である。それには、各種の規制による採用の義務づけ、経済的な不利を補う補助金、税の優遇措置などがある。その財源として環境税などが必要になる。	同　上	同　上
5	「社会技術」を進める組織	「社会技術」を進める組織は、実施主体としては企業が主であるが、その企業をより積極的に組み込むためにＰＦＩ（プライベート・ファイナンス・イニアシャティブ）を活用する。また、企業と生活者の間で調整をするＮＰＯ、ＮＧＯも大きな役割を果たすことが期待される。	同　上	同　上
6	Ⅱ各分野毎の課題と対応 エネルギー・環境	環境破壊が地球規模に広がって深刻になっているが、その主たる原因はエネルギー（化石燃料）の大量消費である。これからエネルギーの使用をいかに抑え、新しいエネルギー供給によって環境破壊を防ぐかが大きな課題である。	同　上	同　上
7	廃棄物処理	廃棄物は、都市ゴミ、家電・自動車など大型ゴミ、各種の産業廃棄物など非常に多様なものがあり、それぞれに対応しなければならない。いかに廃棄の量を減らすか、どのように処理しサイクルするのか、それをいかに進めるのかの方策を示す。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	都市内交通	都市では、鉄道ははなはだしく混雑しているが、混雑緩和にいっこうに進まず、道路交通は、渋滞、事故がいっそう深刻になっている。なぜ抜本的な対策が立てられないのか、どのようにすれば改善に向かうのか、その方向を明らかにする。	森谷　正規	森谷　正規
9	都市問題	日本の都市は、景観、アメニティが欠如しており、ヒートアイランド現象が問題化している。また、地震への防災不備である。これらの重大な都市問題がなぜ解決に向かわないのか、いかに対応できるのかを考える。	同　上	同　上
10	医療・福祉・教育	医療・社会・福祉にも問題が多々あるが、その解決には、主としてＩＴ（情報技術）が利用できるはずである。ＩＴが急速に進む時代であるにもかかわらず、なぜ、これらの分野では利用が進まないのか、いかにして進めていくかを考える。	同　上	同　上
11	課題と対応のまとめ	五つの分野の課題と対応を示してきたが、それに関して挙げた多くの技術について、いかに進めるべきかの視点からいくつかのタイプに分けてまとめる。政府、自治体が進めるべきもの、事業体が力を注ぐべきもの、生活者の意識にかかわるものなどがある。	同　上	同　上
12	Ⅲ良好な技術社会関係を目指して 企業が果たす役割	「社会技術」を進めていくには、開発者として、またサービス提供者としての企業が果たす役割が大きく、各企業に自主的な努力が求められる。その具体的な行動として現れているグリーン調達、環境会計、ゼロエミッションなどについて、その状況を明らかにする。	同　上	同　上
13	市民が持つべき意識	さまざまな社会問題に対して、市民は被害者であるばかりではなく、問題を生じる当事者の一人である場合も多い。そうした社会問題の中での市民の行動をとらえて、問題解決のためには各人がいかなる振る舞いをすべきか、その意識のあり方について考える。	同　上	同　上
14	国際社会に向けて	急速に発展しているアジア諸国において、社会問題はこれから激化していく。温室効果ガスの削減、廃棄物リサイクル、交通渋滞・事故の緩和などの諸問題について、日本が寄与できるものは大きい。海外に向ける日本の技術の有力な発展方向である。	同　上	同　上
15	望ましい技術の進展	21世紀において技術が進んでいく方向を挙げて、その中での「社会技術」の位置付けを明確にして、それが最も重要な将来技術であることを明らかにする。その上で、全体として望ましい技術進展のあり方を示す。	同　上	同　上

＝環境マネジメント（‘０２）＝（TV）

－環境問題と企業・政府・消費者の役割－

〔主 任 講 師：　山口　光恒（慶應義塾大学教授）〕

全体のねらい

環境問題の対象が、従来の公害問題から、地球温暖化・オゾン層破壊などの地球規模の環境問題に拡大している。これに伴い企業、消費者、政府などの役割に大きな変化がみられる。本講座ではこれら当事者の新たな役割を探ると共に、地球温暖化、廃棄物問題、環境保護と自由貿易の両立については特に章を設けて検討する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	地球環境問題とは	はじめに、公害問題との対比で地球環境問題の特徴を述べる中で、持続可能な発展（sustainable development）につき説明する。次いで地球環境問題の原因と本質を探り、政府、企業、消費者等の役割に簡単に触れる	山口　光恒（慶應義塾大学教授）	山口　光恒（慶應義塾大学教授）
2	地球環境問題と企業	企業が変わらねば環境問題は解決しない。企業を動かす主体である政府、消費者・NGO、企業、自治体、金融機関、投資家等と企業の関係を考える。次に、企業を取り巻く世界の情勢及び日本企業の対応を概観し、企業経営と環境問題の関わりに触れる。	同　上	同　上
3	ISO環境管理システム	国際標準化機構（ISO）での環境管理標準化の経緯を振り返り、このうち特に第三者認証の対象でもあるISO14001環境管理システム制定を巡る国際会議での日米欧の立場を解説する。その上で、14001のポイントと日本企業の対応を海外の事例も含めて紹介し、認証取得の意義について考察する。	同　上	同　上
4	製品面での環境配慮（LCA）	製品面での環境配慮の中核となるのは、製品の製造・使用・廃棄のライフサイクル全体を通した環境への影響評価（LCA）である。ISOのLCA規格の内容を説明し、オランダで研究が進められているエコ・インディケーターを紹介し、その後日本の状況を概観する。それと並んでLCA手法による製品比較広告の困難性も検証する。	同　上	同　上
5	環境問題への経済学による診断と処方箋	環境政策の目標は、環境問題をどう診断するかに依存する。経済学による環境問題の診断とそこから出てくる処方箋について論じる。経済学による診断とは「外部負経済」という捉え方であり、そこから出てくる環境政策の目標は効率性の追求となる。また、代表的な処方箋は課税による外部負経済の内部化である。	岡　敏弘（福井県立大学教授）	岡　敏弘（福井県立大学教授）
6	環境政策の諸手法	外部負経済の内部化という観点から、環境政策の諸手法を体系化する。諸手法は、課税、政府規制、賠償と責任にくくられる。ここでは特に、政府規制と賠償・責任に焦点を当てて、それらが外部負経済たる環境汚染を制御するメカニズムを解明する。	同　上	同　上
7	いわゆる経済的手法	環境政策の手段のうち、近年注目を集めている「経済的手法」の理論上の意義と現実とについて述べる。経済的手法とは課税と排出権取引である。課税は5でも述べたが、近年注目されている形態は「ボーモル=オーツ税」と言われているものである。補助金政策についても論じる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	政府規制と費用便益分析、経済と倫理	合理的な政府規制のための手法としての費用便益分析の理論と限界について論じる。その限界から出てくる費用効果分析の意義についても述べる。また、経済的効率性と、衡平や正義の概念との関係を論じ、その中に、環境政策をめぐる諸論点を位置づける。	岡　敏弘	岡　敏弘
9	消費者、NGO の役割	消費者は企業行動を変える有力なアクターである。欧米を中心にグリーンコンシューマーの動きを探る。消費者は住民でもある。日本の廃棄物処分場建設にみるごとく環境保護面での住民の役割も大きい。NGO（非政府組織）は政策提言能力を持ち、実際の環境政策に影響を与えている。日米欧の NGO の実態に迫る。	山口　光恒	山口　光恒
10	地球温暖化（IPCC 第３次報告）	1990 年の IPCC（気候変動に関する政府間組織）第１次報告は気候変動枠組み条約締結に、95 年の第２次報告は京都議定書採択に大きな役割を果たした。講義では 2001 年の第３次報告を中心に、温室効果ガス排出見込みとその影響、それに対する適応策と防止軽減策等につき解説する。	同上	同上
11	地球温暖化（気候変動枠組み条約と京都議定書）	1994 年発効の気候変動枠組み条約の背景と内容、基本理念を解説し、問題点を探る。次いで 1997 年に採択され、先進諸国に初めて数量目標を課した京都議定書の内容と、ここで新たに導入された排出権取引等の「京都メカニズム」等について検討し、京都議定書全体の評価を行う。	同上	同上
12	地球温暖化（議定書の論点と国内対策）	EU、英・独・仏・伊各国及び日本の国内政策の比較検討を行う。この中でドイツと日本の産業界による自主協定の比較も行う。日本については経済産学省や環境省の委員会による目標達成シナリオについて検討を加える。次いでアメリカの京都議定書離脱について論じ、科学と民主主義の矛盾をつく。	同上	同上
13	廃棄物問題（拡大生産者責任その１）	廃棄物政策の主流になりつつある拡大生産者責任（EPR）の内容を説明し、2001 年発刊の OECD ガイダンスマニュアルの内容と問題点を詳細に論じる。この中で日本において誤解が多い処理費用「負担」問題と処理費用先払い・後払い問題の関係についても論じる。	同上	同上
14	廃棄物問題（拡大生産者責任その２）	拡大生産者責任の日本への適用につき容器包装リサイクル法、家電リサイクル法、資源有効利用促進法、次いで自動車リサイクルを例に詳細に論じる。この中で容器包装リサイクル法については費用便益分析に触れ、家電リサイクル法については EU との比較を行う。最後に従来の廃棄物政策で抜けていた点は何かを指摘する。	同上	同上
15	自由貿易と環境保護	環境政策が自由貿易の阻害要因となるケースが出ている。環境条約非加盟国に対する貿易制裁措置と自由貿易の衝突がその典型である。この他日本の温暖化政策やＥＵの廃電気電子機器指令案を巡り、環境規制が結果として貿易障害となる具体的事件が発生している。環境と貿易の両立をはかる方策につき検討する。　環境政策が自由貿易の阻害要因となるケースが出ている。環境条約非加盟国に対する貿易制裁措置と自由貿易の衝突がその典型である。この他日本の温暖化政策やＥＵの廃電気電子機器指令案を巡り、環境規制が結果として貿易障害となる具体的事件が発生している。環境と貿易の両立をはかる方策につき検討する。	同上	同上

＝環境工学（‘０３）＝（TV）

〔主任講師：　鈴木　基之（放送大学教授）〕

全体のねらい

環境工学は、環境問題の解決手法開発の学問である。環境問題そのものは、過去半世紀の間に大きく変化し、従ってその問題の解決のための哲学も変化している。工学は単なる個別の技術開発ではなく、将来ビジョンに基づく統合的なシステム確立を念頭において、そのために科学技術を総動員することが求められる。地球上の限られた資源の量、限られた自然環境の恩恵という制限の中で、ますます人間活動が増大していくことが予想されている現在、人類がの活動を持続していくために何が必要とされるのか、何が可能なのかが今問われており、この答えを見出すための「考え方」を学ぶことが重要である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	環境問題の発生	過去50年位の間人間活動の拡大・活性化によってそれを取り巻く自然環境との間に相克が生じてきた。すなわち、人間活動による環境の劣化が生じ、これが人間の生存そのものに制約を与えることとなった。環境問題の発生、変化を概括し、その解決のために工学がどのようにかかわっていくことになるのかを考えてみよう。	鈴木　基之（放送大学教授）	鈴木　基之（放送大学教授）
2	物質収支と速度論	生産活動、人間活動から環境に影響を与える物質はどのように派生するのか、環境中に流出した物質はどのような挙動をとるのかなどを定量的に理解するうえで基本となる物質収支の考え方、変化の速度論などについて基本的な考え方を概説する。特に窒素の環境を例にとって色々な形の変化を見てみよう。	同　上	同　上
3	有害物質対策・生活環境保全・自然環境保全	環境変化の影響は色々な面から考察される必要がある。人間活動から派生する物質が及ぼす人体健康への直接的な影響、自然生態系への影響等様々な形の悪影響の可能性（リスク）をどのように考え、評価するのかを考えてみよう。	同　上	鈴木　基之 ゲスト 中西　準子（横浜大学教授）
4	処理技術概論（１）上水処理	水環境の劣化に伴い安全な飲料水確保のために種々の技術が用いられる。色々な飲料水の問題を概説するとともに、我が国の飲料水処理において生じている水源の劣化、原水の水質汚濁の問題に対応するための水処理技術に関する工学の基礎を解説し、沖縄の北谷浄水場を例として新しい処理法を紹介する。	同　上	鈴木　基之 ゲスト 真柄　泰基（北海道大学教授）
5	処理技術概論（２）排水の処理	人間活動から派生する排水を環境中に排出するためには十分な処理をする必要があるが、特に水域を健全に守るために、滅菌技術の適用も重要である。有害な細菌、ウィルス、原虫等に対応する処理技術の中で、新しい可能性を有する手法として、紫外線処理についての検討を示す。	同　上	鈴木　基之 ゲスト 大垣　真一郎（東京大学大学院工学系研究科教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	処理技術概論（3）排出ガスの浄化	大気を通じて人体、生態系に影響を与える有害物質の存在も重要である。近年重要となっている室内空気環境の問題として、新しい建材などが原因となって生じている室内空気汚染（シックハウス）に対する工学的な解析等の例を紹介し、この問題への対応を考えてみよう。	鈴木　基之	鈴木　基之 ゲスト 村上　周三 （慶応大学教授）
7	処理技術概論（4）固体廃棄物の取り扱い	活発化する人間活動から発生する固体廃棄物は、その処分場の不足や、投棄された廃棄物が生む環境破壊など多面にわたる問題を生じている。廃棄物とされるものであっても有価物質は多く、その例として生物系の廃棄物に関する資源化の状況と今後の方向を考えよう。	同上	鈴木　基之 ゲスト 迫田　章義 （東京大学生産技術研究所教授）
8	システム的考え方の重要性-統合的な考え方	環境問題は多くの個別の問題として考えられがちであるが、実はその多くの事柄は色々なルートを通じてお互いに関連している。廃棄物問題の解決にも、単に人間活動からの廃棄される物質の問題ではなく、生産プロセスも含んだ地域における総合的物質循環の考え方が必要になる。このようなシステムにおける物流に対する取り組みを紹介する。	同上	鈴木　基之 ゲスト 藤江　幸一 （豊橋科学技術大学教授）
9	資源化手法	廃棄物を最小にすることは最終的には資源の有効利用を図ることにつながる。このためには資源生産性という概念など、色々な新しい考え方が必要となる。世界の資源の利用状況を概観し循環型社会を構成していくための技術的方策、社会的方策などについて考えてみよう。	同上	鈴木　基之 ゲスト 山本　良一 （東京大学国際産学協同研究ｾﾝﾀｰ長）
10	地域での循環型社会の形成	循環型社会を構築していくためには自治体、地域、国など種々の単位での検討が必要であろう。このような方向での取り組みの例として屋久島における研究プロジェクトの取り組みにおいて物質循環を検討している例をみてみよう。またカルンボーにおける工業ネットワークの例も紹介される。	同上	鈴木　基之 ゲスト 藤田　晋輔 （鹿児島大学教授）
11	環境のモデル化とモデルの効用	環境という大きなスケールを持ち、種々の単位プロセスが複雑に絡み合った対象の将来の変化を予見するには、実験などという手法は通常取りえず、数理モデルを構築することにより予測をすることになる。環境のモデル化とはどういうことか、どのようなところに有効性があり、問題があるのかを考えてみることにしよう。	同上	鈴木　基之 ゲスト 松岡　譲 （京都大学教授）
12	水循環と地域水資源	地球上の水は海域には大量に存在するがこれは塩水であり、太陽エネルギーを受けて蒸発し、降水となって地上に戻ってくるわずかの水が淡水資源として人間活動、陸上生態系を支えている。食料生産もその持続性は水資源にかかっている。世界的な水危機を迎える今、水問題に工学としてどのようにかかわるのかを考えてみよう。	同上	鈴木　基之 ゲスト 沖　大幹 （総合地球環境学研究所）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	地球温暖化と工学の対応	地球温暖化は主として化石燃料の燃焼に伴う二酸化炭素ガスの発生により大気の温室効果が増すことにその原因があるとされている。この温暖化問題に対応する工学の取り組みの一つの例として、都市の種々の活動におけるエネルギー利用と、これにより発生する二酸化炭素量をどう考えるのかを見てみよう。	鈴木　基之	鈴木　基之 ゲスト 花木　啓祐 （東京大学大学院工学系研究科教授）
14	干潟など、環境の保全・利用	自然環境は身近なところを考えても、色々な形で人間活動の影響を受けて、劣化しておりまた同時に環境浄化という機能の面で大きな役割を果たしている。自然環境の果たすべき機能を十分に活かし、かつ保全するためにどのような工学的な配慮が可能なのかを考えてみよう。ここでは干潟という特殊・特徴的な生態系の場を例として考えてみよう。	同　上	鈴木　基之 ゲスト 岡田　光正 （広島大学教授）
15	問題解決型から着地点誘導型へ	人間活動は全ての面で環境と何らかの相互作用を有している。最終的に人類の活動を持続していく条件としてなにを考えていく必要があるのか、特に生態系を保全する方向での生物多様性という考え方を紹介する。また有限な資源と環境の下で人間活動のあるべき姿を考えていくためにはどのようなパラダイムの変更が必要なのかを考えてみよう。	同　上	鈴木　基之

＝都市計画論（‘０２）＝（TV）

－私達の都市をいかにデザインするか－

〔主 任 講 師：　香山　壽夫（放送大学教授）〕

全体のねらい

私達の生活する都市を、どのようにつくるのか。そもそも、都市とは何なのか。近代の都市設計理念は何を作り出したか。それは、今どのような問題に直面しているか。今日の都市に求められているものは何か。それを解決するための方法は何か。こうした問題について具体例に即して考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	美しい都市をどのようにつくるのか	1）今私達の住む都市はどのような状態にあるのか 2）都市空間とは何か 3）都市空間はいかにつくられるかー計画者と生活者	香山　壽夫（放送大学教授）	香山　壽夫（放送大学教授）
2	美しかった日本の都市	1）消えた町ー江戸 2）商人・職人の町ー下町 3）武家の町ー山の手 4）宗教と遊興のための空間ー社寺・広小路 5）続いて消えていった町ー美しかった他の地方都市	同　上	同　上
3	都市のかたちー（１）ー身体的都市空間と計画的都市空間	1）都市はどのように形づくられるか 2）原始的共同体の都市 3）古代の計画的都市 4）中世西ヨーロッパの都市 5）バロックの都市	同　上	同　上
4	都市のかたちー（２）ー都市と田園	1）産業革命の生んだ都市の悲惨 2）理想的都市の夢 3）ハワードの「庭園都市」の理念 4）「庭園都市」の実例 5）「庭園郊外」の展開	同　上	同　上
5	都市のかたちー（３）ー合理主義と革命願望	1）モダニズムの都市デザイン 2）ル・コルビジュエの「ユルバニズム」 3）ＣＩＡＭの活動とアテネ憲章 4）ＣＩＡＭの理念の展開 5）合理主義と革命願望の源流 6）荒涼たるシャンディガール	同　上	同　上
6	近代日本はどのような都市をつくってきたかー（１）明治より大戦まで	1）文明開化は都市にとって何であったか 2）対外イメージのための欧風化 3）道路拡張のための「市区改正」 4）都市計画法と震災復興 5）郊外住宅地と満洲新都市	同　上	同　上
7	近代日本はどのような都市をつくってきたかー（２）終戦より今日まで	1）戦災復興 2）ニュータウン建設 3）都市高速道路 4）超高層ビルと空地 5）メガストラクチャー提案の終わりと都市デザインの始まり	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	都市共同体は再建できるか－モダニズムの都市デザインに対する反省	1）都市再開発とは何だったか 2）アメリカにおける反省の動き 3）ヨーロッパにおける反省の動き	香山　壽夫	香山　壽夫
9	都市の持続性は回復できるか－町並み保存と建築再生	1）町並み保存を目指す様々な動き 2）現在行われている町並み保存の様々な手法 3）何故町並みは保存されねばならないか 4）都市は歴史の中で形成される	同　上	同　上
10	都市デザインの要素－（1）－都市集合住居	1）住居は全て集合住居である 2）良き都市は全て良き住居の型を持つ 3）最近の日本の興味深い実例	同　上	同　上
11	都市デザインの要素－（2）－道と広場	1）歩く人のための道と広場をつくろう 2）不毛なるシャンゼリゼへの憧れ 3）細道・裏道・原っぱ・空地の大切さ	同　上	同　上
12	都市デザインの要素－（3）－人を呼び集める建築空間	1）劇場 2）学校 3）市場	同　上	同　上
13	都市デザインの要素－（4）－水と緑	1）身近に自然がなくては生きられない 2）身近な緑 3）手でふれられる水辺	同　上	同　上
14	都市デザインの要素－（5）－かくれた小さな仕掛け	1）門としきり 2）聖なる場所 3）高台と階段	同　上	同　上
15	私達の都市をいかにデザインするのか	1）社会の秩序は都市空間によってつくり上げられる 2）地域共同体はいかにしてひとつのまとまりをつくり得るか 3）地域共同体が自らの都市をつくることはいかにして可能か	同　上	同　上

＝教育文化論（‘０２）＝（Ｒ）

〔主 任 講 師： 宮澤　康人（放送大学教授）〕

全体のねらい

次の世代を育成する人間社会の営みを「教育文化」という概念で捉え、その基本的問題を考え直すための手がかりになる、思考枠組の設定の仕方と問題の問い方そのものを探究するテクストをめざす。既成の枠組みや知識を習得するというレベルを超えて、教育文化を、人間の生き方全体としての文化のなかで、しかも思いきり巨視的な時・空のなかで捉えたい。それは教育についての歴史人類学的な見方ということになるだろう。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	序論：教育文化をどのように見るか	全体の序論として、まず「教育文化」という言葉でどのような範囲の事柄が想定されるかを考え、次に歴史人類学的に教育文化を見るとはどういうことかを考え、最後にこの科目全体のねらいと構成について説明する。	宮澤　康人（放送大学教授）	宮澤　康人（放送大学教授）
2	自然の開発と人間の発達	地球生命圏というシステムのなかに人類を位置づけ、人類が自然との相互作用をとおして、人口動態を大きく変容させながら、農業文明、工業文明、そして脱工業文明へと移行する過程のなかで、次世代を育成する文化がどのように変貌して来たかを巨視的に捉える。	同　上	同　上
3	共同体の文化とその世代間伝達	人類は、農村、山村、漁村という共同体、そして共同体の媒介者としての商人集団や都市といった社会集団をなして存在しつづける。その社会集団が必要とした規範が、世代を超えてどう伝達されてきたのか。教育文化を特徴づける要因が複数の系譜をもつことを示唆する。	同　上	同　上
4	胎教と母子関係	胎教という考え方は、日本では古来から存続してきた。まずその歴史的変化を、主として平安期から明治期までについて跡づける。そのうえで、ヨーロッパの伝統の中にも胎教論が根強く存在していたことを明らかにし、そのコスモロジカルな養生論的性格を示す。	寺﨑　弘昭（育英短期大学教授）	寺﨑　弘昭（育英短期大学教授）
5	若者組と青年期	学校が主たる教育の手段となる以前の社会において、人間形成のうえで大きな役割を担っていたのは「若者組」のような年齢集団であった。若者組が子どもの成長・発達の上で果たしていた機能を概観しながら、近年における青年期の誕生までの道筋を明らかにする。	小林　亜子（埼玉大学助教授）	小林　亜子（埼玉大学助教授）
6	身体文化の「文明化」	ヨーロッパにおいて中世から近代への社会の変化は、「文明化」の過程でもあった。シヴィリテ（礼儀作法）という概念が生まれ、人々の行動のしかた、振る舞い方といった身体文化を変容させ、子どもの「しつけ」、教育を大きく変えていった文明化の過程を辿る。	同　上	同　上
7	識字化と声の文化	識字化は、学校の普及と関連して、文明化の尺度とみなされるが、反面では、生活世界に密着した「声の文化」を抑圧してきた。人類のメディア史を、無文字社会の音声から、文字の発明、近代の印刷文字へとたどり、現代の電子媒体の時代を教育媒体史に位置づける。	宮澤　康人	宮澤　康人

回	テーマ	内　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	教室空間と教師・生徒関係	学校の空間構成は、それ自体重要な教育作用を有する教育文化である。まず日本の学校建築の歴史を概観し、近代学校の空間構成の特徴を提示する。そのうえで、ヨーロッパ（とくにイングランド）において近代的学校空間が成立してくる様相を明らかにする。	寺崎　弘昭	寺崎　弘昭
9	体罰という教育文化	学校での体罰は、日本では明治12年以来法令上禁止されている。にもかかわらず現実には横行していた構造を跡づけたうえで、通過儀礼に付随していた体罰が、近代教育論（たとえばジョン・ロック）において意味づけを変容させつつ存続してきた次第を明らかにする。	同　上	同　上
10	ホモ・ファーベルとホモ・エデュカンス	西洋近代を特徴づけるホモ・ファーベル（合理的加工主体）という人間像に連動してホモ・エデュカンス（合理的教育主体）という人間像が生まれる。他方それに対抗してロマン主義的子供観も現れる。これは<父>なる「精神」と<母>なる「自然」の葛藤と見ることもできる。	宮澤　康人	宮澤　康人
11	国民文化と公教育	近代国家の成立過程は、国民国家の形成過程でもあった。近代国家においては、国民の文化的一体性を醸成するために、公教育が重視されることとなる。国民国家の形成において公教育はどのように成立し、どのような役割をはたすことになったのかを概観する。	小林　亜子	小林　亜子
12	試験文化と社会的選抜	啓蒙期（18世紀）以降、知の世界が大きく変容し始めていたヨーロッパでは、フランス革命後、新しい知の秩序の成立へむかう。血統による貴族的秩序ではなく、功績による秩序（メリトクラシー）がめざされ、試験による選抜制度が整備されていくこととなった。	同　上	同　上
13	子ども問題と家族	犯罪・非行・病理現象等、子どもが引き起こす問題、あるいは子どもが巻き込まれる問題は、いったいいつから社会問題となったのか。特に、子どもの問題が家族の問題と関連して論じられている点に注目して、法・政策・民間の運動の歴史的展開から検討する。	小玉　亮子（横浜市立大学助教授）	小玉　亮子（横浜市立大学助教授）
14	ジェンダーと教育	女性はいかなる形で教育の対象と認識されてきたのか、あるいはされなかったのか。男性への教育との差異はどう理論化されたのか。この問題を、学校から排除された女性、女性向け教育、教育の担い手としての女性、という三つの観点から歴史的に考察する。	同　上	同　上
15	国民国家を越える教育文化	現代世界の教育は、西洋近代の教育文化をモデルにしている。その特徴の一つは、国民国家を中心にしていることである。それが地球上の民族や宗教を対立させる要因にもなっていることを示し、その対立をのりこえるための一つの方途として、国際共通語教育の可能性について考察する。	宮澤　康人	宮澤　康人

＝　教育経営論（‘０４）＝（Ｒ）

〔主任講師：　新井　郁男（放送大学教授）〕

全体のねらい

わが国を中心とした現下の教育改革の方向に照らして、これからの教育経営の在り方について、単なる理論の紹介というのではなく、内外の実践を紹介もまじえながら、わたしの考える教育経営論を展開する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育経営の原理－計画性	教育経営の基本的原理の一つとして、プラン(Plan)－ドゥ（Do）－シー（See）といった計画性の原理について考える。	新井　郁男（放送大学教授）	新井　郁男（放送大学教授）
2	教育経営の原理－多様な教育観の調整	教育経営においては、教師や保護者などの多様な教育観を調整することが重要であること、調整するためのさまざまなストラテジーについて考える。	同　上	同　上
3	教育経営の原理－柔軟な教育課程経営	教育の重要な側面である教育課程の経営に当たっては、目標、時間、空間、教職員組織、などについて柔軟な姿勢をとることが重要であることについて考える。	同　上	同　上
4	学校の創造性	これからの学校は、それぞれの実態をふまえながら特色を出していくことが求められているが、その課題を達成するにはどうしたらよいかについて考える。	同　上	同　上
5	学校に基礎を置いたカリキュラム開発	学校の創造性において最も重要な課題であるカリキュラム開発を各学校が主体的に行う場合のアプローチについて考える	同　上	同　上
6	カリキュラムと学校組織	新しいカリキュラムを開発し、それを実際に機能させるためには、学校組織の改革の重要であることについて述べる。	同　上	同　上
7	教授組織の革新	新しいカリキュラムの導入に対応する学校組織の観点としてティーム・ティーチングの意義などについて考える。	同　上	同　上
8	地域社会学校の創造１	学校と地域の連携を密にした地域社会学校について、アメリカで展開された論やわが国の第２次大戦後の動向、最近の動向などを踏まえて、地域社会学校を経営していくにはどうしたらよいかについて考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
9	地域社会学校の創造２	第８回を受けて、現在、現在再び地域社会学校の理念が復活していることの拝啓や意義などについて考える。	同　上	同　上
10	地域社会学校の創造３	地域社会との連携を深めている、わが国のさまざまな実践例に目を向けながら、その意義や課題などについて考える。	同　上	同　上
11	学校経営におけるリーダーシップ１	校長などの管理職や指導的な立場にある教員などのスクール･リーダーの問題について、ウェーバーの指導者論などを紹介しながら考える。	同　上	同　上
12	学校経営におけるリーダーシップ２	教育経営が適切に遂行されるには校長をはじめとするスクール・リーダーがどのような役割を果たさせばよいかについて、具体的な例を出しながら考える。	同　上	同　上
13	開かれた学校経営１	現下の教育改革において重視されている「開かれた学校」とは何か、そのような学校を創造するためには教育経営はどのように転換しなくてはならないのかについて考える。	同　上	同　上
14	開かれた学校経営２	開かれた学校をめざす開かれた教育経営の具体的な対応の問題として、学校評議員制度、ＰＴＡ、学校選択、行政との関係などについて考える。	同　上	同　上
15	学校組織体としての学校の創造	1回から14回までに考えたことを、学習組織体としての学校の創造という観点から整理して、今後を展望する。	同　上	同　上

＝学校システム論（‘０２）＝（TV）

－子ども・学校・社会－

〔主任講師：　竹内　洋（京都大学大学院教授）〕

全体のねらい

「学校」という言葉も実態も、いまのわれわれにとって自明すぎることである。しかし、学校は人類の文明のある段階で発明された人工装置である。人類が発明した学校という人間形成の装置が、社会の変化のなかでどのように変貌してきたのか。そして、いまなぜ学校の秩序の揺らぎが問題化されるのだろうか。文明の装置としての学校の可能性と不可能性を浮かびあがらせ、21 世紀の学校像を描きたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学校と教育が輝いた時代	第２次世界大戦後、人々は教育の拡大によって悲惨と不幸からの脱出することを願った。新潟県佐渡島両津街を事例としながら、戦後の貧困の中から人々が学校創設にたちあがった時代をみることによって、学校と教育が輝きをもって出発した時代をあらためてふりかえり、半世紀の間にわれわれが得たもの失ったものを考える。	竹内　洋（京都大学大学院教授）	竹内　洋（京都大学大学院教授）
2	大衆化する教育意識～ピアノの普及をめぐって～	戦後日本における家庭用ピアノの普及を分析することにより、「教育する家族」という社会意識が、中間層をこえて大衆層へと広がっていった過程、および、この大衆化をもたらした社会的要因について、考える。	高橋　一郎（大阪教育大学助教授）	高橋　一郎（大阪教育大学助教授）
3	学校の人口学	人口構成の変化ほど、日本の学校教育に大きな影響を与えてきた要因は他にない。最近の大学改革を見てもわかるように、誰もが操ることなできない絶対的な事実として、１８才人口の減少があった。子供数の変化に対する教育政策の対応や教員の年齢構成などを例にしながら、理念よりも人口構成の変化が学校教育を動かす側面を検討する。	岩井　八郎（京都大学大学院助教授）	岩井　八郎（京都大学大学院助教授）
4	美徳の博物館か、悪徳の温床か	学校のカリキュラムや教育目標をみれば、社会において何が望ましいかが、多様に提示されている。一方、それらは望ましくない事実を発見するための指針でもある。学校の外側で作り上げられた望ましさの基準の下で、学校は組織として存続しなければならない。組織としての学校をみる社会学的視点を提示する。	同　上	同　上
5	学校風土と生徒文化	ひとくちに学校といっても課程や規模、伝統、男女比率、進学率などがそれぞれに異なっているのに応じて規律に対する考え方も異なり、生徒の気質や文化も異なっている。こうした違いを風土と文化という観点から整理し、検討してみよう。	黄　順姫（筑波大学助教授）	黄　順姫（筑波大学助教授）
6	女学生文化～羨望と嫌悪のまなざしの中で～	女学生という存在は、それまでの女性についての規範や秩序を破る新鮮さを期待されながらも、一方では常に「堕落」しやすい危なっかしい存在という目でみられてきた。それでは、女学生のどのような行動や生活態度が「堕落」あるいは「不良」ととらえられたのだろうか。そして、当の女学生たちはそうしたまなざしの下でどのように行動し、日常生活を生きてきたのだろうか。ここでは、「堕落」女学生や「不良」女学生をめぐる言説や実態を通して、羨望と嫌悪の二面感情でとらえられてきた女学生の表象とその文化を探ってみたい。	稲垣　恭子（京都大学大学院助教授）	稲垣　恭子（京都大学大学院助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	女学生小説の世界〜ジェンダーと教育を読む〜	女学生を主な登場人物とする小説は、明治20年代あたりから出現し明治30年代には大衆的人気を得るようになった。女学生の生活実態をうかがい知る機会が少なかった当時においては、女学生の実態をある程度反映しながらも多分に外から創り出された表象である女学生小説が、現実の女学生のイメージを規定し、また女学校教育にも少なからず影響を与えたと思われる。ここでは、女学生のパブリック・アイデンティティをつくり上げる上で女学生小説がどのような意味と役割を果たしたのかを考えてみたい。	稲垣　恭子	稲垣　恭子
8	学校・暴力・ことばの力	学校はその基礎が整った明治の時代から絶えることなく暴力の影につきまとわれてきた。しかし、1980年前後を境に全国の中学校に吹き荒れた校内暴力の嵐は、いかなる意味でもことば（理屈）を背景にしていないという点で、それまでの暴力とはまったく性格を異にするものであった。この校内暴力への対処という困難な仕事に身を挺してあたってきた教師たちの話をもとに現代における教育の意味をあらためて考えてみることにしたい。	山本　雄二（関西大学教授）	山本　雄二（関西大学教授）
9	階層・都市・教育	わが国の学校教育の拡大をリードしたのは、都市新中間層である、と言われる。ここでは、戦前期におけるこの階層の形成、およびこの階層と学校教育とのかかわりを分析することにより、現代日本の教育意識の起源について考えてみたい。	高橋　一郎	高橋　一郎
10	教育問題と責任の帰属〜「いじめ」自殺事件をめぐって	「いじめ」はそれが死と結びついていると認識されたときから社会問題になり、やがて学校問題になった。それは学校が責任を問われるべき問題になったことを意味していた。責任は裁判で問われた。 ここでは「いじめ」自殺裁判の事例を通して、裁判で学校教育の何が問われたのか、判決文の論理構成を追いながら検討する。	山本　雄二	山本　雄二
11	記憶の中の学校	学校システムは同窓会システムとの関係のなかで機能する。同窓生達は記憶のなかの学校としての母校へ経済的・心理的援助をする。一方、母校に対し文化的正統性を押し付ける。学校と同窓会の象徴的権力関係を解明しよう。	黄　順姫	黄　順姫
12	生存戦略としての潜在的カリキュラム	少子化現象のなかで学校は生き残れるのか。生存戦略として学校文化を他の学校のそれと差異化し、社会に呈示する。学校行事を取り上げ、潜在的カリキュラムが学校文化の創出、身体化にいかに機能するのかを解明しよう。	同上	同上
13	自由と規律の学校	英国のパブリック・スクールは全人教育がなされる学校の理想型として多くの国で模倣された。日本では、戦後すぐに池田潔が自らの体験をもとに書いた『自由と規律』が多くの人に読まれ、学校の模範とされた。パブリック・スクールがどのようにして理想の学校になったかをみる。	竹内　洋	竹内　洋

回	テ　ー　マ	内　　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
14	自由と規律の学校を訪ねて	変化の激しい現代社会の中で学校の模範といわれたパブリック・スクールはどのように伝統を守り、21 世紀に適応をしているのだろうか。ブレア首相やワーズワースの母校であり、近年『ハリー・ポッター』で有名になったフェテス・カレッジを訪問して、学校教育における保守と革新について考える。	竹内　洋	竹内　洋
15	２１世紀の学校	本科目担当者の全員参加で、これまでの講義を踏まえながら、21 世紀の学校についての構想をめぐる座談会をおこない、これからの学校を考える提案を披露する。	同　上	同　上

＝教育課程編成論（‘０２）＝（Ｒ）

－学校で何を学ぶか－

〔主任講師：　安彦　忠彦（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

学校の教育課程ないしカリキュラムについて、その編成の基礎となる哲学的・思想的原理とともに、教育課程の歴史的・社会的背景、学習者の発達・要求・能力・適性・個性などの心理的・生理的特性、教育内容としての知識・経験・技能・技術・価値などの文化内容の範囲と特質などをきめ細かく吟味し、望ましい編成方法を考える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	教育課程とカリキュラムと教育内容	教育課程という用語は一部の人、とくに教育界の人々の間ではよく使われるが、あまり一般的ではない。他方カリキュラムという用語も学界の方でよく使われる。さらに教育内容という用語も似た意味のことばとして用いられる。その異同・関連について整理する。	安彦　忠彦（早稲田大学教授）	安彦　忠彦（早稲田大学教授）
2	教育課程の哲学的思想的原理の検討（１）：存在論的基礎	教育課程をどういうものにするかについては一定の哲学的・思想的立場を決めなければならない。１回目は、どんな内容のものを選んで教えるのかの基準について、その哲学的な立場の相違が具体的な教育課程をどう変えるのか検討する。	同　上	同　上
3	教育課程の哲学的思想的原理の検討（２）：認識論的基礎	教育課程をどういうものとして作るのかは、人間の認識をどういうものと見るかによって決まる。２回目の検討は、どんな認識のとらえ方があり、それによって具体的な教育課程がどういう違った姿を示すことになるのかについて検討する。	同　上	同　上
4	教育課程の歴史的・社会的背景の分析と批評	教育課程をつくる上で最近注目されている研究分野が、教育課程の歴史的規定性、また社会構造との相互関係についての分析・批判研究である。種々の差別の再生産、歴史的諸要因による妥協的産物としての教科の創設などの研究の上で、自覚的に教育課程づくりを行う必要がある。	同　上	同　上
5	教育課程の構成における三本柱と社会的要請の吟味	学校の教育課程は必ずその時代の社会的要請を受けてつくられる。ただ、その社会的要請の性質をよく吟味しないと、数年間で必要とされなくなるものもあったり、政治的に一面的であったりして、本来の成果をあげられない。教育学的観点からこの点を吟味する。	同　上	同　上
6	学習者の心理的・生理的要求：（１）発達段階について	学校の教育課程は他方で子ども・学習者の心理的・生理的特性を無視しては作れない。１回目は、学習者の発達段階・発達特性について検討し、その上で学習者の学習がいかに効果的に進められる教育課程になるかを探ることが必要となる。	同　上	同　上
7	学習者の心理的・生理的要求：（２）個性・適性について	学校の教育課程と学習者との関係で、もう一つ重要なのは学習者の個性・適性をどうとらえるか、そしてそれに対する適切な教育課程をどうつくるか、という課題である。これは、必修と選択、個別化や個性化、能力差、学力差などの問題に関係する。	同　上	同　上

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	学問的要請としての学校知の吟味：理論知と体験知	学校の教育課程は学問の世界と切り離せない。学校で教える知識＝「学校知」は基本的に学問的な「理論知」であるが、これと「体験知」をどうつないで効果的な学習にしうるかが教育課程編成上の基本的な問題の一つであり、そこに教職の専門的独自性もある。	安彦 忠彦	安彦 忠彦
9	教育内容の組織化と人格・学力との関係	教育課程を通して教えられる教育内容がどう組織化されるか、という問題は、教育課程が子ども・学習者の人格と学力をどのようなものとして形成するか、という問題と表裏の関係にある。教育内容の組織化の考え方や程度によって、人格や学力の特性が規定されよう。	同 上	同 上
10	教育課程の構成・教育課程の内部要素と外部要因	教育課程の構成を試みる上で、教育課程の構成要素が何であるかを明確にするとともに、この内部要素の効果を規定する外部要因がある。教職員や施設・設備などを視野に入れた上での構成でなければ、現実的な構成論にならない。	同 上	同 上
11	教育課程の古典的類型	教育課程をどうつくるかについては、教師はデザイナーという自覚をもって、これまでのタイプ・類型の中で主要なものをきちんと押さえる必要があり、それぞれの長所・短所を細かく知り、目的に応じて使い分けることができるのでなければならない。	同 上	同 上
12	教育課程のハイブリッド・モデル	現在では、特定のタイプの教育課程だけですべてのことを教えようとする試みは、あまりに粗雑なものであったとの反省がなされ、これからはいくつかのタイプの教育課程を、目標の違いに応じて組み合わせる、という混合型が求められている。	同 上	同 上
13	教育課程の経営	教育課程を編成するという作業は、大きく教育課程の経営の一部分を成している。教育課程経営が学校経営の中心であり、このような位置づけの上で、教育課程のすべての部分を絶えず改善していくシステムをつくることが求められる。	同 上	同 上
14	教育課程の評価	教育課程を実際に展開し実施していけば、その結果について評価するのが当然である。授業を通して絶えずつくり直し、予期せぬ結果をも含めてとらえながら教育課程をつくり変える教師の役割が決定的な重要性をもつことを明確化する。	同 上	同 上
15	教育課程と教師：デザイナーとしての教師・カリキュラムの一部としての教師	教育課程が実施されているとき、その立案者と実行者は教師である。子どもや学習者にとって、その教師の指導法、人間性や言動、考え方は基本的に学ぶべき内容の一部となる可能性が常にあり、単に教育課程を実施しているだけの存在ではない。とくに低年齢の子どもには重要である。	同 上	同 上

＝認知過程研究（‘０２）＝（Ｒ）

－知識の獲得とその利用－

〔主任講師：　稲垣　佳世子（千葉大学教授）〕
〔主任講師：　鈴木　宏昭（青山学院大学教授）〕
〔主任講師：　亀田　達也（北海道大学大学院教授）〕

全体のねらい

ここでは高次の認知過程、思考における知識の獲得と利用に焦点をあてる。上手な問題解決や、物事のよりよい理解には「理解力」や「問題解決力」といった一般的能力ではなく、その領域に関する「知識」が重要な役割を果たすことを知る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	認知過程を研究するとは	「認知過程」を研究するとはどのようなことかについての道案内をする。教育場面や日常場面での私達のさまざまな活動の多くは問題解決と理解の過程と捉えられること、認知過程研究で使われる知識や推論など重要な概念について解説する。	稲垣佳世子（千葉大学教授）	稲垣佳世子（千葉大学教授） 波多野誼余夫（放送大学教授）
2	子どもが世界を理解する仕方	子どもはかなり早い時期から特別教えられていないにもかかわらず、世界の重要な諸側面を切り分け、それぞれに異なる因果的な説明を適用できるという点で、今まで考えられてきたよりも有能な存在であることを示す。	同　上	稲垣　佳世子
3	知識の大幅な組み替え	日常生活場面や学校場面で獲得した知識の多くは、新しく情報を取り入れるたびに少しずつ改変されるが、時として大幅な組み替えに至ることがあるという事実やその過程で「誤概念」とよばれるものが現れることがあることを示す。	同　上	同　上
4	熟達者と初心者のちがい	熟達者と初心者はどこがどう異なるのだろうか。主にスポーツや芸術、職業場面での熟達者を例にしながら、熟達者の豊かで構造化された知識を明らかにする。	大浦　容子（新潟大学教授）	大浦　容子（新潟大学教授）
5	熟達化の社会・文化的基盤	初心者が熟達者になっていく過程は、初心者が熟達者のコミュニティに実践活動を通じて参加していくことである。熟達化の過程で他の人々や文化がつくり出した道具についてのメンタルモデルを作っていくことを明らかにする。	同　上	同　上
6	問題解決の基本的図式	問題解決過程の研究によく用いられてきたパズルを題材にして、問題とは何か、またその解決とは何かを説明する。そして問題空間の探索、ヒューリスティック、問題表象、及びその変化についての解説を行う。	鈴木　宏昭（青山学院大学教授）	鈴木　宏昭（青山学院大学教授）
7	教科学習における問題解決	算数や理科などの教科における問題解決プロセスの特徴についてまず解説する。次に、教科の学習を困難にする原因を転移、素朴概念から説明する。最後に、この困難を克服する一つの方法として自己説明を取り上げる。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	機械の操作における問題解決と理解	人間がコンピュータなどの複雑な機会を学習し、理解を深める過程についての講義を行う。まず機械操作の自動化のメカニズムについて論じ、次に機械に対するよりよい理解を支えるメンタルモデルの役割、獲得について論じる。	鈴木　宏昭	鈴木　宏昭
9	演繹推論	いわゆる形式的推論の問題が与えられた時でさえ、人はこれを形式的に解くことは稀である。その代わりに実用的推論のスキーマを使ったり、メンタルモデルをつくることによって、これを解こうとすることを示す。	波多野誼余夫 稲垣　佳世子	波多野誼余夫
10	類推の図式と制約	類推は学習や創造的思考において重要な役割を果たすことが知られている。まず日常的な例を用いて、類推のプロセスと基本図式を説明する。次に、制約という観点から人間の類推のメカニズムを解説する。	鈴木　宏昭	鈴木　宏昭
11	推論における社会的バイアス	人々が社会的事象について行う推論にはさまざまなバイアス（偏り）があることが知られている。その主なものを紹介し、それらがなぜ簡単には消去されないかを考える。	亀田　達也 （北海道大学大学院教授）	亀田　達也 （北海道大学大学院教授）
12	認知と社会的相互作用	推論は個人の頭の中で生じるとはいえ、その個人を取りまく文脈、とくに異なる立場の他者の存在によって強く影響されること、逆に他者との相互作用を通して推論や認知が促進されることを示す。	同　上	同　上
13	理解を求める活動	思考の大きな目標のひとつは理解、すなわち世界の有り様について仮説をたてることである。この過程は様々な対立仮説からの予測を吟味するという時間と労力を要するものであるが、人は本来理解を求める傾向をもつといわれている。	稲垣　佳世子 波多野誼余夫	波多野誼余夫
14	談話理解	談話理解の研究のために、いわゆる認知心理学でとりあげられてきた実験はどのようなもので、そこから明らかになったことは何か、未解決な問題は何かを検討する。合わせて談話の産出（作文など）についてもふれる。	秋田　喜代美 （東京大学大学院助教授）	秋田　喜代美 （東京大学大学院助教授）
15	教室における談話	教室学習における教師と生徒、生徒同士の談話を調べることによって生徒の思考を促す教師のことばや子どもの発言がどのようなものかを検討する。こうした談話については文化差のあることも知られている。	同　上	同　上

＝教授・学習過程論（‘０２）＝（TV）

－学習の総合科学をめざして－

〔主任講師：　波多野　誼余夫（放送大学教授）〕
〔主任講師：　永野　重史（国立教育政策研究所名誉所員）〕
〔主任講師：　大浦　容子（新潟大学教授）〕

全体のねらい

ヒトという種は、単に生物として進化してきたばかりでなく、文化という人工物の体系を作り上げ、それを各個体が学習により内化することで有能さを増大させてきた。その意味で広義の学習ないしそれを援助する教育が決定的に重要なことは確かだし、子どもの側には成人の行動様式を真似ようとする傾向、おとなの側には子どもに教えようとする傾向が元々備わっているらしい。さらに、実践と並行させて学習の援助をある程度意図的、計画的に行おうとする試み（例えば徒弟制度）も、古い歴史を持つ。こうした広義の教育＝学習の援助の過程について考えるところから始めたい。「教育」というと小学校、中学校など、学習者の将来の生活のための一般的な準備を行う機関での教育のことを指すと受けとられがちだが、学校は多様な教育の機会の一つにすぎず、まして今日見られるような欧米型の学校が普及したのはわが国でもここ百年たらずのことでしかない。制度としての学校は、人々の全面的な支持を得ているといえないどころか、それに対する非難や批判が高まりつつあるようだ。しかし、今日の高度に技術化された社会の教育において学校が占める位置は無視できないものである。ここでは、学校の独自の役割が何かを吟味するための知的基盤を提供したい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発達、学習、社会化	最近の比較認知科学や進化心理学に基づき、ヒトの生物学的特徴とその由来について論じる。その発達の過程で、文化という人工物の体系を各個人が学習により内化すること、こうした広義の学習ないしそれを支援する教育が決定的に重要なことを述べる。	波多野誼余夫（放送大学教授）	波多野誼余夫（放送大学教授）
2	人間行動の生物学的基盤	ヒトにもっとも近い種である、チンパンジイをはじめとするヒト以外の動物の社会的知能、認知や学習についての最近の報告から、人間行動がいかなる生物学的基盤を持っているのか考える。	同　上	藤田　和生（京都大学大学院教授）
3	言語を生み出すのは「本能」か	米、欧で大ベストセラーになった言語の生得なる基盤を証明するピンカーの著書と、これに対する、言語獲得の社会的、実用的基盤を強調する立場からのトマセロの批判を手がかりに、言語の本質を論じる。	同　上	波多野誼余夫
4	素朴理論	最近の概念発達研究によれば、乳幼児はかつて考えられていたよりもずっと知的に有能な存在であり、世界の限られた側面についてではあるが、特徴的な因果的説明を行うことのできる知識の体系を持つという。このことを実験的に示す。	同　上	同　上
5	言語と思考	子どもの用いる言語が彼らの思考をどように形成するか、異なる様式の言語コミュニケーションが要求されることで彼らの学習がどれほど困難なものとなるか、読み書き能力の習得がいかに知的発達と関わるか、などを検討する。	永野　重史（国立教育政策研究所名誉所員）	永野　重史（国立教育政策研究所名誉所員）
6	熟達化	初心者と熟達者の知識、技能の差異、さまざまな領域における熟達化の諸相、熟達の型の違い、熟達を促進する経験などについて述べる。	大浦　容子（新潟大学教授）	大浦　容子（新潟大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	教育の諸相	教育とは広く学習を援助しようとする意図的、意識的な営みであり、学校教育はそのごく一部にすぎない。徒弟制や実践への参加という形態での教育のもつ強みや限界について考える。	大浦　容子	大浦　容子
8	問題解決と理解	構成主義の学習観では、知識は伝達されるのではなく、問題解決や理解活動の過程で、次第に構成、洗練、改定されると考える。この意味で教育活動の中心となる問題解決や理解活動に関し、これまで行われてきた研究成果を総覧する。	波多野誼余夫	波多野誼余夫
9	学習における協調	学習はしばしば対人的相互交渉のなかで行われるが、とくに協調的学習はさまざまな促進的効果を持つ。他者に説明する過程で自らの考えを外化し、内省の対象にすることができるし、相互の考えを持ち寄ることで創造的な発展も期待しうる。	同　上	三宅　なほみ（中京大学教授）
10	学習環境のデザイン	学習の科学は、いかに教えるべきかの処方せんを提供するわけではないが、それを考える基盤を提供する。学習目標により効果的な学習環境のデザインは異なるが、ここではとくに新しい事態に柔軟に適応しうる学習者を育てる環境デザインの原理について考察する。	同　上	同　上
11	動機づけ、転移	学校での学習においては学習者をいかに動機づけるかが、くりかえし問題になってきた。また、学校で学習した知識や技能が、学校外の問題解決に転移しにくいこともくりかえし指摘されている。こうした問題についての学習科学からの示唆を論じる。	永野　重史	永野　重史
12	教育における情報技術	コンピュータは、単に技能の習熟を苦痛なしに行わせたり、理解のためのさまざまな事例を効果的に提示するにとどまらず、なかば時空を超えた相互交渉とそれにもとづく学習の展開を可能にする。こした方向の試みを紹介する。	波多野誼余夫	大島　純（静岡大学助教授）
13	教育のための評価	評価には、学習者の状態を知って教育計画を立案したり修正したりする、という側面と個々の学習者に成績を付与するという側面があるが、従来は両者がはっきり区別されず、そのため評価が教育活動に生かされないことが少なかった。教育活動の一環としての評価について述べる。	永野　重史	永野　重史
14	学習の認知神経科学	脳と心の関連についての関心が高まるなか、高次の学習の理解にも、認知神経科学からの寄与が期待されるようになった。急速に進展しつつある認知神経科学からの知見のうちで、学習科学にとって見落とせないのはどんなことか、今後期待されるのはどんな発展かを論じる。	波多野誼余夫	酒井　邦嘉（東京大学大学院助教授）
15	文化の中の学習	学習すなわち知識獲得の過程は、社会文化的文脈により直接に影響されるのみならず、社会文化的価値の内化された形態ともいうべきメタ認知的信念（例えば学習観）によっても影響される。したがって、教育技術を輸出入することには慎重でなくてはならない。	同　上	北山　忍（京都大学助教授）

＝現代身体教育論（‘０２）＝（Ｒ）

〔主 任 講 師：　生田　香明（大阪大学教授）〕

全体のねらい

身体の形態と機能は、生涯の 1/4 を占める成長期で発育・発達し、3/4 を占める加齢期で老化・衰退する。本書では、60 年間にわたる長期加齢期の身体諸機能の老化が、20 年間という短期成長期における運動を含めた生活習慣の影響を受けること、また 100 歳の長寿をまっとうするために、20 歳以降の加齢期において適切な運動の実践が重要であること、そして、それらの運動をどのように行うべきか、それらに関する科学的な知識を提供することにある。

回	テ　ー　マ	内　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
		身　体　の　発　達　と　教　育		
1	形　態　の　発　育	人間の身体は、18 歳頃まで発育を続け、大きさを増していく。しかし、身長や下肢長などの長育、体重や皮下脂肪量などの量育、肩幅や頭長などの幅育は、同じ割合で発育していくものではない。 本章では、身体各部の発育がどのような経過をたどるか、長育、量育、幅育のそれぞれの項目に分けて、これまで報告されているデータに基づいて解説する。またそれらの発育が身体的能力の発達にどのようにかかわるか、などについて述べる。 更に、青少年の身体発育促進現象が、明治 33（1900）年頃から始まっているが、それがどのような経過をたどっているか、戦争の影響はどうか、発育促進の rate はどの時期が最も高かったかなどについて、身長を例にあげて解説する。	生田　香明（大阪大学教授）	生田　香明（大阪大学教授）
2	手指の精密動作の習得（３歳前後）	手指は脳の出先き器官とも言われ、脳の神経細胞の発達とともにその機能は３歳前後に急速に発達することが研究によって明らかにされている。これは、人間の局所の神経感覚機能が早期に急速に発達することを示す。局所の神経感覚機能の急速な発達が手にある外部情報を集める感覚器官、手の反射と運動、手の精密な素速い運動とどのように関係するかについて述べる。 本章では、それが他の身体的能力の発達に比べてなぜこの時期に急速に発達するか、またなぜ、この時期にこの動作を習得しておかなければならないか、などについて解説する。	同　上	同　上
3	足の形態と機能の発達（５歳前後）	この世に生を受けて間もなく、ヒトは臥位から立位へと大きな姿勢転換を強いられる。この時期、神経系の発達と共に、身体の土台としての足の機能も急激に発達する。 本章では、直立・二足歩行というヒト特有の移動様式に注目し、幼児期の足の形態と機能の発達について解説する。	臼井　永男（放送大学助教授）	臼井　永男（放送大学助教授）
4	全身動作の習得（８歳前後）	サッカーボールを蹴って相手に正確にパスしたり、ピンポン球をラケットで巧みに打って相手に正確に返したりする全身動作は、8 歳前後に急速に発達する。これは全身を制御する神経感覚機能がこの時期に急速に発達することを示す。全身を制御する神経感覚機能の急速な発達が、全身動作と感覚系、全身動作のプログラム、基礎的動作の発達、全身動作の分化と統合、全身動作の巧みさなどとどのように関係するかについて述べる。なぜこの時期にこの動作を習得しておかなければならないか、などについて解説する。 本章では、それが他の身体的能力の発達に比べてなぜこの時期に急速に発達するか。	生田　香明	生田　香明

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
5	ねばり強さの習得（１２歳前後）	身体のねばり強さは、全身持久力で評価され、その能力は12歳前後に急速に発達する。ねばり強さの急速な発達が遅筋線維の発達、心血管系の発達、呼吸器系の発達およびそれらの発達の総合的機能としてあらわされる最大酸素摂取量とどのように関係するかについて述べる。 本章では、全身持久力（最大酸素摂取量）の身体的能力が呼吸循環機能に規定される要因について、また健康を保持していくのにどのように関係していくか、更になぜこの時期にねばり強さを習得しておかなければいけないか、などについて解説する。	生田　香明	生田　香明
6	力強さの習得（１５歳前後）	身体の力強さは、筋力で評価され、その能力は１５歳前後に急速に発達する。力強さの急速な発達が速筋線維の発達、神経と筋の連関、筋力の発揮様式、最大筋力の発達などとどのように関係するかについて述べる。 本章では、筋力の身体的能力が筋機能に規定される要因について、また健康を保持していくのにどのように関係していくか、更になぜこの時期に力強さを習得しておかなければならないか、などについて解説する。	同　上	同　上
7	少子化社会と子どもの体力	我が国の少子化傾向は、昭和49年に始まり、現在も続いている。それは子どもの生活に計り知れないほど影響を与えてきた。少子化の進行が子どもの体力低下の進行、特に10歳児の体力データと幼児の体力データにどのような影響をおよぼしているか、また、幼児の遊び相手と遊ぶ人数に与えている影響などについて述べる。 本章では、子どもの体力低下の進行が少子化社会とどのように関係し、またそれがどの時期から、またどこに最も強く現れているか、更に、子どもの体力低下が健康にどのようにかかわってくるか、などについて解説する。	同　上	同　上
8	現在の子どもの「心」と「体」の発達の問題点	無気力、無関心、無感動な子どもの増加に始まって、校内暴力、いじめ、不登校など子どもの荒れが問題になって十数年になる。最近の報告では「不登校」の小、中学生が全国で約12万8千人に達し、また「暴力行為」が全国の学校で約3万5千2百件となって、いずれも過去最多を更新した。その原因として子どもが変わってきたことがあげられ、それを「心」の問題として対策が講じられてきたが、沈静化に向かわない。 本章では、子どもの「心」が問題になる前に既に「体」に問題が起きていたことを提起し、「心」と「体」の働きの関係などについて解説する。	同　上	同　上
身体の老化と教育				
9	生活習慣病の低年齢化（３０歳代）	ロンドンバスの運転手と車掌についての比較研究は、1953年 J.モリスによって報告された。ロンドンの2階建バスの階段を昇り降りしている車掌は、勤務中ほとんど座っている運転手に比べて心筋梗塞にかかる率がずっと低いと言うものである。 この論文はあまりにも有名で、今では古典的とさえ言われている。 しかし、近年のモータリゼーションの発展は、この研究結果が示唆しているにもかかわらず、車掌ではなく運転手の方を大量に育成していくことになる。 このことは本章で取り扱う生活習慣病の本質を示しているように思われる。	臼井　永男	臼井　永男

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
10	基礎代謝の低下（４０歳代）	基礎代謝は、生きるのに必要な最低の消費エネルギーであり、これは15歳（女子）～17歳（男子）歳頃から低下が始まり、40歳代でその低下が加速する。 本章では、40歳代でその低下が加速する要因について、遅筋線維の代謝活性と量、特に代謝活性が深く関わっていること、またそれが健康や身体的能力にどのような影響を及ぼすか、更にその低下防止はどのようにすればよいか、などについて解説する。	生田　香明	生田　香明
11	足機能の低下（６０歳代）	よく老化は足から始まると言われる。歩行スピードの低下、立ち上がり動作の緩慢、足腰の疲労や痛みが加齢とともに顕著になってくる。特に60歳代に入ると足の機能の低下に伴う種々な症状が著しくなり、しかもこのことはしだいに個人差が大きくなる様相を示す。 高齢化社会を迎え、また平均寿命も80歳になった今、60歳代というのはいささか　若すぎるようにも思われるが、転ばぬ先の杖、足の機能について触れるのには適切な時期だと思う。 本章では特に足の機能の低下から、中高年者の身体の特徴について解説する。	臼井　永男	臼井　永男
12	呼吸循環機能の低下（７０歳代）	肺の働きで酸素を血中に取り込み、心臓の働きで酸素や栄養素を全身に運搬する呼吸循環機能は、長寿と密接な関係にあるが、70歳代でその機能の低下が加速する。 本章では、70歳代でこの機能低下が加速する要因について、遅筋線維の量と代謝活性、特にその量の低下が深く関わっていること、またそれが健康や身体的能力にどのような影響を及ぼすか、更にその低下防止はどのようにすればよいか、などについて解説する。	生田　香明	生田　香明
13	脳機能の低下（８０歳代）	脳の神経細胞の大部分は生後分裂することはない。脳では、思考、記憶、判断をはじめとする高次の精神機能が営まれる。また、外界に対する応答として各種の運動や動作が調節される。 本章では、80歳代でこの機能低下が加速する要因について、脳の運動中枢の形態と機能の老年変化および前頭前野の形態と機能の老年変化が深く関わっていること、またそれが健康や身体的能力にどのような影響を及ぼすか、更にその低下防止はどのようにすればよいか、などについて解説する。	同　上	同　上
14	１００歳以上の超高齢者の増加	平成11年9月末に全国で100歳以上の長寿者が11.346人になった。この人たちは、明治32年以前に生まれており、長寿のためにどのような生活をすべきかを私たちに教えている。 本章では、この人たちの発育期および加齢期に生涯健康を支えてきた運動、栄養、睡眠が現在と比較してどのようであったか、またそれらが身体的能力にどのような影響を与えたか、そして100歳を超す長寿者がこの4～5年1000人のペースで増加を続けていることと、平均寿命が男女とも世界一を保持していることなどから、誰でも長生きできるとの認識が広まっているが、その通りになるかなどについて解説する。	生田　香明	生田　香明

回	テ　ー　マ	内　　　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
15	生涯運動が生涯健康に果たす役割	少子高齢社会が進行している我が国では、子どもの身体的能力が低下を続ける一方で、年齢相応の身体的能力の高い高齢者が増加を続けているため、平均寿命がわずかながら伸びている。 本章では、これまでの内容を総括しながら、国民の生涯健康のために国がどのような施策を打ちだしてきたか。また 100 歳を超すためには 4 つの関門をクリアしなければならないこと、そのためには最も適当な時期に最も適切な運動をすることが極めて重要であることなどについて解説する。	同　上	同　上

学校臨床社会学＝（‘０３）＝（Ｒ）

－ 教育問題をどう考えるか －

〔主 任 講 師：　苅谷　剛彦（東京大学大学院教授）〕
〔主 任 講 師：　志水　宏吉（大阪大学大学院助教授）〕

全体のねらい

現代の日本の学校には、さまざまな「問題」が存在する。いじめや不登校、教師のバーンアウト、「学力」や学習意欲の低下など、メディアなどで取り上げられる教育問題に、学校はどのように対応すればよいのか。この授業では、こうした問題にただちに答えを出すのではなく、これらの問題をどのようにとらえていくかという視点にまで立ち戻り、社会学の視点から検討を加える。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学校臨床社会学とは何か	わが国の学校社会学の歩みを振り返ったうえで、そこに臨床的な視点を導入することの意義について論じる。「現場に根ざした研究」「臨床現場を対象とする研究」「問題に対する診断と処方をめざす研究」など、「臨床」ということばに付与された意味の多義性を、具体的な研究実践例を引きつつ検討し、学校臨床社会学の有効性と可能性について考察する。	志水　宏吉（大阪大学大学院助教授）	志水　宏吉（大阪大学大学院助教授） 苅谷　剛彦（東京大学大学院教授）
2	学校臨床社会学の対象と方法	学校臨床社会学が対象とする問題領域について概観するとともに、問題理解の視点と分析のための方法論について論じる。問題把握における構築主義と本質主義の立場の違い、スクールエスノグラフィー、教室における会話分析、ライフストーリー論などの各種の方法論の有効性等について検討する。	酒井　朗（お茶の水女子大学助教授）	酒井　朗（お茶の水女子大学助教授）
3	いじめ	いじめ問題は、時には自殺にまで子どもを追いつめるような極めて重大な問題となっている。本講義では、先ず、いじめの原因論といじめをめぐる社会的反応について紹介する。さらに、いじめ問題を教育現場ではどのように指導して行くべきなのかについて、集団形成やコミュニケーション能力の育成という点から考えてみたい。	油布佐和子（福岡教育大学助教授）	油布佐和子（福岡教育大学助教授）
4	不登校	不登校という現象は子どもが「学校に行かないこと」の背景や、それへの解釈が歴史的に変遷してきた結果としてある。現在学校に行かないことは、矯正すべき病理としてよりも、調整や介入の必要な状況と位置づけて対処されているが、こうした状況とそれがもたらすものについて、多面的に考える。	伊藤　茂樹（駒澤大学助教授）	伊藤　茂樹（駒澤大学助教授）
5	少年非行	近年、少年非行－特に凶悪な非行や特異な事件－が増えているようなイメージが流布し、学校の問題との関連で論じられることが多い。しかしこれはどこまで妥当なのだろうか。統計と事例の検討により、少年非行と学校の関連を冷静にとらえなおし、学校現場で何ができるか、何をすべきかを考える。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	子どもの居場所	最近子どもが安心していられる場所に注目が集まり、「子どもの居場所」と命名されることが多くなった。ここではこの問題に対する関心の高まりの社会的背景を考察するとともに、塾や街角、インターネット空間など多様に広がる子どもたちの居場所の実態とそこでの子ども達のあり様を各種の調査研究を紹介しながら検証する。	酒井　朗	酒井　朗
7	学校の秩序のゆらぎ	学校で教育活動を行うためには秩序が必要であり、従来そうした秩序が維持されていることはいわば自明のことだった。しかし近年「学級崩壊」「私語の蔓延」など、この秩序のゆらぎを感じさせる現象が報告されている。これらを通じて学校の秩序の脆さと、秩序がいかに可能かについて考える。	伊藤　茂樹	伊藤　茂樹
8	変わりゆく教師生徒関係	日本の学校に見られる教師生徒関係の特徴を他の社会との比較を通じて確認した上で、私事化、情報化、心理主義化が進む今日の社会において、これまでの教師生徒関係がどのように変容しつつあるか、そこに潜む問題は何かについて論じる。	酒井　朗	酒井　朗
9	教師のバーンアウト	近年増加している教師の休職やバーンアウトについて、アンケート調査・インタビュー調査の結果から、その実態を明らかにする。また、こうした教師の心身の問題を、多忙化問題と関連づけて考え、「事実としての多忙」と「多忙感」の違いを考慮しながら、教師の仕事や、教師の意識の変化・変質についても考察する。	油布　佐和子	油布　佐和子
10	教師集団	学級崩壊などの問題に対処するに当たって、その回復過程に、同僚の教師集団が多大な影響力を持つことが指摘されている。また、欧米でも個人主義的文化の克服という点から教師の同僚性が注目され始めている。わが国の教師集団の現状についてその実態を明らかにし、その後、教師の協働性・同僚性の確立の問題について検討する。	同　上	同　上
11	カリキュラムと学力	2002 年度からの新しい学習指導要領の導入に伴い、学校現場ではさまざまなカリキュラム改革や授業改善に向けての試みが進行中である。そうした動向は、子どもたちの学力や学習意欲にどのような影響を及ぼすのか。果たして「生きる力」の育成という改革の目標に合致した成果が生みだされるのか。教室の現状から考えてみたい。	志水　宏吉	志水　宏吉
12	選抜と進路選択	現代社会において、学校は、社会的選抜の機関としての重要な役割を担っている。その役割は、学校臨床の場面では、生徒の進路選択をめぐる問題、それを支える進路指導の問題として立ち現れる。しかし、高等教育システムの変化・拡大、職業構造の複雑化や労働市場の急速な変化などを受けて、進路選択、進路指導の課題はかってに比べ困難になりつつある。そうした問題の背景とどのような対処が可能かについて、ここでは検討する。	苅谷　剛彦	苅谷　剛彦

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	マイノリティー問題	わが国の学校文化の性質とその変革の可能性を考えるために、マイノリティー・グループに属する子どもたちの学校体験について検討を加える。具体的な考察の対象とするのは、「ニューカマー」と呼ばれる外国人児童生徒である。彼らにとってのぞましい教育支援とはどのようなものなのかを見極めたい。	志水　宏吉	志水　宏吉
14	ジェンダーをめぐる問題	ジェンダーの視点とは、社会的・文化的に規定された女と男のあり方を意識的に見る道具である。学校現場において、性(ジェンダー)はどのような距離感をもって捉えられているのだろうか。またそのことが、臨床的問題の認識、解決への指向性にどのような影響を与えているのだろうか。ここでは、現場であるからこそ意識される＜性＞、現場だからこそ見えにくい＜性＞の側面に焦点を当て、教育問題・学校問題のなかに埋もれいているジェンダー問題の探り方を考察する。	吉原　惠子 （関西福祉大学助教授）	吉原　惠子 （関西福祉大学助教授）
15	臨床学校社会学：課題と展望	臨床的な＜知＞の重要性が叫ばれる中、社会学という学問の立場から、学校の臨床的な問題にどのように取り組むことができるのか。14回までの授業をもとに、学校臨床社会学の今後の課題と展望について討論する。	苅谷　剛彦	苅谷　剛彦 志水　宏吉 酒井　朗

＝学校臨床心理学（‘０２）＝（Ｒ）

〔主 任 講 師： 馬場　謙一（放送大学教授）〕

全体のねらい

児童生徒の精神的健康に関わる諸問題を分析し、それらの背景に、社会・家庭・学校がどのように関与しているかを明らかにし、児童生徒の健康な成長を促していくためにどのように問題を解決していくべきか、また、心理的援助をどのように与えていくべきか、種々の立場から方策を探っていく。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	学校臨床心理学の要請	児童生徒の情緒障害、教師の心身の疲労、学校内の種々のトラブルなど、学校をめぐる多岐にわたる問題の原因を考え、心理学の領域からどのような寄与ができるかを検討する。	馬場　謙一（放送大学教授）	馬場　謙一（放送大学教授）
2	学校臨床心理学の目的と対象	学校をめぐる諸問題に、臨床心理学が何を寄与できるか、問題解決にどのような視点と方法を提供できるか、その可能性と限界を考える。また、学校臨床心理学のあるべき姿を考える。	同　上	同　上
3	学校臨床心理学の方法① 力動的方法	学校臨床心理学を実践していく場合、種々の立場により方法が異なってくる。ここでは力動的立場について述べ、その有効性について検討する。	同　上	同　上
4	学校臨床心理学の方法② 行動的方法	学校臨床心理学を実践していく場合の行動的方法について、理論的な立脚点と具体的な応用の方法を述べる。	茨木　俊夫（埼玉大学教授）	茨木　俊夫（埼玉大学教授）
5	学校臨床心理学の実践	児童生徒及び教師への心理的援助をいかにして行うか、また校内の心理的諸問題の予防活動はどうあるべきかを考える。	同　上	同　上
6	児童・生徒の理解	児童生徒の心をどのようにして理解し、それを教育、心理的援助、生活指導などにどう生かして使って行くかを考える。	芳川　玲子（横浜国立大学助教授）	芳川　玲子（横浜国立大学助教授）
7	カウンセリングの基礎	傾聴、受容、共感など、カウンセラーに求められる基本的な態度と、生活史的発達論的理解と自我機能に関する知識の重要性など、カウンセリングの基礎となる事柄を述べる。	馬場　謙一	馬場　謙一

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	学校カウンセリングの理論と実際	学校カウンセリングの原理、方法、対象について述べ、ついでその実際について事例にそくして検討する。	芳川　玲子	芳川　玲子
9	学校教育相談の意義と実際	学校において教育相談の果たすべき役割とその意義について述べ、ついでその実際について事例にそくして検討する。	平尾　美生子（昭和女子大学教授）	平尾　美生子（昭和女子大学教授）
10	学校臨床の実際①不登校	現在急増している不登校について、その実態と援助の方法を述べる。	鍋田　恭孝（大正大学教授）	鍋田　恭孝（大正大学教授）
11	学校臨床の実際②ひきこもり	ひきこもりを続ける児童生徒について、その実態と援助の方法を述べる。	同　上	同　上
12	学校臨床の実際③いじめ	いじめ現象の心理的背景、いじめの実態、解決の方法について述べる。	同　上	同　上
13	学校臨床の実際④学業不振・学級崩壊など	学業不振、学級崩壊、教師に蔓延する心身症など、学校内の種々の問題をとり上げ、現代社会や学校システムとの関連を考える。	芳川　玲子	芳川　玲子
14	教師への協力と支援体制	種々の困難を抱える教師に対して、学級カウンセラー、養護教諭、などの協力体制をどのようにして作り上げるか、またその関係はどうあるべきか、人間関係をどう調整すべきかなどについて述べる。	岡田　守弘（横浜国立大学教授）	岡田　守弘（横浜国立大学教授）
15	学校臨床心理学の課題	学校臨床心理学が直面している種々の課題を明確化し、その解決の方法を考える。	同　上	同　上

＝生涯学習論（‘０２）＝（Ｒ）

－生涯学習社会の展望－

〔主任講師：　岩永　雅也（放送大学教授）〕

全体のねらい

近代国家では、例外なく、学校教育システムが人的資源の形成と配分の最も重要な装置またはエージェントとして機能してきた。そこでは、若年時に得た学歴を主な指標とする達成評価と選抜の結果が職業達成や社会階層を決定し、人生のありかたさえも決めてしまうようなメカニズムが働いていた。学歴社会と呼ばれる社会の形態である。しかし、高齢化や少子化、脱工業化といった大きな流れの中で、従来のそうした仕組みが十全に機能しなくなったことが指摘されるようになっている。学校教育の枠をこれまでのように固定的で絶対のものと考えない生涯学習の理念が、とりわけ現代の状況に適合的な考え方として重要視されるようになってきている。本講義では、そうした今日的な状況をふまえ、社会全体を見通すマクロな立場から、まず近代国家に必須であった人材形成の仕組みとしての学校と社会の歴史的な関係を概観し、それが変容を遂げつつある今日の諸事情を俯瞰する。ついで生涯学習に関わる社会的経済的な状況の変化を整理し、世界各国の生涯学習の現状を概観した上で、望ましい「学習社会」実現の展望と、それに向けての課題の整理を行う。本講義の履修にあたっては、ミクロな視点に立つ学部科目『生涯学習と自己実現』を履修しておくことが望ましい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	生涯学習の出自	生涯学習の理念はどのような背景のもとで、いつ、どのようなものとして登場し、社会にどう受け入れられてきたのだろう。ここでは、まず生涯学習の出自とその背景を整理し理念の変遷を跡付けることで、生涯学習を社会全体の視点から検討するという姿勢を明確にしていく。	岩永　雅也（放送大学教授）	岩永　雅也（放送大学教授）
2	近代国家と教育	近代国民国家は、例外なく学校教育制度を近代的国民の形成に利用してきた。そうした近代化における国民教育としての学校教育の意味と役割について検討する。その上で、特にわが国の明治初期に早生的に萌芽していた生涯学習的理念の国民教育的理念への転換についても考察を加える。	同　上	同　上
3	学歴と人材配分	わが国は、戦後教育改革以後、高度経済成長期を経て、学校教育による付与資格が労働市場での人材配分の大勢を決するという、いわゆる「学歴社会」のシステムを作り上げてきたといわれている。生涯学習の理念とは対極にあるともいえるその人材育成・配分システムについて検討する	同　上	同　上
4	学校教育の限界	戦後半世紀にわたり、わが国の社会化と文化の機能的中枢に位置してきた学校教育の功績とその意義を明らかにした上で、現代の学校が直面する教育力の低下の現状を分析する。さらに、教育の自由化、六年一貫制などそれを克服するための種々の試みについても、その有効性を検討する。	同　上	同　上
5	労働とリカレント教育	わが国は、伝統的にOJT(就業しながら技能を修得する)の比重が高い社会であった。しかし、生産技術や情報技術の著しい進歩は、OJT 中心の技能修得を困難にしつつある。労働とその技術習得を巡る環境変化と、新しいリカレント教育の潮流について紹介し、その今日的な意味を探る。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	成人教育と社会教育	成人教育には、移民や長期滞在外国人などのニューカマーに対する再教育という政策的側面があったが、広義の社会政策の視点から、伝統的な成人教育の政策的な意義とその変遷、そして現代の生涯学習への継続性といったテーマを詳細に検討する。また、その日本的な形態である社会教育もすぐれて政策的な意味を持っていたが、現在、社会の総体的な多様化と価値の自由化の潮流の中で、従来型の社会教育はその使命を終えつつあるといわれている。ここでは、その歴史的な意義とその功罪を整理して考察する。	岩永　雅也	岩永　雅也
7	社会変動期の生涯学習	1990年代後半に入り、わが国でもさまざまな社会的変動の表出が顕著に見られるようになった。高齢化、少子化、情報化の著しい進展、産業の空洞化、長期の不況と雇用の低迷、グローバライゼーションの進展等といった変動する今日の社会状況と、それらが生涯学習に与えるインパクトについて考察する。	同　上	同　上
8	余暇とスポーツ	労働環境の変化、あるいは主婦のライフコースの変化に伴い、自由裁量時間のあり方が質量ともに変化してきている。また、余暇活動の一環としてのスポーツ活動も変わりつつある。日本人の余暇生活とスポーツ活動の変化をさまざまな側面から検証し、それが生涯学習とどう関わっているかについて実証的に検討する。	同　上	同　上
9	生涯学習支援と行政	多くの行政主体では、社会教育からの継続性を保ちながら生涯学習に関する支援施策が行われている。行政による生涯学習支援の現状と問題点を具体的に考察し、あわせて生涯学習指導者のリクルートや育成が地域的にどのように行われているかについても検証する。また、生涯学習に関わるボランティア活動や情報提供、データベース（バンク）などについてもその現状を紹介する。	同　上	同　上
10	事業としての生涯学習	今日、生涯学習は無視することのできない巨大な市場を構成しつつある。生涯学習それ自体が巨大な事業分野となっているといってもよい。事業あるいは経済活動としての生涯学習はどのように運営され、どんな問題を抱えているのだろうか。ここでは生涯学習の経済学的な考察を試みる。	同　上	同　上
11	海外の生涯学習	世界各地の生涯学習の現状とその特色を紹介する。特に近代大学が発祥した欧州諸国と生涯学習の最先進国である米国を中心に取り上げる。欧州諸国では、その伝統と社会変動との狭間で多様な可能性を模索する現状を、また、早くから成人教育への積極的な取り組みが見られた移民国家米国では、近年のITの発達を背景に、年齢層、目的、レベル、学習方法等に関して非常に多様な生涯学習実践が行われている状況を、それぞれ紹介する。	同　上	同　上
12	世界の遠隔高等教育	世界には、放送大学と同様に何らかのメディアを利用して遠隔教育を行っている大学が数多く存在する。各国の生涯学習の重要な一翼を担うそれらの遠隔高等教育機関の現状を紹介し、その社会的背景と課題について検討する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	IT 時代の生涯学習	情報通信技術の飛躍的な進展によって、生涯学習者、とりわけ個別在宅学習者にとって非常に強力な学習ツールが提供されるようになった。IT 時代とも呼ばれる現代と近未来のメディア環境を概観し、IT 化の生涯学習への影響と今後の可能性について考察する。	岩永　雅也	岩永　雅也
14	生涯学習の評価と調査	生涯学習は、ややもすると施設や機会の提供、支援システムの構築といったインプットのみで語られがちであって、その成果や学習者の達成についての評価調査が見落とされる傾向にある。ここでは、生涯学習への評価および学習者の意識などを調査する具体的な方法について学習する。	同上	同上
15	「学習社会」実現への道	ごく近い将来、すべての定型的な教育が生涯学習を軸に統合され、学ぶことに関する限り規制や障害のない「学習社会」が出来すると期待されている。しかし、その実現のためには、多くの問題が解決、改善されなければならない。望ましい学習社会を実現するための条件、課題にどのように取り組んでいくべきかについて議論を展開する。	同上	同上

＝情報教育論（‘０２）＝（TV）

－教育工学のアプローチ－

〔主任講師：　菅井　勝雄（大阪大学大学院教授）〕
〔主任講師：　赤堀　侃司（東京工業大学大学院教授）〕
〔主任講師：　野嶋　栄一郎（早稲田大学教授）〕

全体のねらい

近年、情報化社会の進展によって、学校教育から高等教育に至るまで、情報教育は必須のものとなり、「情報教育論」の構築が要請されるようになってきた。そこで、本科目では情報通信技術の進歩、社会の情報化、学校教育の情報化などと、人間の学習や発達、また必要な能力の育成との相互関連を考えながら、情報教育論を論述する。なお、副題に示すように、教育工学のアプローチによる。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	情報教育論の概説	初回なので、情報教育論の概説を試みる。近年、情報教育論が、教育学の一分野としてなぜ登場することになったのか、またその目的とするものは何か、さらに、学としての特徴は何かなどを論じながら、今回の講義の全体像を概説する。	菅井　勝雄（大阪大学大学院教授）	菅井　勝雄（大阪大学大学院教授）
2	メディアと学習～情報教育の準備期	情報教育が始まる前のメディアと人間の学習や発達との関係を含ませ、特に理論的な観点から取り扱う。それは主として、教育工学におけるコンピュータ利用の教授・学習システムの変遷などを論じる中で示される。それはまた、教授環境から学習環境の重視への方向でもある。	同　上	同　上
3	情報と学習～情報教育のスタート	情報教育が我が国で始められてからの人間の学習や発達との関係を、特に理論的な視点から取り扱う。ここではまた、1980年代の分散型情報化から、1990年代のネットワーク型情報化への進展とも関連し、情報教育の在り方の変質とその発展が論じられる。	同　上	同　上
4	学習環境のデザイン	メディア利用の学習環境の構成と広がりに関して、その実際を３例あげて論ずる。最初に、小学校における算数理解システム、続いて、コンピュータ支援協調学習システム、最後にテレビ放送とインターネット融合システムをとりあげる。	同　上	同　上
5	情報とリテラシー	社会生活を送る上で必須の能力がリテラシーであるが、情報社会では情報の読み書きに相当する情報リテラシーが注目されるようになった。また、メディアリテラシーを含め、広く情報技術を活用する能力が求められてきた。その考え方について述べる。	赤堀　侃司（東京工業大学大学院教授）	赤堀　侃司（東京工業大学大学院教授）
6	情報教育のカリキュラム	我が国では高等学校に普通教科「情報」と専門教科「情報」が新設されて、その教科が実施されようとしている。その教科のねらいについて概説する。特に普通教科「情報」については概念が広い。その背景となっている考え方と特徴について述べる。	同　上	同　上
7	小・中学校における情報教育の実際	教科の中で教科目標を達成する教育方法としての情報手段の活用と、情報技術を活用する情報教育が実際の小・中学校で展開されている。この実践を紹介すると同時に、情報手段の活用と情報教育について、その特徴といくつかの課題について述べる。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	教育の情報化の進展	我が国では教育の情報化推進のために、100校プロジェクトやEスクウェアプロジェクト、こねっと・プランなど実践的な取り組みがなされてきた。また、教員研修、情報処理技術者派遣、ボランティア活動支援などの取り組みについて、その盛夏と課題について述べる。	赤堀　侃司	赤堀　侃司
9	ネットワーク利用による遠隔教育	該当年齢人口に占める大学在籍率が50%を超えるユニバーサルアクセス型の時代を迎え、オンキャンパス型の大学にオフキャンパス型の大学の機能を併せ持つ必要性が生じてきた。早大、スタンフォード大の事例を中心に、遠隔教育の具体例と将来展望を試みる。	野嶋　栄一郎（早稲田大学教授）	野嶋　栄一郎（早稲田大学教授）
10	デジタルネットワークを利用したテスト	ニュージャージー州プリンストンにあるＥＴＳを訪問するかたちで、コンピュータベースドテスティングの基礎理論、テスト項目の収集と分析、管理、コンピュータ環境について詳しく解説し、さらに将来的な可能性について言及する。主幹研究員村木英治氏に解説依頼する。	野嶋　栄一郎 村木　英治（ＥＴＳ主幹研究員）	野嶋　栄一郎 村木　英治（ＥＴＳ主幹研究員）
11	大学における教育方法の改善	ディジタル化された教育環境、教育方法の紹介に焦点化する。（１）ディジタルコンテンツの例として早稲田大学演劇博物館の事例、（２）バーチャルリアリティによる教育事例、（３）電子教科書による授業事例を柱に、それらと大学教育の改善を関連づける。	野嶋　栄一郎	野嶋　栄一郎
12	情報技術の進展	通信ネットワークの広帯域化や携帯端末の普及など、情報技術の進展について展望する。さらにＥＵの国際マルチメディア教科書プロジェクトや台湾情報通信科学館などを事例に、新技術の教育利用や技術リテラシーの育成について考察する。	前迫　孝憲（大阪大学教授）	前迫　孝憲（大阪大学教授） 下條　真司（大阪大学サイバーメディアセンター教授）
13	地域の情報化	タイやメキシコ、世界銀行などの遠隔教育プロジェクトや、中国教育テレビに連動した衛星インターネット、「松原式」ネットワークなどを事例に、地域教育ネットワークについて考察する。さらに、米国スーパーネットなどを事例に、規制緩和と教育の役割について検討する。	前迫　孝憲	前迫　孝憲 吉田　雅巳（メディア教育開発センター助教授）
14	情報化の光と影	情報化の進展は、産業の生産性を高め、我々の生活に便利さや楽しさをもたらす一方で、人間が元来持っていたさまざまな能力を失わせ、非倫理的な行為や犯罪を誘発するとされる。こうした情報化の光と影について研究や実践の実際を紹介する。	坂元　章（お茶の水女子大学助教授）	坂元　章（お茶の水女子大学助教授）
15	情報教育の課題	最終回なので、これまで講義してきたことを踏まえ、情報教育の課題をめぐって、３人の主任講師を中心として、座談会形式でいくつかの項目について討議する。情報技術、情報デバイド、教員養成、研究方法論などをとりあげる。	菅井　勝雄 赤堀　侃司 野嶋栄一郎	菅井　勝雄 赤堀　侃司 野嶋栄一郎

＝発達心理学（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）〕

全体のねらい

ヒトは回りの人々との対人的やり取りを通して人間化、文化化への道を辿る。人間は生物学的な制約を受けながらも環境刺激によって道程が規定されながら発達を遂げる。発達の可塑性はきわめて大きく、しかも生涯発達し続ける存在である。本書は「生涯発達」・「文化」・「生涯学習」の視点に立ち、気質、感情、対人関係、自己意識、言語、思考など発達の諸相を描き出す。各章末には、その章で扱われた領域での代表的な研究を取り上げ、「研究ノート」として解説することにより、その領域における問題意識を具体的な研究課題にまで収斂させる方法論を読者に知らせることをめざしている。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	発達心理学の課題と方法	1950年代以降の発達心理学研究の動向を概観して発達心理学がどのような科学でありどんな役割をになっているものであるかを考察する。さらにそうした課題がどの程度達成されているのか、今後なすべきことはどのようなことであるかについてもふれる。次に発達心理学研究において用いられる主要な方法について紹介する。最後にこの科目全体の構成とそのねらいについて説明する。	三宅　和夫（北海道大学名誉教授）	三宅　和夫（北海道大学名誉教授）
2	発達初期の子どもの能力	かつては新生児・乳児は無能な存在とみなされていて心理学の研究はこの時期のことをあまり扱っていなかった。ところが20世紀半ばを過ぎるころから、この時期の発達についての研究が盛んになり、新生児・乳児が素晴らしい能力を持った能動的な存在であることを明らかにするような実証的資料が次第に蓄積されてきた。ここではこうしたことについて具体的に研究例をとりあげて説明し人間の発達における発達初期の意義を検討する。	同　上	同　上
3	気質と行動の発達	誕生後間もない新生児であってもその行動特徴においてかなりの個体差が見られることが知られている。それは生得的なものであると考えられるが、養育にあたる母親などに少なからず影響を及ぼすものである。ここではこのような生得的基礎をもつ行動特徴すなわち気質についての主要な研究を紹介し、さらに発達初期の気質がどのようにその後の行動発達とかかわっているかについて考察し、さらにそのことを通じて発達の安定性・可変性の問題についても検討する。	同　上	同　上
4	世界を捉えるしくみ：象徴機能の発生とことばの獲得	子どもは誕生時から感覚器官をフル回転させて環境と活発にやりとりしている。環境との感覚運動的なやり取りを通じて外界の認識を形成しているが、乳児期の終わりから対人的やり取りの中で視覚的共同注意や社会的参照、3項関係の成立に伴い、象徴機能が獲得され内面世界が成立するようになる。ことばは象徴機能を基盤に、生物学的制約と環境からの入力により獲得されていく。ことばの獲得は世界認識や対人関係の拡大をもたらす。	内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）	内田　伸子（お茶の水女子大学大学院教授）
5	情動の発達	情動表出や情動知覚の研究、情動のダイナミックシステム的アプローチを紹介しながら、情動の古典的理論と最近の機能主義的理論を比較しながら説明する。情動と行動との関係について、情動とコミュニケーション、情動と社会的行動、不安やディストレスの制御、ディスプレイルールの発達について研究を中心に説明する。また、情動の個人差について、気質と情動の関係、情動体験と自我、情動の文化差という観点から紹介する。	氏家　達夫（名古屋大学教授）	氏家　達夫（名古屋大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	他律から自律へ：母子システムと自律の発達	自律性の発達を生涯発達と文化の観点から説明する。自律性は文化的文脈の中で、子どもの状態の調整やしつけなどの親要因と、気質特徴、愛着、反抗などの子ども要因との相互作用を通じて発達する。子どもは他律的存在から自律的存在へと発達する。自律性は大人の発達課題でもある。子どもを育てる過程で親自身も成長する。そこには自律性の部分的な放棄が含まれる。成人期において自律と他律の新たなバランスが求められる。	氏家　達夫	氏家　達夫
7	対人関係の発達	乳幼児期から老年期までの対人関係の発達を扱う。人は生まれたときから家族の一員としての生活が始まり、家族の中での人間関係は発達にとって最も重要な環境を構成する。家族にとっても新たなメンバーの加入により、そのシステムの変容が起こり、メンバーそれぞれの年齢の変化にともないメンバー相互の間の関係の質も大きく変わっていくプロセスとメカニズムを考察する。また、家族の外の人間関係、特に仲間関係の影響も触れる。	臼井　博 （北海道教育大学教授）	臼井　博 （北海道教育大学教授）
8	想像力の発：思考能力の拡大とディスコ　ースの成立へ	子どもの拡散的思考、想像力は生活や対人的やり取りの中で発達していく。想像力の発達と軌を一にして、幼児期後期には、世界や自己を語る手段としてのディスコース（談話や文章、物語）が成立する。幼児初期～児童期にかけての、ディスコースの表現形の変化を追跡し、その表現をささえる創造的想像のメカニズムや認知機能について考察する。またの成立を支える創造的想像のメカニズムの発達について表現形の変化から探る。	内田　伸子	内田　伸子
9	日本の幼児教育実践の特徴	日本の幼児教育の実践の特徴を主にアメリカのそれとの比較を通して描き出していきたい。具体的には最近のアメリカと日米の研究者たちの日米の幼児教育場面のエスノグラフィーや調査データを利用しながら、実際の教師の実践の方法、その背後にある教育の目標、児童観の違いを考察する。特に、教師のもつ土着的な教育方法に関する素朴理論（ethnopedagoy）を取り上げて、分析を行う。	臼井　博	臼井　博
10	学校文化のディスコ　ース：書くこと・考えること	子どもが生活の中で育んできた一次的ことばは読み書き能力の獲得にともなって二次的ことばへと重層的な発達をとげる。読み書き能力によって時間・空間を隔てたコミュニケーションが可能になるとともに思考の手段として内面世界に深く関わるようになる。読み書き能力を獲得するという課題は、学校文化に適応することにつながっている。作文の情報処理過程や自分史の意義の考察に基づき、書くことと考えること・生きることの関わりについて探る。	内田　伸子	内田　伸子
11	学校での学び	学校で学ぶこととして、いわゆる認知的学習のほかに、社会的なスキル、さらには知的な課題解決の構えに影響する動機づけシステムの発達について、学校文化と関連づけて考察する。また、学校における社会化の重要な agent としての教師の子どもとの相互交渉のしかた、教師自身の職業的な発達についても考える。その場合、教育実習の効果を含め、教師教育の在り方についても生涯発達の視点から考察する。	臼井　博	臼井　博

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
12	メディアからの学び	現代社会は産業によって供給される情報伝達手段や情報表現手段が多数あり、大人と同様子どもも長時間接し、特に家庭や学校などを越えた広い世間への窓になっている。最初に接する活字メディアとしての絵本は親子の人間関係の中で本への導入を行う。その後、読書へと発展する。テレビ、テレビゲームは映像的メディアとして新たな活動を生み出し、子どもに大きな影響を与える。電話やインターネットが新たな人間関係を作り出している。	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）	無藤　隆（お茶の水女子大学教授）
13	「臨床実践の発達的基礎」	発達心理学は、子どもから成人の発達を検討することを通して、発達の歪みやそこで生じる心理的問題の発生的根拠を示す。だが、その発生の要因は単一であることは滅多にない。多くの「危険（リスク）」要因が関与し、また要因に影響される度合いの個人差も大きい。例として、うつ病や食異常の問題を取り上げ、発達的リスク要因を解説する。また、家族や学校におけるメンタルヘルスの保持への教育や介入の代表的方法を紹介する。	同上	同上
14	自己意識の発達	1歳頃の身体的自己の成立から初め、4歳頃に心が実体として存在することを理解する。そこから児童期に掛けて、自己概念が次第に成立する。児童期の後半に入ると他者との比較による自己概念が成り立ち、自己尊重感の程度が重要になる。思春期に入ると、孤独感も感じるようになり、自己の見直しが行われる。その模索から成人期に入る頃に大人としてどう生きるかの自覚が成り立つが、その見直しは生涯にわたり繰り返されるだろう。メディア毎に年齢を追って記述する。1）絵本への接触、2）本への導入、3）テレビメディアへの接触とテレビ的世界への導入、4）テレビゲームと架空世界の楽しみ、5）電話とインターネットが変える人間関係のトピックスを取り上げる。	同上	同上
15	成熟と老い：成人期～老年期の学び	中年期の発達について、既存の理論や研究と同時に、現在行っている追跡研究からいくつか事例を紹介しながら説明する。エイジングは発達ととらえることができる。個人は、さまざまな変化にアクティブに適応している。それは、心理的適応という側面と新たな技能の習得という側面からなっている。個人は老いるということを学ぶのである。また、心身ともに健康を保っている高齢者の研究を紹介し、豊かな老いについても考える。	氏家　達夫	氏家　達夫

＝才能教育論（‘０２）＝（TV）

－スポーツ科学からみて－

〔主 任 講 師： 宮下 充正（放送大学教授）〕
〔主 任 講 師： 平野 裕一（東京大学助教授）〕

全体のねらい

遺伝的に規定されている範囲内で、子どもの能力を最大限に伸ばすためには、個人の個性を考慮し発達の度合いに応じて、もっとも適切な教育が提供されるべきことはいうまでもない。この科目では、個人の成長・発達と密接な結びつきをもつスポーツの分野に限定して、高度な能力を効率的に育成するためにはどのような教育がなされるべきかを、スポーツ科学関連分野で蓄積されてきた知見に照らして考えたい。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	才能は教育できるか	才能とは、特異的な目的を達成させることのできる、遺伝的な要因が強く影響するが訓練すればそれだけ高度になる能力と定義する。そして、才能教育の目的は、それぞれの特異的な分野において優れた成果を生みだすことができるように能力の向上をうながすことである。スポーツにおける才能教育について、今後解明されるべき問題点を挙げる。	宮下 充正（放送大学教授）	宮下 充正（放送大学教授）
2	スポーツパフォーマンスの制限因子－体力と運動技術－	スポーツの成績は、運動に必要とされるエネルギーの産生能力と、エネルギーを運動の目的に応じて効率よく利用する能力とによって決まる。この能力には向上の著しい年齢がある。その年齢における教育の成果をいくつかのスポーツを例に検討する。	平野 裕一（東京大学助教授）	平野 裕一（東京大学助教授）
3	運動能力とその発達における遺伝性	運動を遂行する能力は、どの程度先天的に決定され、あるいは、どの程度後天的に開発可能なのだろうか？最近、分子遺伝学的研究、双生児法・発育発達学を組み合わせた研究などにより、新たな知見が蓄積されつつある。それらの成果を、紹介、解説するとともに、今後すすめられるべき研究の方向を提示したい。	山本 義春（東京大学教授）	山本 義春（東京大学教授）
4	随意運動の獲得－学習と発達－	運動は筋肉の活動によって発現するが、その活動は脳・神経系の働きによって制御される。これら脳・神経系の働きの中には、恒常性維持という観点から自動的かつ不変（系統発生的）と考えられているものもあれば、適応・学習といった現象で表現されるように、可塑性に富んだものもある。脳・神経系の作用機序に関する最近の研究動向を紹介し、例えば自動性と可塑性との境界など、解決されるべき課題を考えていきたい。	同 上	同 上
5	系統発生的動作か、個体発生的動作か－歩くと走る－	誕生して１年目ぐらいから歩け、２年目ぐらいから走れるようになる。これら歩くと走るは、特別な訓練をしないでも身につく動作なのだろうか。歩く、走るの運動力学的解析から、この問題を探っていきたい。	中村 好男（早稲田大学教授）	中村 好男（早稲田大学教授）
6	個体発生的動作の学習－跳 ぶ－	跳躍動作は、段差のあるところから跳び下りる、水溜りを跳び越すといった経験を経て身につく。跳ぶ機会の減少した中で成長する子どもの跳躍能力は年々低下している。跳躍動作の解析から、この問題を提起したい。	深代 千之（東京大学助教授）	深代 千之（東京大学助教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	個体発生的動作の学習 －水泳－	学習しなければ身につかない代表的動作である泳ぐについて、まず、初心者が泳ぐという動作を身に付けるまでと、世界のトップレベルの記録が出せる泳力を身につけるまでの経過を解説する。	宮下　充正	宮下　充正
8	個体発生的動作の学習 －投げる－	上手にボールを投げる動作の学習は人間にしかできない動作である。この事実には直立二足歩行という人間の最も基本的な身体的特性が深く関わっている。人間には誰にでも上手に投げられる可能性が与えられているが、適正な年齢に適正な指導や練習がなされないと十分にその可能性を生かすことはできない。	桜井　伸二 （中京大学教授）	桜井　伸二 （中京大学教授）
9	個体発生的動作の学習 －止まっているボールを打つ	打つ動作には、木づちで叩くといった動作から、止まっているボールを長いクラブで打つゴルフがある。ゴルフはボールを遠くへとばすばかりではなく、その方向も重要である。アメリカにおけるゴルファーの教育機関での指導過程を紹介し、その合理性を追求したい。	深代　千之	深代　千之
10	個体発生的動作の学習 －動いてくるボールを打つ	動いているボールを打つ動作には、飛んでくるボールを打つテニスのストロークや野球のバッティングなどがある。野球王国アメリカでの野球選手の養成課程を紹介し、飛んでくるボールを正確に打つ才能を伸ばす視点を提示したい。	平野　裕一	平野　裕一
11	力強さの増強 －レジスタンス・トレーニング－	好成績を収めるためには、発揮する力が大きい方が有利なスポーツの競技種目がある。このような筋力の向上に関与する栄養、運動、休養などの因子について解説し、レジスタンス・トレーニングの今後を展望する。	同　上	同　上
12	ねばり強さのトレーニング	運動を長時間続けていても、からだの動きの速さが低下しない方が有利なスポーツの競技種目がある。このような持久力に関与する生理学的機能について、マラソンのトップランナーを例にあげて解説する。	八田　秀雄 （東京大学助教授）	八田　秀雄 （東京大学助教授）
13	中高年齢者に見られる教育効果 －未開発だった才能の発掘－	長寿社会となり生涯学習が盛んになった。そこでは、さまざまな運動講座が開催されている。成長期に経験しなかった動作様式が中年を過ぎても身につく事実から、才能教育の可能性を探ってみたい。	中村　好男	中村　好男
14	身体障害者のスポーツ参加から才能教育を考える	社会福祉の一部考えられていた障害者スポーツの中からも競技スポーツ志向が芽生え、パラリンピックに参加するスポーツエリートのパフォーマンスは驚くほど高度である。健常者と異常者という二大別は無意味になりつつある。個人の能力を最大限に伸ばす過程について障害者のスポーツ参加から考える。	桜井　伸二	桜井　伸二
15	個性と成長段階に応じた運動指導の主眼	1個の細胞から増殖し、複雑な組織体となって誕生した個人は、その遺伝的制約の範囲の中で、成長という時間と環境という刺激とによって影響されながら成熟していく。　その過程で教育はどうあるべきか考えていきたい。	宮下　充正	宮下　充正

＝道徳性形成論（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　大西　文行（横浜市立大学教授）〕

全体のねらい

この科目では、道徳性発達・形成に関する諸問題を考えることにする。道徳性をどのように考え、定義するかは大変困難な問題であるが、この科目では、「自他の福祉、幸福に資する人格的資質」と考え、講義の前半では、それらが諸学や社会でどのように概念化され、また道徳性は、形成過程がどのように記述され、測定されているかについて考える。
個人は、他者、文化、社会との関係で発達、形成、生成されることから、他者、文化、社会との相互作用関係で道徳性発達・形成を考える必要がある。講義後半では、これらの相互作用で道徳性発達・形成について考察し、「自他の福祉、幸福に資する人格的資質」の形成を考察する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	道徳性とは	道徳、道徳性の語源、語義、哲学、倫理、心理学の諸学から考察する。	大西　文行（横浜市立大学教授）	大西　文行（横浜市立大学教授）
2	道徳性発達・形成諸理論　1	道徳性を人間の精神機能、認知・知的、情意的、意志的、行為的側面から考える。 道徳性の認知的側面として、道徳的判断、推論についての心理学諸理論を考察、検討する。	同　上	同　上
3	道徳性発達・形成諸理論　2	道徳性の情意的側面として、良心、共感性、罪障感、配慮、思いやりなどについての心理学諸理論を考察、検討する。	同　上	同　上
4	道徳性発達・形成諸理論　3	道徳性の行為的側面、人格について心理学諸理論考察する。	同　上	同　上
5	道徳性発達過程	道徳性の認知的側面についての発達過程を考察する。	同　上	同　上
6	道徳性形成過程	道徳性の情意的、行為的側面の発達・形成過程を考察する。	同　上	同　上
7	道徳性測定　1	道徳性発達の認知的側面の検査を考察し、その測定法の取得を目指す。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	道徳性測定 2	道徳性発達の情動的側面およびHEARTについて考察し、その測定法の取得を目指す。	大西 文行	大西 文行 明田 芳久（上智大学教授））
9	道徳性形成と家庭教育	道徳性発達、形成の要因について、発達、意図―非意図、体系―非体系の軸から考察する。 家庭における道徳的環境、しつけ、養育態度や人間関係を考察する。	同上	大西 文行
10	道徳性形成と学校教育	学校教育での道徳教育と道徳性形成の関係を考察する。	同上	同上
11	道徳性形成と同輩関係	同輩、交友関係と道徳性形成の関係を考察する。	大西 文行 戸田 有一（大阪教育大学助教授）	大西 文行 戸田 有一（大阪教育大学助教授）
12	道徳性形成と社会・地域教育	社会、地域、共同体の道徳的環境と道徳性形成の関係を考察する。	同上	同上
13	道徳性形成と少子化、高齢化社会	少子化、高齢化社会と道徳性形成との関係を考察する。	同上	同上
14	道徳性形成と情報化社会	情報化社会と道徳性形成の関係を考察する。	同上	同上
15	道徳性形成と国際化、多文化社会	国際化、多文化社会と道徳性形成を考察する。	大西 文行 小林 亮（玉川大学助教授）	大西 文行 小林 亮（玉川大学助教授）

＝逸脱行動論（‘０２）＝（TV）

〔主任講師：　清永　賢二（日本女子大学教授）〕
〔主任講師：　徳岡　秀雄（元京都大学教授）〕

全体のねらい

最近の青少年による逸脱行動に焦点を当て、Ⅰ．逸脱行動研究への導入、Ⅱ．逸脱行動研究の理論、Ⅲ．逸脱行動研究の方法、Ⅳ．少年の逸脱行動過程、Ⅴ．逸脱少年の司法過程、Ⅵ．逸脱研究の最前線と逸脱の行方、等について社会学及び社会心理学的視点から総合的体系的に論じる。本講義によって、少年たちによる逸脱行動の世界的スケールに立った最新の知識を学ぶことが可能となると同時に、逸脱行動への受講生自身の知的探求行動を促進活性化することを目的とする。

回	テーマ	内　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	逸脱行動の世界	少年たちによる逸脱・非逸脱・反逸脱行動が境界性を喪失しながら膨張を加速化している。何が逸脱行動か、何が逸脱行動でないのか。社会全体の価値や規範の混乱を背景に、少年たちの間での逸脱世界も揺れ動く。逸脱世界を俯瞰し、そこでの少年たちの逸脱的行動実体についての全体的相貌と問題を論じる。	清永　賢二（日本女子大学教授）	清永　賢二（日本女子大学教授） 徳岡　秀雄（元京都大学教授）
2	逸脱研究の今日的意義	逸脱は悪か。悪とは何か。悪は悪か。悪は不正義か。悪は時として正義ではないのか。それでは正義とは何か。一画的皮相的「逸脱＝悪」論を検証し、少年による逸脱行動の現実的作用と意味を問い直す。	岩永　雅也（放送大学教授）	岩永　雅也（放送大学教授）
3	「非行少年」の発明	非行という概念は、少年観の成立と共に、犯罪と貧困とは相互因果的であり、しかも幼少期の経験に大きく規定されているとの認識に基づいて、刑務所から犯罪少年を、救貧院から浮浪児を救出し、両者のために少年救護収容施設が創設される過程で生み出された。犯罪少年プラス貧困少年という非行の原型は、文化・時代による修正を受けながら、今日にいたっている。	徳岡　秀雄（元京都大学教授）	徳岡　秀雄
4	実態・理論・政策	文化と歴史に規定された社会規範からの逸脱の一部が犯罪・非行として把握される。その実態を説明しようとするのが理論（仮説）であり、政策は理論を根拠に採用されるものだと想定される。しかし本章では、実態→理論→政策、という常識的見解よりもむしろ、現実には、政策→理論→実態、という流れなのだという点を強調したい。そこに大きく関わってくるのが、背後仮説という概念である。	同　上	同　上
5	社会的緊張理論の栄枯盛衰	社会学的犯罪理論が成長し、シカゴ学派とマートンのアノミー論とを統合した分化的機械構造論へと精緻化される。この理論（仮説）は時代の追い風を受けて、ケネディ政権のシンボル的政策にまで発展した。理論と政策との相互規定関係をたどるとともに、理論（仮説）は、さらに大きい時代的背景の中に位置づけてこそ意味を持ちえたのだという側面を明らかにする。	同　上	同　上
6	時代精神としてのラベリング論	政策・理論・実態、三者の相互規定性を如実に物語る一例として、1960年代後半から70年代のアメリカを席巻したラベリング論を取り上げる。伝統的実証主義の発想を逆転させたラディカルな主張が、時代精神の変化と共にたどった命運を記述する。また、ラベリング論の政策化は、意図的行為の意図せざる結果、潜在的逆機能の例示としても面白い。	同　上	同　上

回	テ ー マ	内　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	逸脱行動の量的把握	具体的に逸脱行動をどの様に把握し理解するのか。１つの方法として官庁統計を中心とした各種量的把握方法がある。量で把握される「人間行動」の長所と短所、意義と限界、現実場面における具体的展開手法について論じる。	清永　賢二	清永　賢二
8	逸脱行動の質的把握	官庁統計を中心とした量的把握に対し、量では把握困難な日々の微細な少年たちの日常生活世界における逸脱行動に注目した質的把握方法がある。例えば、参加観察法を中心としたエスノメソドロジーは、逸脱行動研究にどの様な新しい視界を開いて行くのか。今後更に必要とされるであろう逸脱行動の質的把握の深部に迫る。	同　上	同　上
9	逸脱行動の現象学	少年による様々な逸脱行動が噴出する。個々の逸脱行動がそれ自身で、あるいは複数の行動が相互に縒り縺れあいながら、時代時代の逸脱行動世界を紡いで行く。複雑に縒り捩れた逸脱行動の現象を解きほぐし、歴史的時間や文化の変遷の中での逸脱行動の現象学的特性を解析する。	同　上	同　上
10	原因理解のための理論枠組み	少年はなぜ逸脱行動を働くのか。原因追及のための様々な理論枠組みが用意される。下位文化論、社会的葛藤論、社会的統制論の３理論を中心に、少年による逸脱行動の原因追及のための理論の整理と、こうした理論を下敷にした仮説モデルの設定を試みる。	同　上	同　上
11	逸脱行動の定量的定性的原因探求	理論は現実に検証されてこそ、その意味を深め、さらなる発展を可能にする。各種統計調査、また参加観察法などを通して定量的定性的に現実の少年たちの逸脱行動の原因を探って行く。	同　上	同　上
12	少年法の歴史と現在	「非行」の発明以来、少年保護体制が充実し、世界最初の少年裁判所がシカゴに創設されるまでの経緯を解説する。 続いて、日本における明治期以後の少年司法政策の発展過程を略述する。それは統制網の拡大・深化、すなわち刑罰を補完する保護処分から刑罰に代わる保護処分へ、さらには保護処分優先主義へと、保護処分対象者が増大する過程でもある。	徳岡　秀雄	徳岡　秀雄
13	これからの少年司法	2001 年 4 月から施行された改正少年法は、5 年後の見直しを規定している。少年司法の現在的課題を明らかにするためには、何か争点で何が変更されたのかを確認しておく必要があろう。 また、改正点の一つに、近年急速に認識され始めた被害者への配慮がある。アメリカでの均衡・修復司法という実践が、日本文化の中で応用可能か否かを検討しておくことも重要である。	同　上	同　上
14	青少年問題の変質と対策のジレンマ	青少年問題全体の、またその重要な一部としての少年犯罪の歴史的変遷は、いずれも反対社会型から非社会への変質として特徴づけられる。それは、モラル・パニックを背景にして、対症療法的対策をとり続けてきたことの帰結であると解せられる。 道徳的社会化を成功させるためには、モラル・パニックに惑わされずに、あらゆる場面でタイプ A 的統制の可能性を追求することが肝要であると思われる。	徳岡　秀雄	徳岡　秀雄

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
15	逸脱研究「知」の最前線と少年たちの行方	少年による逸脱行動も21世紀を眼前に様々な変容を遂げようとしている。その変容に対し、世界の逸脱行動研究は、どの様な対応をし、少年の逸脱行動のどの様な側面に注目し、研究を進めようとしているのか。逸脱行動研究の知の最前線を世界的スケールで探る。同時にどうした「知」の窓を通して21世紀社会での逸脱少年の実像の行方を追う。	清永　賢二	清永　賢二

＝臨床心理学特論（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　橘　　玲子（放送大学教授）〕
〔主任講師：　馬場　謙一（放送大学教授）〕
〔主任講師：　滝口　俊子（放送大学教授）〕

全体のねらい

臨床心理学は精神医学をはじめとする数多くの近接領域と深く関わっているので、これらと臨床心理学の関連にふれる。さらに、臨床心理学の目指すもの、援助の学とは関係性の学であること、などに視点を置いてこれまでの代表的な実践的理論と技法、今後新しい展開が予想される点について講義を進める。なお、二人のゲスト（河合隼雄先生、村瀬嘉代子先生）を迎えてトッピックスを語ってもらう予定である。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	臨床心理学とは	心理臨床活動が行われている領域、論文に見られる具体的テーマ、心理臨床の学習と訓練、実践と研究における倫理について述べる。	橘　玲子（放送大学教授）	橘　玲子（放送大学教授）
2	臨床心理学と精神医学１ 臨床心理学の歴史	臨床心理学と精神医学の関係を述べ、臨床心理学に影響を与えた代表的な研究者を紹介する。また、アメリカと日本の臨床心理学の歴史にも触れる。	同　上	同　上
3	臨床心理学と精神医学２ こころの病：神経症	神経症の概念と歴史、その類型と病前性格、状況論を含む心因と心理療法の可能性などについて述べたい。	馬場　謙一（放送大学教授）	馬場　謙一（放送大学教授）
4	臨床心理学と精神医学３ こころの病：精神病	精神病とは何か、その特質と種類について述べ、各種精神病の病理と治療についても触れる。	同　上	同　上
5	臨床心理学と精神医学４ こころの病：心身症一摂食障害を中心に一	心身の相関性と心の問題の身体への現れ方について述べ、心身症の代表として思春期の摂食障害を取り上げてやや詳しく検討する。	同　上	同　上
6	臨床心理学と近接領域１ 哲　学	臨床心理学的援助を支える考え方の枠組みとして哲学からの影響は大きい。「臨床の知」「トポスの知」（中村雄二郎）などを紹介しながら、心理臨床とその研究・調査についての基本的枠組みについて考えてみたい。	橘　玲子	橘　玲子
7	臨床心理学と近接領域２ 民俗学	臨床心理学は基本的には臨床場面での個人やグループの心のあり方とかかわる学問であるが、個人の心というからといって、社会や文化、儀礼や風習と無関係では実は全くない。今回は現代の心理療法場面においてクライエントの心に現れる「イメージ」が、「昔話」と深いかかわりがあることを検討してみたい。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	心理アセスメント 1 臨床心理学的援助におけるパラダイム	心理臨床家は面接技法も含めて多様な援助の方法があることを知り、その特徴を理解してクライエントの現状に合った援助の仕方を選ぶことが必要である。留意点など、具体的な例を挙げて検討する。	橘 玲子	橘 玲子
9	心理アセスメント 2 アセスメント面接	クライエントの問題はこれまでの、そして現在の対人関係や環境が関わってくる。相談の趣旨、相談の意図、家族からの情報、クライエントの歴史などアセスメントのための面接を述べる。	同 上	同 上
10	心理アセスメント 3 心理テスト	心理テストは心理臨床家の重要な技法のひとつである。異常という判断の問題、心理テストの背景、現在使用されている代表的なもの、実施上の問題点、報告書の書き方など基本的なことを述べたい。	同 上	同 上
11	心理アセスメント 4 見立て：クライエント像を描く	得られた情報から、クライエントの知的機能やパーソナリティ像、病態のレベル、変化の可能性などについて心理臨床家の視点からクライエント像を描く。見立ての必要性、臨床的援助への生かし方、訓練の必要性などにふれたい。	同 上	同 上
12	心のはたらき 1 深層心理学	意識と無意識自我、イド、超自我コンプレックス、葛藤など、心のはたらき方に関する重要な概念がある。そのはたらき方のアウトラインを説明する。	馬場 謙一	馬場 謙一
13	心のはたらき 2 自我と無意識の関係	自我は未だ意識に登らない様々なイメージを無意識として内包している。人間が社会に適応するとき、自我は社会と内界の調整をしている。このはたらき方と自我の防衛機制、症状形成について述べる。自我心理学とその流れについても解説する予定である。	同 上	同 上
14	心のはたらき 3 失策行為と夢	本章では意識と無意識のかかわりの中から現れる「失策行為」と「夢」を取り上げる。Freud, S. が「失策行為」と「夢」に対してどのような「接近法」「姿勢」を示したか、心理療法の中でそれらの理解をどのように生かしていけるか検討してみることにしたい。	同 上	同 上
15	こころと身体：性を考える	「性」に対する多面的な検討を加えたい。本能としての性、行動を支配する性、性とエロス、同性愛、性転換の問題などを取り上げたい。	橘 玲子	橘 玲子
16	トピックス：心理臨床と私	村瀬嘉代子先生に聞く 心理臨床の道を歩んでくるとき、何を大切にしてきたか。理論と実践とをどのように関連させて考えてきたか。統合的アプローチということを考え、実践するようになった背景について 。	橘 玲子	橘 玲子 ゲスト 村瀬 嘉代子（大正大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
17	ライフサイクル論 1　心理臨床と発達論	心理臨床では、生物学的な変化を基礎においた発達論と、治療関係の中での転移・逆転移関係を発生・発達論的に理解する見地がある。この両者の相互関係を精神分析的な観点から概説する。	小此木　啓吾 （東京国際大学教授）	小此木　啓吾 （東京国際大学教授）
18	ライフサイクル論 2　乳・幼児期	ライフサイクルのもっとも初期の乳幼児における心的機能と母子相互作用、その病理としての関係性障害などについて、乳幼児精神保健及び精神分析的発達研究の観点からお話をする。	同　上	同　上
19	ライフサイクル論 3　児童期	親からの自立の準備として友人関係や知識の獲得の重要な児童期について、不登校・緘黙などの心理的な問題を通して述べる。	滝口　俊子 （放送大学教授）	滝口　俊子 （放送大学教授）
20	ライフサイクル論 4　思春期・青年期	自分自身への関心の深まる青春期に生じる種々の葛藤、性別同一性などについて、事例を通して詳述する。	同　上	同　上
21	ライフサイクル論 5　中年期	思秋期とも呼ばれる中年の、心の揺れとその収束について、事例を通して紹介する。	同　上	同　上
22	ライフサイクル論 6　老人期	心身の老いの問題、特に誰もが向かう死の準備としての老年期について、述べる。老人の知恵についても触れたい。	同　上	同　上
23	心理療法　1 精神分析療法	Freud, S. は催眠から自由連想法に技法を展開し、精神分析療法を確立した。クライエント・治療者関係、主として治療過程に現れる抵抗、転移・逆転移、行動化その他重要な概念を説明する。	馬場　謙一	馬場　謙一
24	心理療法2 分析心理学的心理療法	分析心理学とは、日本ではユング心理学とも言われているところからわかるように、Jung, C. G. の創始した心理学に基礎を置く心理学である。分析心理学的心理療法を４０数分でお話をするのは、不可能に近いが、今回は、いわゆるユング派では、人間の心が示す「症状」や「問題」「苦悩」を基本的にどのように理解するかという根本に絞って考えてみることにしたい。	大場　登 （放送大学教授）	大場　登 （放送大学教授）
25	心理療法３ 来談者中心療法	Rogers, C. は来談者中心療法という方法を提示した。この方法は戦後の日本にいち早く紹介され、日本の心理療法幕開けとなった理論でもある。ここではカウンセラーの姿勢の問題を取り上げて考えたい。	橘　玲子	橘　玲子

回	テ　ー　マ	内　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
26	心理療法４ 認知行動療法	学習理論に基づいて実験によって基礎づけられた行動修正法を Eysenck, H. J. は「行動療法」としてまとめた。技法的にも理論的にも、現在は一層多様となり、認知行動療法、社会学習理論モデルなど代表的流れを紹介する。	橘　　玲子	橘　　玲子
27	心理療法５ 内観療法・森田療法	この二つの心理療法は日本で生まれた。森田正馬が確立した森田療法と吉本伊信が開発した自己啓発による内観療法の特徴について紹介する。	同　上	同　上
28	心理療法６ 集団心理療法	エンカウンター・グループやファンタジー・グループについての紹介とその利用、今後の展開を述べる。	同　上	同　上
29	コミュニティと心理臨床	地域臨床活動場面で心理臨床と近接領域とのネットワーク、コンサルテーション・リエゾンなどについて考える。特にスクールカウンセラーの具体的活動を例に挙げながら、新たな問題も提示したい。	同　上	同　上
30	トピックス： これからの心理臨床	河合隼雄先生に聞く：これからの心理臨床・研究・教育について。	同　上	橘　　玲子 ゲスト 河合　隼雄 （京都文教大学学術顧問）

＝臨床心理面接特論（‘０２）＝（Ｒ）

－ 心 理 療 法 の 世 界 －

〔主 任 講 師： 大場 登（放送大学教授）〕

全体のねらい

実際の心理臨床の現場で臨床心理学的面接ないし心理療法を行ってゆくにあたって、心理療法家(サイコセラピスト)にとってもっとも基本となる姿勢・留意点、そして、心理療法(サイコセラピスト)技法論の基礎について体系的に学習することを目的とする。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	はじめに：心理療法と生きた個性	臨床心理面接特論の講義を始めるにあたって、心理療法というものが、ある心理療法を創始した「ある生きた個人」「その個性」、そしてその心理療法の研修を受けた、あるいは、受ける、ある「生きた個人・生きた人間」「その生きた人間の心」を抜きにしては始まらない・語れないという根本について考えてみたい。	大場 登（放送大学教授）	大場 登（放送大学教授）
2	耳を傾ける・自然治癒力	心理療法というと難しい理論やテクニカル・タームの勉強から始まると思う人もいるかもしれないが、実は、心理療法の基本は、「共感的に耳を傾ける」すなわちクライエントの話を傾聴することであり、そのプロセスの中で、クライエントの心の自然治癒力に働いてもらうことである。	同 上	同 上
3	心理療法の器（1）	心理療法という営みは、基本的にはサイコセラピスト（以下セラピストと略）とクライエントの間で生起するが、この営みを抱え、保護するものとして、「心理療法の器」というものが必要である。「レトルト」といったイメージを思い浮かべてもらうとよいかもしれない。	同 上	同 上
4	心理療法の器（2）	「器」に保護される中で、心理療法のプロセスは初めて進行する。セラピストの守秘義務から始まって、面接時間・面接室・面接頻度、料金といった「面接構造」とも言われるもの、どのような心理療法機関（医療機関、大学相談室、個人開業）か、どのような心理療法の立場・姿勢に立ったセラピストか、その他様々の構成要素によって「器」のカラーが生まれてくる。	同 上	同 上
5	トピックス：心理臨床の現場から‐‐①私立心理療法機関	本講義では、トピックスとして、様々の心理臨床の現場での実際の心理療法、個々の現場固有の特徴・経験・感動・難しさについても紹介してゆくことにしている。第１回の今回は、カウンセリングセンターや心理療法研究所という形でサイコセラピーを開業している心理療法機関から学んでみたい。	同 上	大場 登 ゲスト： 三浦 和夫（山王教育研究所）
6	初回面接	面接の初回は、クライエントとセラピストの関係を創るために重要な基盤であるので、緻密な配慮を要する。また、初回面接には、その後の全面接過程が凝縮されていると言っても過言ではない。初回面接での留意点について、詳述する。	滝口 俊子（放送大学教授）	滝口 俊子（放送大学教授）
7	心理療法とアセスメント（1）‐成人の場合	クライエントをセラピストの感情に流されずに理解するためには、アセスメントが必要である。アセスメントの理論と実際について説明する。時には、精神医学的な診断の必要であることについても触れる。	同 上	同 上

回	テ　ー　マ	内　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	心理療法とアセスメント（2） −子どもの場合	年齢や性格によっては、心理検査を用いるアセスメントも行われるが、幼い子どもの場合は、プレイセラピーをしながらのアセスメントになる。また、親面接による情報も子どものアセスメントの素材となる。	滝口　俊子	滝口　俊子
9	セラピストの個性とクライエントの個性	クライエントも様々の症状・傾向・問題を持って心理療法機関を訪れるが、相対するセラピストも、当然の話ではあるが、様々の傾向・性格・カラーを持っている。そして、この両者の間で固有の心理療法プロセスが生じる。マニュアル通りにはゆかない面白さと困難さが、ここにあり、「相性」というテーマともとりくまなければならない。	大場　登	大場　登
10	トピックス：心理臨床の現場から−−② スクールカウンセリング	スクールカウンセラーの役割と課題について、実際の体験を通して学んでみたい。	滝口　俊子	滝口　俊子 ゲスト： 香川　克 （京都文教大学・公立中学スクールカウンセラー）
11	セラピストの心に浮かぶ疑問・連想・イメージ・仮説	クライエントの姿・語ること・症状に「耳を傾け」ていると、セラピストの心に、いろいろな疑問・連想・イメージが浮かんでくる。あるいは、セラピストなりの見立てや仮説も、そして、時にはその見立てと抵触するイメージが浮かんでくることもあろう。	大場　登	大場　登
12	セラピストの問いかけとコメント	「共感的に傾聴」することが、サイコセラピーの一方の柱だとすれば、クライエントの話を傾聴しているうちに、セラピストの心に浮かぶ疑問・イメージや心の揺れ・仮説を見つめ、これに基づいて、クライエントの反応を慎重に見守りつつ「問いかけ」をしてゆくことが、もう一方の柱と言えるだろうか。	同　上	同　上
13	セラピストとクライエントの関係性（1）	クライエントの訴え、セラピストによる傾聴、両者の個性が、「器」の中で次第に「煮詰まって」くるにしたがって、クライエントの心の中の様々な「外的・内的人物像」は、心理療法で相対している「セラピスト」像と微妙なつながりを持ち始める。	同　上	同　上
14	セラピストとクライエントの関係性（2）	クライエントから投げかけられるクライエントの心の中の「外的・内的人物像」、そして、その「人物像」に伴う複雑で濃密、時に圧倒的な様々の感情は、セラピストの心に一定の心理的影響を及ぼさずにいることは決してない。かくして、セラピストの心もまた、「器」の中の「心理的なプロセス」に必然的に関与してゆくことになる。	同　上	同　上
15	トピックス：心理臨床の現場から−−③ 医療機関（病院・クリニック・精神科・心療内科・小児科・NICUその他）	今回のトピックスは、医療機関での心理臨床の仕事の紹介である。医療機関といっても、多くの人々が思うような伝統的な「精神科・神経科」だけでなく、今日では、心療内科、小児科、いわゆるNICU（新生児集中治療室）そして、ホスピス、歯科領域でさえ、心理の仲間が働いている。	同　上	大場　登 ゲスト： 橋本　洋子 （聖マリアンナ医科大学横浜市西部病院新生児病棟）

回	テーマ	内　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
16	意識と無意識	心理療法の仕事をしていると、人間の心にはどうやら、自分で意識している「意識」領域を超えて、広大な「無意識」の領野が存在していると考えた方が理解しやすい経験に出会うことが多い。そして、この「無意識」には、今日あまりに安易に語られる「トラウマ」といった過去の記憶ばかりではなく、実は、「陰と陽」「影と光」「腐敗と生成」「魂」「癒し」「死」「エロス」「男性と女性」その他その他の実に豊かなイメージが満ち溢れている。	大場　登	大場　登
17	プレイセラピー	言語表現の発達途上にある子どもとの面接において用いられているプレイセラピーについて、事例を交えながら紹介する。プレイセラピストに見守られながらの遊びは、短に情緒が開放される体験にとどまらず、自己治癒力が活性化するのである。	滝口　俊子	滝口　俊子
18	家族面接	クライエントは、家族と深く結びついているので、セラピーへの協力を得るために、家族とも面接することは重要である。家族成員の変化は、全体としての家族の変容と無関係ではありえない。家族面接の技法と留意点について述べる。	同　上	同　上
19	箱庭療法その他のイメージ療法	箱庭療法という言葉は、なんとなく耳にしたことがある人が多いかもしれない。もともとはチューリッヒの Kalff, D. が始めた心理療法技法であるが、日本に渡ってくるや、あっという間に全国の心理療法関係機関に浸透してしまった。それというのも、日本には、昔から「盆景」「箱庭」の世界があり、子どもだけでなく、成人もまた、自らの「世界」を非言語的に表現して、その「心のイメージ」と交歓・交感する伝統があったからのようである。	大場　登	大場　登
20	トピックス：心理臨床の現場から−−④教育相談所・教育センター	今回は、全国各都道府県・各都市にあって、子ども達の心理的な問題（課題）・あるいはその家族の抱えている心理的困難に、必要な場合は学校と連絡をとりながら、心理療法的サービスを提供している「教育相談所・教育センター」の紹介である。	同　上	大場　登 ゲスト： 甲斐　由美 （東京都板橋区教育相談所）
21	夢と癒し	古代ギリシャで、人々が心身の病に見舞われると、人々はアスクレピオス医神の神殿を訪ねた。斎戒沐浴の後、彼らは神殿最奥の小部屋で眠り、「癒しの夢」の訪れを待った。日本の古代・中世においても、人生の困難や病に出会った人々は、「貴船」や「石山」に詣でたり、「観音」さんに篭って、「癒しの夢」の到来を待った。	大場　登	大場　登
22	心理療法と夢（1）	古代ギリシャ・アスクレピオス神殿で当時の人々が夢による癒しを求めた営みはインキュベーションと呼ばれるが、Meier, C. A. によれば「このインキュベーションが 2000 年の眠りを経て Freud, S. の診察室・自由連想のカウチで復活した」と言われる。	同　上	同　上
23	心理療法と夢（2）	たしかに心理療法で、我々がクライエントの話に耳を傾けていると、「そう言えば今朝こんな夢を見ました」と報告されることが多い。「耳を傾ける」とは、この意味で、「心の最奥からの声」あるいは、「人間の意識を超えた領域からの声」に対してのことでもあるのかもしれない。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
24	心理療法とコンステレーション（布置）	心理療法の面接でクライエントの語ることを注意深く聴いていると、クライエントの心の中、いわゆる内界で焦点化ないし、活性化されている、あるいは前景に出ているテーマと見事に対応する外的・現実的出来事が、クライエントの周囲で生じていることをよく経験する。だからこそ、一見「外的・日常的」だけと思われるクライエントの経験にも我々は、大きな関心を寄せて傾聴することができるとも言えよう。	大　場　　登	大　場　　登
25	トピックス：心理臨床の現場から－－⑤産業・企業	職場におけるカウンセリング・産業カウンセリングの役割と可能性について検討してみたい。	滝　口　　俊　子	滝　口　　俊　子 ゲスト： 箕　輪　　尚　子 （ソニー（株）人事センター
26	困難な事例との出会い	心理療法の営みを続けていると、セラピストは、必ずといってよいほど圧倒的な難しさ・無力感・不安を感ぜざるを得ないようなクライエントに出会うものである。それまでの僅かな、いわゆる成功経験など粉微塵に打ち砕かれるような出会い。「心の専門家」などという言葉は、以後、決して使えなくなるような経験。人間の心の闇は恐ろしい程に圧倒的で、且つ深いものである。	大　場　　登	大　場　　登
27	心理療法の面接と記録	困難な事例に出会った時には、面接記録を書くことさえ大変な心理的エネルギーを必要とする。記録には、クライエントのことよりは、セラピストを自称してきた自分の不安や無力感、あるいは面接の行われた晩に眠れぬ中で垣間見た「恐ろしい夢」が書き留められることも多いであろう。そもそも面接記録は、一体どのようなことを、どの程度書いたらよいのだろうか。	同　上	同　上
28	スーパーヴィジョン	心理臨床の研修にとって不可欠な体験として、スーパーヴィジョンがある。個人スーパーヴィジョンとグループスーパーヴィジョンの比較、スーパーヴァイザーの選び方や、スーパーヴィジョンの料金、期間について。さらに個人分析との異同についても述べる。	滝　口　　俊　子	滝　口　　俊　子
29	トピックス：心理臨床の現場から－－⑥エイズカウンセリング	今回のトピックスでは、いわゆるエイズカウンセリングにあたっている心理臨床の現場を紹介したい。仕事の困難さ・日頃感じていること・いわゆるエイズ患者やＨＩＶウィルス感染者の方々に教えてもらったことなどが紹介される予定である。	大　場　　登	大　場　　登 ゲスト： 小　島　　賢　一 （荻窪病院血液科）
30	おわりに：講師からのメッセージ	心理臨床の世界は、広大な裾野と、底知れぬ深さを持っている。それだけに、確かに非常にやりがいのある職業分野であると共に、一歩間違えれば、いわゆるセラピスト側もがのみこまれてしまう危険と隣り合わせであるのも事実である。このことは、医学や法律学等、生きた人間と真っ向から接する学問分野・専門職業分野の宿命と言えるかもしれない。最終回は、滝口と大場から、今後さらに心理臨床の勉強を続けてゆく人々へのメッセージを送りたい。	滝　口　　俊　子 大　場　　登	滝　口　　俊　子 大　場　　登

＝心理学研究法特論（‘０２）＝（Ｒ）

〔主任講師：　鑪　幹八郎（京都文教大学教授）〕

全体のねらい

神学研究法の中でも、特に臨床心理学研究の困難さと重要性について解説する。臨床心理学においては、プライヴァシーの問題および研究から得られる公共性との両立と相克が重要なテーマである。これらについて留意しながら、心理学研究法、なかんずく臨床心理学研究法について解説する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	心理学および臨床心理学の領域と研究法	臨床心理学の領域を五つの領域、すなわちカウンセリング・心理療法・アセスメント・家族・コミュニティおよびグループに分けて考える。研究として重要なことは、まず何を知りたいかを明らかにすることである。研究の目的が明らかになれば、それをどのように達成するかという方法がおのずから明らかになるはずである。臨床心理学研究の特徴として、第一プライバシーや倫理的な問題をいつも頭に置いておくこと、第二に臨床経験が研究を左右する特徴があることを十分理解しておくこと。	鑪　幹八郎（京都文教大学教授）	鑪　幹八郎（京都文教大学教授）
2	研究法の背景	心理学研究法には個性記述（現象記述）的なアプローチと、法則定立的なアプローチがある。そして、自然科学の実証モデルを援用した数量化が重視されている。そこには、各事象が独立して発生し、しかも内容が等質であるという単純なモデルが基礎となっている。臨床心理学の研究においてもこのモデルが重要であることはいうまでもないが、臨床事例はくりかえしできない、個別のものであるため特別なアプローチが必要となる。	名取　琢自（京都文教大学助教授）	名取　琢自（京都文教大学助教授）
3	研究法① 面接法	具体的な研究法として、これから六つの方法を説明する。面接法をつかった研究法とはどのようなものであろうか。ここでは代表的な面接法である同一性地位面接と成人愛着面接を通して面接法による研究の意義と特徴を説明する。	平井　正三（北大路精神分析オフィス）	平井　正三（北大路精神分析オフィス）
4	研究法② 観察法	観察法による研究法を説明する。観察することによってどのように臨床的な資料を収集することが可能であるか、乳幼児の母子相互作用の研究を通してその意義と特徴を説明する。	同　上	同　上
5	研究法③ 質問紙調査法	現在数多くの質問紙が作られているが、主としてリッカート法による質問紙の構成法について解説する。また、臨床場面で使われる質問紙法や性格検査も紹介する。	香川　克（京都文教大学助教授）	香川　克（京都文教大学助教授）
6	研究法④ 投映法	投映法の特徴を、質問紙法や面接法など他の方法と比較しながら説明し、その意義について考察する。代表的な投映法について述べ、それらを用いた研究（あるいは、投映法自身に関する研究）について紹介する。	中村　博文（京都文教大学講師）	中村　博文（京都文教大学講師）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
7	研究法⑤ 実験法	臨床心理学においても、実験による研究は重要である。その古典的一例として、ユングによる言語連想実験をとりあげ、心理学的事実を明らかにするための数量化の意義について解説する。また、実験研究を実施する際の基本概念（実験群・統制群など）についても説明する。	名取　琢自	名取　琢自
8	研究法⑥ 事例研究法	事例研究法は臨床心理学において最も重要な研究法のひとつであるが、この方法が実際にはどういうものなのかは意外に知られていない。本講では、知識伝達と技術習得のちがい、概念的知識と手続き的知識のちがいに注目しながら、臨床の場において人間を統合的にとらえる実践的方法として洗練されてきたこの事例研究法の意義と限界について検討したい。	同　上	同　上
9	領域と研究法① カウンセリング・心理療法	ここから講義の内容は各領域での研究法の適用に焦点をあてる。本講では、カウンセリング・心理療法における研究のトピックとして、以下のテーマを取り上げたい。 「診断・見立ての妥当性」「変容のプロセス」「技法の比較」「面接者とクライエントの相互作用」「治療者・クライエントの内的イメージ」「夢の変容」「スーパーヴィジョン」「教育分析」	鑪　幹八郎	鑪　幹八郎
10	領域と研究法② アセスメント	臨床心理学におけるアセスメントについて説明し、その必要性を述べる。アセスメントの諸方法を紹介したうえで、それらの妥当性について考える。またアセスメントそのものの妥当性検証について述べる。	中村　博文	中村　博文
11	領域と研究法③ 家族	近年、家族のあり方の急激な変化にともない、システムズ・アプローチ、構成的アプローチ、そのほか、様々な新しい視点が提案されている。これらの見方を資料的に具体化するための研究法について述べる。	鑪　幹八郎	鑪　幹八郎
12	領域と研究法④ コミュニティ・アプローチ	近年、学校や地域社会における心の問題が社会的に関心を集めている。臨床心理学はこの領域に様々な接近を試みている。その接近法から明らかにされる諸側面を、これまで述べた研究法を通して説明する。	香川　克	香川　克
13	領域と研究法⑤ グループ・アプローチ	グループを利用して、個人の成長や適応に資する活動が広い領域で活発に適用されており、グループアプローチ・集団心理療法などと呼ばれている。これらの活動の意義や特徴をらかにする研究法について解説する。	同　上	同　上
14	領域と研究法⑥ 統合的な理解の必要性	今回と次回の二回にわたって、研究法と臨床心理学の領域の問題を再考する。研究法は研究目的によって決まること、臨床心理学においては統合的な理解が不可欠であることなど、これまでの研究法の講義をふりかえって再述する。	鑪　幹八郎	鑪　幹八郎
15	総括：臨床心理学研究の難しさと重要性について	臨床心理学研究法のまとめとして、研究の難しさと重要性について述べる。難しさに関しては、プライヴァシーや倫理の問題がかかわってること、クライエントの福祉がかかわっていることがあげられる。重要性については、研究によって臨床的な活動が公共の知識として蓄積されること、さらに、人間存在における臨床の「知」という問題について貢献することができることを解説する。	同　上	同　上

＝社会心理学特論（‘０２）＝（TV）

－人格・社会・文化のクロスロード－

〔主任講師：　大橋　英寿（放送大学教授）〕

全体のねらい

社会心理学は、パーソナリティ・社会・文化の３視点を有機的に統合して人間生活を理解しようとする。個人の発達と時代史の交差上に展開する社会化過程を基底にすえて、パーソナリティ、社会、文化というビッグ・ワードの社会心理学的意味を順次解説していく。それをふまえて、文化生態的環境変化の影響、異文化体験、ライフサイクルの変動、エスニック・アイデンティティ、ヘルスケア・システムの多元性、シャーマニズムの癒し、非行・犯罪と被害者支援などをとりあげる。そうすることで社会心理学が臨床心理学にとって不可欠な連携分野であることを理解し、両分野の接点を多角的に探る。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	社会心理学 —人間科学の礎—	社会心理学は、パーソナリティ心理学・社会学・文化人類学の接合するところに位置する境界科学・学際科学である。それゆえに、活況をみせる一方で、この学問分野の定義、守備範囲、研究法をめぐっては多種多様な立場が併存している。この錯綜状況に整序をこころみ、マルチメソッドの必要性と、人間科学としての方法論上の独自性を強調する。	大橋　英寿（放送大学教授）	大橋　英寿（放送大学教授）
2	社会化過程 —発達と時代史の交差—	人が文化規範を学習して社会の一員となっていく社会化過程は、パーソナリティ心理学、社会心理学、社会学、文化人類学の共通テーマである。社会化は幼少年期の受動的過程にとどまらず、ライフサイクル全体にわたる個性化の過程でもあり、さらに既存の社会と文化を変容させる要件にもなりうる。その実例をシャーマンの成巫過程を通して理解する。	同　上	同　上
3	社会心理学とパーソナリティ心理学	パーソナリティ心理学と社会心理学という隣接する２つの立場から行われてきた「パーソナリティ」研究の史的展開について論じ、両者の立場の違いについて解説する。その上でミシェルのパーソナリティ研究批判に端を発する「人間—状況論争」を契機に、パーソナリティ心理学と社会心理学が相互に理解を深め、新たな研究動向へと収斂していく様相について論じる。	堀毛　一也（岩手大学教授）	堀毛　一也（岩手大学教授）
4	他者との相互作用	二者関係を中心に、自他のかかわりあいの様相を個体の認知的側面を中心に解説する。具体的には、人が自らを含め周囲の他者や社会的状況をどのように認知し、知識・信念体系を築きあげていく過程について論じたうえで、そうした認知的基盤をもとに行われる、他者とのコミュニケーションの特質やコミュニケーション・スキルの問題について解説する。	同　上	同　上
5	集団過程 —社会心理学のアプローチの意味—	「集団の優位性 vs.個人の無力性」という対比にひそむ問題点を明らかにし、集団状況と孤立状況の相違点を詳述する。二者関係から多数者の組織的関係までの集団的影響関係を整序し、安定した状況下にある「集団」のもつ特徴を明らかにする。目標の共有、成員性、凝集性、組織性、持続性などの特徴がもたらす諸問題（集団残慮、集団極化、服従）をとりあげる。	細江　達郎（岩手県立大学教授）	細江　達郎（岩手県立大学教授）

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	集団状況における個人	行動は人と状況との関わりで生起すると捉える社会心理学の視点を解説する。自分をどのようにカテゴリー化するか、集団カテゴリーにどう自我関与するのかが、行動の具体的な選択を方向づける。集団規範の施行、役割の調整など、複数の集団への関与の適応・不適応・無適応関係を理解する。集団状況の課題として、社会的促進、行動の不活性、同調、社会的手抜き、状況の過小評価などを解説する。	細江　達郎	細江　達郎
7	文化生態的環境の変化と子どもの心身	身体が食物を摂取・吸収することで成長していくのと同じく、子どもの脳は感覚入力を糧として成長していく。感覚入力の種類や量は、子どもがどのような環境で育っているかで変わってくる。戦後の日本においては、高度成長期とビデオゲームが普及した1980年代後半の２回、子どもの育つ環境は大きく変わった。こうした環境の変化が子どもの心身にどのような影響を与えているかについて論じる。	箕浦　康子（お茶の水女子大学教授）	箕浦　康子（お茶の水女子大学教授）
8	異文化体験とストレス	ある社会に適合的な文化の衣をまとった人が、別の文化圏へ移動した時にはどのようなことが起こるのか。子どもは、育ちの場に充満している文化的意味を、自己流に内に取り込み、文化の衣（意味空間）をまとうことで、その社会の一人前の成員となっていく。文化的背景を異にする人々の間でなぜディスコミュニケーションが発生しやすいのかなどについて、事例を交えながら検討する。	同　上	同　上
9	社会変動とライフサイクル	個人の発達過程は、社会文化的な文脈との出会いで、意味や展開、限界が変容する。具体例を職業的社会化過程の長期の追跡調査で見ていく。1960年代の高度成長期に地方の中学校で卒業期を迎えた青年の多くが選んだ進路に都市就職があった。かれらが成人期を迎え、さらに老年期を展望するいま、職業生活はどのような変遷をたどったのか。時代史と個人史の交差を社会心理学的に検証する。	細江　達郎	細江　達郎
10	南米移民の生活ストラテジー	国境を越えて移動する「国際移動民」が地球的規模で増加している。日本でも近年、外国人労働者が増え、1990年の入管法改正以降はブラジル、ペルー、アルゼンチン、ボリビアなどの日系人の出稼ぎ者が急増し、一時的出稼ぎから定住志向まで生活形態が多様化してきている。南米日系人の生活ストラテジー、日本体験に伴う二世・三世のエスニック・アイデンティティの変容を事例をあげて解説する。	大橋　英寿	大橋　英寿
11	ヘルスケア・システムと住民の対処行動	心身の不調に気づいたからといって、病院へすぐ出向くとはかぎらない。現代医療にのみ頼るわけでもない。病者と家族のとる対処行動を理解するには、＜疾病＞と＜病い＞、＜治療＞と＜癒し＞の複眼的視点とともに、民間セクター・専門職セクター・民俗セクターがオーバーラップする地域のヘルスケア・システム全体を視野にいれる必要性を、フィールドワークの知見にもつづいて検証する。	同　上	同　上
12	癒しの伝承 ―シャーマニズム	人類最古の治療者と目されるシャーマンが現在も世界各地で活躍している。人々のシャーマン的職能者への依存の実態は、医療従事者には見えにくいが、クライエントがとる対処行動の見過ごせない一面である。土着コスモロジーを背景にした信仰治療は自然界や宇宙との調和にもつづくホーリスティクな治療法として注目される。沖縄のシャーマン「ユタ」の病因論と治療儀礼を通してその一端を紹介する。	同　上	同　上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	青少年非行問題	犯罪の原因論は、人を犯罪に向かわせる要因をとらえようとし、青少年非行の場合、当の少年にのみ焦点が当てられてきた。非行行動は社会関係で生起する。当事者の研究だけでは、問題の理解も解決もできない。人間の行動を社会的文脈の中で捉える視点が不可欠である。一つの研究例を取り上げて、非行の問題へ社会心理学的に接近することの重要性を解説する。	菊池　武剋（東北大学教授）	菊池　武剋（東北大学教授）
14	被害者の社会心理学	犯罪・非行は、加害者・被害者・第三者の相互影響関係の中で発生する。加害者をとらえるだけでは説明できない。被害者に注目することで、加害者・被害者の関係、犯罪・非行場面の力動が理解できる。犯罪類型ごとの加害者・被害者の特性から、犯罪・非行の発生と予防についての知見も得られる。「被害者支援」は被害者にとって必要なだけでなく、加害者の更正・矯正にとっても大きな意味をもつ。	同上	同上
15	社会心理学と臨床心理学の接点	臨床的問題の発生過程と解決は個人の生きてきた社会文化的背景を抜きには理解できないであろう。カウンセラーとクライエントの対話である「心理臨床の場」そのものが心理-社会的リアリティで構成されていく。とすれば、臨床心理学者にとって社会心理学の知識は不可欠であろう。両分野の接点と相互交流の在り方を模索する。	細江　達郎	細江　達郎 大橋　英寿

＝家族心理学特論（‘０２）＝（Ｒ）

－システムとしての家族を考える－

〔主任講師：　亀口　憲治（東京大学教授）〕

全体のねらい

未曾有の変革期にある家族をとりまく心の危機の深層を解明し、具体的かつ効果的な対応策についての理解を深めることをねらいとする。家族臨床心理学は誕生まもない学問であり、また狭義の臨床心理学の枠にとどまらない多面的な問題群を抱えている。近接する学校教育、医療看護、介護福祉、産業労働、司法矯正、生涯発達、ジェンダー論など、数多くの専門領域の壁を超え、現代家族を総合的視野から理解し、支援するための知的基盤を提供する。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	家族臨床心理学への招待	家族療法と家族心理学が融合することによって生まれた家族臨床心理学という専門領域が果たすべき役割やその基本的概念いついて解説する。家族を根源的な人間システムとしてとらえる立場から、家族の心の危機への効果的な対応を探る。	亀口　憲治（東京大学教授）	亀口　憲治（東京大学教授）
2	生涯発達から見た家族危機	個人の成長や発達については、新生児期から老年期までを含む生涯発達の枠組みでとらえることが必要とされるようになった。家族システムも、発達段階ごとに独特の発達課題を乗り越えていかねばならない。主要な家族危機について解説する。	同　上	同　上
3	精神保健と家族の役割	ストレスの多い現代社会において、精神保健の果たすべき予防的役割が次第に強調されつつある。なかでも、家族が与える影響力の大きさについては、病因論と治療論の両面から指摘されているところである。最新の注目すべき研究成果を紹介する。	同　上	同　上
4	児童福祉における家族の役割	児童虐待の増加は、近年大きな社会的関心を集めるようになった。なぜ、実の親がわが子を虐待するのだろうか。児童虐待に見られる親子間、あるいは家族内の病理の発生メカニズムについて分析し、その効果的な対応策についても検討する。	同　上	同　上
5	看護・介護と家族コミュニケーション	高齢化の急速な進行は高齢者だけではなく、その家族の問題でもある。看護や介護に当たる家族員相互のコミュニケーションの問題は、ヘルパーなどの援助者が良質のケアを提供するうえでも、軽視することができない課題である。	同　上	同　上
6	学校と家族の連携－システム論の視点から	子どもの心の問題を解決するためには、学校と家族の連携が不可欠だといわれてきた。しかし、現実には、むしろ両者の対立を示す風潮の方が優勢ではなかっただろうか。本講では、両者をつなぐ父親の役割や先駆的な各地の実践例について解説する。	同　上	同　上
7	非行問題と家族の関わり	非行の背景に家庭環境の要因があることは以前から指摘されてきたことである。最近では、17 歳の凶悪事件の多発に社会的関心も高まっている。非行の発生や予防の観点から、家族の関わりを再考し、主要な問題点を整理する。	同　上	同　上

回	テ　ー　マ	内　　　　　容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
8	家族に優しい職場の創造	能率や効率のみを重視した職場の労働環境が、個々の家族のささやかな団欒を奪ってきた現状を否定することはできない。21 世紀の日本の職場が、家族に優しいものとなるか否かは、少子化の進行を食い止めるためにも緊急の課題である。	亀口　憲治	亀口　憲治
9	家族心理臨床の基礎	家族に関わる臨床の実践のために、理論と技法が構築されてきている。本講では、家族に関わる基本とも言うべき、臨床家の姿勢について実例を通して述べる。家族心理アセスメント、真の傾聴・受容・共感、クライエントと臨床家との関係性、家族の成長力への畏敬や家族崩壊への配慮にふれる。	同　上	同　上
10	家族療法の歴史と理論	1950 年代に登場した家族療法の歴史を概観し、その理論がほぼ半世紀を経て、どのように形成され、今日に至っているかを簡潔に紹介する。個人の内界に注目する従来の心理臨床との対比や、両者の相補的関係や統合の可能性についても述べる。	同　上	同　上
11	家族療法の技法と実践	家族療法の技法の発展はめざましく、わが国でも不登校や摂食障害、家庭内暴力などの心理的問題の解決に顕著な効果をあげつつある。「ジョイング」や「リフレーミング」などの代表的な技法について具体例を示しながら平易に解説する。	同　上	同　上
12	家族療法の事例に学ぶⅠ－不登校問題の解決	全国で 13 万人を超す不登校児の問題を解決する有効な決め手はまだ見つかっていない。この問題に家族全員で取り組むことによって解決しようとする家族療法の実践事例を解説する。	同　上	同　上
13	家族療法の事例に学ぶⅡ－家庭内暴力と非行問題の解決	個人療法的アプローチでは解決困難な場合が多い家庭内暴力や非行の事例を取り上げる。これらの問題をかかえた家族に対して、家族療法がどのように展開されるのか、詳しく解説する。	同　上	同　上
14	夫婦療法の理論と実際	中高年夫婦の離婚の増加に見られるように、夫婦療法や夫婦カウンセリングなどの専門的な知識を身につけることが、多くの心理臨床家に求められている。実践の手法についても紹介する。	同　上	同　上
15	家族の未来と可能性	核家族はさらに分裂を進めて、多様な形態の「家族」が出現しつつある。現代家族は、家族進化の岐路に立たされているのだろうか。最終回となる本講では、家族の未来像を展望するうえで参考になる魅力的な話題を多数紹介したい。	同　上	同　上

＝コミュニティ・アプローチ特論（‘０３）＝（Ｒ）

〔主任講師：　村山　正治　（東亜大学教授）〕

全体のねらい

成長モデルを念頭に置いて、特に教育・学校で臨床心理士がどう活動でき貢献できるかを講義する。家庭と社会や文化を結ぶ領域としての学校現場で臨床心理士の活動の展開も視点に入れる。したがって他職種とのネットワークを組んだり、専門家としての臨床的観点を提供しなければならない。コミュニティの中での学校をとらえることによって、臨床心理士の活動は新しい方向が模索され、示唆される。

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
1	今なぜコミュニティアプローチか	現代社会では異文化交流、子育てネットワーク、地域紛争、被害者支援、虐待やいじめなど、異業種間の専門家や非専門家である市民が協力して取り組む課題が増大している。このような今日的課題解決のためになぜ今コミュニテイアプローチが注目されるのか論じてみたい。	村山正治（東亜大学教授）	村山正治（東亜大学教授）
2	コミュニテイアプローチとは何か	コミュニテイアプローチの定義、歴史、方法、その特徴、科学性、独自性、現代社会における意義、などについて具体例をあげながら解説する。	同上	同上
3	コミュニテイアプローチとしての一子育てネットワークの実際	作今、兄弟が少なく、子供同士で遊ぶ経験が少ない中で親になる人たちへの子育てに関する悩みは深刻なものがある。心理臨床の子育て支援活動の実際と意義について解説したい。	滝口　俊子（放送大学教授）	滝口　俊子（放送大学教授）
4	キャンパスコミュニテイにおけるコミュニテイアプローチの展開	最近の学生には，対人不安傾向が強く，大学を自分の居場所と感じない学生が増えている。キャンパスコミュニテイにグループアプローチを展開して，心の発達と成長，仲間つくりの効果測定などを実施したモデルにつき解説したい。	中田　行重（東亜大学助教授）	中田　行重（東亜大学助教授）
5	総合地域臨床科学の考え方	総合地域臨床とは特定の地域を対象とした心理臨床支援活動である。個人心理臨床の一環としてのネットワークつくりや特定の組織を対象とした組織臨床よりも広い概念である。地域臨床活動と研究をあわせた総合地域臨床科学について解説する。	下川　昭夫（東京都立大学助教授）	下川　昭夫（東京都立大学助教授）

回	テ ー マ	内 容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
6	総合地域臨床活動の実際－ママ・ネットとボル・ネット	総合地域臨床活動にはセンター型支援とネットワーク型支援がある。前者は保育園、学校、福祉施設などへの支援であるし後者は地域社会に入り込んで見えてくる対象への支援である。実際例を紹介しながら開設する。	下川 昭夫	下川 昭夫
7	サイコリトリート、不登校児の母親グループの実際	コミュニティアプローチによる援助の具体例を紹介する。一つは九州大学健康科学センター峰松修教授による「サイコリトリート」である。もう一つが不登校児の親を援助するグループアプローチであり、特に小野修氏は長年の経験を本に著された。この２つの方法論について、その意味を考察する。	中田 行重	中田 行重
8	エンカウンターグループを媒介にしたコミュニティ形成の実際	エンカウンターグループは人々の心を繋ぎ、自分探しのための重要なアプローチとして注目されている。３０年にわたる「福岡人間関係研究会」の活動を通じて形成されてきたコミュニテイ形成過程を述べる。	村山 正治	村山 正治
9	エンカウンターグループによる国際紛争の解決	カウンセリングで有名なカールロジャースは「静かな変革者」といわれている。アイルランド紛争、中米の対立 など 80 年代の世界における紛争の火種となっていた地域に着目し、紛争当事者の大統領クラスを集めて、グループを行い、相互の人間的信頼を回復することで、国際紛争解決につながる事例を示し、その意義を解説したい。	同 上	同 上
10	コミュニテイアプローチをめぐる倫理の諸問題	臨床心理士など専門家の活動には厳しい倫理規定がある。コミュニテイアプローチの諸活動、例えばセルフヘルプグループ活動に伴う倫理問題についてはまだ十分検討することにしたい。日本吃音臨床研究会代表、伊藤伸二との対話を録音している。	同 上	村山 正治 伊藤 伸二（大阪教育大学非常勤講師）
11	ネットワーキングの理論と実際	変革の時代に専門家や関連する人たちを繋いでいく有効なアプローチにネットワーキングの理論と方法がある。ここでは学校臨床心理士ワーキンググループの実際例を中心にその特徴、独自性、有効性を検討する	同 上	同 上
12	セルフヘルプグループの展開	21 世紀はセルフヘルプグループ（SHG s）の時代ともいわれている。「吃音者のための言友会」、「断酒会」。薬物常用者のための「ダルク」、不登校児のための「フリースクール」など様々な会が活動している。SHGs の現代的役割と機能について実際活動の事例を挙げながら考察したい。	同 上	同 上

回	テーマ	内容	執筆担当講師名（所属・職名）	放送担当講師名（所属・職名）
13	九州国際大学窪田由紀教授との対談危機介入モデルの理論と実際	窪田由紀氏は福岡県下の学校で発生した殺傷事件や校内暴力事件に臨床心理士として対応して来た実績がある。この経験から危機介入の手引きを作成したが、これは全国の学校臨床心理士から大変評判がよい。その作成の経過、活用の実際をコミュニテイアプローチの視点から考察してみたい。	窪田　由紀（九州国際大学教授）	村山　正治 窪田　由紀（九州国際大学教授）
14	九州大学留学生センター髙松里助教授との対談	コミュニテイアプローチと留学生支援活動の実際 世界各国の多数の留学生が日本の大学で生活を送っている。異文化に生きる人々へのコミュニテイアプローチを地域と連携としながら、展開している髙松里氏と対談し、これからの多文化社会におけるコミュニテイアプローチの重要性について論じていきたい。	髙松　里（九州大学助教授）	村山　正治 髙松　里（九州大学助教授）
15	大妻女子大学教授、日本コミュニテイ心理学会長山本和郎との　対談━コミュニテイアプローチのこれからの課題と展望	日本のコミュニテイ心理学の開拓者であり、日本コミュニテイ心理学会の会長でもある山本和郎氏をゲストにお招きして、これまでの日本における展開とこれからの方向を展望してこの講座のまとめとする。	山本　和郎（大妻女子大学教授）	村山　正治 山本　和郎（大妻女子大学教授）

この冊子に掲載した平成16年度新規開設科目の講義内容は、教材の原稿等を作成する時点で主任講師等が執筆しており、実際に印刷教材及び放送教材を制作する時点で内容等を組み替えていることもあり、必ずしも最終的な印刷教材・放送教材と一致していない部分がありますので、ご容赦ください。

なお、放送大学ホームページに掲載されている講義内容については、最新の内容にリアルタイムで更新しております。

R100
古紙配合率100%再生紙を使用しています